

STUDIA TIBETICA No. 5

# 西藏仏教宗義研究

第三卷

—トウカン『一切宗義』ニンマ派の章—

། ལྷོ་ལྷོ་བཀའ་གྲུབ་མཐའ་རྒྱུ་མ་པའི་སྐབས། །

財団法人 東洋文庫

チベット研究委員会

1982

STUDIA TIBETICA No. 5

*A STUDY OF THE GRUB MTHAḤ  
OF TIBETAN BUDDHISM*

*Volume 3*

*—On the chapter on the rÑiñ ma pa  
of Thuḥu bkwan's Grub mthah—*

*THE TOYO BUNKO*

*1982*

## まえがき

これは東洋文庫において 1961 年以來行われている「チベット人との協同によるチベットの言葉・歴史・宗教・社会の総合的研究」の成果の一部である。筆者は昭和 54 年 12 月に『一切宗義』ニソマ派の章の研究を含む修士論文を東京大学に提出した。本書はその論文を要約・修正したものである。

この論文を書くにあたって、師友学輩から多大の学恩を受けた。まず、西岡祖秀、原田 寛、木村隆徳の三先輩、とくに前二者には暖かい励ましの言葉と論文記述上の貴重な助言を賜った。昭和 52 年当時来日していたボン教学僧 S.Karmay 氏には、帰欧ま際の忙しい折に『一切宗義』ニソマ派の章の教義部分の読解を教示していただいた。山口瑞鳳教授には、チベット語の初歩の文法から『一切宗義』ニソマ派の章の読解、ニソマ派の諸資料、チベット学一般に至るまで、何から何まで手とり足とり懇切丁寧に指導していただいた。また、修士論文の指導教官をお引き受けいただいた高崎直道教授にも種々御指導を仰いだ。

以上のような多数の方々のお指導・助言にもかかわらず、満足なものを上梓できなかった。筆者の語学力の不足のため資料に読解し切れない部分があり、仏教的素養の欠如のため誤謬もあるかと思われる。それらに関しては、先学識者の叱正をまって補訂するつもりである。

最後に機会を与えて下さった東洋文庫当局に深く感謝する。

昭和 57 年 3 月

平松敏雄

# 目 次

## 略 語 表

### 第一部 序 論

I 資料について	1
1) トゥカン・ラマの『一切宗義』	1
2) その他の資料	1
II 従来の研究	3
1) ニンマ派一般に関するもの	3
a) S. chandra Das の研究	3
b) Li-an-che の研究	3
c) Tucci の研究	4
d) その他の研究	5
2) ゾクチェン及びそれと中国禪の関わりに関するもの	6
a) Tucci の研究	6
b) 日本の諸研究	7
c) S.G. Karmay の研究	7
d) H.V. Guenther の研究	7
III 『一切宗義』に記されているニンマ教法の諸範疇の相互関係	8
IV ゾクチェンの歴史的背景	11
V ゾクチェン一般の教義と「心・界部」の教法	14
1) ゾクチェン一般の教義	14
1-1) 『宗義の宝蔵』に叙述されたもの	14
1-2) 『真如の宝蔵』に叙述されたもの	15
2) 「心・界部」の教法	18
2-1) 『最勝乗の宝蔵』と『宗義の宝蔵』の九乗の宗義の概要部分 に叙述されたもの	18
2-1-1) 「心部」の教法	18
2-1-2) 「界部」の教法	20

2-2) 『一切宗義』に叙述された「心・界部」の教法	25
2-2-1) 「心部」の教法	25
2-2-2) 「界部」の教法	26
3) ゾクチェン一般、あるいは「心・界部」の教義に関する試解	27
3-1) 「自らのぼる」の側面	27
3-2) 「自ら解脱する」の側面	29
3-3) 「修」に関して	32
3-4) 結 語	32
4) ゾクチェンと中国禪及び密教	33
4-1) ゾクチェンと中国禪	33
4-2) ゾクチェンと密教	35
4-3) 密教と中国禪の融合とゾクチェン	36
VI 「教誡部」の教法	39
1) 「教誡部」の教義	39
1-1) 『最勝乗の宝蔵』と『宗義の宝蔵』の九乗の宗義の概要部分 に叙述されたもの	39
1-2) 『宗義の宝蔵』第八章に叙述されたもの	44
1-3) 『最勝乗の宝蔵』第十四章と『言葉と意味の宝蔵』第四章に 叙述されたもの	46
1-4) 『一切宗義』に叙述されたもの	55
1-5) 「教誡部」の教義に関する結語	55
2) 「教誡部」の実践	57
2-1) 『最勝乗の宝蔵』と『言葉と意味の宝蔵』に叙述されたもの	58
2-1-1) 「テクチュ」	58
2-1-2) 「トゥゲル」	60
2-1-2-1) 「四灯明」	60
a) 「四灯明」	60
b) 「四灯明」と「四顯現」との関係	61
2-1-2-2) 「トゥゲル」	63
2-2) 『宗義の宝蔵』第八章に叙述されたもの	69
2-3) 『一切宗義』に叙述された「教誡部」の実践	69
2-4) 結 語	71

Ⅶ 結 び .....	72
序 論 註 .....	74
第二部 『一切宗義』ニンマ派の章訳註	
序 .....	101
<1> ニンマ派の宗義の前期の形成過程 .....	101
<1・1> 初期の歴史 .....	101
<1・1・1> ソンツェンカ <sup>o</sup> ンボ王時代 .....	101
<1・1・2> チソンドツェン王時代 .....	101
<1・2> 九乗の宗義と六つの伝承の次第 .....	104
<1・2・1> 九乗の宗義 .....	104
<1・2・2> 六つの伝承の次第 .....	105
<1・3> 系統の別説 .....	105
<1・3・1> 「遠伝伝説」の歴史 .....	105
<1・3・1・1> 「幻化網」の系統 .....	105
<1・3・1・1・1> ヴィマラミトラからマ・リンチュンチョク を経る系統 .....	105
<1・3・1・1・2> 「スル Zur 系」に到るもの .....	106
<1・3・1・1・3> 他の系統(ドブクバからの別系) .....	107
<1・3・1・1・3・1> ツァンバチトゥンとニェトゥンを経る系統 .....	107
<1・3・1・1・3・2> サンギェタク Sans rgyas grags を 経る系統 .....	107
<1・3・1・1・3・3> ロクの系統 .....	107
<1・3・1・1・3・4> 他のスルの分派 .....	107
<1・3・1・1・3・5> カダム系 .....	108
<1・3・1・2> 「経」の系統 .....	108
<1・3・1・3> ロン系 .....	108
<1・3・1・4> 「八教説」の系統 .....	108
<1・3・1・5> ソクチェンの系統 .....	109
<1・3・1・5・1> 「心部」の系統 .....	109
<1・3・1・5・2> 「界部」の系統 .....	110

<1・3・1・5・3> 「教誡部」の系統 .....	110
<1・3・1・5・3・1> 「ニンタク」の系統 .....	110
<1・3・1・5・3・2> 「ダーキニーのニンタク」の系統 .....	111
<1・3・2> 「埋蔵教説」の系統 .....	111
<1・3・3> 「深淵浄現教説」の系統 .....	112
<2> ニンマ派の宗義 .....	113
<2・1> ソクチェン以外の宗義 .....	113
<2・2> ソクチェンの宗義 .....	113
<2・2・1> 総 説 .....	113
<2・2・2> 別 説 .....	113
<2・2・2・1> 「心部」の教法 .....	114
<2・2・2・2> 「界部」の教法 .....	114
<2・2・2・3> 「教誡部」の教法 .....	114
<2・2・3> 結 び .....	116
<2・2・3・1> 要 略 .....	116
<2・2・3・2> 「基・道・果」 .....	116
<3> ニンマ派の教法の吟味 .....	117
<3・1> 不浄とするもの .....	117
<3・2> 清浄とするもの .....	118
<3・3> そのままにしておくもの .....	118
<3・4> いづれに従うべきか .....	118
<4> ニンマ派の宗義の後期の形成過程 .....	120
<4・1> 「テルトゥン」の系統 .....	120
<4・2> ニンマ派の寺院 .....	122
<4・3> 結 び .....	122
結 語 .....	123
奥 書 き .....	123
訳 註 .....	124

第三部 テキスト、ソクチェンの種類

I 『一切宗義』ニソマ派の章テキスト ..... 184  
 II 『七つの宝蔵』に見えるゾクチェンの種類 .....

略 語 表

1. 邦文以外のもの

(1) 書籍

BA G.N.Roerich : Blue Annals, Calcutta, 1949~1953.  
 BTC Bu ston rin po che : 『ブトン仏教史』 bDe bar gcegs paḥi bstan paḥi gsal byed chos kyi ḥbyuṅ gnas gsuṅ rab rin po cheḥi mdzod, The Collected Works of Bu-ston, Part 24 (Ya), Śatapitaka Series, vol 64, Ed. by L.Chandra, New Delhi, 1971.  
 CTI L.Petech : China and tibet in the early XVIII th century, Leiden, E.J.Brill, 1972.  
 『Das 辞』 Sarat Candra Das : A Tibetan-Englih Dictionary, Calcutta, 1902.  
 DC bDud ḥjoms rin po che : 『ニソマ派仏教史』 Gaṅs ljoṅs rgyal bstan yoṅs rdzogs kyi phyi mo sna ḥgyur rdo rje theg paḥi bstan pa rin po che ji ltar byuṅ baḥi tshnl dag cin gsal bar brjod pa lha dbaṅ gyul las rgyal baḥi rīa bo cheḥi sgra dbyaṅs, printed by Shlva Mani Pradhan at the Mani Printing Works, Kalimpong and published by Dudjom Tulku Rinpochee, Madhav Nikunj, Kalimpong, 1964.  
 DTN ḥGos lo tshā ba gShon nu dpal : 『テプテルゾンボ』 Deb ther snon po, 1476~1478 (TBH, No.346A-2563~2577). 版は Śata-Pitaka Series, Vol 212, Ed. by L.Chandra, New Delhi, 1974.  
 DZL Y.V.Wylie : The Geography of Tibet according to the 'DZAM-GLING-RGYAS-BSHAD, Rome, 1962.  
 『EVa』 EVa.M.Dargyay : The Rise of Esoteric Buddhisme in Tibet, Motilal, Banarsidass, Delhi, 1977.  
 GHP A.Ferrari : Mkyen brtse's Guide to the Holy places of Central Tibet, Roma, 1958.  
 GCM Thuḥu bkwan Blo bzaṅ chos kyi ṅi ma : 『一切宗義』 Grub mthaḥ thams cad kyi khuṅs daṅ ḥdod tshul ston pa legs

- bçad çel gyi me lon (グンルン dGon lun 版, 東大 No.101)。  
 なお, 略号 Shol 版は, Collected Works of Thu'u-bkwan  
Blò-bzang-chos-kyi nyi ma, Ed. by Ngawang Gelek  
 Demo, New Delhi, 1969~1971, Vol. II. pp. 5~519 を指す。
- G・Th Klon chen rab hbyams pa : 『宗義の宝蔵』 Theg pa mthah  
dag gi don gsal bar byed pa grub pañi mthah rin po  
cheñi mdzod, 蔵外 No. 493-3035。
- 『Jäschke 辞』 H.A. Jäschke : A Tibetan-English Dictionary, London,  
 1881, reprinted 1934, 1949, 1958.
- KBU Herbert V. Guenther : Kindly Bent to Ease Us, Vol 1, 2, 3,  
 Dharma Publishing, California, 1975~1976.
- KGJ Ferdinand D. Lessing and Alex Wayman : mKhas grub rje's  
Fundamentals of The Buddhist Tantra, Mouton, The  
 Hague, paris, 1968 (これは mKhas grub rje : rGyud sde  
spyiñi rnam par gshag pa rgyas par brjod の訳と註である。)
- MBT Giuseppe Tucci : Minor Buddhist Texts, Part II, Roma,  
 1958, (Roma Oriental Series, K-2)
- NGB rÑin ma rgyud hbum, Dil mgo mkhyen brtse 編, Thimbu,  
 1972, vol 36.
- ODT René de Nebesky-Wojkowitz : Oracles and Demons of  
Tibet, Akademische Druck-u. Verlagsanstalt, Graz/Aus-  
 tria, 1975.
- PSJ Sum pa mkhan po Ye çes dpal hbyor : Pag Sam Jon Zang,  
 1748, Collected Works of Sum-pa-mkhan po, volume 1  
 (Ka), Sata-piṭaka Series, volume 214, Ed. by L. Chandra,  
 New Delhi, 1975。  
 なお, 略号 Das 版は, Part I, II, Ed. by S. Ch. Das, Calcutta,  
 1908. 版を表わす。
- RM Reñu Mig. dPag bsam ljon bzani, Part III. Ed. by L. Chandra,  
 New Delhi, 1959.
- SMG gNub chen Sañs rgyas ye çes : bSam gtan mig sgron (あ  
 るいは rNal hbyor mig gi bSam gtan), pub. by S. W. Tashi

- gang pa, Ladakh, 1974.
- TBH Z. Yamaguchi : Catalogue of the Toyo Bunko Collection  
of Tibetan Works on History, Tokyo, 1970.
- THL A. I. Vostrikov : Tibetan Historical Literature, Tr. by  
 Harish Chandra Gupta, Calcutta, 1970.
- TPS G. Tucci : Tibetan Painted Scrolls, Roma, 1949.
- 『チベ宗教』 G. Tucci, W. Heissig : Die Religionen Tibets und der  
Mongolei, Stuttgart Berlin Köln Mainz, 1970.
- Th・Ch Klon chen rab hbyams pa : 『最勝乗の宝蔵』 Theg pañi mchog  
rin po cheñi mdzod, 蔵外 No. 494-3036.
- Tsh・D Klon chen rab hbyams pa : 『言葉の意味の宝蔵』 gSañ ba bla  
na med pa òd gsal rdo rje sñiñ poñi gnas gsum gsal bar  
byed pañi tshig don rin po cheñi mdzod, 蔵外 No. 497-  
 3039.
- 『蔵文辞』 dGe bçes Chos kyi grags pa : 『蔵文辞典』 brDa dag miñ  
tshig gsal ba, 西藏仏教研究会, 東京, 山喜房仏書林, 1972.
- (2) 論文
- 『Das 訳』 Sarat Chandra Das : "Contributions on Tibet", Journal of  
the Asiatic Society of Bengal, No. 1, 1882, pp. 6~14.
- 『サムテン』 S. G. Karmay : "A discussion of the doctrinal position of  
 rDzogs chen from the 10th to the 13th centuries"  
Journal Asiatique, 1975.
- 『リアンチェ』 Li-an-che : "Rñiñ ma pa, the Early Form of Lamaisme",  
the Journal of the Royal Asiatic Society, 1948.

## 2. 邦文のもの

## (1) 書籍

- 『イン思想史』 中村元『インド思想史第2版』岩波全書, 1974.
- 『心把握』 玉城康四郎『心把握の展開—天台実相観を中心として—』山喜房仏書林, 昭和36.
- 『西藏宗義1』 立川武蔵『西藏仏教宗義研究第一巻』東洋文庫, 1974.
- 『西藏宗義2』 西岡祖秀『西藏仏教宗義研究第二巻』東洋文庫, 1978.

- 『チベ文化』 Rolf Alfred Stein: La civilisation tibétaine, 1962. 『チベットの文化』山口瑞鳳・定方晟訳, 岩波書店, 昭和 46.
- 『チベ密教』 酒井真典『修訂増補チベット密教教理の研究(一)』, 国書刊行会, 初版, 昭和 31.
- 『中観唯識』 長尾雅人『中観と唯識』岩波書店, 1978.
- 『仏学辞』 多屋頼俊・横超慧日・舟橋一哉『仏教学辞典』法蔵館, 初版, 昭和 30.
- 『密経典史』 松長有慶『密教経典成立史論』, 法蔵館, 昭和 55.
- 『密教歴史』 松長有慶『密教の歴史』<サーラ叢書 19>, 平楽寺書店, 1969.
- (2) 論文
- 「大蔵縁起」 羽田野伯猷「チベット大蔵経縁起〔その一〕—ナルタン大学問寺の先駆的事業をめぐって」『鈴木学術財団研究年報』3号, 1966.
- 「チベ仏教」 山口瑞鳳「チベット仏教」『講座東洋思想』5, 東京大学出版会, 1967.
- 「チベ変容」 羽田野伯猷「チベットの仏教受容の条件と変容の原理の一側面」『日本文化研究所研究報告』第4集, 1968.

### 3. その他

- 『印仏研』 『印度学仏教学研究』
- 『西藏会報』 『日本西藏学会々報』
- 蔵外 No. 『東洋文庫蔵チベット蔵外文献索引稿』, 東洋文庫, 1978.
- 東大 No. 『東京大学所蔵チベット文献目録』東京大学文学部印度哲学印度文学研究室, 1965.
- 東北 No. 『西藏大蔵経総目録索引』(A Complete Catalogue of the Tibetan Buddhist Canons), 仙台, 1934.
- 北京 No. 『影印北京版西藏大蔵経総目録・索引』(The Tibetan Tripitaka, peking edition, Catalogue & Index), 鈴木学術財団, 東京, 1962.
- Pelliot.No. Marcelle Lalou: Inventaire des Manuscrits tibétains de Touen-houang, conservés à la Bibliothèque Nationale, I, II, III, Paris, 1939, 1947, 1960.
- VP.No. Louis de la Vallée Poussin: Catalogue of the Tibetan Manuscripts from Tun-Huang in the India Office Library, London, 1962.

なお、論文中に用いられる中黒(・)は、並列関係、同格関係、対照(対立)関係を表わす他に、単に呼称の切れ目を表わす場合もあるから、注意して頂きたい。また、『一切宗義』の註において、系統者で □ で囲まれたものは、『一切宗義』に記されている者である。



第 一 部

序 論

## I 資料について

### 1) トゥカン・ラマ『一切宗義』

トゥカン・ラマとその著書『一切宗義』については、既に A. I. Vosrikov の Tibetan Historical Literature, Calcutta, 1970, pp. 156~158; 立川武蔵『西藏仏教宗義研究』第一巻, 東洋文庫, 1975, pp. 8~10, 西岡祖秀『西藏仏教宗義研究』第二巻, 東洋文庫, 1978, p. 1; 『仏典解題事典』第二版, 春秋社, 1977, pp. 379~380に解説されている。

ここでは、その第二章に含まれるニンマ派の章の構成を下に示すにとどめる。

- <1> 前期の形成過程
- <2> 宗義の主張の仕方
- <3> それについて吟味すること
- <4> 後期の形成過程

これらのうち、<1>は歴史的記述であり、『テプテルゴンボ』の要約である。<2>はニンマ派の教法のうちゾクチェンの教義と実践について記し、ゾクチェン以外の教法は名称のみあげている。依拠した資料の一つはその引用もあることから、ロンチェン・パの『七つの宝蔵』と思われる。<3>はニンマ派の教法がインド招来のものか、チベット偽撰のものかに対する諸学者の意見である。資料は『テプテルゴンボ』と『バクサムジョンサン』と思われる。<4>は後期の歴史についての記述であるが、「テルトゥン」 gter ston (発掘者)の系統のみ記してある。その原資料は定かでない。

また、構成上、歴史に関する記述を前期・後期と続けて記さないで、その間に「宗義の主張」と「吟味すること」を挟んで記したことに、特徴が見られる。

本書の和訳のテキストとしては、東京大学所蔵のグンルン (dGon luñ) 版を用いた。<sup>(1)</sup>

### 2) その他の資料

本書中『一切宗義』を補足する資料として、歴史に関しては、『テプテルゴンボ』と『ニンマ派仏教史』を使う。前者は『一切宗義』が歴史上の記述の基本資料としているからであり、後者は『一切宗義』にない新しい部分を記してあるからである。

教義に関しては、ロンチェン・パの『七つの宝蔵』を用いる。チベットでは現今に到るまで、<sup>(2)</sup>ニンマ派の僧侶たちがニンマ派の教法を学ぶのに、この論書から始めるからである。

今、参考のため『七つの宝蔵』 mDzod bdun の名称を示しておく。

1. 『最勝乗の宝蔵』 Theg paḥi mchog rin po cheḥi mdzod, 蔵外 No. 494 - 3036, 二十五章から成る。

2. 『真如の宝蔵』 gNas lugs rin po cheḥi mdzod, 蔵外 No. 496 - 3038, 四章から成る。

その自注, sDe gsum sñin poḥi don ḥgrel gnas lug rin po cheḥi mdzod ces bya baḥi ḥgrel ba, 蔵外 No. 495 - 3037.

3. 『法界の宝蔵』 Chos dbyinś rin po cheḥi mdzod kyi rtsa ba, 蔵外 No. 491 - 3033, 十三章から成る。

その自注, Chos dbyinś rin po cheḥi mdzod kyi ḥgrel ba lun gi gter mdzod, 蔵外 No. 492 - 3034.

4. 『言葉と意味の宝蔵』 gSañ ba bla na med pa ḥod gsal rdo rje sñin poḥi gnas gsum gsal bar byed paḥi tshig don rin po cheḥi mdzod, 蔵外 No. 497 - 3039, 十一章から成る。

5. 『宗義の宝蔵』 Theg pa mthaḥ dag gi don gsal bar byed pa grub paḥi mthaḥ rin po cheḥi mdzod, 蔵外 No. 493 - 3035, 八章から成る。

6. 『如意の宝蔵』 Theg pa chen poḥi man ṅag gi bstan bcos yid bshin rin po cheḥi mdzod, 蔵外 No. 488 - 3030, 二十二章から成る。

その自注, Theg pa chen poḥi man ṅag gi bstan bcod yid bshin rin po cheḥi mdzod kyi ḥgrel pa padma dkar po, 蔵外 No. 489 - 3031.

7. 『教誡の宝蔵』 Man ṅag rin po cheḥi mdzod, 蔵外 No. 490 - 3032, 六章から成る。

これらのうち、本書で資料として使ったのは、1から5までの『宝蔵』である。東洋文庫所蔵のものを用いた。

## II 従来の研究

従来の研究は大きく二種に分けられる。一つは、ニンマ派一般に関するもの。他は、ニンマ派の中のゾクチェン及びゾクチェンと禅宗の関係を論ずるものである。それぞれ示す。

### 1) ニンマ派一般に関するもの

#### a) S. Chandra Das の研究

ニンマ派に関する最初の研究は、S. Chandra Das の『一切宗義』ニンマ派の章の翻訳である。それは“Contributions on Tibet”, Journal of the Asiatic Society of Bengal, No. 1, 1882, pp. 6~14 である。翻訳されているのは、ニンマ派の章の<1>「前期の形成過程」のみである。教義に関しては、全く記述していない。また、翻訳部分においても、誤訳が多く、ニンマ教法の諸範疇について誤った考え方をしている。このような欠点はあるが、『一切宗義』に注目して、それを翻訳し、ニンマ派についてチベット以外に紹介した功績は認められる。

#### b) Li-an-che の研究

「Das 訳」に次いでニンマ派の研究としてあらわれるのが、Li-an-che: “Rñin ma pa: the Early Form of Lamaism”, the Journal of the Royal Asiatic Society, 1948. である。この論文の長所は、第一に、mahāyoga 乗, anuyoga 乗, atiyoga 乗それぞれに「仏説」bkaḥ ma と「埋蔵教説」gter ma があると明言したことである。これは『一切宗義』のように、それら三乗が「仏説」のみに属するとすることよりは、正しい。第二に、mahāyoga 乗を「タントラ部」rgyud sde と「修部」sgrub sde に分類して、「修部」の「八教説」bkaḥ brgyad について詳しく説明していることである。この説明は他の論文に見られないので重要である。第三に atiyoga 乗に禅宗との類似点を認めたことである。

その欠点は、第一に「スル流」Zur lugs と「ロン流」Roñ lugs を mahāyoga 乗のみ説くものとしたことであるが、それらは mahāyoga 乗, anuyoga 乗, atiyoga 乗の三つをともに教えるものである。第二に、「埋蔵教説」の「テルトゥン」gter ston (発掘者) を mahāyoga 乗の箇所でのみ記したことである。mahāyoga 乗のみの「埋蔵書」gter kha (テルカ) を発掘した如き誤解を与えている。また、ラトナリンパの『ニンマ・ギェブム』を南テルマとしたことである。これは北・南テルマという分類に入れるべきでな

いと思われる。南テルマはテルダクリンバ(1634/46~1714)から始まると考えられるからである。第三に、anuyoga 乗、atiyoga 乗の系統の記述が欠けていることである。第四に、atiyoga 乗の実践を「教誡部」man nag sde の「トゥゲル」thod rgal で代表させていることである。また、「トゥゲル」が精神生理学的実践を利用すると記されていないことである。第五に、「界部」klon sde に関して、光明になるのは「界部」特有の観法によるものと明記しないことである。第六に、「教誡部」の実践及び教義の説明が余りにも簡略すぎることである。「テクチュ」khregs chod と「トゥゲル」の二種の実践法があることも、記されていない。

以上の欠点が認められるものの、他論文に記されていない記述もあり、重要な論文である。

#### c) Tucci の研究

これらの研究に次いで、Tucci 氏の研究がある。1949年の Tibetan Painted Scrolls (略号 TPS) 1958年の Minor Buddhist Texts (略号 MBT) 1970年の Die Religionen Tibets und der Mongolei (略号『チベ宗教』) である。MBT に関しては、禅宗とゾクチュンとの関係を取り扱っているのので、後論する。

まず、Tibetan Painted Scrolls について。この書では、pp. 85, 87, 88, 105, 108~115 にニンマ派に関して記述されている。その記述の長所は、ニンマ派の教法について、「儀軌を主にするもの」(= snags pa) と「教義を主にするもの」(= rdzogs chen pa) に分けたこと。ニンマ派にボン教の影響があると強調したこと。「埋蔵書」の形成理由とその形成時期について記してあることである。

その欠点は、ゾクチュンに中国禅の影響ではなく、道教と類似点を見出したことである。後の Tucci 氏の論文 MBT では、中国禅の影響と明記されるようになる。

以上のこと以外で、『五部実録』bKah than sde lna などの「埋蔵書」の紹介に関しては、A. I. Vosrikov の Tibetan Historical Literature (ロシア語版、1936) で既になされている。Tucci 氏のそれらについての記述は、彼の次の論文 MBT への準備となるものであり、特に注意すべきものは記されていない。

次に、Die Religionen Tibets und der Mongolei について。この書で、Tucci 氏はチベット各宗派の教法の概略を説明している。ニンマ派については、pp. 94~106 に述べられている。ゾクチュンに関して、彼の以前の研究 (TPS や MBT) に比べると、研究に発展が見られる。

しかし、誤りが二つある。第一は、ゾクチュンの三つの「部」sde の対応を、「心部」— mahayoga 乗、「界部」— anuyoga 乗、「教誡部」— atiyoga 乗としている。正しくは、三部とも atiyoga 乗に含まれる。<sup>(1)</sup> 第二は、「テクチュ」を「界部」の実践としてい

ることである。たしかに、「テクチュ」は「心・界部」の観法を継承しているが、あくまで、「教誡部」に属するものである。

また、誤りとまでは言わないが、この研究の欠点は、ゾクチュンの実践に関して、各実践部分の相互関係が明瞭でないことと、後世の付加要素が区別されていないことである。これは簡略すぎる後世の綱要書を資料として使ったためである。<sup>(2)</sup> その他、「教誡部」の実践を「トゥゲル」のみに限っていること、「心・界部」の観法が全く記されていないことが、その欠点としてあげられる。

その長所は、上述の如く記述に不明瞭な部分もあり、誤りもあるが、「トゥゲル」の実践を部分的にでも紹介したことである。また、ゾクチュンの教義に関して、簡略ではあるが、当時としては進んだ正当な記述がしてあることである。

以上の外に、ゾクチュンに中国禅マカエン禅師の影響を認めることは、MBT 以来変らない Tucci 氏の主張である。

#### d) その他の研究

まず、R. A. Stein 氏の研究がある。それは R. A. Stein 『チベットの文化』岩波書店、昭和 46、山口瑞鳳、定方晟訳である。これの原本 La civilisation tibétaine, Paris, Dunod は 1962 年に出版されている。この書の p. 177 に『五部実録』によって九乗の宗義を紹介している。また、pp. 191, 192 に九乗の宗義と生起・究竟次第を対応させて、mahāyoga 乗 — 生起次第, atiyoga 乗 — 究竟次第としている。これは誤りであって、正しくは、mahāyoga 乗 — 生起次第, anuyoga 乗 — 究竟次第, atiyoga 乗 — 生起・究竟不二である。このような部分的な誤りはあるが、チベット宗教全体の中でニンマ派の位置をはほぼ正しくとらえている。

第二に、ケツンサンポ氏の研究がある。それはケツンサンポ「ニムマバにおける九乗の宗義」『西藏会報』第 11 号、昭和 39、p. 3 である。この論文は後世に整理されたニンマ派の九乗の宗義の概要である。とくに、戒律に関して、ニンマ派は根本二十七、枝末二十五の三昧耶戒の厳修を説くと記すことは、他派からの批判によって戒律を重視し直したためであると思われる。その他、タントラ六乗に関しても、「新密呪」派 gsar ma pa と共通の部分が多く記されている。<sup>(3)</sup>

第三に、山口瑞鳳氏の研究がある。山口瑞鳳「チベット仏教」『講座東洋思想第 5 巻』東京大学出版会、1967 の pp. 254, 260, 270 にニンマ派に関する記述がある。新しい主張としては、九乗の宗義に中国密教の教判の影響を認めること。もう一つは、ゾクチュンに影響をおよぼした中国禅をマカエン禅師のものではなしに、九世紀初め(チツクデツェン王時代)の中国との国交再開以降に入ってきた、マカエンの禅よりも思想的に発展した中国禅

とすることである。

それ以外の九乗の宗義などの記述は、従来の研究の範囲にとどまっている。

第四に、H.V. Guenther 氏の研究がある。H.V. Guenther: Buddhist Philosophy in Theory and Practice, penguin, 1972 にミバン・ジャムヤン・ナムゲルギャツォ Mi pham hJam dbyanis rNam rgyal rgya mtsho (1846~1914) の Yid bshin mdzod kyi grub mthah bsdus pa の翻訳が載せられている。その kriya 乗 ~ yoga 乗の記述は、ロンチェンパの『七つの宝蔵』とほとんど同一である。mahāyoga 乗 ~ atiyoga 乗については後世に付加された部分も記されている。

翻訳については、後世の付加要素が記されてはいても、九乗の宗義に関して従来より詳しい内容を知るのに役立つ。Guenther 氏自身の研究では、ニンマ派の教法に対する彼独特の解釈が示されており、仏教学の伝統の中でニンマ派の教法を解していると思われぬ。

第五に、羽田野伯猷氏の研究がある。羽田野氏のニンマ派に関する研究は、「チベットの仏教受容の条件と変容の原理の一側面」『日本文化研究所研究報告』第4集, 1968, pp. 51, 52 に記されている。格別新しい主張はなされていない。ニンマ派の教法ではゾクチェンが重要であることを述べ、そのゾクチェンに Tucci 氏の言うごとく中国禅の影響を認めるほかに、インド仏教系の Vairocana, Vimalamitra の存在を発生史的に考慮すべきであると説く。九乗の宗義それぞれについては論じていない。

第六に、E.Va.M. Dargyay 氏の研究がある。それは The Rise of Esoteric Buddhism in Tibet, Delhi, 1977 である。これは『ニンマ派仏教史』を中心資料として、ニンマ派の歴史を研究したものである。各系統の神話時代の研究と、ゾクチェンの系統の各資料の比較研究はよくなされているが、「テルトゥン」の歴史は『ニンマ派仏教史』の要約に過ぎない。ただ、「テルトゥン」の「埋蔵書」や「テルトゥン」の生歿年を調べるには役に立つ。また、「幻化網」の系統に関しては、初期のもの以外は記されていない。

## 2) ゾクチェン及びそれと中国禅の関わりに関するもの

### a) Tucci の研究

Tucci 氏以前にもサムイェの宗論などに関する研究はあるが、ゾクチェンと中国禅の関わりを取り扱ったのは、G. Tucci: Minor Buddhist Texts Part II, Roma, 1958<sup>(4)</sup> が最初のものと思われる。

サムイェの宗論をめぐる様々な問題をとりあげているが、その中で、サムイェの宗論以後も中国仏教が残存していたと主張することが、最も重要である。Tucci 氏はそのことを

『五部実録』などの資料によって論証せんとしている。他に Saraha の「大印」 mahā-mudrā の教法(インド系)と中国禅が共通の基盤をもつと主張したことも、注目に値する。<sup>(5)</sup>

それら以外では、ゾクチェンの教法に関する研究は十分ではないが、『一切宗義』の部分的翻訳、『ニンマ・ギェブム』の三つの論書の要約、『五部実録』の翻訳、『大蔵経』に収められているヴァイローチャナ、ヴィマラミトラ等の論書の要約は、ゾクチェンの入門的紹介として役立つ。

### b) 日本の諸研究

日本の諸研究も Tucci 氏の MBT から始まっている。とくに、チベットへの中国禅の影響を論ずるものでは、敦煌文書や新しく出版された論書によって、Tucci 氏の研究を補足・訂正しようとしている。それら新しい研究の方向は、マカエン禅師以外の中国禅のチベット仏教への影響を調べることにあると思われる。

今枝由郎<sup>(6)</sup>、上山大俊<sup>(7)</sup>、沖本克己<sup>(8)</sup>、小島宏充<sup>(9)</sup>、木村隆徳<sup>(10)</sup>、原田寛<sup>(11)</sup>、藤枝晃<sup>(12)</sup>、山口瑞鳳<sup>(13)</sup>の諸氏の研究がある。

### c) S.G. Karmay の研究

以上のゾクチェンの中国禅宗起源説に反対する立場を取るのが、S.G. Karmay 氏である。S.G. Karmay: "A discussion of the doctrinal position of rDzogs chen from the 10th to the 13th centuries" Journal Asiatique, 1975 において、ゾクチェンがヴァイローチャナによって、インドからチベットにもたらされたことと主張している。また、準備的研究と思われるが、ゾクチェンの教義そのものに対する考察が不十分なため、説得力に欠ける。

### d) H.V. Guenther の研究

ゾクチェンの教義そのものを扱った研究に、H.V. Guenther: Kindly Bent to Ease Us, Dharma, 1975, 3 vols. がある。これはロンチェンパ Klon chen pa の『休息の三法類』 Nal gso skor gsum の翻訳である。訳語の方も Guenther 氏独特のものを使っているが、翻訳に付けられた研究も彼特有のものである。フッサールやハイデガーの現象学からゾクチェンを考えようとしている。現代哲学でゾクチェンを解釈するのは無意味ではないし、西洋の思想界より何世紀も以前にチベットに現象学的考察が出現したと驚嘆するのも結構である。しかし、それよりも、仏教学の伝統の中でゾクチェンの教法を考察しようとするのか、と疑問に思われる。

これらの研究の他に、日本で金子英一氏がニンマ関係の目録作成に貢献している。<sup>(14)</sup>

以上が従来の研究である。ゾクチェンという名はしばしば言われるが、その教義内容とな

ると、簡略な研究以外は、皆無である。ニンマ派の教法、特にゾクチェンの教法の研究については、初歩的な段階にあると言える。

### III 『一切宗義』に記されているニンマ教法の諸範疇の相互関係

『一切宗義』に記されているニンマ教法の範疇には、まず「九乗の宗義」がある。

(宣説者)

(1) (ア) 声聞乗	}	普通乗	化身・シャカムニ
(イ) 独覚乗			
(ウ) 菩薩乗			
(エ) kriya 乗	}	外タントラ乗	報身・金剛薩埵
(オ) upa 乗			
(カ) yoga 乗			
(キ) mahāyoga 乗	}	内タントラ乗	法身・普賢 Kun tu bzän po
(ク) anuyoga 乗			
(ケ) atiyoga 乗			

二番目として、「六つの伝承の次第」がある。

- (2) (ア) 「仏、御意による伝承」 rgyal ba dgoñs brgyud  
 (イ) 「持明者、記号による伝承」 rig ḥdzin brda brgyud  
 (ウ) 「人間、耳による伝承」 gañ zag sñan brgyud  
 (エ) 「指名の教え、予言による伝承」 bkañ babs luñ bstan brgyud  
 (オ) 「カルマの残余、埋蔵書による伝承」 las ḥphro gter gyi brgyud pa  
 (カ) 「祈願、封印による伝承」 smon lam gtad rgyaḥi brgyud pa

三番目として、「遠伝」「近伝」などがある。

- (3) (ア) 「遠伝仏説」 rin brgyud bkañ ma  
 (イ) 「近伝埋蔵教説」 ñe brgyud gter ma  
 (ウ) 「深淵浄現教説」 zab mo dag snañ

四番目として、「仏説」 bkañ ma に「経・幻・心」 mdo sgyu sems がある。

- (4) (ア) 「幻化網」 sgyu ḥphrul  
 (イ) 「ドゥパド」 ḥdus pa mdo  
 (ウ) 「セムチョク」 sems phyogs

五番目として、ゾクチェン atiyoga 乗に三つの部 sde がある。

- (5) (ア) 「心部」 sems sde ——— 「セムチョク」 sems phyogs  
 (イ) 「界部」 kloñ sde ——— 「金剛橋派」 rdo rje zam pa  
 (ウ) 「教誡部」 man ñag sde ——— 「ゾクチェンニンチク」 rdzogs chen  
 sñin tig

これらは右側に記した名称で呼ばれることもある。

以上が『一切宗義』に見える諸範疇であるが、この中で(2)は伝承の方法であって、他の四つほど相互に密接な関係はない。<sup>(1)</sup>それゆえ、(2)は後段に論ずるとして、それ以外のものについて説明する。

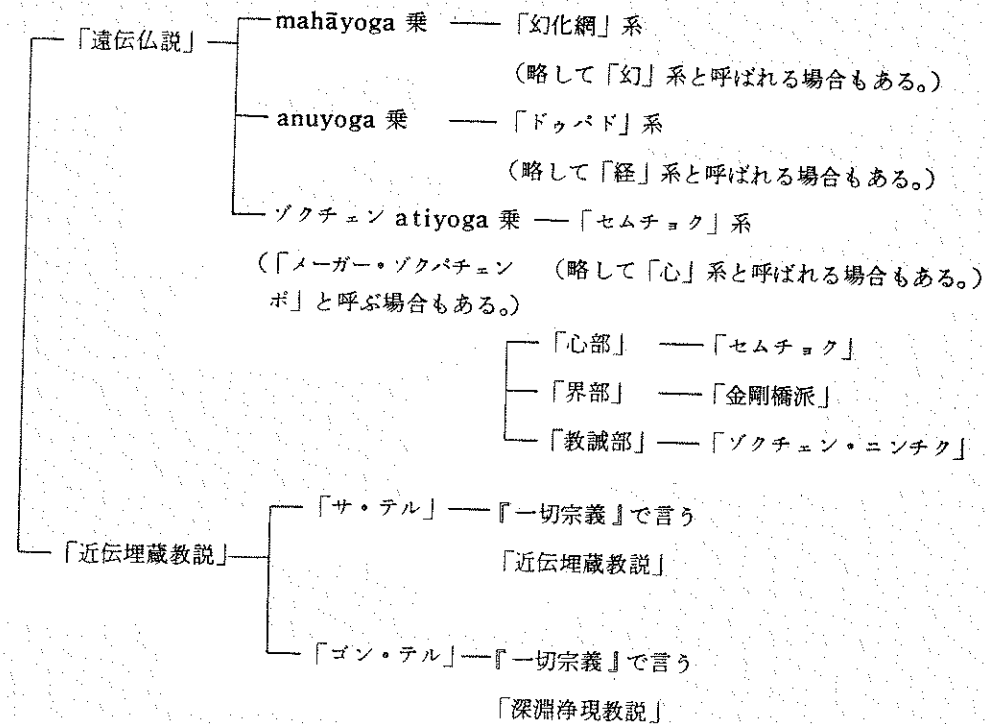
まず、(4)はそれぞれ順次に、mahāyoga 乗、anuyoga 乗、atiyoga 乗にあたる。これらは法類名や所依の教誡名などによって、名づけられたものである。このことは、(5)の場合に「金剛橋派」が「界部」の教誡名のゆえに、「界部」をあらわすのと同様である。以上のことから、九乗の宗義の内タントラ三乗の内訳を順次に示したのが(4)と(5)であるとわかる。ここで注意することは、「セムチョク」に二種あることである。一つはゾクチェン atiyoga 乗全体をあらわす場合、他はゾクチェンの中の「心部」をあらわす場合である。また、ゾクチェン全体を「メーガ・ゾクパチェンポ」 man ñag rdzogs pa chen po と呼ぶ場合がある。これもゾクチェンの中の「教誡部」と混同しないように注意する必要がある。

次に、(3)について説明する。「遠伝」と「近伝」に関して言えば、経あるいはタントラの宣説者である「仏」以来「教えの相承」 luñ brgyud が続いているのが、「遠伝」である。それゆえ、「仏説」と呼ばれる。一方、埋蔵書となって、「教えの相承」が途切れる場合が「近伝」であり、「埋蔵教説」のことである。

また、「埋蔵教説」に大きく分けて二種ある。「サ・テル」 sa gter<sup>(2)</sup>と「ゴン・テル」 dgoñs gter である。簡単に言えば、「サ・テル」は地中に隠された埋蔵書、「ゴン・テル」は meditation 中で神々やラマたちから教法を授かることであり、啓示であるが、実際は創作である。『一切宗義』でいう「深淵浄現教説」とは、「ゴン・テル」のことである。<sup>(3)</sup>

この(3)と他の範疇との関係は、「仏説」は「経・幻・心の三つ」であると記されているから、mahāyoga 乗、anuyoga 乗、atiyoga 乗は「仏説」に含まれることになる。

以上のことを図示すると、



となる。「仏説」の方は、教法の内容で区分されている。「埋蔵教説」の方は「埋蔵書」の形式で区分されている。「埋蔵教説」の教法内容については、「ラ・ゾク・トックの三つ」 bla rdzogs thugs gsum の区分がある。<sup>(4)</sup> これらも九乗でいうと、mahāyoga 乗、anuyoga 乗、atiyoga 乗に属するものである。たとえば、mahāyoga 乗の「幻化網」の法類や「八教説」 bkaḥ brgyad の法類が「埋蔵教説」にもあるのである。このようなことは余り言われたいが、「仏説」の「経・幻・心」に対して、「埋蔵教説」に「経・幻・心」に相応するものがあると言うことも出来る。<sup>(6)</sup> それゆえ、教法内容では「仏説」と「埋蔵教説」に同部類に属するものがあり、教法内容で「仏説」と「埋蔵教説」の分類はできない。ニンマ派で「仏説」と「埋蔵教説」を分ける基準は何かというと、前期仏教弘通時にインドからもたらされた<sup>(7)</sup>とされる経・タントラの翻訳に依るものを、「仏説」としているように思われる。たとえば、ゾクチェン atiyoga 乗の「教誡部」でロンチェンバ Klon chen pa に到る系統は、「埋蔵教説」の系統である。これを「仏説」の系統とするのは、同じゾクチェンの「心部」の中心タントラ Kun byed rgyal po がインドからもたらされたものと考えられているからである。

以上で、(2)「伝承の六次第」を除く、ニンマの教法の諸範疇の相互関係は説明し了えた。九乗の宗義の下六乗(声聞乗～yoga 乗)に関しては、「仏説」に含められるが、ニンマ派では内タントラの三乗ほど重要視されない。「埋蔵教説」ではそれらに関するものは、ほとんど無いと思

われる。

(2)「伝承の六次第」に関して、簡単に説明しよう。(ア)「仏、御意による伝承」<sup>(8)</sup>は、諸仏が言葉・文字を使わないで、心から心へと伝える方法である。(イ)「持明者、記号による伝承」<sup>(9)</sup>は、持明者たちが文字を使わないで、「記号」 brda を用いて伝承する系である。(ウ)「人間、耳による伝承」<sup>(10)</sup>は、人間が口から耳へと言葉によって伝えるものである。(エ)「指名の教え、予言による伝承」<sup>(11)</sup>は、発掘する「テルトゥン」に、所表の真実の智である密意の奥底(mtshon bya don gyi ye ces dgois paḥi mthil)を与えて、未来の予言をして、[「埋蔵書」が]止めていた息をすること (dbugs dbyun ba) による伝承である。(オ)「カルマの残余、埋蔵書による伝承」<sup>(12)</sup>とは、能表である「記号」によって文章をつづって、埋蔵場所の守護神に托して、あらわれないように封印する。予言された時期が到り、祈願の力が熟し、カルマの残り (las kyi hphro) が除けられ、守護神が妨げないという条件がそろると、「テルトゥン」が発掘する。それらの「埋蔵書」がダーキニーの記号文字 mkhaḥ ḥgro brdaḥi yi ge によって書かれていて、通常人には解読できないために、『ニンマ派仏教史』ではこの伝承を「ダーキニー、封印による伝承」 mkha ḥgro gtad rgya と呼んでいる。(カ)「祈願、封印による伝承」<sup>(13)</sup>とは、「埋蔵書」を自由にできる人が発掘するように、という祈願によって封印することによる伝承である。

これらのうち、「仏説」の伝承の仕方は、(ア)～(ウ)の三種であり、「埋蔵教説」の伝承方法は、(ア)～(カ)の六種である。

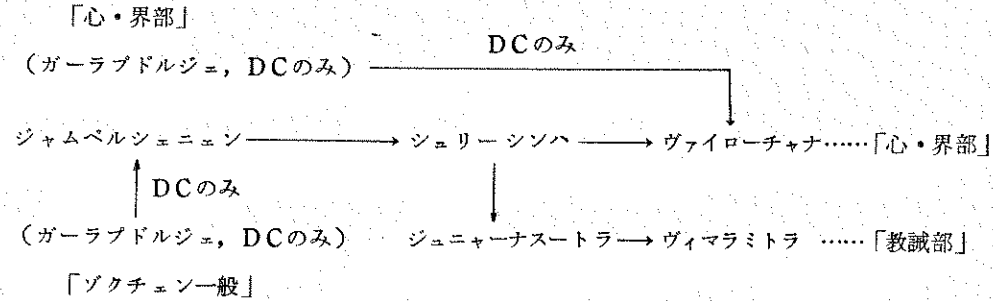
#### IV ゾクチェンの歴史的背景

ゾクチェンの成立に関しては、歴史的に問題となる部分が多い。『ニンマ仏教派史』(略号 DC)によれば、ガーラブドルジ dGaḥ rab rdo rje が金剛薩埵からゾクチェンの教法を授けられ、三人のダーキニー dhākiṅx と共にそれを文字で表わした。彼の弟子ジャムペルシェン ḥJam dpal bces gñen が、それらを三つの「部」 sde<sup>(1)</sup>に分けた。授けるべき弟子がいなかったため、「教誡部」は埋蔵した。後に、シュリーツンハ Çrisirḥa が発掘して、「教誡部」の教法をさらに四つに分類した。<sup>(2)</sup>彼の弟子がヴィマラミトラ Vimalamitra とジュンチャーナースートラ Jñānasūtra であるといわれる。

これはゾクチェン一般の系統といわれるものであるが、実際は「教誡部」の系統をいうもので

ある。「心部」「界部」は主にヴァイローチャナ Vairocana からの系統とされる。<sup>(3)</sup>

以上の系統を整理のため図示する。



このように、伝承史料による限り、ゾクチェンはインドで成立し、それがチベットにもたらされたのであり、その伝播者の主なるものはヴァイローチャナとヴィマラミトラとされる。

しかし、チベットの伝承史料には、アティーシャ以後のインド仏教の偏重による潤色が施されていることを考慮する必要がある。ゾクチェンは、おそらくチベットでヴァイローチャナ、ヴィマラミトラなどのタントリストによって編集・創作されたものと思われる。タントラと中国禅の融合は mahāyoga 乗ですでになされている。後述する如く、それは密教の「菩提心」の観法と中国禅の「見性」「観心」が教義的に共通のものを含み、mahāyoga 乗密教側が中国禅の実践法の容易さ・簡潔さに影響されたためである。ゾクチェンではこの融合が中国禅側に傾き、実践に関しては中国禅の即身成仏・頓悟に全く一致している。

また、「教誡部」に関しては、その「部」としての成立は、後期弘通時であると思われる。中国仏教的な部分の成立を前期弘通時に認めるとしても、<sup>(4)</sup>その主要部分には後期弘通時の密教の影響が著しいからである。

以上が「初期のゾクチェン」である。

次に、ゾクチェンがチベットで形成されて後、教義が整理・確立されるようになる。「心部」と「界部」は、『テプテルゴンポ』では別々の系統が記されているが、教義的には極めて近い。ヴァイローチャナの弟子のサンギェグンポ Sans rgya mgon po で、「心部」と「界部」の系統は分岐するが、後代まで「心部」が伝えられるのは、この「界部」の系統によってである。『ニンマ派仏教史』にはそう記されている。

この「界部」の系統の中で、「心部」はともかく「界部」の教義の統合・整理をしたのは、サンギェグンポから教えて七代目のジェン・ダルマボディ hDzen Dharma bodhi (1052～1168) であったとされる。『テプテルゴンポ』の「界部」の記述は、大部分彼に関するものである。彼の生存時代は十一世紀であり、チベット仏教界全体が、ランダルマ王の破仏とそれに統

く宗教界の混乱による痛手から立ち直ろうとした時期である。墮落した仏教を是正するためにアティーシャが招かれた時期であり、インドから正統密教が伝えられ、「新密呪」派 gsar ma pa と呼ばれる各宗派が確立する時代である。ニンマ派内でもこのチベット仏教一般の趨勢に呼応するかのような動きが見られた。

「幻化網」の「スル流」のドブクパ sGro phug pa (1074～1134)、「ロン流」のロンゾム Ron zom、「界部」(及び「心部」)系のこのジェン・ダルマボディである。彼らによってニンマ派の教義が統合・整理されたと想像される。また、ゾクチェンに関しては、この11世紀に「仏説」の教義統合のために、前期弘通時の中国禅系文献が「埋蔵書」として利用されたことも、特筆されるべきである。これらの「埋蔵書」は「埋蔵教説」にではなく、「仏説」に属する。<sup>(5)</sup>

「教誡部」に関しては、教義の確立は、十一世紀より少し遅れるジャン・タンドルジェ Shan Bkra çis rdo rje (1097～1167) から始まった。教義確立とは言っても、創作の部分も多いと思われる。彼から以後は「直接系」が続くが、彼以前は「埋蔵系」であるからである。彼の発掘した埋蔵書が、本当にチェツン・センゲワンチュク lCe btsun Sen ge dbaṅ phyug<sup>(6)</sup> やヴィマラミトラのものである保証はない。少なくとも、「教誡部」の中で最も重要であり、後期弘通時の新しい密教の影響の濃い「無上秘密の法類」(後述)は、彼以後に創作されたものと思われる。

教義の確立はジャン・タンドルジェから始まったが、実質的にそれを大成したのは、ジャン・タンドルジェから七代目、十四世紀のロンチェンラブチャンパ Kloṅ chen rab ḥbyams pa (1308～1363) である。ニンマ派をチベットで存続し、「新密呪」諸派に対抗できる宗派に仕上げたのは、彼の功績に依るころが大きい。それは「心部」「界部」も含めて、ニンマ派全体について言えることである。

以上が「中期のゾクチェン」の歴史的背景である。

後期になると、ゾクチェンも含めて「仏説」は、「テルトゥン」<sup>(7)</sup>たちによって引き継がれ、「埋蔵教説」の系統と同一になって伝承される。この点は『一切宗義』に明記されていないので、その記述の一つの欠点ともなっている。重要な「埋蔵教説」の系統としては、ドルジェタク rDo rje brag 寺に依る「北テルマ」系、ミンドゥルリン sMin grol gliṅ 寺に依る「南テルマ」系がある。とくに、後者の創始者であるテルダクリンパ gTer bdag gliṅ pa (1634/46～1714)には、「仏説」のほとんどの系統が集まり、それらの系統は彼を経て現代まで続いている。ダライラマ五世の弟子でもあり、その政權と結び付いて、ニンマ派が隆盛を極めた時期である。

彼以後は、ズンガルのチベット侵入とそれに続く国内情勢の変化によって、<sup>(8)</sup>一時的に衰退する



が、ゾクチェンも含めた「仏説」の系統は現代まで続いている。『一切宗義』では「仏説」の系統が減じたかのように記すが、それは誤りであり、『ニンマ派仏教史』でも批判されている。<sup>(9)</sup>

以上が「後期のゾクチェン」の歴史である。

## V ゾクチェン一般の教義と「心・界部」の教法

九乗の宗義の最高乗である atiyoga 乗は、ゾクチェン rdzogs chen と呼ばれる。既に述べた如く、この乗は「心部」sems sde「界部」kloñ sde「教誡部」man ñag sde と三部に分かれる。まず、三部に共通なゾクチェン一般の教義について説明し、その後、三部を個別に説明しよう。その場合、「心・界部」と「教誡部」とでは、教義・実践に大きな隔りがあるので、「心・界部」を一まとめにして論じ、「教誡部」は別けて論ずる。

### 1) ゾクチェン一般の教義

#### 1-1) 『宗義の宝蔵』に叙述されたもの

ゾクチェンの教義とは、あらゆる相対と離れた真理に関する教義である。その真理は「心性」sems ñid「菩提心」byañ chub sems「自生の智」rañ byuñ ye çes「法性」chos ñid「根基」gshi「明知」rig pa という様々な名称で呼ばれ、それらはほとんど同義である<sup>(1)</sup>。また、その真理そのものが、ゾクチェンと呼ばれることもある。更に、その真理と現象諸法の関係もゾクチェンの教義内容となる。

Kun byed rgyal po にはゾクチェンの「ゾク」(rdzogs, 究竟)に関連して、その教義を説明し、「一に究竟している (rdzogs)。二に究竟している。一切に究竟している。」<sup>(2)</sup>と記されている。

『宗義の宝蔵』G.Th, 168 b, 4~169 a, 4 には、この Kun byed rgyal po の記述を次のように注釈している。

「一に究竟している」とは、「心」sems によってつくられたものについて究竟していることである。即ち、現象の諸法は「心」によってつくられたものであり、自性が無いことによって、「自生の智」の「状態」ñan<sup>(3)</sup> から動いていないために、究竟しているのである。

「二に究竟している」とは、「円満具足」phun sum tshogs pa, sampatti に関し

て究竟しているのである。「自生の智」に三仏身(法身・報身・化身)が本来具足していることによって、他から求める必要なく究竟しているのである。

「一切に究竟している」とは、「菩提心」について究竟していることである。一切諸法が「菩提心」<sup>(4)</sup>の「状態」に集まっており、その「状態」からのほり çar pa (真性随縁とほぼ同義)、その「状態」に住することによって、その「菩提心」について究竟しているのである。

以上が『宗義の宝蔵』の説明である。これらのうち、一番目と三番目が重要である。両者合わせて次の二つのことを説いてるように思われる。一つは、現象諸法が心によって作られたものであり自性が無いことである。他の一つは、諸法は自性が無いままに「真理」そのものであり、「真理」を意味する「菩提心」において現象諸法が自然成就 lhun grub していることを説くものである。この二点は、後述する如く、ゾクチェン教義を貫く二つの側面である。

#### 1-2) 『真如の宝蔵』gNas lugs rin po cheñ mdzod に叙述されたもの

この論書の題名は、サンスクリット語に還元すると、Tathatā-ratnakośa となるとロンチェンパ Kloñ chen pa が記しているが、ロンチェンパがチベット語で著作したものである。この論書によると、ゾクチェン一般の教義は、次の四つにまとめられる。<sup>(5)</sup>

- (一) 「無なること」 med pa  
一切諸法の自性が無いこと
- (二) 「坦々たること」 phyal pa  
広がり切れることと一方に偏することが無いこと rgya chad phyogs lhun med pa
- (三) 「自然成就なること」 lhun grub  
本来から自然成就していること ye nas lhun grub
- (四) 「独一なること」 gcig pu  
一切諸法が「独一なる自生の智」rañ byuñ ye çes gcig pu の「状態」に集まっていること。

これらをもう少し詳しく説明しよう。

#### (一) 「無なること」

これは諸法に自性が無く「空」であるという原始仏教以来の概念である。三つのものに関して説かれる。「自生の心性」そのものに自性が無いことと、「境」yulに自性が無いことと、及び「有境」(yul can)に自性が無いことである。

□ 「坦々たること」

phyal pa<sup>(6)</sup> は同音の cal (gcal, 広まり) のことである。『藏文辞』の phyal le ba がそれに当る。「平坦なること」を意味する。これは三昧の無分別・無努力な瞑想状態を指す語である。この三昧状態は「中断なく限りなく坦々たること」 bar med mñam pa chen po と結びつけられ、虚空の形容にも使われる。また、「廣大無辺の漂い」 rgya yan<sup>(7)</sup> の瑜伽にも結びつけられる。これら三語は同一の意味をもち、三昧状態における諸法のあり方を示したものであり、「真如」 tathatā のことである。実践に由来する全く仏教的な「真如」、すなわち、諸法が法性のままにあるということに即して「真如」を表わすものである。

□ 「自然成就なること」

これは lhun gyis grub pa の略された言葉である。自然に成就していること、勞せずして成立していることという意味である。

「自然成就なること」を説明する前に、その説明のためにも必要であるため、まず、「ゴウォ」 no bo と「ランシン」 rañ bshin について述べよう。現在のところ両語の正確な意味は分からず、用いられる場合に従って、それぞれの意味合いが相違するとも考えられる。また、ニソマ派では考察対象の定義が、「ツェンニィ」 mtshan ñid を合わせた三点から説かれる場合が多い。筆者の現在の考えでは、「ゴウォ」と「ランシン」は共に特質を意味するが、前者の方が根本的であり本来的である。no bo, rañ bshin, mtshan ñid を試訳してみると、本質・特質(特性)・特徴あるいは本性・自性・行相となるかと思われる。これらの用例はニソマ派だけでなく、チベットの他宗派にも見られる。<sup>(8)</sup>

さて、「自然成就なること」は三種記されてある(10b, 6~11a, 1)。「顯現・有」 snañ srid は「ランシンが自然成就」 rañ bshin lhun grub, 輪廻・涅槃は「化成が自然成就」 rol pa lhun grub, 「菩提心」は「本来から自然成就」 ye nas lhun grub という三種である。

最後のものから説明すると、「菩提心」が「本来から自然成就」というのは、「菩提心」が人為によらずに自生 rañ byuñ していることである。

二番目の「化成が自然成就」は「如意宝の如き菩提心」から一切諸法がのぼることが、「自然成就」であることである。一切諸法が「菩提心」からの「化成」になる。輪廻の法は不浄なる「化成」であり、涅槃の法は清浄なる「化成」である。この「化成が自然成就」は「空にして自然成就な根基の顯われ」 ston pa lhun grub gshi snañ chen po とも呼ばれる。

最初の「顯現・有」の「ランシンが自然成就」ということは、「菩提心」の「ランシンが自然成就」と現象諸法の「ランシンが自然成就」が一致すること。現象の「ランシンが自然成就」という「位相」「状態」こそが、「菩提心」の「ランシンが自然成就」の「位相」であることを意味する。つまり、有為である諸法が無為(=自然成就)になるのである。有為である諸法が無為となるのは、「法性」として、あるいは「法界」において無為になるのである。諸法が「法性」(=真理)の「位相」となるのである。

同書の 11a, 6 に、一切諸法の「ゴウォが本来清浄」 no bo ka dag, 「ランシンが自然成就」と記されている。この二語は、普通には「菩提心」の二側面を表わす語である。このことは一切諸法以外に真理を設けていないことを意味する。

□ 「独一なること」

一切諸法の「根基」である「独一なる明知」 rig pa gcig pu は多様に顯われても、独一なることより動いていないことである。この「根基」より輪廻・涅槃の諸法がのぼっても、根本は独一なる「菩提心」であり、それら諸法は顯われるときから空であり、夢・幻・水月の如くであることである。

一切諸法は「本来空」 ye ston であり、「空」として一つであり、その「本来空」である独一の状態こそが、「菩提心」の独一なることの「状態」「位相」であることを意味すると思われる。

また、「独一なる明知(あるいは菩提心)」は、流出説の根源・本体を意味しない。妄念によって「心」に諸法が顯われるが、その妄念が空ぜられ諸法が空ぜられた状態の「心」を意味する。その状態では、諸法が「心」であり、「心」は「空」なる「法性」の「位相」となっている。「独一なる明知」とはそのような「法性」となった空なる「心」を言うのである。それ故、そのような「明知」(=「菩提心」)は、「法性」として等質でありつつ、個々人に存在するものである。ゾクチェンでは後述する如く転依を認めないが、転依した阿頼耶識あるいは如来藏のようなものである。所取・能取の無い「心」である。『起信論』における「心性」であり、その「心性」も流出論的本体ではなく、このように理解されるべきものである。

以上が『真如の宝蔵』に説かれているゾクチェンの教義である。それらはさらに四つづつの項目に分けられて、十六の異門として説かれている。<sup>(7)</sup> また、種々の瑜伽の名称も記されているが、内容的には上述の教義以上には出ない。<sup>(8)</sup>

ゾクチェンの教義は基本的にはこの四つに尽きる。これらは「ゾクチェンの四義 don bshi」と呼ばれる。ゾクチェンの教義で使われる他の用語もすべて、これら「四義」に含まれる。

2) 「心・界部」の教法

2-1) 『最勝乗の宝蔵』と『宗義の宝蔵』の九乗の宗義の概要部分 (Th・Ch, 71b, 2~78a, 1. G・Th, 165a, 5~177a, 5) に叙述されたもの

「心部」と「界部」<sup>(9)</sup>の教義はたいへんよく似ている。ほとんど同じものもあるので、「心部」と「界部」の教義の特徴を明らかにするためには、まずそれら二部の教義の差異を示すのがよいと思う。

二部の教義の差異は、後述する「界部」の四つの「界」kloñ のうちの第二の「界」、即ち「様々なものについて説く斑(まだら)の界」kloñ khra bo sna tshogs su smra ba に記されている。この「界」はさらに三つに細分される。

- a. 「有について説く心部と相応する斑の界」 yod smra sems sde dañ mthun pañi kloñ khra bo
- b. 「無について説く自己の要訣と相応する斑の界」 med smra rañ gnad dañ mthun pañi khra bo
- c. 「有・無を教誡〔部〕と相応して説く斑の界」 yod med man ñag dañ mthun par smra bañi kloñ khra bo

これらのうちで、「有」とは「自生の智」から諸法が様々に「自らのぼる」rañ çar ことである。真性が随縁して現象になる側面のことである。(ただし、本来的には諸法が「心」に顕われること)。「無」とはそれら諸法が「本来清浄」であり「本来解脱」ye grol (これは「自ら解脱する」rañ grol とほとんど同義) していることである。「化成」としての諸法が「勝義空」に消入し、真如へ帰一することであり、真性随縁の反対面である。

以上の「斑の界」の記述から、「心部」と「界部」の差異は、「心部」は「自らのぼる」顕現の方面を説くもの、「界部」は「自ら解脱している」本質の方面を説くものということになる。ついでに言えば、「教誡部」はその両方を調和させて説くものである。<sup>(10)</sup>

2-1-1) 「心部」の教法

「心部」は三部の中では最も中国禅に近く、ゾクチュン初期の教法を伝えているものである。『最勝乗の宝蔵』(Th・Ch, 73a, 1~2) では「心部」を大きく二分して、「様々なものが心であるというゾクチュン」sna tshogs sems yin du smra bañi rdzogs pa chen po と「〔様々なものが〕心の方面であるというゾクチュン」sems kyi phyogs yin du smra bañi rdzogs pa chen po とに分ける。「心の方面」とは、心に属するもの、心という範疇にあるものを意味すると思われる。<sup>(11)</sup>

さて、大きく二分された「心部」のうち、前者の「心」は実践主体の「心」であり、「心」と「心性」と分けて観念化する以前の「心」である。一切諸法がその「心」であり、対象 don の有も無もともに否定する。

後者の「心」は「心性」と「心」とに分けられた場合の「心」である。現象諸法の説明について言えば、「心性」と現象諸法の間「心」という概念を挿むのである(第三の「セムチョク・パ」参照)。しかしながら、「心性」は抽出されたものではなく、所取・能取が無く清浄になった「心」を意味する。

次に、「心の方面であるというゾクチュン」の種類が、『最勝乗の宝蔵』と『宗義の宝蔵』で異なる。図示すると、

『最勝乗の宝蔵』	『宗義の宝蔵』
I. 「様々なものが心であるというゾクチュン」	
II. 「心の方面であるというゾクチュン」	
1. 「果は心の生じたところと主張する セムチョク・〔パ〕」 ḥbras bu sems kyi byuñ sar ḥdod pañi sems phyogs〔pa〕	1. 「果は本初の界と言うもの」 ḥbras bu gdod mañi dbyiñs la zer ba
2. 「誤謬・障蔽を超えたセムチョク・ 〔パ〕」 gol sgrib las ḥdas pañi sems phyogs〔pa〕	2. 「誤謬・障蔽を超えるセムチョク・パ」 gol sgrib la bzla bañi sems phyogs pa
3. 「理由〔によるもの〕・〔根源が〕 乱れ混雑されるセムチョク・〔パ〕」 gtan tshigs ḥkhrugs sdebs kyi sems phyogs〔pa〕	3. 「理由〔によるもの〕・根源が毀される セムチョク・パ」 gtan tshigs khuñs rdib kyi sems phyogs pa
4. 「広がり切れることと一方に偏す ることが無い自生の智のセムチョク・ 〔パ〕」 rgya chad phyogs lhun med par rañ byuñ ye çes kyi sems phyogs〔pa〕	4. 「広がり切れることと一方に偏するこ とが無いことについて主張するセムチョク ・パ」 rgya chad phyogs lhun med par ḥdod pañi sems phyogs pa
5. 「かたよりをとる物が自ら成立してい ること〔を説く〕セムチョク・〔パ〕」 phyogs ḥdzin dños po rañ grub	5. 「かたよりをとるもの〔に関する〕宗義 のセムチョク・パ」 phyogs ḥdzin grub mthañi sems phyogs pa

paḥi sems phyogs [pa]

6. 「心計と離れた宗義を開陳するセム  
チョク・[パ]」 grub mthaḥ blo  
bral ḥan ḥbyed kyi sems  
phyogs [pa]

6. 「心計と離れ、かたよりをとるものから  
離れていること[を説く]セムチョク・パ」  
blo bral phyogs ḥdzin las ḥdas  
paḥi sems phyogs pa

7. 「心の方面であると言うセムチョク・パ」  
sems kyi phyogs yin du smra baḥi  
sems phyogs pa

上図の如く、『宗義の宝蔵』では「様々なものが心であると言うゾクチュン」が記されず、「心の方面であるというゾクチュン」が七種に分けられている。七番目のものは、それまでの六種の「セムチョク・パ」<sup>(14)</sup>の総括のような内容である。

さて、これらの「セムチョク・パ」は諸法が「心の方面」であることを説くものであり、それに尽きるが、その教義を細分して六つの側面から考察しているのだから、それらを簡単にまとめてみる。

1は諸法が解脱していることを説き、「根基」が「本来から置かれ」ye gshag であり、「自ら置かれてある」rañ gshag ことによって、重複 bskyar して対治する必要がないことを説く。「教誡部」の「テクチュ」khregs chod の観法のうちに同一のものがある。2は「心計」blo (=妄分別)<sup>(15)</sup>によって迷妄している他の八乗を批判して、誤謬・障蔽を超えた「自生の智」を説く。3は「理由」を示して、輪廻・涅槃の根源を毀す。4と5は観法を説く。4は「自生の智」の「化成」が遍満して偏倚なきことの見解。5は「不偏倚な廣大無辺の漂い」rgya yan phyogs med の三昧。6は「自生の智」が「心計」と離れていることによって、諸法が真・妄として成立しないことを説く。<sup>(16)</sup>

### 2-1-2) 「界部」の教法

「界部」の教法は、「自生の智」からのぼった諸法が、「本来清浄」であり、「本来解脱」していることを強調し、「化成」が「勝義」に帰一し、同化してしまうことを強調するものである。

この「界部」は大きく四種に分けられる。即ち、

- 1. 「因無きことについて説く黒き界」  
kloñ nag po rgyu med du smra ba
- 2. 「様々なものについて説く斑の界」

kloñ khra bo sna tshogs su smra ba

3. 「心について説く白き界」

kloñ dkar po sems su smra ba

4. 「因果を超えた究極界」

kloñ rab ḥbyams rgyu ḥbras la bzla ba

これらのうちで、四番目の「界」については、『法界の宝蔵』Chos dbyiñs rin po cheḥi mdzod kyi rtsa ba (蔵外 No. 491-3033)の自注 Chos dbyiñs rin po cheḥi mdzod kyi ḥgrel ba luñ gyi gter mdzod (蔵外 No. 492-3034)の 223a, 3-4 で、「究極界はすべての総括の撰頌 spyi chñs としてまとめられたものであることによって、とりわけて logs su 説明しない。」と記されている如く、上の三種の「界」を総説したものである。それゆえ、「界部」の分類は、本当は、最初の三種に尽きる。

最初の三種の「界」に関しては、「黒」「斑」「白」という呼称でその差異が知られる。即ち、「白き界」は「心」について言うもので、これは「有」yod である「自らのぼる」方面を主に説くものである。「斑の界」は既述した如く、「有」と「無」と「有無」を説くものに当り、「黒」が「無」を説くものに当る。それゆえ、一番目の「黒き界」は「無」である「自ら解脱している」方面を説くものである。また、その「黒き界」で因がないことは、「自生の智」について説いているようにも思えるが、内容を調べると、諸法に関して因がないとも教えているように思われる。諸法に因が無いから、「自ら解脱して」いて、本来清浄であると説くのである。

以上のことを図示すると、

- 1. 「黒き界」 ——— 「無」
- 2. 「斑の界」
  - a. 有について説く「心部」と相応する斑の界 ——— 「有」
  - b. 無について説く自己の要訣と相応する斑の界 ——— 「無」
  - c. 有無を教誡部と相応して説く斑の界 ——— 「有・無」
- 3. 「白き界」 ——— 「有」

となる。もちろん、「黒き界」でも「有」であること、即ち、「自らのぼっている」ことの方面に関しても説いている。「自らのぼっていること」が無ければ、「自ら解脱していること」はあり得ないからである。ただ、強調点を「無」の方面に置くというだけである。そのことは「心部」と「界部」との関係に同じである。ロンチュンパの「界部」の分類の

意図は、少なくともそれら「界」の呼称の上からみると、以上の如くになると思われる。

それでは、それぞれの「界」について説明しよう。

### 1. 「因無きことについて説く黒き界」

これは諸法に因が無いから「自ら解脱して」いて、「本来清浄」であると説くものである。この界はさらに三種の「黒き界の部」に細分される。即ち、

- a. 「御行為の黒き界の部」 mdzad pa kloñ nag gi sde
- b. 「御慈悲の黒き界の部」 thugs rje kloñ nag gi sde
- c. 「化成の黒き界の部」 sprul pa kloñ nag gi sde

である。これら三種とも諸法が「自ら解脱して」いることを説くものであるが、それら諸法が真理（＝「自生の智」の「自らのぼった」ものであることに関して、化身 sprul sku が現出する際の用語を借りたのである。「御行為」「御慈悲」「化成」がそれである。また、三種の部とも「理由」を説くことは、先述の「セムチョク・パ」の三番目のものに似ていると言える。三種の部をそれぞれ説明すると、aは、諸法が因なくのぼっていることによって、偏倚なく、「自ら解脱している」ことを示す。bは、のぼったもの çar ba と解脱したもの grol ba が同等であることによって、諸法が「本来解脱していること」を示す。これは「智」,「御知」 mkhyen pa, 「心性」と心的あるいは認識論的方面から説いている。「御慈悲」とは、その点を考慮して名づけられたものと思われる。cは、諸法の「依ること」 ltos pa の無なることと「依られる根基」 ltos gshi<sup>(17)</sup> の尽きていることを示し、「真理」（＝「根基」）が本来解脱していることを説く。「根基」そのものも自性なく空であることを説くものである。「教誡部」の実践「テクチュ」の「五つの解脱のあり方」 grol lugs lña の観法のうちの「本来解脱」と同一のものである。

### 2. 「様々なものについて説く斑の界」

この「界」は「自らのぼること」と「自ら解脱していること」の両面を説く。既述した如くに、三種に細分される。

- a. 「有について説く心部と相応する斑の界」
- b. 「無について説く自己の要訣と相応する斑の界」
- c. 「有無を教誡〔部〕と相応して説く斑の界」

（以上の呼称は『宗義の宝蔵』に従った。）

それぞれを説明しよう。aは、「自生の智」について説き、その「化成」が妨げられるなきことと、「心計」と離れていることによって、諸法が「本来解脱」していることを説く。「有」の方面を説くために「心部」と相応するとされる。しかし、実際にはそ

れほど「有」の面ばかりが説かれてはいない。bは、「界部」の総じての「ゴウ」の説明と同じ。即ち、「有」は「法性」 chos ñid が様々にのぼるが、「無」は頭われ snañ ba（＝現象）が自己の場所 ran sa から解脱している、と記す。cは、三要訣によつて、輪廻・涅槃と努力・確立が無いことに超えることを説く。有無を二つとも強調する点と、要訣を説く点で「教誡部」と一致するものと言われる。基本的には、輪廻・涅槃の諸法が本来空 ye ston で、本来清浄であり、解脱しているというのみである。

### 3. 「心について説く白き界」

諸法が「心」の「化成」であることを説くものであり、「セムチョク・パ」と同一である。しかし、「解脱している」ことの方面を全く説かないのではない。それも「セムチョク・パ」の場合と同じである。「心」の「化成」をより以上に説く点で、「白」と名づけられるのである。

この「白き界」は大きく二種に分けられる。

- a. 「言説することができない広大な行為について説明する白き界」 las rgya che ba brjod med du bçad pañi kloñ dkar po
  - b. 「見・修を蓋する白き界」 lta sgom kha sbyor gyi kloñ dkar po
- （これらの呼称は『最勝乗の宝蔵』に従った。）<sup>(18)</sup>

それら二種の「白き界」のうち、bの内容については、『最勝乗の宝蔵』、『宗義の宝蔵』とも全く記していない。

aの「白き界」に関して、総じての説明として、「凝視による解脱」 cer grol を記す。これは「教誡部」の実践「テクチュ」のうちの「五つの解脱するあり方」の一つである。<sup>(19)</sup>

このaはさらに二種に分けられ、それぞれがさらに二つに細分される。それらを示すと、

- (a) 「海の界」 rgya mtshoñi kloñ
  - (一) 「大のもの」 che ba
  - (二) 「小のもの」 chuñ ba
- (b) 「虚空の界」 nam mkhañi kloñ
  - (一) 「日月の界」 ñi zla ñi kloñ
  - (二) 「宝の白き界」 rin po che ñi kloñ dkar po

これらはすべて「白き界」に属するものであるので、「心」に関して説くものである。以下にそれぞれの説明をしよう。

(a) 「海の界」は総じての説明として、諸法（あるいは「心」）の「自己解脱」（「自ら解脱する」と同一）、「本来解脱」「完全解脱」を記す。これらは「教誡部」

の実践「テクチュ」の「五つの解脱のあり方」に含まれる。また、この「海の界」は「心」から考察を始める。そのうち「大のもの」は「心」が空であることを説く。「小のもの」は「依られる根基」 rten gshi 「依る法」 brten chos について説き、「心」「境」さらに輪廻の縁が清浄であることを説く。

い) 「虚空の界」では、同じ「自己解脱」(さらに「本来解脱」「完全解脱」)を悟るにも、「心性」から考察を始める。そのうち「日月の界」は、「心性」について「ゴウォ」が清浄で空であること、「ランシン」が生ずること無く本来解脱していることを説く。「宝の界」は「法性」の「功德」 yon tan が円満成就 yoñs su rdzogs してのぼること、「法性」が自然成就であると説く。これは如意宝に関連して名づけられたものと思われる。

#### 4. 「因果を超えた究極界」

この「界」は既述した如くに、上述の三種の「界」の総括としての「界」である。これはさらに四種に分類される。

- a. 「作られることと離れていること〔を説く〕外の究極界」 bya ba dañ bral ba phyiḥi rab ḥbyams
- b. 「自己の理である宗義について説く内の究極界」 grub mthaḥ rañ gshun du smra ba nañ gi rab ḥbyams
- c. 「障碍が除かれるもの、秘密の究極界」 gegs bsal ba gsañ baḥi rab ḥbyams
- d. 「要訣が広げられるもの、真実性の究極界」<sup>20)</sup> gnad spros pa de kho na ñid kyi rab ḥbyams

これらは後述する「教誡部」の「外」「内」「秘密」「無上秘密」の法類と同じく、一般的な教義から奥義的な程度の高い教義へと順次に説いてある。

それぞれ説明すると、aは「自生の智」に関して三要訣、「心」に関して二要訣を説く。その「心」に関する二要訣のうちの一つが、この「界」の呼称となっているもので、「作られることが無い」である。この「界」では、「自生の智」については説くが、「自生の智」と現象諸法(あるいは「心」)の関係にまで説き及んでいない。ここで説かれる「心」は「心性」と等しいもので、実践主体の「心」である。

bは他の八乗が「自生の智」に依らず、「心計」に依ることによって、誤っていると説く。自己の宗義については、「自らのぼる」の方面で、諸法の平等性と円満成就 yoñs su rdzogs 性を説き、「自ら解脱する」の方面で、諸法と「真如」 gnas lugs の同一なることを説く。

cは三種の障碍を説くものである。それとともに、それらの障碍を除く観法とその果を説く。基本的には、一切諸法が「自ら解脱して」いて、真理(=「法性」,「自生の智」)そのものであることを主張するものである。諸法が、「顕われ・心」,「思念」 dran bsam , 所取・能取という三側面から説かれることによって、真理も三側面から説かれる。専ら観法を説く「界」である。

dは観法である要訣を二つ説く。第一の観法は「教誡部」の実践「テクチュ」の「裸の明知 rig pa rjen paに関する実践」に受けつがれるものである。即ち、見られるままの諸法を凝視した明瞭さの中で全く散乱なく弛め放つこと yin thog ños zin pa der cer re lhan ner yeñ med chen por glod pa によって、「変化せず自然成就なるもの」 mi ḥgyur lhun grub chen po の「光」 gzer を体得し、それが「境」と「心」とに広がる。それによって、それぞれが「法性」として解脱するのである。第二の観法は、「本性を凝視する要訣」 rañ ño cer mthoñ gi gnad である。これは「教誡部」の実践「テクチュ」の「五つの解脱のあり方」の「凝視による解脱」に受けつがれる。

以上が「究極界」であるが、「外」「内」は「界部」の教義を要略して記してあり、「秘密」「真実性」は観法を説くものである。特に、「真実性」の最初の要訣の観法は、前三種の「界」に見られなかったものであり、最も特徴的なものである。「界部」において創り出されたものであり、「心部」と「界部」の差異は、この観法のみと言える。<sup>21)</sup>

#### 2-2) 『一切宗義』に叙述された「心・界部」の教法

##### 2-2-1) 「心部」の教法

『一切宗義』には「心部」の教義について、「何として顕われるものでも『心』であるが、心性が自生の智としてのぼったことによって、〔その『ゴウォ』が〕自生の智より他になることはない」と主張するものと記す。これは『最高乗の宝蔵』の「セムチョク・バ」の総じての「ゴウォ」の記述とほぼ同じであり、その引用にすぎない。

また、『一切宗義』は論述対象の教法を他宗派の類似した教法と比較して、その差異を明らかにすることを特徴とし、それによって、その宗派以外の者たちに、その教法を容易に理解させようとする。

「心部」に関しては、「大印」 mahāmudrā の教法と比べている。両者の差異は、「大印」では「境」を封印し去るが、「心部」では「有境」を「心性」「明知の空」 rig ston 「本来清浄」と決定することである。

この差異に対して二つの解釈が考えられる。一つは、「大印」は現象を客塵として否定

し去るが、「心部」では「心性」からのぼったものであり、「自ら解脱」していると悟り、改めて否定しないという差異があると考えられることである。「本来清浄」とは「自ら解脱」していることと同等である。<sup>22)</sup>

他の一つは、『秘密集会』(北京 No. 81, 201-1-4~5)に、「蘊・処・界は一切諸仏が封印されたものである」と記されていることから、「封印」は諸境を神に変えて観ずることと考える。その場合、両者の差異は、実践におけるものとなる。「大印」は境を神と観想するものであり密教生起次第的、「心部」は心を心性と悟るのみで正覚する点から、中国禪的なものという差異になる。

筆者の「大印」に対する智識が十分でないため、二解釈のいずれとも決定できない。また、誤謬もあるかもしれない。

## 2-2-2) 「界部」の教法

『一切宗義』は「界部」の教義について、「〔諸法は〕法性〔すなわち〕普賢 Kun tu bzañ po の界以外に去る場所<sup>23)</sup>は無いことによって、〔所詮 brjod bya が〕法性の界以外の他の生じるものを否定する。」と記す。これは『最勝乗の宝蔵』で三部の総説のうち、「界部」について説いてあるものと同一である(Th・Ch, 72b, 4~5)。ただ、『最勝乗の宝蔵』では「法性の界」の前に、「所詮」が記されている。これが正しい形と思われる。

教義に関しては、以上の如くに『一切宗義』は『最勝乗の宝蔵』の引用そのまま、それ以上には出ないが、実践に関しては、「新密呪」派の「五次第」と比較している。二つとも「光明」ḥod gsal を重んじるという。『一切宗義』はその差異を、「五次第」は努力をとめない、「界部」の実践は無努力のものであるとする。『一切宗義』では「界部」の実践を、「縁すること〔と〕心を向けること dmigs gtad と離れた甚深なる要訣〔である〕無努力の状態に置くこと、深と輝<sup>24)</sup>が双入している智 zab gsal gyi ye çes zun ḥjug によって虹身 ḥjah lus を金剛身として成就せしめる甚深なる方法によって、この道に入った持明者たちが、智身 ye çes kyi sku としてお逝きになる」と記している。この方法は『宗義の宝蔵』の「真实性の究極界」に記されている第一の観法のことである。第一の観法とは、「見られるままの諸法を凝視した明瞭さの中で全く散乱なく弛め放つこと」である。『一切宗義』は「界部」の最も特徴的な実践法で「界部」の実践法を代表させたのである。

以上が『一切宗義』に見える「心部」と「界部」の教法である。これによって、『一切宗義』は『七つの宝蔵』 mDzod bdun をその資料の一つとして用いていることが分る。

「ゾクチェン」の無努力性や他宗派の実践道との比較など、ニソマ派以外の者としては、よくその教法の概要をとらえている。

## 3) ゾクチェン一般、あるいは「心・界部」の教義に関する試解

『最勝乗の宝蔵』と『宗義の宝蔵』による限り、ゾクチェンは二つの側面をもつ教義と言える。二つの側面とは、「自らのぼる」と「自ら解脱する」である。それぞれ説明しよう。

### 3-1) 「自らのぼる」の側面

第一の側面である「自らのぼる」は、基本的には「顛われ」(=現象諸法)は「自生の智」がのぼったものであり、影像・幻の如くに空であり、自性が無いと主張することである。しかし、単一ではない考え方を「自らのぼる」の側面にまとめているので、それらを示そう。

この「自らのぼる」の側面は、本来、「唯心論」系の教義であり、『華嚴経』「十地品」第六地の「この三界に属するものは、すべてこの心のみなるものである。」 cittamātram idam yad idam traidhātukam という偈に由来する。

この「唯心偈」に対する解釈に三種ある。第一は、「心」を「妄心」とし、その貪欲心が現象諸法をつくり出し、現象そのものは自性無く、幻の如きものとするものである。この解釈が「唯心偈」の本来的な意味であると思われる。

第二は、諸法は自性無く幻の如くであるという観想の結果、清浄なる「心性」あるいは「真心」のみとなることである。これは形而上学的な「心性」ではなく、現実当体の「心」である。悟りの果であり、その状態では「現象」と「心」は融合している。現象即心であり、唯心が唯色と等しくなる状態である。後述する「心・仏・衆生三無差別の偈」の意味するところにつながる。真性随縁や「生起次第」 bskyed rim 的な意味は含まれていない。<sup>25)</sup>

第三は、上述の第二の解釈面が、仏身遍満思想(色身の「位相」における仏身遍満)と結びついて、真性随縁や「生起次第」のような教義になったものである。これは本来「唯心偈」に無かった面であり、第二の解釈における悟りの果から見た世界を「真理」から説明したものである。

さて、ゾクチェンの「自らのぼる」の側面を考察すると、二種の「化成」が説かれている。一つは、「不浄の化成」 rol pa ma dag pa である。輪廻の法とも呼ばれる。これは「唯心偈」の第一の解釈、「妄心」が虚妄なる現象をつくり出すという思想を根本とする。それは現象諸法を迷乱 ḥphrul pa とし、根基無きものとするでも分かる。この「妄心」による「唯心論」を根底に「真心」(=「自生の智」「心性」「菩提心」)を設定して、

そこから現象の説明をする。(典型的なものは、第三の「セムチョク・バ」に見られる。)  
「真心」からの現象説明は、「唯心偈」の第三の解釈に相当する。それゆえ、この場合は「唯心偈」の第一の解釈に第三の解釈を加えたものになる。「真心」からの現象説明と現象を迷乱とすることは、『起信論』の真性随縁思想と似ていると言える。

このゾクチェンの「不浄の化成」においてさらに複雑なことに、「真理」(=「真心」「菩提心」と現象の間に「心」を挿まないで、現象がただちに「真理」の「化成」とされる場合がある(cf,『法界の宝蔵』)。そのため、「生起次第」的な傾向が強くなる。その場合、「生起次第」では現象が清浄とされるのに、ゾクチェンでは現象が迷乱とされるのは、現象の「本性」ran'noを悟らないためとされる。この「不浄の化成」の説明は、「唯心偈」の第三の解釈の傾向が強くなったものである。このため、「不浄の化成」は本来「唯心偈」の第一の解釈、「妄心」による「唯心論」を根本とするのであるが、その点が弱くなり、「妄心」の「唯心論」が見落され、「自らのぼる」の側面は「生起次第」と全く同一であるという誤解を招くようになる。なによりもまず、「不浄の化成」では現象は空である上に、迷乱とされることに注意しなければならない(cf,第三の「セムチョク・バ」)。<sup>26</sup>

次に、「自らのぼる」のうちもう一つの「化成」は、「清浄の化成」rol pa dag paである。「涅槃の法」とも呼ばれる。これには他乗の「道」lamの「果」である「智」や「仏身」が含まれる(cf,『法界の宝蔵』第六章)。「不浄なる化成」である現象諸法の「本性」を悟ると、それら諸法が「智」や「仏身」などの「清浄の化成」となるのである。「不浄の化成」は並列的に考えるべきものでなく、それらの内容は同一のものである。身・語・意を上述の悟りによって御身・御語・御意 sku, gsun, thugsに変えることである。「唯心偈」の第三の解釈、「真心」の「唯心論」(=「真性随縁」)と現象を「清浄」とする点で、密教の「生起次第」と同一である。

また、この「清浄の化成」が「化成」であって、やはり幻の如く自性無く「真理」(=「菩提心」と異なるということに対する説明は、中観教義を援用すれば理解し易い。即ち、「不浄の化成」「清浄の化成」「菩提心」がそれぞれ「世俗」「唯世俗」「勝義」に相当する。同じ現象内容の悟りの差異による三側面をあらわすことも同一である。「清浄の化成」と「菩提心」の差異は、「唯世俗」と「勝義」の差異である。「如幻空性」と「如虚空空性」<sup>27</sup>の差異である。長尾教授のいう二諦の簡別性に相当する。ただし、「自らのぼる」の側面においてのみである。「自ら解脱する」の側面では、二諦との関係はおのずから異なり、二諦は消失してしまう。また、中観では「唯世俗」を有意味的・積極的に説くのに、ゾクチェンでは「清浄の化成」を無意味的・否定的に説く点も異なる。

以上によって、ゾクチェンの「自らのぼる」の側面は、「妄心」の「唯心論」を基盤とし

つつ、それに「真心」からの真性随縁思想を加えた「不浄の化成」と、同じく「真心」からの真性随縁思想であるが、現象を清浄とする「生起次第」と同一の「清浄の化成」が、「本性」に対する悟りを仲介として(間にはさんで)両面を構成しているような「唯心論」と言える。

この「自らのぼる」の側面では、現象と真理の同一は説かれないこともないが、幻の如く、空で、根基なきことの方が強調される。それは「妄心」からの「唯心論」を根本としているためである。

また、この「自らのぼる」の側面は、「ゾクチェンの四義」のうち「無たること」と「化成の自然成就」に当る。現象は心のつくったものというのが「化成の自然成就」であり、その現象に自性がなく幻の如くであるというのが、「無たること」である。

その他、「自らのぼる」の側面では、本来は諸法が「心」に顕われることを意味し、流出説とは異なるが、ややもすれば、流出説的傾向に誤って解釈されがちになる。それは「心性」(=「菩提心」「自生の智」という依他起性ではない円成実性のものからの諸法の現出を説くためである。この傾向を妨がんとする努力は、「自らのぼる」の「自ら」と「因無く」ぼるの「因無く」(cf,「御行為の黒き界の部」)、及び「心性」そのものが自性無く空である点に見られる。

### 3-2) 「自ら解脱する」の側面

次に、ゾクチェン教義の第二の側面である「自ら解脱する」について説明しよう。諸法がそのまま「自ら解脱して」いて、「真理」(=「自生の智」)であると悟る側面である。「無明」「煩惱」もそのまま「真理」となる。「輪廻の法」(=「不浄の化成」)や「涅槃の法」(=「清浄の化成」)もそのまま「真理」と観ずる。現象諸法を決して否定し去らない。

この「自ら解脱する」にも、二つの面がある。第一の面は、「真理」の「化成」としてのぼったものが、「勝義空」に消えてしまうこと。「究竟次第」と同一の面である。これは現象が全く無になって「真理」だけが残るというのではなく、現象の空なる状態こそが「空なる菩提心」のことであり、「勝義空」である。現象の空なる状態以外に「勝義空」はあり得ないと考えるべきである。「自らのぼる」の側面での現象の空を押し進めたものとも言えるが、「勝義空」と一致し、「真理」そのものになったとも言える。この面での「清浄の化成」と「菩提心」(=「真理」)との差異は、長尾教授の二諦の簡別説で説明され得る。即ち、「唯世俗」は縁起の理の如く諸法があることであり、空性の縁起有への還相であり、それは tathatā に似ているが、縁起有である限り、「勝義空」ではない。従って「勝義諦」ではない。



次に、「自ら解脱する」の第二の面は、「真理」として解脱した諸法が空なるままに自ら成就 *ran grub* していることである。第5の「セムチョク・パ」で説かれる如く、「根基」では「かたよりをもったもの」*phyogs hdzin* が捨てられずに成就していることである。この場合の「かたより」*phyogs* は「心の方面」*sems phyogs* の「方面」と意味が異なる。「かたよりをもったもの」とは、諸法の「位相」にあるものである。能取・所取をもったものとも言える。「界部」の第三の「究極界」では「かたよりをもつ心計」という表現も見える。

「かたよりをもったもの」が「根基」で捨てられずに成就していることは、如意宝の如き「法界」*chos dbyins* で一切諸法が努力なく自生していることとも言われる（cf、『法界の宝蔵』第四章）。それは「菩提心」の一面であり、「一切が成就しており自然成就たるもの」*kun grub lhun grub chen po* とも呼ばれる（cf、『法界の宝蔵』第七章）。まさに、諸法が理の如くある状態であり、仏教的 *tathatā* の状態である。

この「法界」における仏教的 *tathatā* の状態と「清浄なる化成」の差異は、どの如く考えるべきか。長尾説の二諦の簡別性では説明し切れないように思われる。縁起有と勝義空の説明が十分でないためである。

そこで、「世俗諦」「唯世俗」「勝義諦」について考察してみる。<sup>28</sup> まず、「世俗」と「勝義」の差異は、

- 世俗—二として顕われることを有するもの
- 勝義—二として顕われることと離れているもの

となる。二とは能取・所取を指す。

次に「世俗諦」と「唯世俗」の差異は、

- 「世俗諦」—二として顕われる縁起有の諸法を真実（諦）と執すること。自性無の縁起が有自性の如くに顕われること。
- 「唯世俗」—空性の縁起有への還相。自性を有とする執着はないが、縁起有があるもの。すなわち、二として顕われる諸法を真実と執することはないが、二として顕われる諸法は存すること。

となる。

以上が中観教義における「世俗諦」「唯世俗」「勝義諦」の差異である。一般的に縁起の理の如く諸法があることが *tathatā* といわれるが、その *tathatā* が「勝義諦」でない理由もこれによって理解される。所取・能取の二が存在するからである。また、「勝義空」といっても、諸法が無になることではない。諸法は空なるままに法性として、所取・能取の二と離れて存在しているのである。それが「勝義空」の積極的表現でもある。<sup>29</sup>

これらによって、長尾教授の説く「縁起有」は「二として顕われること」、「勝義空」は現象諸法が「無」になることではなくて、「二と離れて存在すること」と補足説明される。

さて、ゾクチェンにおける「清浄の化成」が「化成」であって、「自ら解脱する」側面における「自ら成就する」でないこと、即ち、「法界」における「自然成就」でないことは、今補足説明した「唯世俗」と「勝義諦」の差異で説明される。ゾクチェンで「化成」という諸法としての「位相」は、仏教的には「世俗」に相当し、「二として顕われること」である。「清浄」と「不浄」の差異は、「諦執」が無い、あるかの差異である。「清浄の化成」が「化成」であって、「法界」における「自ら成就する」になれないのは、「二として顕われる」という「位相」であるからである。

以上がゾクチェンの「自ら解脱する」側面における諸法の「自ら成就」の面の説明であるが、禅定体験に関連して、先述した「唯心偈」の三種の解釈と結びつけてみる。「唯心偈」の第三の解釈、「真心」からの真性随縁思想、悟りの果からの現象説明が「清浄の化成」にあたる。第二の解釈、「唯心」が「唯色」となる状態が、「自ら解脱する」における「自ら成就」である。

第三の解釈では「心」と「色」（現象）の差異があるが、第二の解釈では「心」がそのまま「色」である。華嚴でいえば、「清浄の化成」は性起に、「自ら解脱」して「自ら成就」している面は事理無礙よりも事事無礙法界に相当すると思われる。「心」も「色」も超えた、「理」も「事」も超えたものである。それが所取・能取の二と離れた「勝義空」の状態である。<sup>30</sup>

この「自ら解脱する」の側面は、「ゾクチェンの四義」で言うと、「無たること」「唯一なること」「坦々たること」「自然成就なること」に当る。「化成」が「勝義空」に消えてしまうことと、「勝義」（＝真理）そのものが空である点で、「無たること」である。「勝義」のそのような状態は「空」という面では絶対唯一であるという点で、「唯一なること」である。「勝義」（＝真理）の三昧状態を表わすのが「坦々たること」である。「勝義」の状態では諸法が自ら成就しているという点で、「自然成就」なることである。ただし、「化成が自然成就」ではなくて、「ランシンが自然成就」である。

また、「自ら解脱する」においては、因縁を自性とする現象諸法が「真理」（＝「菩提心」）を自性とするに観ぜられる（cf、『法界の宝蔵』第三章）。<sup>31</sup> 諸法の「化成が自然成就」（＝有為の「位相」）が「ランシンが自然成就」（＝無為の「位相」）となり、それがそのまま「真理」の「ランシンが自然成就」（＝無為の「位相」）となるのである。

第一の「自らのぼる」の側面が『華嚴経』『十地品』の唯心偈（根本は「妄心」の唯心論）につながるものであるのに対して、この「自ら解脱する」の側面は同じ『華嚴経』の「夜摩

天宮菩薩説偈品」の心・仏・衆生三無差別の偈につながるものであり、唯心偈の第二の解釈（「唯心」＝「唯色」の唯心論）とも結びつく。

### 3-3) 「修」に関して

次に、ゾクチェンの「修」に関して、上述した二側面から説明しよう。ゾクチェンで言う「無分別・無努力の修」とは、この「自ら解脱する」における tathatā の状態（「勝義」におけるもの）を悟り、それに同化することである。

諸法をそのまま「真理」と見ることは、仏教一般に共通である。しかし、それは悟りの結果から見た場合に言われることであり、悟り以前の状態では、煩惱は煩惱とされ、否定されて、除かれるべく「修」の努力がなされる。

ゾクチェンでは、その他乗の「修」を分別や能取・所取があるから迷乱であり、「真理」と一致しないと説く。第二の側面「自ら解脱する」の悟りの後では、それら他乗の「修」という迷乱も「真理」と観ぜられる。しかし、第一の側面「自らのぼる」では否定的に扱われるのである。

要するに、現象諸法を迷乱と見ることと、悟りの後、現象をそのまま「真理」と見ることは、他乗とゾクチェンに共通である。しかし、迷乱から「真理」に到る「道」が異なるのである。迷乱を除くために努力するか、迷乱をそのまま「真理」と頓悟するかである。ゾクチェンでは、後者の立場をとるので「果」と「道」が同一と言える。

中観教義とゾクチェンとの差異もこの点から示される。上述のように確かに、「不浄の化成」「清浄の化成」「菩提心」は、中観の「世俗諦」「唯世俗」「勝義諦」に位置的に相応する。しかし、「道」を含む「唯世俗」を無意味とするか、有意義とするかにおいて、大きな差異がある。ゾクチェンでは究極的に二諦を認めないのである。ゾクチェンの論書『サムテンミクロン』*bSam gtan smig sgron* では、ゾクチェンより下乗の頓悟乗よりも劣る漸悟の乗に、中観が当てられている。それによっても、「唯世俗」に対する理解の相違がうかがわれる。

### 3-4) 結 語

ゾクチェンの教義は以上の二側面をもつものである。第一の側面「自らのぼる」を流出論的に解釈し得るのに相応して、第二の側面「自ら解脱する」にも流出論的方向性をもつと解釈することも可能である。しかし、基本的には流出論的解釈は避けるべきであろう。というのは、ゾクチェンの大成者ロンチェンパは、形而上学的実体をもつ流出論的なチョナン派 Jo nan pa の教義に対する他宗派からの批判を知っていた筈であるからである。

「自らのぼる」の側面は、諸法が「現象」という「位相」にあること、「自ら解脱する」の側面は、その同じ諸法が「真理」という「位相」にあることである。戯論の「心計」によって諸法を見るか見ないかによって、「自らのぼる」の側面になるか、「自ら解脱する」の側面になる。

また、これらのうち、「自らのぼる」の側面では諸法の平等性が言われる他に、現象と真理の同一も言われる場合もあるが、<sup>(32)</sup> 現象と真理の同一は、「自ら解脱する」の側面で強調されるのが、ゾクチェン教義の特徴である。

「心部」「界部」はそれぞれこの両側面を具えている。この両側面を具えていてゾクチェンとしては完全な教義である。それらのうち、ゾクチェン教義全体の基調は、「自ら解脱する」の側面である。少なくとも、『七つの宝蔵』に見える完成期のゾクチェンでは、その如くである。<sup>(33)</sup>

後世、教法整理期に密教の「生起次第」「究竟次第」に学んで教義を整理・統合したために、「自らのぼる」側面を強調する「心部」、自ら解脱する側面を強調する「界部」というように分類された。しかし、この分類は厳密なものではなく、上述した如く、両部ともそれぞれ二側面を具えている。たとえば、「心部」では、たしかに「自らのぼる」の側面を強調するが、それは現象が如幻であり、根基なきことを言うためである。現象と真理の同一は「自らのぼる」の側面では強調されず、「自ら解脱する」の側面で強調されるのである。

以上によって、ゾクチェンの教義とは「法性一元論」であり、「唯心論」（「妄心」の「唯心論」を根本とする）系の「自らのぼる」と「仏・心・衆生三無差別」系の「自ら解脱する」の二側面をもつものと結論できる。

## 4) ゾクチェンと中国禅及び密教

従来、ゾクチェンがインド密教（仏教タントラを指す）系のものか、中国禅宗系のものか、明確に決定されていないので、その点を考察してみよう。

### 4-1) ゾクチェンと中国禅

伝承資料による限り、ヴァイローチャナとヴィマラミトラがゾクチェンの教法をインドからもたらしたことは、否定できない。しかし、ここでは伝承資料の記述を考慮外に置こう。伝承資料は、しばしば後世に付加・修正されているからである。

このように考察条件を定めると、ゾクチェンの成立における中国禅の影響が明確にくる。それは次の諸点によってである。

1. 頓悟・無努力を説くこと。
2. サバンの著作<sup>(34)</sup>に、ゾクチェンを中国禅系と説明してあること。
3. 『バクサムジョンサン』に、ゾクチェンには中国和尚 ha çan の教法が混ぜられている、と記されていること。
4. 敦煌文献 Pelliot. No. 116 に中国禅師の名が列挙されており、ほとんどそれと同一のものが、ニソマ派の論書である『五部実録』と『サムテンミクロン』に記されている。特に、『サムテンミクロン』ではゾクチェンに到る前段階の乗の記述部分に、「頓門派」としてそれら中国禅師の名が記されている。
5. 瞑想実践において「神」lha を媒介としない。密教の実践ではどの乗でも、必ず「神」を媒介とする。
6. 悟りに到るまでの「基・道・果」gshi lam ḥbras bu を設けない。これも『バクサムジョンサン』に記されている。
7. アビシェーカが無い。(ただし、「心・界部」のみ)

これらによって、ゾクチェン教法の形成時における中国禅の影響は、間違いのないと思われる。

次に、ゾクチェンが中国禅の中で、どの宗派に最も影響を受けたのかを考察する。中国仏教のチベット伝播は、帰義軍による敦煌奪回までであると推定されるから、考察対象は初期禅宗諸派のみとなる。

まず、第一に、マカエンの禅は、瞑想実践が主であり、教義的には未成熟であったように思われる。その上、客塵を否定するものであり、北宗禅的である。ゾクチェンは客塵を否定しない。「頓門派」という大きな範疇内で影響を及ぼしたものの、直接的影響は薄いようである。

第二に、ゾクチェンの顕教および下乗タントラ批判に見える実践道の否定、即ち、努力を有する「修」は「意の判別」yid dpyod が入るために、真の悟りは得られないこと。これは南宗禅の神会（荷沢宗）が北宗禅を批判した方法をそのまま押し広げて、下乗タントラにまで及ぼしたものである。

第三に、ゾクチェンの教義において、真理を表わす同義語の中に、「明知」rig pa や「自生の智」がある。これらの語によって真理に認識論的側面を認めていることは、神会と同一である。とくに、「明知」<sup>(35)</sup>あるいは「裸の明知」rig pa rjen pa は、神会の説く「靈知」rig pa と訳語が同一であり、ゾクチェンとの関係を推定することも可能である<sup>(36)</sup>（「靈知」の訳語については、Pelliot. No. 116 参照）。

第四に、神会の教義に見られる「体」「本用」「応用」は、それぞれ、

{	「体」	—————	no bo ston pa
	「用」	{	「本用」 — ran bshin lhun grub (あるいは、ran bshin ma ḥgags)
「応用」 — rol pa lhun grub			

と、ゾクチェン教義に見られる真理の三側面に一致させることも可能である。

第五に、ゾクチェンでは「輪廻の法」と「涅槃の法」を超えた真理を説くが、神会にもそれと類似の思想が見られることである。<sup>(37)</sup>

第六に、ゾクチェンでは、諸法は「空」であるが、「空」でありつつ、「自ら成就」していると説く。諸法が「自ら解脱」して、そのまま真理であると説く。「化成就が自然成就」が「ランシンが自然成就」となり、因縁の自性が「菩提心」の自性となる。これは洪州禅系の教義を思わせる。神会にもその傾向を認めることはできるが、神会では諸法が「空」であり、その「空」と悟った状態を「空寂の知」とする。しかし、その状態で諸法が「自ら成就」しているとは、積極的に言わない。妄念および現象諸法を真理と同一であると積極的に主張するのは、洪州禅にはかならない。

以上によって、ゾクチェンは南宗禅の影響を最も受けて形成されたと思われる。「自らのぼる」の側面は荷沢宗、「自ら解脱する」の側面は洪州禅である。<sup>(38)</sup>ゾクチェンに洪州禅の影響を認めることは、問題が残るかもしれない。資料的に洪州禅のチベット伝来が確認されていないからである。しかし、馬祖道一は金和尚と共に処寂の弟子とされ、四川にいたので、洪州禅の伝来の可能性も考えられる。

この如く、ゾクチェンが南宗禅的であることを考察したが、それはインド系仏教「漸門派」に対する中国系仏教「頓門派」として総称される、マカエン禅師以来の「頓門」という土壌の上においてのことである。というのは、チベットでは「頓門派」という大きな範疇のもとで、北宗禅と南宗禅の差異には関心が払われなかったと言われるからである。しかし、「頓門派」の中でも、無努力・頓悟という点において最も進展した南宗系の禅へとゾクチェンが傾いたことは考えられる。このことは上述したゾクチェンと南宗禅との共通諸点からも裏づけられる。

#### 4-2) ゾクチェンと密教

ここでいう密教とは、「新密呪」派の anuttarayoga 乗を指す。ゾクチェンと anuttarayoga 乗の教義<sup>(39)</sup>を比べてみると、共通点もあるが、相違点も少くない。

それら両者の共通点から示そう。第一に、「心部」で強調される「自らのぼる」の側面のうち、「化成就が自然成就」が真理からの現象展開をあらわし、「生起次第」と一致する。ただし、「化成就が自然成就」のうち「清浄の化成就」のみが、現象を神性化して清浄にする点で

「生起次第」と一致するのである。

第二に、「界部」で強調される「自ら解脱する」の側面のうちで、真理の「化成」が「勝義空」へ消えてしまうことは、現象が真理の「勝義空」へ回帰する点で、「実竟次第」と一致する。

第三に、ゾクチェンでは真理を「菩提心」とすることもありますが、これは密教と同一である。

次に、両教義の差異点を考察しよう。第一に、ゾクチェンの「自らのぼる」の側面のうち「不浄の化成」は、現象を迷乱とし、根基なきものとするのである。密教の「生起次第」にはこの面がない。ゾクチェンの場合、第一の共通点で示した「清浄の化成」でさえも、現象と真理との同一よりも、現象が根基なきことを強調するものである。それは「清浄の化成」と「不浄の化成」が同じ次元で扱われていることでも分る。密教の「生起次第」は、世俗における現象と真理の同一を説くものである。ゾクチェンでは現象と真理の同一は、主に「自ら解脱する」の側面で強調される。この差異点は、ゾクチェンの「自らのぼる」の側面が心的経験に由来する唯心論であり、「妄心」の「唯心論」を含み、むしろ、それを根本としているために生ずる。

第二に、ゾクチェンの「自ら解脱する」の側面では、真理の「化成」が「勝義空」に消入することを説くが、その「勝義空」の「法界」において、諸法が「自ら成就」していることも説く。密教の「究竟次第」は現象の「勝義空」への消入は説くが、その状態において現象諸法が「自ら成就」しているとは説かない。勝義の「清浄光明」prabhāsvara への消入は説くが、その「清浄光明」における諸法の「自ら成就」まで説かないのである。

以上によって、ゾクチェンには密教と共通部分もあるが、より基本的な側面において異質な点を含むのである。この異質点に関しては、ゾクチェンが中国禅の深い影響を受けて成立したと考えられ、その教義が「唯心論」系の「法性一元論」に由来するためと思われる。共通点に関しては、ゾクチェン教義は本来「自らのぼる」「自ら解脱する」の両側面を具えていたものであろうが、後代それを「生起」「究竟」両次第に合わせて「心部」「界部」として整理したのではないかとまず考えられる。次に、ゾクチェンの成立そのものに関する密教の影響が考えられる。それは上述の如く真理を「菩提心」とすることにも見られるが、それ以外における影響の可能性も推測し得る。それを次の項で示しておきたい。

#### 4-3) 密教と中国禅の融合とゾクチェン

密教と中国禅の融合は、ニンマ派の mahāyoga 乗で行われた。ニンマ派の mahāyoga 乗はインドからもたらされた「幻化網」を基盤とするが、流派によって<sup>(40)</sup>は中国禅と融合した mahāyoga もある。敦煌文献 VP. No. 454、ペルヤン著『金剛薩埵問答書』rDo rje

sems dpaḥi shus lan (北京 No. 5082, vol 87, VP. No. 470, Pelliot No. 819, Pelliot. No. 837), ヴィマラミトラ著『幻網道説』sGyu ḥphrul drwa baḥi lam (北京 No. 4740), 及び『サムテンミクロン』の大瑜伽派の章に含まれるものが、中国禅と融合した mahāyoga に当る。密教と中国禅の通路は、「菩提心」の観法である。インドで成立した密教の生起次第(「幻化網」に限らず、「新密呪」派の anuttarayoga 系も含めて)の観法を調べると、「菩提心」の観法と、「菩提心」を種子に変えてその種子から出生された諸神を観想するものがある。前者に見える実質は、中国禅と共通しており、「看心」や「見性」の内容と同じである。ただ、中国禅と密教との違いは、中国禅の方が「菩提心」の観法(=「見性」)のみで正覚するとされることである。密教では「菩提心」の観法で示された教義を悟るために、種子から諸神へという儀軌化された観法をなし、諸神との「我慢」によって正覚するのである。頓悟ではなく、この一生によって正覚せんとする点にも相違がある。VP. No. 454 や『金剛薩埵問答書』に見られる mahāyoga はこれら二つの実践法を融合したものである。そこには相反する実践上の理論が相克している。中国禅へ超えようとするものと、密教にとどまろうとするものである。VP. No. 454 では「菩提心」の観法から諸神の観法へと経路をつなぎ、相反する実践を折衷しているが、正覚は後者の観法によるとして、最終的には密教にとどまっている。

さて、このような中国禅と融合した mahāyoga は、実践的にはゾクチェンと明らかに異なるが、教義的には同一部分が多い。たとえば、VP. No. 454 にはゾクチェンの教義がそのまま見出される。「独一の根基」「独一の真理」が説かれることがその一つである。これは「ゾクチェンの四義」のうちの「独一たること」に当る。次に、「心性」「菩提心」「法界」を同一のものとしている上に、「明知」も説かれている。現象を心の顯われと悟ることは、「心部」の教義そのままである。「涅槃の法」「輪廻の法」という『法界の宝蔵』にそのまま見られる教義が説かれ、用語まで同一である。また、諸法が御身・御語・御意として自然成就しているとも説くが、これは「ゾクチェンの四義」のうちの「自然成就」に含まれる。「法性の飾り」というゾクチェン用語も使われている。

同じく、mahāyoga 文献の上述した『幻網道説』には「是」yin 「非」min 「かたよりと離れた」phyogs bral というゾクチェン用語が見られ、mahāyoga の敦煌文献 VP. No. 436 には「瑜伽」の種類に「飾り」「坦々たること」というゾクチェン教義を思わせる用語が記されている。

既に述べたように、ゾクチェンは「唯心論」系の教義であり、無努力・無分別・頓悟の実践と考え合わせて、その源に中国禅の影響が間違いなくあったと思われる。しかしながら、以上のような mahāyoga にゾクチェンとの共通教義が多く含まれていることから、ゾクチ

エンの成立にはインド系密教の影響も再考すべきかと思われる。両者の教義に共通点が多いのは、ゾクチェン教義によって mahāyoga 乗を解釈したこととも考えられる。即ち、それらの mahāyoga を中国禅との融合の他にすでに成立していたゾクチェンとも融合した mahāyoga と考えるのであり、この場合はゾクチェン的な mahāyoga にゾクチェンと共通点があるのは当然のことである。しかし、逆に mahāyoga 乗を中国禅的に解釈したことからゾクチェンが成立したとも考えられる。また、初期のゾクチェンは中国禅色が強いが、mahāyoga 乗から成立した密教的な教義（中国禅と融合したもの）が、大成期にゾクチェンとしてまとめられたとも考えられる。さらには、初期からゾクチェンには中国禅色の強い流派と密教色の濃い流派があって、それが大成期に『七つの宝蔵』に見えるゾクチェンとしてまとめられたとも考えられる。あるいは、流派ではなく、その両者はゾクチェン内の教義の要素として、初期にすでにゾクチェンとしてまとめられていたとも考えられる。

「ゾクチェン」という語が mahāyoga 乗の中心タントラである『サンワニンポ』に見える<sup>41)</sup>ことから、密教 mahāyoga 乗とゾクチェンの関係をもう一度考え直すべきであろう。ゾクチェンは実践では「菩提心」の観法で頓悟正覚するという全く中国禅的なものであり、教義にも先述した如く密教と異質なものを含むが、密教 mahāyoga と教義的に共通部分も多いからである。教義的には VP. No. 454 に見える mahāyoga のように、ゾクチェンは mahāyoga 乗の方へ近いとさえ感じられる。VP. No. 454 のみを見る限り、ゾクチェンの教義は中国禅と融合した mahāyoga、実践は中国禅とさえ考えることも可能である。ただし、それはゾクチェン教義の全てではなく、或る部分に関してである。また、それは VP. No. 454 等の mahāyoga がゾクチェン的に解釈され、ゾクチェンと融合した mahāyoga でないと仮定した場合のことである。そのように仮定した場合に、ゾクチェンの成立に関しては、中国禅そのものの影響と、中国禅と融合した密教 mahāyoga の影響を考慮しなければならないのである。中国禅、密教 mahāyoga、ゾクチェンは教義的に非常に類似している。「菩提心」の観法を媒介として、三者は極めて接近している。VP. No. 454 等がゾクチェンに影響された mahāyoga でないと仮定した場合に、教義・実践を考慮すると、ゾクチェンは密教 mahāyoga と中国禅の間に位置すると言うことも可能である。

## VI 「教誡部」の教法

「教誡部」では、実践の占める比重が大きくなる。それゆえ、「教誡部」の教法を教義と実践に分けて説明する。

### 1) 「教誡部」の教義

本書で資料としている『七つの宝蔵』の著者ロンチェンパは「教誡部」に属する者であるため、『七つの宝蔵』には「教誡部」についての記述が多い。以下、『七つの宝蔵』から重要と思われる箇所を選んで、教義の説明を試みよう。

1-1) 『最勝乗の宝蔵』と『宗義の宝蔵』の九乗の宗義の概要部分 (Th・Ch. 78a, 1~84a, 1. G・Th, 177a, 5~182a, 3) に叙述されたもの

「心部」が「基」gshi (様々なものがのぼる根基) について、「界部」が「果」hbras bu (様々なものが解脱した法界) について説くものであったのに対して、「教誡部」は「道」lam を説くものであるとされる。また、「心部」は「心」であることによって、他方、「界部」は「法性」を執取することによって、夫々「意の判別」yid dpyod になるが、「教誡部」は「意の判別」がなく、「真如」gnas lugs が自ら明らかになる ran gsal ことによってすぐれているとされる。

この「教誡部」は大きく三種に分けられる。即ち、

1. 「噂の仕方では説くもの」kha ḥthor baḥi<sup>(1)</sup> tshul du gsuñ pa
2. 「談話の仕方では説くもの」kha gtam paḥi tshul du gsuñ pa
3. 「タントラ、自己の理の仕方では説くもの」rgyud ran gshun gi tshul du bkaḥ stsal ba

これらは順次に一般者（あるいは、初心者）向けのものから、より高次な秘密のものまでを説いている。それぞれを説明しよう。

#### 1. 「噂の仕方では説くもの」

これは「心計」と離れた「自生の智」が「要訣」に依って一瞬のうちにのぼることを説く。二種ある。

- a. 「設定されるべき道の決擇の教誡」gshag pa lam gyi mthaḥ gcod paḥi man nag

b. 「解脱したものの清浄なる力の道が明らかになる教誡」 grol ba stobs dag  
pañi lam mñon du gyur pañi man ñag

これら二種ともについて「基・道・果」が説明されている。そのうち、aの方では戯論と離れた「本性」rañ ño が「道」にのぼると説き、bの方では三仏身が「道」に顕われると説く。

2. 「談話の仕方では説くもの」

「心計」と離れて迷乱しないことを説く。これに二種ある。

- a. 「愚癡が動かされて捨てられるもの」 glen pa yeñs la bor bañi kha  
gtam
- b. 「口に触れる時がないもの」 khar phog du med pañi kha gtam<sup>(2)</sup>

aは「脈管・風・心」rtsa rluñ sems について示し、「脈管」の要訣によって「風」が、「風」の要訣によって「心」が自寂rañ shi し、「智」が明顯になることを説く。密教的なものである。bは「界」dbyiñs に関して、その遍満性と認識されることños gzuñs が無いことと無為たることを説き、「界」に行為・努力bya rtsol が無いことによって「自生の智」が悟られると説く。中国禅系のものである。

3. 「タントラ、自己の理の仕方では説くもの」

これはすべての仏説bkañ の根源byuñ sa になるものを説く。これに四種ある。

- a. 「いかなる見解もまとまる仕方では説くもの」 lta ba sgañ dril bañi tshul  
du bkañ stsal ba<sup>(3)</sup>
- b. 「放血、障碍が除けられるという仕方では説くもの」 gtar ka gegs bsal bañi  
tshul du bkañ stsal ba
- c. 「隠蔽と顕出の仕方では説くもの」 gab pa mñon du phyuñ bañi tshul du  
bkañ stsal ba
- d. 「説明が自らあらわれる仕方では説くもの」 bçad pa rañ gsal bañi tshul  
du bkañ stsal ba

それぞれを説明しよう。

a<sup>(4)</sup> は見解について説くものである。二種ある。<sup>(5)</sup>

- (a) 「所分別である顕われの見解について主張するもの、〔顕われは〕作られること  
がないということ」 snañ ba brtags lta bar ñdod pa byar med pa
- (i) 「能分別である心の見解に関してまとめられたもの、〔心は〕一切から起すもの  
であるということ」 sems rtog lta bar dril ba kun nas sion pa

これらのうち、(a)は「顕われ」に関するもの、(i)は「心」に関するものである。「顕わ

れ」も「心」も「真理」(=「根基」)からのぼったものであり、本来から解脱している  
と説く。「自らのぼる」と「自ら解脱する」の両側面を説くものであり、全く「心・界部」  
の教義である。<sup>(6)</sup>

b<sup>(7)</sup> は障碍を除く仕方を説くものである。呼称のうちで「放血」は重要な意味を持って  
いないと思われる。「法性」の「本性」gçis を知って、輪廻・涅槃の境界 mtshams  
を分けるものである。その仕方に二種ある。

- (a) 「見・修の温暖の程度によって障碍を除くもの」 lta sgom drod tshad  
kyi gegs bsal ba
- (i) 「物のあり方によって障碍を除くもの」 dños po ñdug tshul gyi gegs  
bsal ba

それぞれを説明しよう。

(a)は、見・修・行三種の温暖によって、障碍を除く仕方を説く。「温暖」<sup>(8)</sup>とは、見・  
修・行がそれぞれ一定段階に達したときに得られるものである。たとえば、「見」の温暖  
は輪廻・涅槃の二つが等味に混合したもの、と記される。

見・修・行それぞれに、動く gyo ba とき、得る thob pa とき、堅固なる brtan  
ba とき、障碍が除けられること gegs bsal ba という四項目に分けて説明されており、  
全部で十二になる。それぞれの「温暖」の程度が三段階に分けられているのである。四番  
目はそれらによる果である。

「見」は「身・語」に関するもの、「修」は「心」に関するもの、「行」は「顕われ」  
に関するもの<sup>(9)</sup>である。

内容的には「心・界部」の教法を余り出していない。とくに、「界部」の「障碍が除かれ  
るもの、秘密の究竟界」と類似しており、諸法をそのまま「真理」とすることは同一であ  
る。

(i)に説かれている「物のあり方」とは、「顕われ」は「心」であり、自ら解脱して「法  
性」であることである。これを知れば、修習の必要はなく頓悟する。「心・界部」と同一  
の中国禅系の観法である。

c<sup>(10)</sup> は諸聖典において、見・修・行のうち、どれが主に説かれるかを示している。それ  
らの強調点の差異に従って修習した結果の相も説く。これに二種ある。

- (a) 「一が隠蔽され二が顕出されるもの」 gcig gab nas gñis mñon du phyuñ  
ba
- (i) 「二が隠蔽され一が顕出されるもの」 gñis gab nas gcig mñon du phyuñ  
ba

(あ)は見・修・行のうち二つが強調され、他の一つが強調されないものである。三種ある。  
い)は見・修・行のうち一つのみが強調されるものである。これにも三種ある。

これらにおいて、見・修・行の具体的内容は示されていないが、「見」である「界の見」dbyiñs ita baを主に説いてのち、「修・行」を付帯的に説く聖典の例として、Kun byed rgyal poがあげられている。要するに、これらはニンマ派聖典の説示方法に関する分類であると思われる。教義内容から言えば、「心・界部」以上には出るものでない。<sup>(11)</sup>

dは「教誡部」の中で最も特徴的なものである。言葉に貪著しないことによって、宗義 grub mthañとして存在しないものである。三種ある。

- (あ) 「迷乱の牛を追う仕方について説くもの」 ñkhrul pa ba ded kyi lugs su smra ba
- (い) 「迷乱を根基において追い戻す仕方について説くもの」 ñkhrul pa gshi la zlog pañi tshul du gsuñs pa
- (う) 「滴が自己の要訣で投げ降されるもの」 thig le ran gnad la phab pa<sup>(12)</sup>

これらのうち、(い)に関しては全く説明されていない。それゆえ、(あ)と(う)のみ示す。

(あ)は「無明」ma rig paが三界の輪廻する根基 gshiであるから、それを自己において追い、「無明」の根 rtsa baを切ることを説くものである。さらに、三種に細分される。

- (一) 「迷乱が根から切れることによって、輪廻・涅槃がくつがえされる仕方」 ñkhrul pa rtsa nas bcad pas ñkhor ñdas lto bzlog pañi lugs
- (二) 「迷乱をもとのままに置くことによって、不迷乱の法性を認識する仕方」 ñkhrul pa ran so la bshag pas ma ñkhrul pañi chos ñid ños zin pañi lugs
- (三) 「迷乱の根基の内部が囲まれることによって、迷乱の輪廻する流れが切れる仕方」<sup>(13)</sup>

ñkhrul gshi khog bskor bas ñkhrul ñkhor rgyun chad pañi lugs  
これら三種とも「迷乱」を追い戻す仕方である。(一)は「迷乱」の根本である「無明」が自ら解脱していると知ることによって、「迷乱」を追い戻す。(二)は「迷乱」を毀さずありのままに見る。そのために、過去・現在・未来を観察し、迷乱は因無く、輪廻・涅槃は無差別であり、「明知」として唯一の「根基」と悟ることによって、「迷乱」を追い戻す。(三)は輪廻の根基を空ぜしめ、不可得(=作為 byas paによって得られない)の「根基」をつくることによって、「迷乱」を追い戻す。これらはいずれも教義と一致する観法によって、「迷乱」を無くするものであり、中国禅系のものである。

(う)に関して、その呼称のうち「滴」は、「明知」あるいは「明知の光彩」rig gdañs

のことである。「教誡部」では、「明知」は心臓にある「如来蔵」のことである。その「滴」が自己の要訣によってあらわれることを説くものである。

これに二種ある。

- (一) 「耳による伝承」 sñan rgyud
- (二) 「説明による伝承」 bçad rgyud

それぞれを説明しよう。

(一)は一人から一人に耳の感官によって現実に伝えられるものである。これはさらに二種に細分される。「文字を伴うもの」yi ge dan bcas paと「文字が無い耳の伝承、法性・真理の教誡」yi ge med pañi sñan rgyud chos ñid don gyi man riagとである。

(二)はさらに四種に細分される。

- (a) 「外の法類」 phyiñi skor
- (b) 「内の法類」 nan ñi skor
- (r) 「秘密の法類」 gsan bañi skor
- (d) 「無上秘密の法類」 gsan ba bla na med pañi skor

『テプテルゴンポ』に継承が記されているのは、これらの法類である。また、『法界の宝蔵』の自注 Chos dbyiñs rin po cheñi mdzod kyi ñgrel ba lun gi gter mdzod (蔵外 No.492-3034)の 223a, 4 には、これらの四法類が「教誡部」と記されている。

これによって、この四法類が「教誡部」の中で最も重要であり、「教誡部」の教法を代表し得るものであることが分る。これらは「外の法類」から「無上秘密の法類」へと、順次に一般的なものから奥義的なものへと説かれている。それぞれの法類を説明してみよう。

(a)では、煩惱を捨てないことによって、五毒が修道 lam khyerとして存していると教える。煩惱を否定せず、努力・確立しないことによって、どんなものとして顯われても、「法性」としてのぼるのである。

(b)では、「有色」gzugs canでないことによって「相」mtshan maが無い「法性」と、来・往が無いことによって常に存している「智」を教える。また、その如き真理の「行相」mtshan ñidが、樹に喩えて示されている。

(r)では、悟りの頓時性を教える。「伝授」no sprad pa<sup>(14)</sup>と悟りを得ること、死と正覚、正覚と慈悲という三つの同時なることを示し、それによって順次に、聞・思・修、精進・修習、二資糧の三種に依る必要のないことを説く。

(d)は「法性」を直接に感官によって見る実践法「トゥゲル」thod rgalを教える。た

だし、その名称はここでは記されていない。その「行相」として、「四顯現」*snañ ba bshi* が「定量」*tshad* に到ることによって、「果」が三仏身・五智に依ることをなさない、と記すのみである。これらについては、「教誡部」の実践の項で説明する。この「トゥゲル」は「教誡部」の教法の中で、最も重要であり、独創的なものである。<sup>(15)</sup>

以上、『最勝乗の宝蔵』(Th・Ch)と『宗義の宝蔵』(G・Th)<sup>(16)</sup>のこの部分に見られる「教誡部」の教法は、「心部」「界部」的内容をそれ程超えていない。大部分が中国禅宗系の観法である。密教的な加味も見られなくはないが、少ない。「心・界部」と異なる部分は、「無上秘密の法類」の「トゥゲル」のみと言える。しかし、「トゥゲル」という名称も示されず、実践方法はもとより、「四顯現」についてもその内容は記されていない。全体的に、説明が簡略すぎて理解し難い嫌いがある点に注目したい。

1-2) 『宗義の宝蔵』(G・Th)の第八章(184b, 2~208a, 6)に叙述されたもの

上述の1-1)で使った部分の資料に記されている「教誡部」の教義は、「無上秘密の法類」を除いて、「心・界部」とそれ程変わりはない。しかし、「教誡部」では、それら以外の教義も取り入れられているので、それを示したい。

その資料の最初のものとしてあげ得るものが、この『宗義の宝蔵』の第八章である。「光明金剛精髓の乗の別説」*ñod gsal rdo rje sñiñ poñi theg pa bye brag tu bñad pa* と名付けられている。「光明金剛精髓の乗」とは「教誡部」のことにほかならない。この第八章は、「教誡部」の教義と実践の概要書という趣きがある。

教義に関しては、次の三点が説かれる。第一点は「根基」について説くものである。それを「自生の智」とすることは、「心・界部」と共通である。その「自生の智」を三側面に分けて、三仏身と結びつける。このような真理の三側面の教義は「心・界部」にすでにあったと思われる。というのは、「心部」の中心タントラ *Kun byed rgyal po* にすでに記されているからである(ただし、*Kun byed rgyal po* では「ゴウァ」と「ランシン」の関係が逆になっている)<sup>(17)</sup>。しかし、『七つの宝蔵』では、上述した「九乗の宗義」の概要部分(Th・Ch, 71b, 2~84a, 1. G・Th, 165a, 5~182a, 3)の箇所には記されていないので、ここで「教誡部」の教義として取りあげる。その教義を示すと、

{ 「ゴウァ」 *no bo* — 「空」 *ston pa* — 「法身」 — 虚空の如し  
 { 「ランシン」 *rañ bshin*<sup>(18)</sup> — 「輝」 *gsal ba* — 「報身」 — 日・月の如し  
 { 「トゥクジュ」 *thugs rje* — 「遍満」 *khyab ba* — 「化身」 — 光 *ñod zer* の如し  
 これらを既述した「本来清浄」*ka dag* 「自然成就」*lhun grub* 及び中国仏教、密教

の教義と関係づけると、

	<ゾクチェン>	<中国仏教(宗密)>	<密教>
}	「ゴウァ」 — 「本来清浄」	—— 「体」	—— 「般若・空」
	「ランシン」 — 「ランシンが自然成就」	—— 「本用」	
	「トゥクジュ」 — 「化成が自然成就」	—— 「応用」	—— 「方便・悲」

となる。これらのうち、「トゥクジュ」は密教の「方便・悲」あるいはインド漸門派の「般若・大悲」の主張の影響かとも思われる。また、中国仏教の「体・用」説に依るものと考えられることも可能である。特に、「ランシンが自然成就」「化成が自然成就」と分けることは、「本用」「応用」に近い。

第二点は、その如き「真如」*gnas lugs* (「自生の智」の存する様子)を知らないことによって、迷乱すると説く。「如来蔵思想」一般に言われていることである。

第三点は、「教誡部」になって創られた教義が説かれる。初期のゾクチェンである「心・界部」には見られないものである。密教の影響が著しく、「教誡部」独特の実践法「トゥゲル」と結びつくものである。「新密呪」派 *gsar ma pa* から影響されて精神生理学的实践を取り入れてはいるが、脈管・風・滴に世俗と勝義を設けることにおいて、「新密呪」派と大いに異なっている。即ち、人間の身体は「父」*pha* と「母」*ma* の「世俗、因の滴」*kun rdzob rgyuñi thig le*<sup>(19)</sup> が混ざることによって生ずる。身体が形成されている間に、「金剛身」*rdo rjeñi lus* において三脈管と四輪 *ñkhor lo, cakra* が生ずると説く。ここまでは、「新密呪」派と同じであるが、「大殊勝の四脈管」*khyad par chen poñi rtsa bshi* を説くことにおいて異ってくる。「如来蔵」(=「明知」)は心臓に存して、心臓のまん中から無数の小さな脈管によって身体中に遍満している。しかし、特に、この四脈管に集まっている。四脈管を示すと、

1. 「黄金の綿布の大脈管」*kati gser gyi rtsa chen*<sup>(20)</sup>  
 「中央脈管」*dbu ma* の中央とそれから心臓の中央に結びつくもの。「普賢、根基の滴」*kun du bzañ po gshiñi thig le* が満ちて住する。
2. 「白い絹糸の如き脈管」*dar dkar snal ma lta buñi rtsa*  
 「光脈管」*ñod rtsa* (心臓の中央にある。1の大脈管のこと)から「清浄孔」*tshañs bug* (額にある)に到る脈管のこと。「不生の法性の道に入る滴」*chos ñid skye med kyi lam du ñjug pañi thig le* すなわち「無分別なる明知の御身」*rig pa rtog med kyi sku* がのぼり、身体 *rten* において識 *rnam çes* が動くことが清められる道 *lam* である。



3. 「微細で渦巻き流れる脈管」 phra la ḥdril paḥi rtsa

四輪のまん中を貫いており、「光明」 ḥod gsal の所依 rten をなす。「普賢、頂の滴」 bzañ po rtse moḥi thig le が「五光」 ḥod lña zer と「小滴」 thig phran として住している。

4. 「水晶の管を有する脈管」 ḥel spug can gyi rtsa<sup>(21)</sup>

心臓から眼につながるものである。「普賢の飾りを有する滴」 bzañ poḥi rgyan dan ldan paḥi thig le が住する。「金剛鎖」 rdo rje lu gu rgyud の無数の頭われ snañ ba がのぼる所依 rten となる。「トゥゲル」の実践の根本となる脈管である。これは「命脈」 srog rtsa の中にある。

以上が四脈管である。「如来蔵」の存する所となる。これらの脈管中を「明知の光彩」 rig gdans<sup>(22)</sup> (=心臓にある「如来蔵」の光彩) が動くのであるが、それは「智の風」 ye ḥes kyi rluñ によって動く。これもニマ派の「ゾクチェン」の「教誡部」において、創り出されたものである。「風」を「行為の風」 las kyi rluñ<sup>(23)</sup> と「智の風」に分けるのは、現在の筆者の研究範囲では「ゾクチェン」のみであると思われる。何故、「智の風」を創ったのかというと、やはり、「トゥゲル」の実践を説明するためである。

以上のことを「心・界部」の教義との関係上、「妄」である人間の身体そのものに「真」が含まれるとし、真妄一如の思想を精神生理学的実践によって理解したものであり、「真理」を形而上学的実体としてとらえまいとする試みにつながるとも考えられる。しかし、「如来蔵」そのものは、「妄」が除けられた完全なる「真」としてむしろ精神生理学的に実体化されている。その点、「心・界部」の教義とは異なる。サルトル流に言えば、「真理」を擬物論的 chosiste に取り扱っているのである。

他に、この章では「明知」が人間の身体にあって障蔽される様子が記されているが、割愛する。

最後に、この章は「教誡部」の教義を概略的にまとめてあるが、「唯識」の影響による教義的解釈の部分がなお不足していると思われる。

1-3) 『最勝乗の宝蔵』第十四章 (Th・Ch, 304a, 1~359a, 1) と『言葉と意味の宝蔵』第四章 (Tsh・D, 52b, 5~67b, 2) に叙述されたもの

『最勝乗の宝蔵』第十四章と『言葉と意味の宝蔵』第四章は、それぞれ対応する内容を持つ。<sup>(24)</sup>

前述した如く、ゾクチェンの「心・界部」の教義は、法性の一元論であり、現象諸法をそのまま法性とするものである。ところが、他乗から真・妄の間に「道」が無いと批判される

ために、現象諸法を「妄」として区別せんとする努力が行われる。そのことが顕著にあらわれているのが、資料のこの部分である。『最勝乗の宝蔵』に関していえば、この第十四章に「教誡部」の教法が集約されており、論書全体の枢要となっている。

以下にそれらの教義内容を説明しよう。

1. 「クンシー」 kun gshi と「法身」 chos sku について

「如来蔵思想」が現象世界の説明のためにそれのみでは不十分になって、「唯識」教義を援用することは、「如来蔵思想」の発展に見られるところである。ゾクチェンでは「心・界部」にもその影響があったと思われる (cf, 第3の「セムチョク・パ」)。しかし、『七つの宝蔵』において、詳細に「唯識」的教義が説かれてあるのは、「教誡部」のこの部分である。

「唯識」教義の影響として、まず、「クンシー」があげられる。『大蔵経』所収の初期ゾクチェンの論書<sup>(25)</sup>にも「クンシー」が記されていて、「心・界部」の初期からあった概念と思われる。しかし、そこでは「明知・菩提心」を意味し、『七つの宝蔵』で説かれているものと意味が異なる。『最勝乗の宝蔵』と『言葉と意味の宝蔵』に見られる限りでは、「クンシー」は「阿頼耶識」という意味もあるが、むしろ「無明」の意味の方が強い。「クンシー」から八識がつくられる。『起信論』と比べて見ると、『起信論』では阿黎耶識(真妄和合識)に依って無明が生じ、それから種々の識が生ずる。ゾクチェンでは「根基」 gshi から「クンシー」, 「クンシー」から八識が生ずる。つまり、無明が「妄」とされる点は同じであるが、無明と阿頼耶識の前後関係が逆なのである。そのことは、ゾクチェンの阿頼耶識が完全なる「妄」(遍計所執性)であるのに、『起信論』の阿黎耶識は「心性」と結合して真妄和合識となることにもつながる。阿黎耶識は仏教的 tathatā<sup>(26)</sup> であり、依他起性の位置にある。

また、この箇所では、「法身」から「クンシー」へのつながりは説かれない。真・妄を区別せんとし、意識的に説いていないようにも思える (cf, 次の「智と心」の箇所では、「力」 rtsal の「化成」 rol pa を用いて説明している)。この場合は、妄世界の展開は全く「根基」とは別の「クンシー」から説かれる。「唯識」教義を取り入れながらも、「真理」「無明」という「如来蔵思想」の基本構造は残し、その上に「唯識」教義が融合されずに唐突に結合されたように思える。「クンシー」に関する「教誡部」のこの教義は、八識の上に第九識として阿摩羅識をたてる華嚴宗に類似している点は注目すべきであろう。<sup>(27)</sup>

『最勝乗の宝蔵』に「クンシー」に関する譬喩が記されている。「教誡部」における「クンシー」の概念を明確にするために、それを示すことにしたい。即ち、「海」である

「法身」 chos sku に「船」である「クンシー」が浮んでいる。その「船」に「人」である「心」, 「心」の業と薫習, 迷乱が乗っていると喩えられる。

この「クンシー」から生じる阿頼耶識が依他起性ではなく遍計所執性に墮しめられていることによって, 唯識教義の転依による悟りの否定が説かれる。「妄」に属するもの(=阿頼耶識)は「真」(=「法性」)になれないと主張する。「妄」の法が転依しても「妄」であると説く。仏教的に言うと, これは中観二諦説からの三性説批判である。ゾクチェンとその敵対者(=「唯識」派)との対論は、『最勝乗の宝蔵』Th・Ch 305a~305b に記されている。

以上の「教誡部」における「法身」と「クンシー」の教義は, ゾクチェン一般(あるいは, 「心・界部」)の「自らのぼる」の側面の教義を受け継いだものである。その側面では, 現象諸法は自性無く, 影像の如きものとされる。「化成」であって, 「真理」そのものではないとされる。とくに, 「不浄の化成」は自性無き上に, 迷乱とされる。「教誡部」はこの「不浄の化成」を強調し, 「真」(=「法身」)と「妄」(=「クンシー」)の区別を明確につけようとしたのであるが, 実際には不完全な説明に終わっている。

次に, 「教誡部」における「法身」と「クンシー」の概念をそれぞれ説明しよう。

まず, 「法身」とは涅槃の根本であり, すべての薫習と離れた, 無漏のものである。『言葉と意味の宝蔵』では, 「法身」(=ゴウァ)「執身」(=「ランシン」)「化身」(=「トゥクジェ」)と三種に分類している。これは『宗義の宝蔵』第八章でも記されていた如く, ゾクチェンにおいて一般的なものである。しかし, 『最勝乗の宝蔵』ではそれぞれをさらに三仏身に分けて, 「トゥゲル」の実践と関係づけて密教的なものにしている。九種に分類されたもののうち, 「報身の化身」「化身の化身」は「妄」に属するものであるが, 「真」に入れられている。<sup>28)</sup> このことは, 「教誡部」でも真・妄を区別せんとしているが, 結局, 不完全な形に終わり, 「心・界部」以来の「真妄一如」の思想を根本としていることを示している。

次に, 「クンシー」とは, 輪廻の根本であり, すべての薫習の所依である。『言葉と意味の宝蔵』『最勝乗の宝蔵』とも四種に分類してある。「法身」と対立する概念であり, それゆえ, 認識論的というよりも存在論的概念である。ただし, 『最勝乗の宝蔵』では「根本の識 çes pa」の側面から説明されている点で, 阿頼耶識に近い。<sup>29)</sup>

## 2. 「心」sems と「智」ye çes について

上述した「クンシー」と「法身」では, 現象諸法の根源である「クンシー」を説くのみで, それからの現象展開は説かない。この「心」と「智」では「無明」からの現象展開を説く。また, 「クンシー」と「法身」では「妄」と「真」の区別に極力努めてきたが,

「心」と「智」ではゾクチェン本来の「唯心論系」の思想が支配的になる。形式上は「心」と「智」が区別されているが, 「真妄一如」(あるいは, 「法性の一元論」)が強調される。また, 「心性」と「無明」のつながりも説かれている。

「心」と「智」それぞれについて説明しよう。

### ア. 「心」

「心」に関する説明においては, 現象世界の展開をとくに説こうとする。それを三種の方法で説明する。

#### あ) 「二種の分類による説明」

第一の方法として, 「心」を「清浄の心」dag paḥi sems と「不浄の心」ma dag paḥi sems の二種に分類して説明する。『言葉と意味の宝蔵』より『最勝乗の宝蔵』の方が詳しい。とくに, 「不浄の心」には「無明」「心」「煩惱」と詳しい説明がなされている。この『最勝乗の宝蔵』の記述は「根基」(=「心性」)→「無明」→「心」→「意」yid →「煩惱」という現象展開をすべて広く「心」に属せしめて説明したものである。「心性」も「心」に含めたのは, 「心部」の「唯心論」(あるいは, 法性の一元論)を受け継ぐものである。また, ゾクチェンでは, このように「心」と「心所」sems byun すべてを総称して「心」としている。むしろ, この場合は「心」は無く, 「心所」のみである。「心」の分析は, 次の「唯識教義的方法」のところで行われる。ここに注意すべきことは, これら「心」と総称されるものは, 小乗のアビダルマ哲学とも異なるのは勿論, 唯識教義とも異なることである。それはゾクチェン独特の内容を持っている。

その他に, 『最勝乗の宝蔵』のみに記されていることであるが, 上述の現象展開に対しゾクチェン特有の説明がされる。即ち, 「根基」の自然成就なる「力」rtsal から「無明」が生じる。「無明」の「化成」rol pa から「心」が生じ, 「心」の「飾り」rgyan から「意」が生じ, 「意」の「境」yul から「五毒」が生じる。<sup>30)</sup> 以下八万四千の煩惱まで順々に生ずる。この説明は, 唯識教義を取り入れずに, 「真理」の「化成」や「力」などによって, 現象世界の展開を説くものであり, 「心・界部」の教法を受け継ぐものである。また, 「無明」をとり入れたことは, 『起信論』に類似しているが, 差異がある。『起信論』では「無明」の風によって「心性」が現象諸法へ展開していくが, ゾクチェンでは「根基」(=「心性」)が自ら化成して, 他の原理を必要とすることなく展開する。「無明」もその展開の結果にすぎないのである。「力」はあくまで「自ら」ran である。<sup>31)</sup> 少なくとも, この資料の部分によるかぎりそうである。

この説明は上述した如く「心・界部」の「自らのぼる」の側面と全く軌を一にするものである。現象諸法を実体なき影の如きものとする点も同一である。ただ, 「教誡部」は

「無明」をとり入れることによって、現象を「妄」としてきわだたせたのである。「心・界部」では迷乱とされるのみである。また、この箇所では「自らのぼる」の側面のみであり、「自ら解脱する」の側面が説かれていないことも注意される。<sup>(32)</sup>

(い) 「唯識教義的方法による説明」

ここに示されるものは「心所」ではなくて「心法」の分析である。唯識教義の影響を受けたものである。八識の名称は唯識教義と同じである。唯識教義との差異は、第七識(=未那識) *ñon yid* の働きである。唯識教義では、第七識の働きは第八識を対象として、自我と執取することである。ゾクチェンでは、第七識の働きは第六識と同じである。ただ、第六識は前五識を通された境 *yul* を最初に総体的に取り *dan por spyi ḥdzin pa*、第七識は後に各別に取り *rjes la bye brag ḥdzin pa* という差異があるのみである。<sup>(33)</sup> それゆえ、ゾクチェンでは第七識の対象は第六識で絶対的に取られた境、端的に言えば、第六識である。それが第六識を「所取の意識」 *gzun gyi yid ces*、第七識を「能取の意識」 *ḥdzin gyi yid ces* と呼称する理由である。要するに、ゾクチェンでは八識説をとり入れたものの、唯識教義で説く五識と第六識と第八識のみで、八識を構成した。そして、第六識を働きの上で、第六と第七に分けたわけである。唯識教義で説く第七識をゾクチェンでは取り入れなかったのである。

これは『楞伽經』に由来するものと思われるが、その理由は、以下のようにも考えられる。唯識説では前七識と阿頼耶識の互いの薫習によって、現象世界の成立・時間的進展が説明される。ゾクチェンでは外面的には薫習という形を取り入れながらも、実際には、現象諸法の展開はすべて「化成」(=「自らのぼる」)によって説かれる。薫習による現象世界の説明の必要は全く無く、薫習そのものさえも「化成」で片づけられている (cf、『法界の宝蔵』第十一章、20 b)。それゆえに、第七識が阿頼耶識を対象として、その種子を阿頼耶識に薫習する必要もないのである。我執も「化成」として説明される。ただ、認識構造を説明するためにのみ、八識説を利用すればよいのである。ゾクチェンで阿頼耶識から広がる七識の順序を阿頼耶識→五識→二種の意識と記す。それは、薫習された種子が現行する順序と見えるが、本当は五識→二種の意識という認識の順序を言い換えたのにすぎない。要するに、「法性の一元論」には薫習という概念は必要がないのである。

最後に、唯識教義とゾクチェンの八識はこのような差異はあるが、「心所法」を五十一とすることは同じであることを付言しておく。

(う) 「密教教理的方法による説明」

これは上述の如き煩悩に到る妄世界の展開を密教的に説明するものである。ここで、「密教的」とは、精神生理学的実践ということの意味する。以下、その説明を示そう。

心臓に「如来蔵」がある。人体中の「真理」である。このことは既に述べた。それに対しては様々な呼称があるが、ゾクチェンでは「明知」<sup>(34)</sup>がよく用いられる。

肺に「風」がある。これはものを移動させることをその性質とする。これに二種ある。「行為の風」と「智の風」である。これらについても既に述べた。この場合、「風」の名称は「命風」 *srog rlung*<sup>(35)</sup> となっているが、「心」(=「妄」)に関することなので、「行為の風」に属するものと思われる。

心臓から出る「血道」 *rtsa sbubs* と肺からの「風」が通る脈管が交わる場所がある。そこが「葉の管程の脈管」 *rtsa sog maḥi sbu gu tsam* である。そこで心臓からの光彩 *rtsal gdan*<sup>(36)</sup> である「明知の光彩」と肺からの「風」が混ざる。「明知」と「明知の光彩」は水と水泡に喩えられる。「明知の光彩」と「風」は、跛で眼を有する人間と盲で脚を有する馬に喩えられる。そして、「心」とはこの「明知の光彩」と「風」が混ざったものである。<sup>(37)</sup> 総じて言えば、「心」であるが、その「明知の光彩」と「風」が混ざるとき、三種の「不浄」 *ma dag pa* が積まれるのである。「無明」と、すべての薫習を集めている「心」と、境に対する妄分別である「意」である。これは「三を有する聚り」 *sum ldan gyi tshogs pa* と呼ばれる。また、この「葉の管程の脈管」が「心」(総称の「心」)の住する場所である。

「心」(総称の「心」)はそこにとどまらないで動く。馬である「風」によって動くのである。その「風」は上述した如く「命風」とも呼ばれるし、「息の馬」 *dbug gyi rta* とも呼ばれる。その通路は、「葉の管程の脈管」の内部を上を走る「赤い命脈」である。これは脊椎の列を上に行き、左の「頸脈管」 *rtse chuñ* と結びつき、末端は鼻と口に到る。その「門」 *sgo* である鼻と口から「心」が広がることによって、様々な業と煩悩が生じる。

以上が密教的方法による現象世界の展開の説明である。これは古タントラ伝承による理解を示したのか、ゾクチェン「教誡部」で創り出されたものか、定かでない。

イ. 「智」

「智」とは、形式的分類では、妄である「心」に対する真の部分である。「心性」と等しく、「教誡部」では「如来蔵」のことになる。「明知」とも呼ばれる。本来から存する「真理」 *don* を知るものと定義される。<sup>(38)</sup> これを説明する方法にも二種ある。『言葉と意味の宝蔵』では「普通の分類」 *thun mon gi dbye ba*、「特別の大秘密の真実」 *khyad par gyi gsañ chen nes pa* と名付けられている。それぞれを説明しよう。

(あ) 「普通の分類」

一般的に「智」というと「五智」を指すのであるが、ゾクチェンでは「五智」をも含めて大きく三種に分類する。『言葉と意味の宝蔵』によって示すと、

1. 「根基に存する智」 gshi gnas yi ye çes	{ (一) 「ゴウォ」 (二) 「ランシン」 (三) 「トクジュ」	—— 法身	<私見による仏身> との対応
		—— 報身	
		—— 化身	
2. 「相を取る智」 mtshan ñid ḥdzin paḥi ye çes 「五智」		—— 報身	
3. 「境に遍満する智」 yul la khyab paḥi ye çes	{ (一) 「如所有智」 ji lta ba mkhyen pa (二) 「尽所有智」 ji sñed mkhyen pa	—— 法身	
		—— 化身	

これらのうち、1はゾクチェン独特の「真理」の三側面を「智」に当てたものである。2はいわゆる「五智」である。3は境に対するものとしての「智」である。それに勝義の智(＝「如所有智」)と世俗の智(＝「尽所有智」)との二種がある。<sup>(39)</sup> 以上の智を三身に対応させると、上図の如くなるかと思われる。

この「根基に存する」あるいは「根基を取る」gshi ḥdzin paと「相を取る」という形容による二種は、「ゾクチェン」において「真理」に属するものを分類するのによく使われる。『最勝乗の宝蔵』では「明知」の分類にも用いている。その場合も「相を取る明知」は「五智の主」ye çes lnaḥi bdag ñidとされている。

『言葉と意味の宝蔵』で「智」に関してこの「相を取る」という種類を設けたのは、五仏・五智の概念を取り入れた結果であると思われる。というのは、「ゾクチェン」の教義ならば、「根基に存する」ものだけで十分であるからである。あるいは、ゾクチェン的な「ランシン」と「トクジュ」の側面を、2(＝「相を取る智」)と、3(＝「境に遍満する智」)の「智」として特別に取り出し、一般的な教理と結びつけたのかもしれない。とにかく、この『言葉と意味の宝蔵』による2と3の「智」は非ゾクチェン的であると思われる。

『最勝乗の宝蔵』によると、三種の分類は同じであるが、内容が異なっている。1は全く同じ。2は「五智」がさらにそれぞれ五つに細分され、二十五に分類されている。そして、この2の「智」に「如所有智」と「尽所有智」が入れられている。ともに「慈悲の部分に関して」説明されるところに見えている。3の「智」として、内の「自己の光彩」rañ gdañsである「五光」とその外への顕われとが記されている。「トゥゲル」の実践に関係づけられた「智」である。

統一という点から言えば、精神生理学的なものが除外されて「普通の分類」のもとにま

とめられた『言葉と意味の宝蔵』の記述の方が、統一性がある。

(い) 「特別の大秘密の真実」

これは「教誡部」特有の精神生理学的説明である。「智」の「ゴウォ」を心臓にある「如来蔵」である「明知」と定義する。

詳しく示せば、心臓の八つの端の中央の「光脈管」ḥod rtsaの「精液」dañs(いわゆる semen のことではない)において、「五光」の真中に芥子粒ほどの「柔和伸」shi ba skuとして「明知」<sup>(40)</sup>が存するのである。

その「ゴウォ」「ランシン」「トクジュ」も説かれるが、密教的である。すなわち、

- |   |        |   |                                |
|---|--------|---|--------------------------------|
| { | 「ゴウォ」  | — | 心臓の中央の清浄な「光脈管」に存する「御身」sku。     |
| { | 「ランシン」 | — | 光として存する「五智」の無量の顕われ             |
| { | 「トクジュ」 | — | 「明知」として存する。「御知」mkhyen paが内に輝く。 |

とある。

次に、この心臓の「明知」<sup>(41)</sup>(＝「如来蔵」)は心臓にのみ保存されているのではなくて、その「光彩」gdañs<sup>(42)</sup>が身体の様々の場所に存している。それらの場所は「無量〔宮〕」gshal yas〔khañ〕という形容によって呼ばれる。それらを次に示そう。

(一) 「大無量〔宮〕」gshal yas chen po — 「眼」

「四灯明」sgron ma bshiとして存する。

- |   |         |   |
|---|---------|---|
| { | 「如所有智」— | { 「空なる滴の灯明」 thig le ston paḥi sgron ma <sup>(43)</sup>        |
|   |         | { 「清浄なる界の灯明」 dbyñs rnam par dag paḥi sgron ma <sup>(44)</sup> |
| { | 「尽所有智」— | { 「遠くに置く水の灯明」 rgyañ shags chuḥi sgron ma                      |
|   |         | { 「自生なる般若の灯明」 çes rab rañ byuñ gi sgron ma                    |

これらの「如所有智」と「尽所有智」が、それぞれ上の如き「灯明」として熟するのである。「灯明」とは心臓の「明知」の「光彩」の一種と考えられてよい。「トゥゲル」の実践のプロセスであられるものである。上図のうちで、最初の二種の「灯明」が左眼にあり、「般若 çes rabの自性」である。あとの二種の「灯明」が右眼にあり、「方便 thabsの自性」である。

(二) 「心の宝無量〔宮〕」citta rin chen gshal yas — 「心臓」

「御身」として存する。

(三) 「脈管の宝無量〔宮〕」rin chen rtsa yi gshal yas — 「四脈管」

「四脈管」とは、1—2)『宗義の宝蔵』第八章に見える教誡部の教義」のところで示した「大殊勝の四脈管」のことである。『最勝乗の宝蔵』では Rañ çar(ゾク

チェンの所依聖典の一つ)から引用してあり、呼称も異なる。

これら「四脈管」には、「滴」として存する。

(四) 「清浄なるドゥンカンの無量〔宮〕」*rnam dag dun khañ gshal yas* — 「ドゥンカン」<sup>45)</sup>(脳のこと)

「光明」として存する。また、心臓の「明知」が「柔和神」として存するのに対して、「ドゥンカン」には「忿怒神」*khro bo sku* として存するとも言われる。

これは「忿怒神の大円満マンダラ」*khro bohi dkyil hkhor yoñs rdzogs chen po* とも呼ばれる。

(五) 「ブリグタの無量〔宮〕」*bhriguta gi gshal yas* — 「ブリグタ」(眼球のこと)

「金剛鎖」*rdo rje lu gu rgyud* の顕われとして存する。「金剛鎖」とは、「トゥゲル」の実践であられるもので、やはり、「明知」の「光彩」の一種である。

以上が「無量宮」である。これら五種の「無量宮」は孤立して存するのではなく、それぞれ「脈管」によって結びつけられている。そのつながり方を見ることにしよう。

心臓の中央にある「光脈管」の「黄金の綿布の大脈管」から上に出ている「白い絹糸の如き脈管」は、脊椎の「花卉」*hdab* (支分の脈管が出ているところ)から脊椎を通過して上に行き、「頸」*mgo* (普通は「頭」を指すが、この場合は「頸」)の内に入る。その脈管が左右の「頸脈管」から出て、「脳」*klad pa* (=「ドゥンカン」)に結びつく。また、左右の耳の「花卉」から出て、その耳からの三つの支分 *yan lag* の二つが眼の袋に植えつけられる。これが「灯明」の基である。中央のものは「清浄孔」(額にある)に入れられる。<sup>46)</sup>

以上がそれら「無量宮」のつながり方である。「四脈管」のうち残り二脈管、すなわち、「微細で渦巻き流れる脈管」と「水晶の管を有する脈管」については、『宗義の宝蔵』の第八章の記述以上の説明はされていない。<sup>47)</sup>

以上は『最勝乗の宝蔵』によって示したものである。この密教的方法による「智」の説明は、「トゥゲル」の実践のためにつくられた教義と言ってもよい程に、「トゥゲル」と深い関係がある。

また、『最勝乗の宝蔵』ではこれらのはかに、「如来蔵」(=「明知」)の顕われの「光彩」*snañ bañi gdañs* である「光明」*hod gsal* を、「御身」「智」「光」*hod* 「滴」「明知」という五側面から説明している(Th・Ch, 333b, 6 以下)。ゾクチェンの教義の理解のためには重要なもの(「滴」の考察、「四灯明」の概要、見・修・行・果の「四瑜伽」*rnañ hbyor bshi* など)が含まれるが、余りにも煩瑣になるので省略す

る。

1-4) 『一切宗義』に叙述されたもの

『一切宗義』に記されている「これが要訣の上で解脱すること、〔すなわち〕要訣を灯つことは、灸と似ているのである。」という「教誡部」に関する記述は、『最勝乗の宝蔵』の「教誡部」の総じての「ゴウァ」<sup>48)</sup>として記されているものである(Th・Ch, 78a, 1)。

『一切宗義』の記述は実践を主に説いているように思われる。教義に関しては、「ゴウァ・ランシン・トゥクジェ」の説明がなされている。

1. 「ゴウァが本来清浄」

「本初の真如、不生なる根基の空」*thog mañi gnas lugs gshi skye ba med pañi ston pa* のことであり、「明知の空」*rig ston* にあたる。

2. 「ランシンが自然成就」

「その空性の止滅する無き光彩」*ston pa ñid de ñi mdams hgags pa med pa* のことであり、「輝く空」*gsal ston* にあたる。

3. 「トゥクジェが遍満」

「浄・不浄いづれとしてもほるその力」*deñi rtsal dag ma dag cir yañ hchar pa* のことであり、「顕われの空」*snañ ston* にあたる。

これらは「真理」を仏身論の面からとらえた側面であり、『七つの宝蔵』に記されている。それに加えて三種の「空」を説くことは、三側面の概念を明確にするのに役立つ。<sup>48)</sup>

次に、『一切宗義』では「心」と「明知」の差異を説く。『七つの宝蔵』で示される「心」と「智」の差異にあたる。即ち、「心・界部」の「自らのほる」の側面(「不浄の化成」)であり、「教誡部」では他学派からの批判に対抗して、真・妄を区別しようとした面である。

第三に、輪廻・涅槃無差別の教義を説く。「心性」の「ゴウァ」である「空」の状態では、輪廻(=「心」の「相」)と涅槃(=「心」の「ゴウァ」)は無差別とする旨を云う。これは「心・界部」の「自ら解脱する」の側面である。真妄一如の側面であり、ゾクチェンの基調となるものである。<sup>49)</sup>

『一切宗義』の「教誡部」の教義に関する記述は、以上で尽きると思われる。<sup>50)</sup> その説明には、『七つの宝蔵』に見られる精神生理学的実践の説明が全く除かれている。

1-5) 「教誡部」の教義に関する結語

「教誡部」の教義は「心・界部」の教義と同様に「如来蔵思想」の一種であるが、「心・界部」の教義と異なる点が二つある。第一点は、他乗から真・妄の間に「修道」が無いと批

判されたために、真・妄を区別せんとしたことである。第二点は密教の影響である。

まず、第一点から説明しよう。真・妄の区別は「法身とクンシー」の箇所では意識的になされている。唯識教義の転依説批判もそこでなされている。しかし、「法身」の説明で「真妄一如思相」のあらわれている部分もあるのは統一を欠いている。

「智と心」の箇所では、真・妄の区別は全く形式的になり、「心性」(真)が「心」(妄)に入れられている。また、「無明」(妄)を取り入れたものの「心性」(真)の「化成」とされる。これは「心・界部」の「自らのぼる」の側面を受け継ぐものであり、相違はない。この箇所では、真・妄の区別をことさらに設けたため、「無明」が「自ら解脱する」ことは、故意に説かれていないが、他の箇所では説かれる。<sup>(51)</sup> それゆえ、「心・界部」が「自らのぼる」の「不浄の化成」で、現象諸法を根基なく空であり迷乱であるとしたのを受け継いで、単に字句の上で「妄」として強調しているのにすぎない。「自らのぼる」の側面での「不浄の化成」では、それが「妄」であっても、「自ら解脱する」の側面で「妄」をそのまま「真」とすることは同一であるから、「妄」の挿入は形式に終わっている。

唯識教義の導入(ただし、その影響は「心・界部」からある)によっても、真・妄間の説明はなされず、妄世界の展開の説明のみに終わっている。真・妄間の説明は「心・界部」以来の「化成」によってなされ、そのために八識そのものが変質されている。真・妄間の転依もその点からかえって否定されている。

以上のことによって、第一点に関しては、「教誡部」の教義は真・妄間の区別をつけようとしたが成功せず、実質的には「心・界部」以来の「自らのぼる」「自ら解脱する」の両側面をもつ「法性の一元論」を受け継いでいると言える。

次に第二点に関して考えてみよう。「教誡部」では、確かに後期弘通期の密教の影響を大いに受けている。具体的には、「新密呪」派の精神生理学「四輪」「三脈管」「風」「滴」を取り入れたことを云う。しかし、取り入れたものの、これらを「世俗」として墮とした上で、「勝義」に属するものとして「勝義の滴」、それを運ぶ「智の風」、通路となる「大殊勝の四脈管」を創り出している。

これはゾクチェンが非タントラ的であるとの批判に抗するために、「教誡部」で「新密呪」派の密教教理を取り入れつつ、ゾクチェンをそれ以上のものに形成して見せようとしたためである。即ち、「世俗」に「新密呪」派の精神生理学的实践を取り入れ、「勝義」に自らの精神生理学的实践の教理を創出したのである。このことは、顯教的なものに関して、「世俗」に唯識教義を導入し、「勝義」に「真理」の三側面を説くことと同巧である。「世俗」に既製教理を取り込み、「勝義」に独自の教理を創り出した、あるいは、「心・界部」から受け継いだのである。

また、「明知の光彩」と「風」の結合に関して、「明知の光彩」と「行為の風」が結合すると「心」(妄)になる。「明知の光彩」と「智の風」が結合すると、「四顯現」(「真」に属するもの)になる。これはゾクチェン一般の教義で、「自らのぼる」の側面の二種「不浄の化成」と「清浄の化成」に相当する。この二種は、現象諸法の「本性」rañ noを知るか知らないかの差による。そのことが密教的に言われると、「行為の風」「智の風」の差となるのである。実際は、働きにおいて「行為の風」と「智の風」は同一である。

図示すると、

{ 「明知の光彩」+「行為の風」=「心」(妄) ←→ 「不浄の化成」の面  
{ 「明知の光彩」+「智の風」=「四顯現」(真) ←→ 「清浄の化成」の面

そして、後述する如く、この両者とも「トゥゲル」の最終段階(第四の「顯現」)で心臓の「如来藏」(=「明知」)に消えてしまうというのは、「自らのぼる」の側面では、諸法は幻の如く、実体無きものということの密教的表現である。これは「不浄の化成」も「清浄の化成」も「自らのぼる」の側面に含まれることであり、それらが結局は「根基なきもの」gshi med であり、「勝義空」に消入することである。「勝義空」に消入するという点は、「自ら解脱する」側面につながる。

このように、「明知の光彩」という形で、「心・界部」以来の「自らのぼる」(=「不浄の化成」と「清浄の化成」)と「自ら解脱する」の両側面をもつ「法性の一元論」が、「教誡部」の密教的教義の中にも受け継がれている。

以上によって、「教誡部」の教義形成に様々な要素(第一点、第二点)が加えられたが、「心・界部」以来の「法性の一元論」(=真妄一如思想)は、基調として残っていると結論できる。

## 2) 「教誡部」の实践

資料とした『七つの宝蔵』において、「心・界部」は教観一致のものであるので、实践はとりわけて説明されていない。しかし、「教誡部」では实践の記述の比重が大きくなる。

「教誡部」の实践には次のようなものがある。

- { 1. 「縁ずる境の慧をもつ者によって実践されるもの」  
dmigs pa yul gyi blo can gyis ñams su blañ pa  
2. 「明知が自ら顕われる慧をもつ者によって実践されるもの」  
rig pa rañ snañ bañi blo can gyis ñams su blañ pa  
{ (1) 「テクチュ」 khregs chod

{ (2) 「トゥゲル」 thod rgal<sup>(52)</sup>

- (a) いわゆる「トゥゲル」。「四頭現」が顕われるもの。「準備行 snon ḡgro と中核の実践 dnios gshi を修するもの」
- (b) 「直喩によって悟るもの」。水晶にあたる太陽の光などの直喩 dpe を見て、心臓の「如来蔵」(=「明知」)を悟るもの。
- (c) 「中有で悟るもの」。「トゥゲル」を修したが、今生で正覚できず、その「修」の力によって中有で「如来蔵」(=「明知」)を悟り正覚するもの。

以上の実践のうち、ここで論述するものは、(1)「テクチュ」と(2)「トゥゲル」の(a)「準備行と中核の実践を修するもの」とである。この二種の実践が「教誡部」の実践の中で、最も重要であり、代表的なものである。

これら二種の実践の特色は、「トゥゲル」の方に密教色が強く、「テクチュ」の方にそれが少ないことである。「心・界部」以来の「ゾクチュン本来的なもの」、「神」の観想を媒介としない禅宗・頓悟的なものが、「テクチュ」に継承されているように思われる。

また、「教誡部」の実践全体として他乗の実践よりも七点<sup>(53)</sup>ですぐれているとされる。

以下に、それぞれの実践を説明しよう。

## 2-1) 『最勝乗の宝蔵』と『言葉と意味の宝蔵』に叙述されたもの

『最勝乗の宝蔵』と『言葉と意味の宝蔵』の双方とも、「教誡部」の実践に関しては、数章にわたり記述してある。それら両資料の記述に差異もある(とくに「四灯明」の箇所)が、それを比較して研究すると膨大な分量になるので、ここでは両資料の記述のうちで適当と思われるものを選んで、実践の内容を説明するのとどめる。

### 2-1-1) 「テクチュ」

『言葉と意味の宝蔵』には、中国人の大アジャリ、シュリーシシハ Çrīsimha による三種の方法が記されている。それらは、

- a. 「法が尽き本来からの大清浄なることにおいて超えること」 chos zad ka dag chen por la bzla ba
- b. 「所作と離れ透過して裸のものに止縛されること」 bya bral zañ thal rjen par ḡgag bsdam pa
- c. 「完全に解脱し一平等なるものに系縛されること」 yons grol mñam pa chen por chins su bcins pa

(Tsh・D, 130 a, 2)

それぞれの内容を説明しよう。

aは教観一致のものである。その内容は「心・界部」を超えていない。それは次のことに尽きる。

- 1. 一切諸法は自性無く幻の如く存在しない。
- 2. 一切諸法は自性無く空なるままに、「本来清浄」であり、「自ら解脱して」存している。
- 3. それゆえに、一切諸法はそのまま「真理」(=「明知」)である。

この観法は「自ら解脱する」の側面で一切諸法がそのまま「明知」であることを説くものである。それは、「十二の金剛笑」<sup>(54)</sup> rdo rjeḡi gad mo bcu ḡñis と「八種の大驚異の言葉」<sup>(55)</sup> no mthar gyi tshig chen po brgyad にまとめられる。

bは「裸の明知」rig pa rjen pa を認識して、その「状態」nañ をまもる実践である。<sup>(56)</sup> 「界部」のうちで最終部に記されていた最も特徴的なもの「要点が広げられるもの、真実性の究極界」の実践法を、受け継ぐものと思われる。「境」yulに「裸の明知」がのぼる場合も記されているが、「トゥゲル」ほど複雑でない。「神」のマンドラもあられず、密教的ではない。

cは「明知」の「五つの解脱のあり方」grol lugs lia を悟り、それによって一切諸法が「明知」として解脱していることを悟るものである。その果は、諸法が自ら消失して跡形なく透過すること rañ yal rjes med zañ thal である。

「解脱のあり方」については様々な説があるが、基本的には次の五種<sup>(57)</sup>である。「本来解脱」ye grol, 「自己解脱」rañ grol, 「擬視による解脱」cer grol,<sup>(58)</sup> 「辺解脱」mthaḡ grol, 「独一解脱」gcig grol。これらはゾクチュン教義の「自らのぼる」と「自ら解脱する」の二側面のうち、後者の側面を五種に分けて観ずるものである。

以上が「テクチュ」の実践である。「テクチュ」の「心・界部」からの観法の継承は、次のようになると思われる。

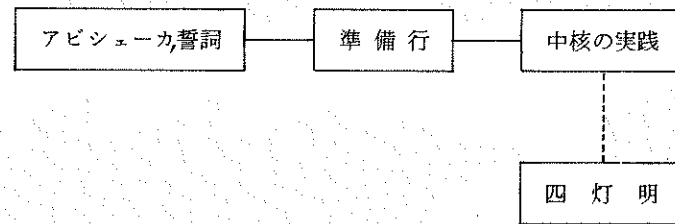
- a. ↔ 主に「心部」
- b. ↔ 「界部」
- c. ↔ 主に「界部」。「心部」のものも含まれる。

この「テクチュ」の実践の果は、「顕われ」(=現象)と身体が水月の如くに清められて、壁などによって妨げられることが無くなることである。Zaḡs yig can dan rtags tshad という論書で、「四頭現(「トゥゲル」で現われるもの)が定量 tshad に到らなくても、肉身 rdo bcas が顕われず、原初の場所 gdod maḡi sa へ解脱することがある。」と記されているものは、この「テクチュ」のことであると、『最勝乗の

宝蔵』は説いている (Th・Ch, 509b, 4)。

2-1-2) 「トゥゲル」

「トゥゲル」は七つの点<sup>(59)</sup>で「テクチュ」よりすぐれていると言われる。いわゆる「トゥゲル」(=「準備行と中核の実践を修するもの」)には、アビシューカと誓詞と「四灯明」の実践が付加される。図示すると、



これらのうち、「四灯明」の実践は、「中核の実践」に入れてもよいほど重要なものである。「四灯明」を「道 lam」として「四顕現」があらわれるとも言われる。「四顕現」とは「トゥゲル」(=「中核の実践」)において顕われるものである。「四灯明」の実践が「中核の実践」に入れて説明されないのは、<sup>(60)</sup>そうすると余りにも煩瑣になるためと思われる。

以上のような「四灯明」の重要性を考慮して、まず「四灯明」から説明しよう。

2-1-2-1) 「四灯明」

「四灯明」について、「四灯明」そのものと、「四灯明」と「四顕現」との関係に分けて説明する。

a) 「四灯明」

「灯明」とは、心臓の「如来蔵」(=「明知」)の「光彩」の一種である。光り輝く点から「灯明」と名づけられたと思われる。「四灯明」は次の如きものである。

- (一) 「遠くに置く水の灯明」 rgyañ shags chuḥi sgron ma
- (二) 「空なる滴の灯明」 thig le ston paḥi sgron ma
- (三) 「清浄なる界の灯明」 dbyiñs rnam par dag paḥi sgron ma
- (四) 「自生なる般若の灯明」 ḡes rab rañ byuñ gi sgron ma

それぞれを説明しよう。

(一)の「水の灯明」<sup>(61)</sup>がもとであって、これに依って残り三種の「灯明」がある。「水の灯明」とは、眼にある「野牛の角に似た脈管」にある「光脈管」である。虚空に顕われる「如来蔵」(=心臓にある「明知」)の「光彩」を見るものである。

(二)の「灯明」<sup>(62)</sup>は「五光」の円い周縁によって囲まれている「滴」のことである。

「滴」とは、心臓にある「如来蔵」の「光彩」が内の「脈管」と外の虚空に顕われたものである。虚空に顕わす方法は三種<sup>(63)</sup>ほどあるが、眼を指で庄する方法がよく用いられる。それによって生ずる光が、「滴の灯明」である。その色は人間では赤であるが、六種衆生によって異なる。<sup>(64)</sup>この「滴の灯明」はその形から孔雀の尾翎眼に喩えられる。

(三)の「灯明」<sup>(65)</sup>は眉間の向い側に顕われる「大遍満の青の光」と、その後、その内からのぼる五色を有する光である。両眼の端から虹あるいは *na ro* の如くにのぼると言われる。この「界の灯明」は「四顕現」があらわれる「境」になるものである。この中に「金剛鎖」 rdo rje lu gu rgyud (「四顕現」のうちの第一の顕現)を動くことなきように置いて見つめることから、「四顕現」が生じる。そのことが「トゥゲル」の実践の中心となるプロセスでもある。「界・明知」 dbyiñs rig で言えば、「界の灯明」が「界」に、「金剛鎖」が「明知」になる。この場合、「界」とは心臓の「明知」の「ゴウォ」が本来清浄の側面、「明知」とは「ランシンが自然成就」の側面をあらわすものである。これら二種の「明知」(即ち、心臓の「明知」とその「光彩」を意味する「界・明知」の「明知」)の区別には注意を要する。

「界の灯明」を顕わす方法については、三種<sup>(66)</sup>ばかりあるが、普通には太陽・月・灯明を見つめて、それから「界」を導く方法が用いられる。

(四)の灯明<sup>(67)</sup>は、他の三灯明に遍満して存在している「般若」のことである。具体的には、上述した「界」の中に「明知」を入れて、動くことなきようにして見つめることによって生じる「界と明知が二としてない御意 dgoñs pa」のことである。この「般若の灯明」では、「般若」は密教的に実体化されて、火花に喩えられる。

以上が「四灯明」である。

b) 「四灯明」と「四顕現」との関係

「四灯明」と「四顕現」との対応関係を示すために、まず、「四顕現」について説明しよう。

「四顕現」とは、「トゥゲル」の実践において顕われる四段階の顕われである。「顕現」とは、心臓の「如来蔵」(=「明知」)の「光彩」が虚空に顕われたものである。

「四顕現」の名称は次の如くである。

- (一) 「直接なる法性の顕現」 chos ñid mñon sum gyi snañ ba
- (二) 「境地が増える顕現」 ñams gon ḥphel gyi snañ ba
- (三) 「明知が定量に到る顕現」 rig pa tshad phebs kyi snañ ba
- (四) 「法性へ尽きる顕現」 chos ñid zad paḥi snañ ba

これらを簡単に説明すると、第一の「直接なる法性の顕現」<sup>(68)</sup>とは、「界」(=「界の



灯明)の中に「滴」と「微細滴」thig le phra mo が見えることである。「滴」がつながる場合は、三連 sum sbrel までである。これが「金剛鎖」<sup>(69)</sup>と呼ばれるものである。黄金色で浮動している。第二の「境地が増える顕現」<sup>(70)</sup>は、それから「智」の「色」kha dag と「形」dbyibs の「顕現」があらわれることである。第三の「明知が定量に到る顕現」<sup>(71)</sup>とは、第二の「顕現」の後、それらが一つの「滴」になり、それから「滴」の数がふえてつながり、それらの「滴」のうちに「仏身」が顕われ、ついにそれら「仏身」のマンダラが顕われるに到ることである。第四の「法性へ尽きる顕現」<sup>(72)</sup>とは、それらのマンダラの顕われが「内界」nai dbyins (心臓にある「如来蔵」のこと)に消入してしまうことである。消入してしまう前に、マンダラが消えたあと、青い「界」が一瞬残る。そのために「顕現」と呼ばれるのである。

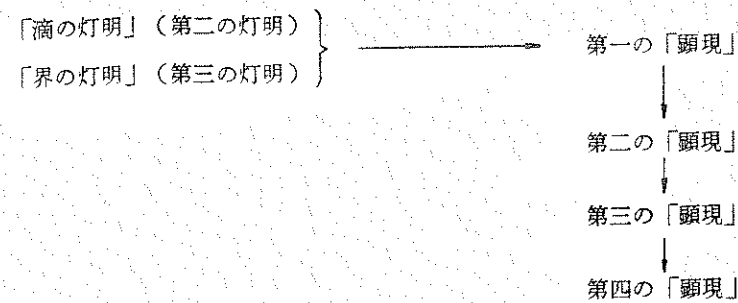
これらの「四顕現」は、「界」の中に「金剛鎖」を動くことなく置いて見ることから顕われる。「界」の中で「金剛鎖」(=「明知」、これは「滴の灯明」と同質のもの)が四段階に変形して顕われるが、それらが「四顕現」である。第一・第二の「顕現」が顕われれば、第三・第四の「顕現」は努力することなく自然に顕われる。

以上が「四顕現」である。次に、「四灯明」との関係を考えてみよう。『最勝乗の宝蔵』第十一章 247b, 2 と第十三章 287b, 5 の記述によると、「灯明」の第一～第四が順次に「顕現」の第一～第四に対応することになる。しかし、これは形式上の対応関係を示しているにすぎないと思われる。それについての筆者の見解を次に示しておく。

まず、第一の「顕現」に必要なものは、「界」(心臓の「如来蔵」の「光彩」,「エオオ」の側面)と「明知」(心臓の「如来蔵」の「光彩」,「ランシン」の側面)である。「界」は「界の灯明」と同一のものである。「明知」は「滴」(「界」の中にあらわれるもの)あるいは「金剛鎖」のことであり、「滴の灯明」と同質のものである。

さて、この「界・明知」を虚空に顕わす方法は、原則的には「界の灯明」の実践が「界」に関するものであり、「明知」に関するものは「滴の灯明」の実践であると思われる。しかし、「界の灯明」の実践のみで「界」が顕われ、その中に自然に「明知」が顕われる場合もあり、「滴の灯明」の実践のみで「明知」と「界」が顕われる場合もある。この「界・明知」を顕わす方法に関しては、『最勝乗の宝蔵』と『言葉と意味の宝蔵』の両方の記述とも不明瞭である。普通には、「界の灯明」の実践のみで「界・明知」が顕われる場合が、説かれるようである。

三つの場合のいずれにせよ、それらの「灯明」の実践が、第一の「顕現」のためのものであると考えられる。それゆえ、「四灯明」と「四顕現」の対応関係は、次の如くなる。



「滴の灯明」と「界の灯明」そのものが、第一の「顕現」であると言ってもよい。「四灯明」が「トゥゲル」の実践にとって重要なことが、これでわかる。

なお、「水の灯明」(=第一の灯明)と「般若の灯明」(第四の灯明)については、それらは「四顕現」に直接関係しない。「水の灯明」は「四顕現」を見るもの(あるいは、「四顕現」が映るもの)。「般若の灯明」は「界」と「明知」を不二として見ること(=「トゥゲル」の実践そのもの)から生ずる「般若」(あるいは、他の「灯明」の「能知」ges byed の部分)のことである。「四灯明」のうち、心臓の「如来蔵」の「光彩」という定義に本当にあてはまるのは、「滴の灯明」と「界の灯明」のみである。

以上で「四灯明」の説明を終る。

2-1-2-2) 「トゥゲル」

「トゥゲル」の実践はすべて、「界・明知」を虚空に顕わして、「界」の中に「明知」を動くこと<sup>(73)</sup>なきように置いて見つめることのためである。

「トゥゲル」の実践には、先述した如く、四種のアビシューカ、誓詞、準備行、中核の実践が含まれる。<sup>(74)</sup> これらのうち、アビシューカ<sup>(75)</sup>と誓詞<sup>(76)</sup>に関しては、省略する。

「準備行」についても、煩瑣になるために、名称のみを示しておく。

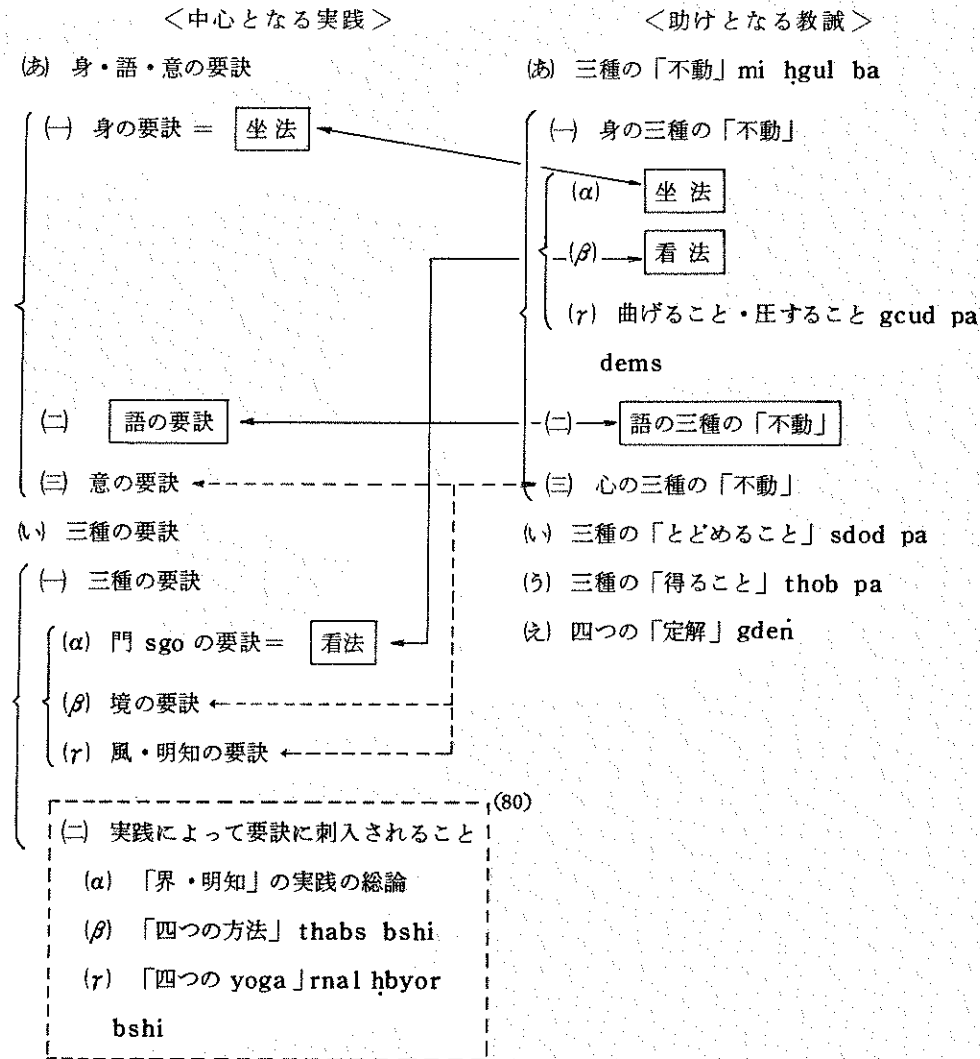
- (一) 「三仏身を引導するもの sna khrid par byed pa, 四大種の音 sgra の意味を学ぶこと」<sup>(77)</sup>
- (二) 「明知を引導するもの、輪廻・涅槃を区別する ru çan hbyed pa 行を学ぶこと」<sup>(78)</sup>
- (三) 「心の引導をするもの、身・語・意 lus nag yid 三つのあり方 gnas lugs を知ること」<sup>(79)</sup>

これらの「準備行」において、「平静を行ずること」rnal du hbebs pa を伴うことが、その特徴である。

次に、「中核の実践」について説明する。「中核の実践」を簡単に言うと、身体は「坐法」bshugs stans に住すること、眼は「看法」gzigs stans において見ること、

「風・明知」rlun rig (「明知」は如来蔵の「光彩」の方)が静かになることという要訣が一致して、「四顕現」が顕われることである(Th・Ch, 447a, 4)。

「中核の実践」は大きく二種に分けられる。「中心となる実践」(筆者が名付けたもの)と「助けとなる教誡」である。それらを示すと、



(上図に関する注意。実線の矢印(←→)は実践方法が同一であることを示す。点線の矢印(←---→)は実践方法が類似していることを示す。また、「中心となる実践」の(イ)の(二)「実践によって要訣に刺入されること」ñams len gyi gnad du bsnun pa は、『言葉と意味の宝蔵』にのみ記されていて、『最勝乗の宝蔵』には記されていない。これは以下の説明では省略する。また、「助けとなる教誡」の(イ)「四つの定解」は、『言葉と意味の宝蔵』では別章に論じられている。)

上図に見られる如く、「中心となる実践」と「助けとなる教誡」との双方に、重複するものが多い。それは「助けとなる教誡」が、「四顕現」が「定量」tshad に到る時の「助け」mthah rten もしくは「支え」rgyab rten として生じたものであるためである。「中心となる実践」で顕われる「四顕現」を確実に成就せしめるものである。

これらの実践それぞれについて説明しよう。

1. 「中心となる実践」

(a) 身・語・意の要訣

(一) 身の要訣

三仏身の坐法<sup>(81)</sup>をなすことである。三仏身の坐法とは、

- 「化身の坐法」sprul skuhi bshugs stans — 仙人の如くに存すること dran sron lta bur gnas pa
- 「報身の坐法」lonis skuhi bshugs stans — 象の様子 glani chen tshul
- 「法身の坐法」chos skuhi bshugs stans — 獅子の様子 sen gehi tshul

右側の呼称は、それぞれの坐法が「仙人が蹲坐すること」「象が横たわること」「獅子

(二) 語の要訣

これには「学ぶこと」bslab pa と「住すること」gnas pa と「超えること」la bzla pa と「堅固になること」brtan pa と四種<sup>(82)</sup>あるが、啞の如くに誰とも一言も話さないことに、まとめられる。

(三) 意の要訣

虚空の中心を見つめることによって、妄分別 rtog pa が自ら切れることである。<sup>(83)</sup>

(イ) 三種の要訣

(一) 三種の要訣

(a) 門の要訣

三仏身の看法をすることである。<sup>(84)</sup>即ち、

- 「化身の看法」sprul skuhi gzigs stans — 視線を投げ降して見ること
- 「報身の看法」lonis skuhi gzigs stans — 眼の端で見ること
- 「法身の看法」chos skuhi gzigs stans — 眼を上に戻すことによって見ること

(b) 境の要訣

両眉の間の虚空を見つめることと、それによって「識」çes pa が散乱しないことである。<sup>(85)</sup>

(7) 風・明知の要訣

「境」と「門」（ここでは眼のこと）の二つが会うときに、「風」が静まることによつて、「明知」（＝「如来蔵」の「光彩」の方）を囚人としてとらえることである。<sup>(86)</sup>

以上が「三種の要訣」である。これら「三種の要訣」は、上述の「身・語・意の要訣」が押えられた上で、押えられるのである。「三種の要訣」のうち、「境の要訣」と「風・明知の要訣」は「界の灯明」の実践と同一のものである。<sup>(87)</sup>

以上が「中心となる実践」である。

2. 「助けとなる教誡」

(a) 三種の「不動」

(一) 身の「不動」

(a) 遍満するもの khyab pa, 坐法の三種の「不動」

これは「中心となる実践」の「身の要訣」と同じ三仏身の坐法をなすことである。『最勝乗の宝蔵』では、「身の要訣」と実践方法は同じであるが、異なった目的（あるいは、果）を記す。<sup>(88)</sup>

(β) のぼらしめるもの hchar byed, 看法の三種の「不動」

これは「中心となる実践」の「門の要訣」と同じ三仏身の看法をなすことである。「門の要訣」よりも看法の方法が詳しく記されており、その実践の果（あるいは、はたらき）も異なる。<sup>(89)</sup>

(γ) 曲げること gcud pa, 圧すること dems の三種の「不動」

これは「中心となる実践」には無いものである。三種とは次の如きものである。<sup>(90)</sup>

- 「身体の手足を曲げること」
- 「指の諸関節を収縮 bskums pa すること」
- 「頸の脈管を圧すること gtems pa」

(二) 語の三種の「不動」

これは「中心となる実践」の「語の要訣」と同じものである。実践内容は同じであるが、三種に分けることによって少異もあるので、それらを示しておく。<sup>(91)</sup>

- 「他人と語を混じえないこと」
- 「言葉の顛倒 hdre ldog を切ること」
- 「自己の言詮 brjod pa すべてが滅せられること」

(三) 心の三種の「不動」

これは主に「界・明知」に関する「不動」である。三種とは、<sup>(92)</sup>

- 「〔心〕が向けられた的 hbem（虚空のこと）と離れないこと」

「明知」を「界」の囲庭 go ra に入れること」

「つねにその状態と離れないこと」

これらのうち、最初のもは「中心となる実践」の「意の要訣」と「境の要訣」とに類似しているが、残り二つは「風・明知の要訣」に類似していると思われる。

(i) 三種の「とどめること」<sup>(93)</sup>

これに「身」と「風」と「顕現」の「とどめること」の三種あり、それぞれにまた三種あるから、全体で九種である。<sup>(94)</sup> はじめの大きく分類された三種のみ示しておく。

- (一) 「身」の「とどめること」三種によって、所作 bya ba と離れる。
- (二) 「風」の「とどめること」三種によって、「不生の定量」 mi skye bahi tshad がとらえられる。
- (三) 「顕現」の「とどめること」三種によって、「不退転」 mi ldog pa に依る yid ches pa。

これらの「とどめること」に関しては、その結果の方が重要である。結果は二種説かれている。「微相」 rtags が身・語・心にのぼること<sup>(95)</sup>と、「定量」が夢 rmi lam によってとらえられること<sup>(96)</sup>である。とくに、前者が重要であり、四種のアビシュエカと関連づけられ、ニソマ派独特のアビシュエカ論となっている。

(ii) 三種の「得ること」<sup>(97)</sup>

「得ること」とは、「自在」 rañ dbañ を得ることである。『最勝乗の宝蔵』と『言葉と意味の宝蔵』の記述に相違があるが、『言葉と意味の宝蔵』によって示す。

- (一) 「生」 skye ba に自在を得ることによって、他利をなす。
- (二) 「入」 hjug pa に自在を得ることによって、有漏が顕われないで成仏する。
- (三) 「風」と「心」に自在を得ることによって、三界に戻ることはない。

これらは実践方法というより、実践の果である。

(iii) 四つの定解<sup>(98)</sup>

『最勝乗の宝蔵』でのみ「助けとなる教誡」とされる。その内容は、地獄・輪廻と仏・涅槃を見たり聞いたりしても、恐怖と希望を起さないということにまとめられる。

これら四種の見解 lta ba の定解によって、不退転の「智」の「定量」がとらえられる。

以上が「助けとなる教誡」である。この「助けとなる教誡」の説明の後、『最勝乗の宝蔵』及び『言葉と意味の宝蔵』ともに、「十地」と「十六地」の成就する様子を説く。<sup>(99)</sup>

「四顕現」が「助けとなる実践」を具有して円満成就する間に、それらの「地」 sa が成就するのである。

以上が「トゥゲル」の実践である。「トゥゲル」の実践で顕われる「四顕現」について

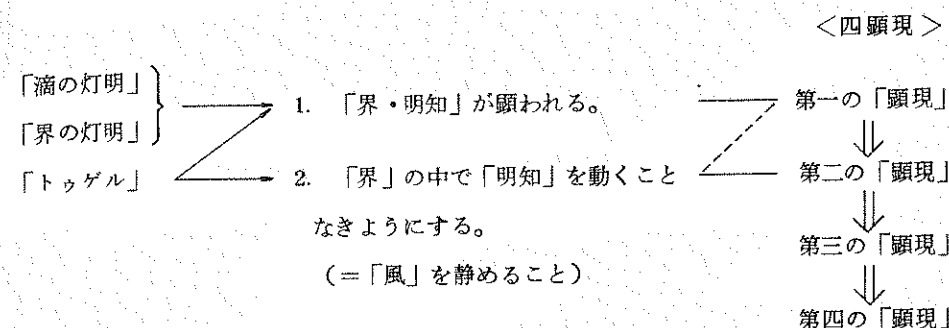
は、『最勝乗の宝蔵』及び『言葉と意味の宝蔵』ともに「中心となる実践」と「助けとなる教誡」との記述の間に説明している。第三の「顕現」において様々な「定量」に到ること<sup>(100)</sup>や、第四の「顕現」（「法性へ尽きる顕現」）に関して「漸次に尽きるもの」rim gyis zad paと「頓時に尽きるもの」cig car du zad paという「明知の光彩」の二種の尽きる仕方<sup>(101)</sup>があること、同じく第四の「顕現」で他利身として「大転移の御身」hpho ba chen poñi skuになることなど<sup>(102)</sup>重要なことも記されているが、余りにも煩瑣になるので省略する。

最後に「トゥゲル」の実践をまとめてみると、次の二点になる。第一点は、「トゥゲル」の実践のすべての方法は、「四顕現」を顕現するためのものであり、とくに、第一の「顕現」の「界」と「明知」（＝「滴」「金剛鎖」）を顕現するためのものである。「界・明知」は既述した如くに、心臓の「如来蔵」（＝「明知」）の「光彩」である。「滴」で言えば、「勝義の滴」don dam gyi thig leである。これを眼の「光脈管」（＝「水の灯明」）にまで運ぶものが、「智の風」である。その通路となるものが、先述した「大殊勝の四脈管」のうちの「水晶の管を有する脈管」である。<sup>(103)</sup>このように、密教の精神生理学的な教義のうち、「勝義」に属するものとされているすべてが、「トゥゲル」の実践で利用されている。もともと、それら「勝義」に属するものは、この「トゥゲル」の実践を説明するために、「ゾクチュン」の「教誡部」で創り出された教義である。

また、「界・明知」を顕現するという点では、「灯明」（ここでは「滴の灯明」と「界の灯明」）の実践と緊密に結びついている。「灯明」の実践の方が中心と考えられるほどである。『最勝乗の宝蔵』及び『言葉と意味の宝蔵』ともに「灯明」の実践を「トゥゲル」に組み入れている記述が見られる。

第二点は、第一の「顕現」（「直接なる法性の顕現」）で顕現された「界・明知」について、「界」の中に「明知」を入れて動くことなきようにして観ずることである。これは第二の「顕現」以降の展開を起すためのものである。「トゥゲル」はこのための実践でもある。「界・明知」は本当は虚空に顕現しているのではなくて、眼の「光脈管」（＝「水の灯明」）に映っているに過ぎない。<sup>(104)</sup>そして、心臓の「如来蔵」の「光彩」である「明知」が動くのは、「智の風」によるのである。それゆえ、「明知」の動きを止めることは、「風」を静めることである。「トゥゲル」の実践の半分は、このためのものである。「智の風」が完全に静まると、「界・明知」はともに心臓の「如来蔵」へ消入してしまう。これが第四の「顕現」（＝「法性へ尽きる顕現」）である。結局、第一から第四までの「顕現」とは、「光彩」の乗り物である「智の風」の静まる程度に従って見える、「光彩」の変化する姿に過ぎないのである。

以上のことを図示すると、



（上図で、「風」を静めることと第一の「顕現」を点線（-----）で結んだのは、第一の「顕現」では「界・明知」が顕われることの方が主であるからである。「風」を静めることは、第二の「顕現」で主となる。また、既に述べた如く第三・第四の「顕現」は、第二の「顕現」が顕われて後、努力する必要なく自然に顕われる。）

「トゥゲル」の複雑な実践体系も、まとめると以上に尽きるのである。

以上で、『最勝乗の宝蔵』と『言葉と意味の宝蔵』に見える「教誡部」の実践についての説明を終る。

#### 2-2) 『宗義の宝蔵』の第八章（184b, 2～208a, 6）に叙述されたもの

この『宗義の宝蔵』第八章では、アビシュエカと実践の果（＝「大転移の御身」）についてよく説明されているが、実践（「テクチュ」）とそのものについては略説されるのみである。実践で「四顕現」がのぼることを記すが、その内容には全く触れていない。

実践そのものの説明が少ない代わりに、実践の結果として「心」が戻ること、「心」が戻らないという点での他宗派のタントラ実践への批判、他乗すべての実践とその果に相当するものがこの「教誡部」に集まっている様子を記す。

『宗義の宝蔵』第八章の実践についての記述は、教義の中での実践、あるいは他乗との位置関係の中での「教誡部」の実践を説明していると考えられる。初心者あるいは他宗派の者に対する概要書としての『宗義の宝蔵』の性質が、この実践部分の記述にもうかがえる。また、他乗を否定するのではなく、「教誡部」に組み入れて、それによってそれら他乗の上に「教誡部」があることを主張することも、この実践部分の記述の特徴である。

#### 2-3) 『一切宗義』に叙述された「教誡部」の実践

まず、「教誡部」の実践について、「法性」が「境」に現実ののぼって、「自己の明知」

rañ rig が「〔金剛〕鎖の仏身」 lu gu rgyud kyi sku として熟して、解脱させるものである、と記す。これは「トゥゲル」の実践のことであり、「金剛鎖の仏身」として熟するというのは、その実践で顕われる「四顕現」のうちの第三の「顕現」のことである。

『一切宗義』の記述の特徴である他宗派との比較については、「教誡部」の実践は「六支瑜伽」 sbyor drug と比較されている。「教誡部」の「トゥゲル」の顕われを主要とする修道が「六支瑜伽」に似ていると説かれる。「トゥゲルの顕われ」とは、実践においてのぼる「空なる色 ston gzugs の顕われ」のことである。両実践の差異については、『一切宗義』の記述を示しておこう。

「六支瑜伽」 — 五風を中央脈管 dbu ma に縛る要訣によって、「空なる色の顕われ」がのぼるもので、行為・努力 byed rtsol の大楽の道に順次に導くもの。

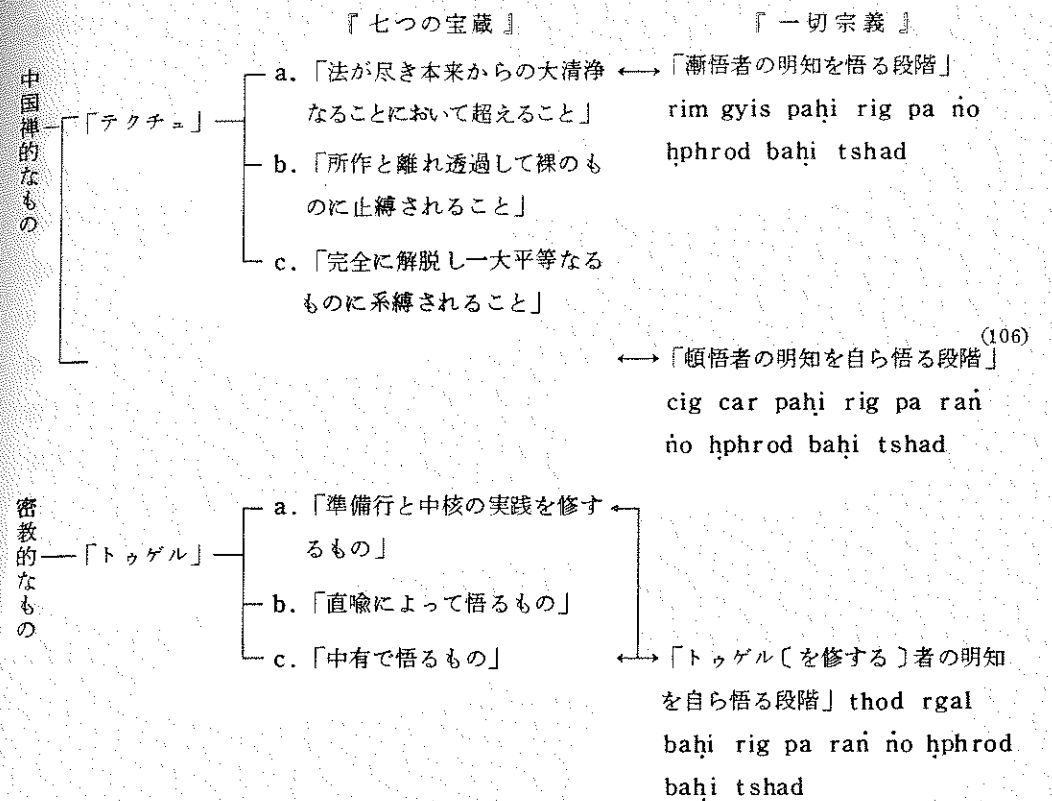
「教誡部」の実践 — すべての「意の判別」 yid dpyod を断って、「自ら輝く真如」 gnas lugs rañ gsal を如実に mñon sum du 確認すること gtan la hbebs pa によって、すぐれている。

つまり、『一切宗義』では「行為・努力」あるいは「意の判別」の有無を両者の差異としているのである。この「教誡部」の実践に「意の判別」がないということは、『最勝乗の宝蔵』および『言葉と意味の宝蔵』に記されている「教誡部」の実践の他乗よりすぐれている七点のうちの一つである。また、「六支瑜伽」と比較することも、『最勝乗の宝蔵』第十八章<sup>(105)</sup>に記されていることである。これらの記述において、『一切宗義』は『七つの宝蔵』を資料の一つとしていることが分る。

次に、『一切宗義』では「教誡部」の実践のすぐれていることを以下の如くに記す。即ち、三つの粗大門（＝身・語・意）が微細清浄身（＝御身・御語・御意）として清浄になることのみでなく、「法性へ尽きる顕現」（＝第四の「顕現」）が究竟することによって、すべての細・粗の三門が「仏身」と「智」の「状態」 rian で根基なきものとして清浄になるものであることによって、すぐれている。

この記述も『七つの宝蔵』（Th・Ch, Tsh・D）によったものである。『七つの宝蔵』で示されている他乗の実践よりすぐれている七点のうちの一つ、三仏身が「道での顕われ」 lam snañ としてのぼり、果は「本来清浄」であること、というものに該当する。他乗の実践の「果」をすべて「道」のものとする点ですぐれているのである。

三番目に、『一切宗義』は「教誡部」の実践の三種の「段階」 tshad について説く。それらを『七つの宝蔵』に叙述されたものと対応させて示すと、



となる。

一般的に、「テクチュ」が頓悟であり、「トゥゲル」が漸悟であると言われるのは、「テクチュ」では教観一致の部分が主であり、「トゥゲル」では「四顕現」が顕われる「準備行と中核の実践を修するもの」が代表的であるからである。『一切宗義』で云う「漸悟者の明知を悟る段階」は、教観一致のものであり、頓悟に入れてよいと思われる。

以上が『一切宗義』の「教誡部」の実践に関する記述である。その記述には「テクチュ」の名称をあげていないこと（ただし、〔結語〕では「テクチュ」と「トゥゲル」の名称が記されている。GÇM, Kha, 20b, 5）、「トゥゲル」に関して「四顕現」の内容、実践の方法、アビシュエカを説明していないことなどの不十分なところが見られる。ニンマ教法の概要書である『宗義の宝蔵』をさらに概説したような趣がある。

#### 2-4) 結 語

「教誡部」の実践は、「テクチュ」と「トゥゲル」がその主なるものである。「テクチュ」は「心・界部」の教観一致の実践を受け継ぐものである。中国禅的なものであり、ゾクチュンにとって本来的なものである。「トゥゲル」は「教誡部」において密教の影響を受けて

創り出されたものである。これはゾクチェンが頓悟であり、真・妄間に「道」を認めないとする他派からの批判に抗するために創られたのである。

しかし、心臓の「如来蔵」(＝「明知」)の「光彩」を虚空に出して、それを見て正覚することは、原理的に禅宗の見性成仏を発展させ、複雑化させたものに過ぎない。

「トゥゲル」では、密教の精神生理学的教義によって「真」と「妄」とが区別されたものの、「妄」から「真」への「修道」を言わず、「真」を悟ることのみを説く。「心・界部」での「修」は、現象を「自ら解脱する」と見て、仏教的 tathatā を頓悟することであったのが、「教誡部」でその tathatā の三昧状態が精神生理学的に実体化され、心臓の「如来蔵」になっただけである。表面的には「漸悟」とされているが、「妄」から「真」への「修道」は相変らず認められていない。結局、密教的要素を取り入れたものの、禅宗的实践法を基盤にしているのである。<sup>(107)</sup>

また、「教誡部」になって付加された密教精神生理学的教義部分は、すべてこの「トゥゲル」の實踐を説明するためのものである。それゆえ、この「トゥゲル」の實踐がいかに「教誡部」で重要視されたかが分る。實踐方法としては、頓悟である「テクチュ」より漸悟である「トゥゲル」の方が、優れているとされるのである。

## VII 結 び

ニンマ派の教法を形づくっている要素は、三つある。第一は、前期弘通時にインドからもたらされた密教。第二は、前期弘通時に禁教されつつも正統仏教圏外で広がり、正統なラマがないままに、密教聖典が表面的に解釈され、インド密教の意図するところとは異なった危険な方向へ趣いたもの。まさに、禁教の理由になったところの方向へ傾いたものである。この傾向はランダルマ王の破仏とそれに続く吐蕃王朝の崩壊によって助長され、チベット土俗神やボン教とも混淆して、全く異端的な密教となる。第三は、中国禅宗系のものである。これらの三要素が、非正統性と如来蔵思想と頓悟志向とをその共通の軸として、まとめられたものが、ニンマ派である。

ゾクチェンをこれらの三要素によって考察すると、「心・界部」は第三要素と第一要素が混ぜ合わされたものである。実践的には全く第三要素のみであるが、教義的には第一要素も無視できない。それは中国禅と融合した mahāyoga にゾクチェンと同じ教義が見い出されることによって、既述したような仮定(Vの4-3参照)も立てられ得るからであり、密教的な「菩提心」

もその教義に用いられているからである。しかし、第三要素の割合が多いことは否定できないばかりか、それが根本かとも考えられる。既に述べた如く、流派によって第一要素と第三要素の割合が異なるとも考えられる。また、「教誡部」の教法は、「心・界部」の教法(第三要素+第一要素)に、後期弘通時の密教の要素(これを第四の要素とも呼べる)が加えられたものである。

次に、これらゾクチェンの三つの「部」の成立時期に関して示しておきたい。歴史資料によると、ジャムベルシェニェン ḥJam dpal bḥes gñen がそれらゾクチェンの諸聖典を三つの「部」に分けたとされ、成立は同時である。しかし、教義と実践面から考えると、「心部」→「界部」→「教誡部」という成立順序が推定される。後の「部」が前の「部」を含みつつ、順次に発展・成立したのである。これらのうち、「心部」と「界部」の成立は時期的に近く、前期弘通時と思われる。「教誡部」の成立に関しては、「心・界部」と共通の教法部分は前期弘通時に存在していたと考えられるが、<sup>(1)</sup>その中心となる「無上秘密の法類」(「トゥゲル」を含むもの)は、後期弘通時に「新密呪」派の密教の影響を受けて成立したと推定される。<sup>(2)</sup>また、前期弘通時成立の「心・界部」と共通の教法部分と後期弘通時成立の「無上秘密の法類」がまとめられて一つの「部」となったのも、後期弘通時と推定される。「部」としての「教誡部」の成立は、『七つの宝蔵』の著者ロンチェンパから余り隔りの無い時期であると思われる。

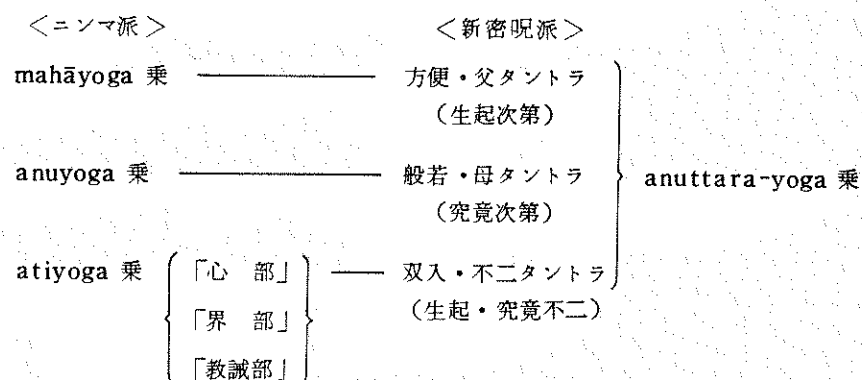
序 論 註

I

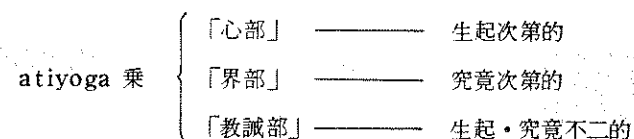
- 註 1. 『一切宗義』は、東大 No.90~111。ニンマ派の章を含む第二章は、No.101である。  
 註 2. 「リアンチ」 pp.155~157 参照。

II

- 註 1. ニンマ派の内タントラ三乗を「新密呪」派のタントラ分類と対比させれば、



となる。ただし、atiyoga 乗の三つの「部」(sde) は、後述する如く、「新密呪」派の生起・究竟次第に学んで整理されたため、次のような傾向をもつとは言える。



しかし、総じて言うと、mahāyoga 乗と anuyoga 乗の統合は三つの「部」に共通であって、「教誡部」のものだけではないのである。

- 註 2. Tucci 氏の使った資料は、Rañ byuñ rdo rje mkhyen brtsehi lha の Yon tan rin po chehi mdzod las ḥbras buhi theg paḥi rgya cher ḥgrel rnam mkhyen cin rta, Klon chen rab ḥbyams pa の gSañ ba bla med ḥod gsal rdo rje sñiñ poḥi gnas gsum gsal bar byed paḥi tshig don, rTa phag yid bshin nor bu las mun khrid ḥod gsal khor yug (著者は記されていない)。これらのうち、たしかに Klon chen pa の資料はあるが、他の二資料も重要視しているようである。

- 註 3. ケツンサンボ氏が使った資料は、mNah ris pañ chen Padma dbaṅ rgyal の

sDom gsum rnam nes である。

- 註 4. これより以前に、宗論に関しては、ドミエヴィルの研究がある。Paul Demiéville: Le Concile de Lhasa, paris, 1952 がそれである。しかし、中国禅宗系仏教がサムイェの宗論以後も残存し、それをニンマ派のゾクチェンに認めようとしたのは、チベット人以外では Tucci 氏のこの論文が最初である。

- 註 5. これは Tucci 氏が最初に主張したことではない。サベン(1182~1251)が sDom gsum rab dbye (Sakya bkaḥ ḥbum, Tokyo, vol 4, No.132. 「サムテン」 p.152 参照)に記しているし、DTN, Ga, 31b, 4~5 にも記されている。

序いでにいうと、ゾクチェンに中国禅の影響を認めることは、チベット内では以前から主張されていたことであり(特に、サベン以後)、このことに関して Tucci 氏が最初ではない。ただ、チベット人以外では彼が最初であり、『五部実録』を用いたのは、彼の功績である。

- 註 6. 今枝由郎氏の研究  
 Yoshiro Imaeda, "Documents tibétains de Touen-houang concernent le Concile du Tibet", Journal Asiatique, 1975. 「第29回国際東洋学会議チベット部会に出席して」『西藏会報』第21号, 1974。

- 註 7. 上山大峻氏の研究  
 「曇曠と敦煌の仏教学」『東方学報』第35冊, 京都, 1964. 「大蕃国大徳三蔵法師沙門法成の研究」上, 下, 『東方学報』第38, 39冊, 京都, 1967, 1968. 「チベット訳楞伽師資記について」『仏教文献の研究』百華苑, 1968. 「チベット訳からみた楞伽師資記成立の問題点」『印仏研』21巻2号, 1973. 「敦煌出土チベット文マハエン禅師遺文」『印仏研』19巻2号, 1971. 「敦煌出土チベット文写本の資料性について」『西藏会報』21号, 昭和50. 「敦煌出土チベット文禅資料の研究」『仏教文化研究所紀要』第13集, 1974 (この論文で Pelliot, No.116 の重要性を説き、後に、日本の諸研究者が Pelliot, No.116 を研究し始める端緒となる)。「チベット訳『頓悟真宗要訣』の研究」『禅文化研究所紀要』第8号, 1967. 「チベット宗論における禅とカマラシーラの争点」『日本仏教学会年報』40号, 1975. 「エセイデの仏教綱要書」『仏教学研究』32, 33号, 京都, 1977. 「敦煌仏教の盛衰」『アジア仏教史・中国編V, シルクロードの宗教』。「ペーヤン著の大瑜伽(mahā-yoga) 文献-P·tib 837 について」『仏教文化研究所紀要』第16集, 1977。

- 註 8. 沖本克己氏の研究  
 「bSam yas の宗論(一) - Pelliot 116 について」『西藏会報』第21号, 昭和

50. 「bSam yas の宗論(二)」『西藏会報』第22号, 昭和51 (この論文で初めて『五部実録』の他にニンマ派の論書である bSam gtan smig sgron に言及される)。「bSam yas の宗論(三)」『西藏会報』第23号, 昭和52。「チベット訳『二入四行論』について」『印仏研』24巻2号, 1976。「敦煌出土西藏文禅宗文献の研究(一)」『印仏研』26巻1号, 1977。「敦煌出土西藏文禅宗文献の研究(二)」『印仏研』27巻2号, 1979。「敦煌出土西藏文禅宗文献の研究(三)」28巻1号, 1979。「『楞伽師資記』の研究(一)」『花園大学研究紀要』9号, 京都, 1978。「『楞伽師資記』の研究(二)」『禅文化研究所紀要』11号, 京都, 1979。「摩訶衍の思想」『花園大学研究紀要』8号, 1977。「禅宗史に於ける偽経」『禅文化研究所紀要』10号, 京都, 1978。「敦煌出土のチベット文禅宗文献の内容」『敦煌仏典と禅』(講座, 敦煌8), 大東出版社, 昭和55。

註 9. 小島宏允氏の研究

「チベット伝ボダイダルマタラ禅師考」『印仏研』24巻1号, 1976。「チベットの禅宗と『歴代法宝記』」『禅文化研究所紀要』6号, 1974。「『歴代法宝記』と古代チベットの仏教」『初期の禅史Ⅱ』(禅の語録3), 筑摩書房, 昭和51。「チベットの禅宗と蔵訳偽経について」『印仏研』23巻2号, 1975。「Peliot, tib, n° 116 文献にみえる諸禅師の研究」『禅文化研究所紀要』第8号, 京都, 1976。「古代チベットにおける頓門派の流れ」『仏教史学研究』18-1, 京都, 1976。

註 10. 木村隆徳氏の研究

「敦煌出土チベット文写本 Peliot 116 研究(一)」『印仏研』23巻2号, 1975。「敦煌出土チベット文写本 stein 709」『西藏会報』第22号, 昭和51。「Une Lacune dans le Manuscrit tibétain de Touen-houang, Peliot tibétain 116」『印仏研』24巻1号, 1977。「チベットに流入した中国禅」(昭和51~52年度科学研究費補助金一般研究(B)研究成果報告書, 東京, 1978)。「敦煌チベット語禅文献目録初稿」『文化交流研究施設研究紀要』第4号, 1980。「敦煌出土のチベット文禅宗文献の性格」『敦煌仏典と禅』(講座敦煌8), 大東出版社, 昭和55。他に, 「Kamalaśīla 作金剛經広註敦煌出土チベット写本」『印仏研』24巻1号, 1976。

註 11. 原田 覚氏の研究

「bSam yas の宗論以後に於ける頓門派の論書」『西藏会報』第22号, 昭和51。「摩訶衍禅師と頓門」『印仏研』28巻1号, 1979。「敦煌蔵文資料に於ける宗義系の論書(一)」『印仏研』26巻1号, 1977。「敦煌蔵文資料に於ける宗義系の

論書(二)」『印仏研』29巻1号, 1980。「摩訶衍禅師考」『仏教学』8号, 東京, 1979。他に, 「“sGra sbyor bam po gnis pa”考」『印仏研』27巻2号, 1979。「“Mahāvvyutpatti”の成立事情」『西藏会報』第25号, 昭和54。

註 12. 藤枝 晃氏の研究

「沙州帰義軍節度使始末〔一〕」『東方学報』京都, 第十二冊第三分, 1941。「吐蕃支配期の敦煌」『東方学報』第三十一冊, 1961。その他の諸論文あり。藤枝氏の研究にはMBT以前のものもあるが, 敦煌学として共通であるので, あげておいた。

註 13. 山口瑞鳳氏の研究

「上山大峻『曇曠と敦煌の仏教学』評」『東洋学報』47-4, 昭和40。「チベット仏教と新羅の金和尚」『新羅仏教研究』金知見, 蔡印幻編, 山喜房仏書林, 昭和48。「rin lugs rBa dPal dbyaṅs—bSam yas 宗論をめぐる一問題」『平川還暦記念論文集, 仏教における法の研究』春秋社, 昭和50。「チベット仏教」『講座東洋思想第5巻』東京大学出版会, 1967(これは既述)。「吐蕃王国仏教史年代考」『成田山仏教研究所紀要』第3号, 成田, 1978。「『二卷本訳語釈』研究」『成田山仏教研究所紀要』第4号, 成田, 1979。その他, 東洋史系の論文多数あり。

註 14.

「古タントラ全集目録Ⅰ」大正大学『総合佛教研究所年報』創刊号, 昭和54は, NGBのVol 1 の目録である。「ニンマ派に於ける『心髓』の相承系譜」『大正大学研究紀要』昭和55は, ロンチェンパの sÑin thig ya bshi の目録である。他に, 論文「ラトナリンバと旧訳タントラ全集」『法然学論集』第2号, 昭和53がある。同じニンマ派の研究を志すものとして, NGBの目録の完成を期待する。

### III

註 1. 「Das 訳」p.11, 1.9~p.12 で, Das が(2)と(3)を合わせて, 「ニンマのラマの九つのクラス」としているのは, 誤りである。

註 2. 「サ・テル」sa gter にも「真」と「偽」がある。「真の埋蔵書 gter kha」とは, 敦煌文書のようなものである。ニンマ派の「埋蔵書」の場合, 「真の埋蔵書」であってもいくらか手が増えられているが, 全部分創作ではないので, 「真」とされる。その素材となる原本が埋蔵された理由の一つとして, 中国仏教の禁教があげられる。それゆえ, 「真の埋蔵書」には中国禅宗系の論書が多いと推定される。(『チベ文化』p.67, 参照)



「偽の埋蔵書」とは全部分創作されたものである。実際は、自らの創作であり「ゴン・テル」*dgonis gter* であるのに、いつわって埋蔵場所から発掘したとするものであり、ニンマ派の「埋蔵書」の大部分を占める。創作した教法・儀軌を「サ・テル」とするのは、パドマサンパヴァなどの前期翻訳時代のラマに結びつけて、その教法を権威づけるためである。それを証拠だてるものとして、後代になるにつれて「サ・テル」が減り、「ゴン・テル」が増える傾向にある。創作を創作としてそのまま主張するようになったのである。

なお、埋蔵書については、『西藏宗義2』pp.8~9, 「チベ宗教」p.269, 『チベ文化』pp.67, 312 参照。

- 註 3. シグボリンパ *Shig po gliñ pa* (1829~1870, DC, 306b, 4~312b, 1) やキェンツェイワンポ *mKhyen brtseñi dbañ po* (1820~1892, DC, 312b, 1~320b, 1) の「七つの個有の教え *bkañ babs bdun*」を示す場合のように、「深淵浄現教説」と「ゴン・テル」が別種に教えられることもある (*dag snañ gi gter* と *dgonis gi gter*) が、大きく分けると同一の部類に入る。
- 註 4. 「ラ・ゾク・トックの三つ」については、『EVa』p.70 参照。
- 註 5. ニンマ派の *mahāyoga* 乗は大きく「修部」*sgrub sde* と「タントラ部」*rgyud sde* に分けられる。前者が「八教説」の法類、後者が「幻化網」の法類である。「八教説」についてはGÇM訳註<1・1>註53, <1・3>註79, 80, <2・1>註11。「幻化網」については<1・1>註53, <2・1>註5参照。
- 註 6. ただし、「仏説」は教義 (philosophy) を主にし、「埋蔵教説」は儀軌 (ritual) を主にするという差異がある。これは S. Karmay 氏の教示による。
- 註 7. あくまで、ニンマ派内でインドからもたらされたと考えられるものである。それらに対しても、「新密呪」諸派は偽撰と批判する。実際、偽撰のものが多し。後述する *Kun byed rgyal po* もチベット偽撰であると推定される。それが『大藏経』に入れられた理由については、「大藏縁起」pp.55, 56 参照。
- 註 8. DC, 32a, 6~35a, 4. PSJ, 244a, 3. Das 版 p.386, 1.10。
- 註 9. DC, 36a, 1~36b, 2. PSJ, 244a, 3. Das 版 p.386, 1.12。
- 註 10. DC, 39a, 4~42a, 3. PSJ, 244a, 4. Das 版 p.386, 1.15。
- 註 11. DC, 246b, 2~3。
- 註 12. DC, 246b, 3~247b, 1。
- 註 13. DC, 246b, 1~2。

#### IV

- 註 1. 「心部」「界部」「教誡部」のことである。
- 註 2. 後述する「教誡部」の四法類、「外の法類」「内の法類」「秘密の法類」「無上秘密の法類」のこと。本論Ⅴ, 1-1), 3-d-(5)-(二)参照。
- 註 3. GÇMの記述で注意すべきことは、DTNで「心部」にヴィマラミトラからの傍系が記されているが、それがヴァイローチャナ系とされていることである。
- 註 4. DTNに「幻化網」の系統で、*gNubs Sans rgyas ye çes* が弟子たちに、*lta ba sgañ dril, star ka gegs sel, gab pa mñon du phyun* という「教誡部」の教義を伝えたことが記されている。それが「教誡部」の部分的前期弘通時成立の根拠となる。DTN, Ga, 4a, 3~5。Ⅴ註4, 7, 10。
- 註 5. Ⅲ, 註2. 及び後註7参照。
- 註 6. GÇMの訳註<1・3>註122参照。
- 註 7. 「テルトゥン」には、「真」と「偽」があると言われる。GÇMによると、*Padma than yig* (14世紀、ウルギェンリンパ発掘) が予言しているところのサンギェラ *Saṅs rgyas bla ma* からデチェンリンパ *bDe chen gliñ pa* までのテルトゥンたち。それに、後世、タシトプギェル *bKra çis stob rgyal* が予言と一致するテルトゥンたちを『百人の願文集』としてまとめたが、そこに記されているテルトゥンたち。彼らを真のテルトゥンとしている。しかし、現代の時代から見れば、真のテルトゥンと言われる者も疑しく、彼らのほとんども、埋蔵者自身が発掘者である偽のテルトゥンである。
- また、テルトゥンは11世紀頃から出現するから、「中期」にはすでに存在するわけである。もともと「埋蔵書」発掘の一原因は、後期弘通時の初期に中国禅宗の資料を時代に合わせて潤色し編集することにあったからである (そして、オリジナルなテキストのある中国禅系「埋蔵書」は「仏説」系に属するとされる)。しかし、テルトゥンの「埋蔵教説」の系統が「仏説」の系統よりも隆盛になり、後者を包み込んで合一してしまうのは、「後期」になってからである。
- 註 8. ズンガルの侵入は1717年。1720年に清によってズンガルは敗退するが、以後、チベットは清の保護領になる。しかし、チベットの政権はもと通りにゲールク派に委ねられ、この状態が1912年まで続く。ダライラマ五世の死後、ニンマ派に対する迫害が二度ある。侵入したズンガルによるものと、その後のチベットの政権者の一人 *K'añ-c'en-nas* によるものである。しかし、いずれの場合も、一般的なもの

はなく、迫害者は悪評を蒙った。CTI, pp. 53~54, pp. 109~110, 及び『一切宗義』訳註<4・1>註33参照。

- 註 9. GÇMはズンガル侵入後の混乱時期のテルトゥンとして, *hJig med gliñ pa* (1729~1798)を記さずに *rJe druñ sprul sku Blo bzañ hphrin las* を記す。GÇMはニンマ派の二方向, 再興と墮落のうち, 後者のみを記したのである。DCの著者ドゥジョムリンポチュエの批判するところである。DC, 241b, 5~242a, 3参照。

## V

- 註 1. 仏教一般には、「智」と「理」は区別され、「智」とは「理」を悟らしめるものである。「果としての側面」*result aspect*「基盤としての側面」*ground aspect* と呼ばれることもある(高崎直道「法身の一元論—如来蔵思想の法観念」『平川彰博士, 還暦記念論文集, 仏教における法の研究』春秋社, 昭和50, 参照)。しかし, ゾクチェンでは「智」はそのまま「理」であり, いわば, 「理・智」を超えたものである。これは禪定あるいは三昧体験に基づく教義に見られることである。
- 註 2. G・Th, 168b, 4 の *Kun byed rgyal po* からの引用には, *gcig rdzogs gñis rdzogs sems la rdzogs* と記されている。なお, *Kun byed rgyal po* (北京 No.451) 98-2-6~7 には『七つの宝蔵』と異なる説明がされている。
- 註 3. *ñan* は一般的には「法界」*chos dbyiñs, nisarga* のことを指し, *kloñ* と同義である。しかし, 『Das 辞』には *station* (状態) の訳も記されているので, *kloñ* (界) と差異をもたせるため, そちらの方を取った。意味は *kloñ* とそれ程違わない。
- 註 4. 菩提を願う心ではなく, 密教で使われる用語と同じで, 「真理」を意味する。
- 註 5. *Kun byed gyal po* にも記されている。北京 No.451 の 113-5-5, 114-2-4~5, 119-4-4。
- 註 6. *phyal yas* 「果てしなき平坦」と書かれることもある。*Kun byed gyal po* (北京 No.451) の 114-2-4 には *dños su mi bcod ye çes ma hğags pa* と説明されている。
- 註 7. *rgya yan* は『蔵文辞』p.172 に, *don med hkyams pa* (無目的に漂流していること) とその意味が記されている。無分別・無努力の三昧状態をあらわす。「廣大無辺の漂い」と訳した。三昧状態の「心」が廣大無辺に漂っているのである。*rgya yan* はまた *kha yan* と書かれることもあり, 両者は同義である。

- 註 8. 例えば, サキヤ派の論書に用いられている。GÇM, Cha, 19b, 6. 20a, 1. 20a, 6 (『一切宗義』サキヤ派の章。『西藏宗義1』p.126)。『金剛句偈』*Lam hbras pod ser*, 8a, 3 (『西藏宗義1』p.145)。なお, V註29, M註18参照。
- 註 9. 四項目とは, *gnad* (*gnad dkrol ba*) と *hğag* (*hğag bsdams pa*) と *chiñs* (*chiñs su bciñs pa*) と *la bzla ba* (*la bzla bañi gnad*) である。
- 註 10. ゾクチェンの教法は, 三部 *sde*, 九界 *kloñ*, 四系縛 *chiñs* にまとめられる, と『真如の宝蔵』の 14b, 6 に記されている。それらについてはロンチェンバの自注 *sDe gsum sñin poñi don hğrel gnas lugs rin po cheñi mdzod ces bya bañi hğrel pa*, 86b, 4~87a, 3. 参照。
- 註 11. 「界」*kloñ* は *dbyiñs* (「本質」の意味の方) と同義語である。Tucci 氏が MBTで「波」(*undulation*)と訳しているのは, 良くない。ついでに言うが, 同じ書で *man ñag* を「密咒」(*mantra*)と訳しているが, 正しくは「教誡」(=口伝のこと)である。
- 註 12. DTN, Ga, 31b, 5~6 (BA, p.169)にゾクチェンの三部の特徴として,  
「セムチョク・パ」(「心部」のこと) — 「深」*zab mo* を強調する  
「界部」 — 「深」と「輝」*gsal ba* の双方を強調する  
「教誡部」 — 「輝」を強調する  
この記述は筆者の説と異なるようであるが, 三部を実践面からとらえたものとすれば, 矛盾はなくなる。「深」とは本来「止」であり, 「輝」とは「観」のことである (cf. 『心把握』pp.391, 392. DTN, Ga, 31b, 4~5 に *Grol bañi thig le* から引用して, 「深」と「輝」の説明がしてある。参照)。ゾクチェンの実践に結び付けると, 「輝」は「真理」(=「心性」「如来蔵」)が輝き, ひいては虚空に顕われる面を意味する。「深」は「真理」が空であり寂であり, 虚空に顕われない面を指す。即ち, 「教誡部」は「トゥゲル」*thod rgal* の実践で心臓の「如来蔵」を虚空に顕わすから, 「輝」を強調することになる。「心部」は教観一致のものであり, 「真理」(=「心性」)の空寂なる面を悟るから「深」を強調している。「界部」はその中間態であるから, 「輝」と「深」の両方を強調していることになる。
- 註 13. ゾクチェンで用いられる「心の方面」「顕われの方面」*snañ phyogs*の「方面」の用語法は, 他宗派にも例が見られる。たとえば, GÇM「カギェ派の章」Shol 版, Kha, 19b, 5の *snañ phyogs*, チャンキヤ・ラマの *Grub bañi mthañi*

rnam par bshag paḥi thub bstan ltun poḥi mdzes brgyan (東大 No. 87) Kha, 92b, 5 に記されている snañ phyogs, ston phyogs。しかし、sems phyogs はゾクチェン特有の用語とも思われる。

- 註 14. 「セムチョク・パ」 sems phyogs pa とは、現象諸法を「心の方面」 sems phyogs と説くものという意味である。適当な訳語がないので、呼称の場合は「セムチョク・パ」と訳した。
- 註 15. blo は「智」 ye ces と同義に用いられる場合もあるが、ゾクチェンでは「妄分別」 rtog pa と同義である。
- 註 16. Th・Ch と G・Th では「心部」の教義説明のあと、「心部」の聖典の内容を項目別に説明してある (Th・Ch, 74b, 4~75a, 2。 G・Th, 172a, 6~172b, 6)。
- 註 17. Th・Ch, 507b~508a (「テクチュ」 khregs chod が記されている章に含まれる) に、「依られる根基」 rten gshi を「明知」 rig pa, 「依る法」 rten chos と記してあることにより、「依られる根基」は「真理」 (= 「自生の智」など) であることが分る。
- 註 18. G・Th は二種の「白き界」を、brjod med rañ çar chen poḥi kloñ dkar po, lta sgom gñis su med paḥi kloñ dkar po と呼称する。
- 註 19. 以下、この「白き界」には「教誡部」の「テクチュ」の観法と一致するものが記されている。この点で、『チベ宗教』の、「界部」は「テクチュ」の手びき (initiation) を教えるという記述は正しい。しかし、これは部分的に正しいのであって、正しくは、「心部」も「テクチュ」の手びきを教えるとするべきであるし、「テクチュ」は「教誡部」の実践と明記する必要がある。
- 註 20. G・Th では、「要訣が解かれるもの、真実性の究極界」 gnad bkrol ba de kho na ñid kyī rab ḥbyams と呼称されている。
- 註 21. 「界部」の教法の説明のあと G・Th, 176a, 6~177a, 5 では以上の教法を四種の「界」 kloñ, 九種の「界」, 三種の「界」にまとめている。これらの内容は同じであるが、まとめ方によって、四・九・三種の差異がある。Th・Ch, 77b, 3~78a, 1 では四種の「界」のみ記す。四種の「界」とは、rol paḥi kloñ, rgyan gyī kloñ, chos ñid kyī kloñ, bya ba dañ bral baḥi kloñ である。
- 註 22. ゾクチェンと「大印」の教義の比較は、すでにサパンがしている。サパンの著作 sDom gsum rab dbye (Sa skya bkaḥ ḥbum, Tokyo, Vol 4, No.132) に記されている。しかし、そこではゾクチェンと「大印」の同一性が説かれている。ゾクチェンと「大印」の類似性と差異を説いたのは、GÇMが最初である。なお、サ

パンの「大印」教義の理解に対する批判は、GÇM, ShoI 版, Kha, 25a 以下参照。

- 註 23. 「去る場所」とは「解脱する場所」 groI sa のことである。
- 註 24. 「深」と「輝」については、『心把握』p.391 に、「理性の常に寂なるを止 (非権非実) と名づけ、寂にして常に照らすを観 (亦権亦実) と名づける」と記されているのが参考になる。ゾクチェンの用語で言えば、「深」が no bo ka dag (あるいは ston pa), 「輝」が rañ bshin lhun grub (あるいは, gsal ba) の側面である。上註 12 参照。
- 註 25. 玉城教授の言う最もラディカルな「唯心偈」解釈。『心把握』pp.52~58 参照。
- 註 26. 現象を迷乱とするのは、現象という「位相」においてである。現象という自性があると執せられた状態の現象、「心計」によって観念的に把握された現象が迷乱であるという意味である。
- 註 27. 二種の空性については、『中観唯識』p.113 参照。
- 註 28. 世俗諦・唯世俗・勝義諦の概念に関しては、『中観唯識』pp.37, 51, 53, 113, 167 等を参照。
- 註 29. 言うまでもなく、「勝義空」の否定的表現が no bo ston pa に当り、積極的表現が rañ bshin lhun grub に当る。rañ bshin lhun grub は本来、ston pa と gsal ba を超えたものである。しかし、「法性」の lhun grub の面を積極的に表現すると、rañ bshin lhun grub とならざるを得ないのである。それが現象展開の説明と結びつくようになると、rañ bshin lhun grub と no bo ston pa の距離が大きくなる。なお、後述する thugs rje kun khyab は「清浄の化成」にあたり、「性起」を意味する。後註, VI, 18 参照。
- 註 30. 「力」 rtsal に関して言うと、「清浄・不浄の化成」が「力」の「化成」になる。「自ら解脱して「勝義空」に消入することは、「力」が「根基」に運ばれる、と説明される。cf, 『法界の宝蔵』第十章。
- 註 31. 『法界の宝蔵』第三章に見える ḥdus や ḥub chub の語は、ゾクチェン特有の用語であり、「自ら解脱する」の側面に属する。
- 註 32. ゾクチェン教義の二側面に対して、次のような解釈も可能である。即ち、「自らのぼる」の側面では、「のぼる」で真・妄の全一の否定と別異の否定、「自ら」で真・妄別異の消極的否定を表わす。「自ら解脱する」の側面では、「自ら」に加えて「解脱する」で真・妄別異の積極的否定を表わす。
- この解釈は、たしかに「界部」の「宝の界」の「功德が自ら成就 rañ rdzogs

してのぼる」と表現される場合には、あてはまるように思える。「自らのぼる」の側面が真・妄の消極的同一を示すように思える。

以上の解釈に関連して、「自らのぼる」の側面について本文で述べたことを補足しよう。ゾクチェンの「自らのぼる」の側面は基本的には本文で示したことに尽きすが、詳しく考察すると次のように区分される。

「自らのぼる」	—	—	1. 「不浄の化成」	—	—	7. 無意味とされるもの(否定)	
			2. 「清浄の化成」				イ. 有意味とされるもの(肯定)
			3. 法界におけるのぼる				

これらのうち、「不浄の化成」と「清浄の化成」のア「無意味とされるもの」は、本文中に示した「不浄の化成」と「清浄の化成」である。「清浄の化成」のイ「有意味とされるもの」は上述した真妄の消極的同一の面である。アが「妄心の唯心論」から由来する「不浄の化成」の影響を受けた「清浄の化成」の一面であるのに対し、イは密教の生起次第あるいは中国仏教の真性随縁に由来するものと思われる。

ゾクチェン教義にはこれら二つの「清浄の化成」が見られるが、それらのうち基本となるのは、本文に示した如くア「無意味とされるもの」である。それはゾクチェンを全体的に見ると、「清浄の化成」よりも「不浄の化成」、「真心の唯心論」よりも「妄心の唯心論」の方が根本であるからである。後者の影響が前者に及ぼされているからである。即ち、「清浄の化成」は真・妄の消極的同一を表わすこともあるが、それよりもその「化成」そのものが「空」であることを強く表わしている。そのことは「化成」「飾り」rgyan 等のゾクチェン特有の用語にも示されている。

「自らのぼる」のうちの3「法界におけるのぼる」は、諸法が「自ら解脱」して「法界」で「自ら成就」していることを、「のぼる」の用語で表わしたものであり、本文中で示した「自ら解脱する」の側面に属するものである。本文中では「自らのぼる」の側面では取り上げなかった。『一切宗義』の「心部」の教義に関する記述や『最勝乗の宝蔵』の「セムチョク・パ」の総じての「コウオ」の記述に見られる「心性が自生の智としてのぼる」の「のぼる」はこの用語例である。他に、「界部」の「海の界」、第2と第3の「究極界」の記述に見られる。諸法が解脱して「法性」となり、「法界」において「法性」として顕われる(=円満成就する)ことである。上述した如く「のぼる」という用語は使われているが、本文で説いた二側面のうちでは「自ら解脱する」の側面に属し、「自ら解脱した」状態で(「心」に)顕われるのである。2「清浄の化成」のイ「有意味とされるもの」とは区別されるべきものである。

3「法界におけるのぼる」と2「清浄の化成」のイ「有意味とされるもの」は本来差異がありながら、一般仏教思想においては同一視されるようになる場合もある。3と2のイの同一視の傾向は、ゾクチェンにおいても見られる。しかし、ゾクチェンでは「のぼる」の側面に1「不浄の化成」の影響が大であるため、全体としては3と2の区別を強調するように思える。そのことは、2のアがイよりも強調されていることの言い換えでもある。

註 33. 「心部」「界部」ともに、「自らのぼる」「自ら解脱する」の両側面を具えていることの根拠としては、初期ゾクチェンの論書にすでに両方の用語が見えることがあげられる。例えば、「心部」の中心聖典 Kun byed (北京 No.451) では、「のぼる」が 97-1-7, 98-1-8, 100-4-2, 101-2-1, 「解脱する」107-4-5, 118-1-8, 123-2-3, 124-4-1, 125-1-7 (rañ grol), 126-4-5 etc. Çri simha 著の論書のうち、hKhor ba rtsad nas gcod pa gtan tshig hKhor lohi man ñag (北京 No.5031) には、「のぼる」が 111-2-1, 「解脱する」が 112-1-5, 111-2-1。 Khor ba rtsad nas gcod pa bdud rtsi dri med kyi man ñag (北京 No.5032) には、「のぼる」が 111-4-5, 「解脱する」が 111-4-1, 111-4-3, 111-4-5 (rañ grol) に記されている。

註 34. サバン Sa-skya Pañdita (1182-1251) の著作とは、sDom gsum rab dbye (Sa skya bkah hbum, Tokyo, vol 4, No.132) と sKyes bu dam pa rnams la sprins bahi yi ge (Sa skya bkah hbum, Tokyo, vol 5, No.30) のことである。cf, 「サムテン」 p.152。

註 35. 「明知」は初期ゾクチェン(=「心・界部」)では、神会の「靈知」と同じく、「理・智」を超えた三昧状態の「心」をあらわす。それは「教誡部」になっても「裸の明知」rig pa rjen pa に受けつがれるが、一方では次第に精神生理学的に実体化され、心臓の「如来蔵」を意味するようになる。このような「明知」の概念の意味するものの変遷に注意する必要がある。

註 36. このように神会の「靈知」との関係も推定することも可能であるが、「自証知」rañ rig からの由来も考慮すべきかと思われる。「自証知」は唯識、密教、中国禪にそれぞれある。唯識に関して言えば、四つの直接知覚のうちの一つとされる。そしてロンチェンパは『最勝乗の宝蔵』第十八章で、それら唯識の四直接知覚よりも、ゾクチェンの「明知」(この場合は、心臓の「如来蔵」)がすぐれていると批判してい

る。密教に関しては、mahāyoga 乗「幻化網」の中心タントラ『サンワニンポ』(北京 No. 455)の2-2-6に「自証知」が見えている。中国禪に関しては、敦煌文書 VP. No. 709, 710 等に記されている。『法界の宝蔵』第四章で、「法界」あるいは「菩提心」が「空」でないことを示すのに、「自証界」rañ rig kloñ が用いられる。これは peiliot. No. 116 で、神会が「空辺」ston pañi mthah に墮すのを遮すために、「靈知」rig pa を説くのに類似している。しかし、この場合でも『法界の宝蔵』は rañ rig としていることに注意したい。それゆえ、ゾクチェンの「明知」は神会の「靈知」のみならず、もう少し広い範囲からの影響の可能性も考慮すべきかと思われる。

註 37. 鎌田茂雄『禪源諸詮集都序』(『禪の語録』vol 9), 筑摩書房, 昭和 46, p.138 に神会の教えに関して、次のように記されている。「迷う時、煩惱も亦た知なるも、〔知は〕煩惱なるには非ず、悟る時神変も亦た知なるも、知は神変なるには非ず」。しかし、このように神会の教義との類似性は認められるが、中国禪と融合した mahāyoga にも同一の教義が記されている。たとえば、敦煌文献 VP. No. 454 がそれである。その文献には、「涅槃の法」「輪廻の法」というゾクチェン用語までそのまま見える。ゾクチェン教義のこの点のみに限っては、中国禪と融合した密教 mahāyoga の方に近いと思われる。

もちろん、これは本文で後述する如く、VP. No. 454 の mahāyoga がゾクチェン的に解釈されて、ゾクチェンと融合した mahāyoga でないと仮定する場合のことである。中国禪と融合した mahāyoga からゾクチェンが成立したと仮定する場合のことである。もし、VP. No. 454 の mahāyog がゾクチェンと融合したものであれば、共通用語が見られるのは当然であり、神会の教義より以上にゾクチェンと類似しているのは当然であるからである。要は、ゾクチェン用語が mahāyoga の文献とゾクチェンの文献とで、時期的にいつれに早く見出されるかが決定されればよいのである。それによって、VP. No. 454 等の mahāyoga が、中国禪と融合した mahāyoga でありゾクチェンへの過渡期のものか、あるいは、中国禪及びゾクチェンと融合した mahāyoga であるのか決定できる。今後の研究に待つところである。ただ、ゾクチェンの用語は、それが元来中国禪と融合した mahāyoga に属したのか、あるいは初めからゾクチェンに属したのかは別として、前期弘通期には存在していたと言える。

註 38. しかしながら、禪宗というものに、この二側面は本来具わっている。多少の差はあっても、ダルマの禪以来共通である。ただ、積極的に「自ら解脱する」の側面を強調したのは、洪州である。

註 39. 密教 anuttarayoga 乗の「生起次第」「究竟次第」の教義に関しては、『密教歴史』p. 85, 『密經典史』p. 149, 津田真一「タントラとは何か」『豊山学報』第 24 号, 昭和 54, p. 55。

註 40. ニンマ派の mahāyoga の流派は「スル流」「ロン流」「ロンチェンバ流」の三つあると言われる(「リアンチ」p. 157)。「スル流」は中国禪と融合していない純粹のインド密教の「幻化網」。後二者が中国禪と(あるいはゾクチェンとも)融合したものであり、融合の程度は「ロンチェンバ流」の方が大きい。

註 41. 『サンワニンポ』(北京版, No. 455), 3-1-7 と 6-1-7 に記されている。とくに、後者が注目すべきである。

## VI

註 1. BA, p. 195 では、kha ḥthor ba を「不完全な」と訳している。

註 2. Th・Ch の khor phog dus med pañi kha gdam が、G・Th では bor phog dus med pañi kha gdam となっている。それに従うと、「途中で消失する時がないもの」となる。

註 3. Th・Ch の lta ba sgan dril bañi tshul du bkañ stsal ba が G・Th では lta ba dgon s dril bañi tshul du bkañ stsal ba となっている。それに従うと、「見解が御意に集まっている仕方であつて説くもの」となる。DTN, Ga, 4a, 3 と 5 では lta ba sgan dril

註 4. DTN, Ga, 4a, 3 と 5 に、サンギェイェン = Sañs rgyas ye çes が弟子のソ・イェン = ソンチュク So Ye çes dbañ phyug とユンテンギャツォ Yontan rgya mtho にこの教説を与えたと記されている。この DTN の記述を信ずれば、「教誡部」のこの法類は前期弘通期から存在していたことになる。ただし、この記述は「幻化網」の系統の中で記されている。

註 5. 以下の呼称については、Th・Ch と G・Th に差異がある。

< Th・Ch >

- { (a) snañ ba rtags lta bar ḥdod pa byar med pa
- { (b) sems rtogs lta bar dril ba kun nas sloñ ba

< G・Th >

- { (a) snañ brtags lta bar ḥdod pa byar med pa
- { (b) sems rtog lta bar dril ba

本文に示したものは、G・Th を基本として、Th・Ch によって補足したもので

- ある。
- 註 6. この法類は、二つの対応した表現によって、見られるままの現象世界をあるがまま「真理」として受け入れ、分別によって観念をもてあそぶなという観法を説くとも言える。
- 註 7. DTN, Ga, 4a, 4~5 に、サンギューイェシユが弟子のケン・ユンテンチョク Nan Yon tan mchog とユンテンギャツォにこの教説 (DTN では star ka gegs sel gyi tshul) を与えたと記されている。その記述を信ずれば、「教誡部」のこの法類は前期弘通期から存在していたことになる。上註 4 参照。
- 註 8. SMG, 234a, 6 以下にゾクチェンの「温暖」について記されているのが参考になる。
- 註 9. 実践としては、「識」*ces pa* を向けて対象を取ることを消すことであり、「心」に関するものであるが、除かれる障碍は「顕われ」に関するものである。
- 註 10. DTN, Ga, 4a, 5 に、サンギューイェシユが弟子のユンテンギャツォにこの教法を与えたと記されている。それに従うと、「教誡部」のこの法類は前期弘通期から存在していたことになる。上註 4, 7 参照。
- 註 11. 分類のための分類とも考えられ、見・修・行と三段にして、他派からの「道」なしとする批判に抗したとも考えられる。その分類の理由はともかく、SMG のゾクチェンの章でも見・修・行と分けて説いてある。(「見」158a, 3~204a, 2, 「修」204a, 2~224b, 2, 「行」224b, 2~234a, 6)。
- 註 12. Th・Ch の *gnad la phab pa* が、G・Th では *gnad la phebs pa* (要訣に到る) になっている。
- 註 13. G・Th の *bskor bas* が、Th・Ch では *bsgor bas* になっている。
- 註 14. *no sprod* のもともとの意味は、面と面を合わせることである。そこから面授・伝授の意味が生じる。『藏文辞』p.209 には、会遇、使認識、確認などの意味、『Jäschke 辞』p.337 には *explain* の意味が記されている。
- 註 15. G・Th, 181b, 5~182a, 3 に、これら「四法類」(外・内・秘密・無上秘密) を「教誡部」の内容分類にまとめてある。その記述と「心部」「界部」の説明の末尾に記された内容分類の記述 (V, 註 16, 21 参照) を比較考察してみると、一般に「教誡部」の教法と言え、ば、「四法類」を指すと考えてよいと思われる。
- また、Th・Ch, 82a, 2~84a, 1 にはゾクチェン「三部」の内容分類をまとめて記してある。
- 註 16. G・Th のこの部分 158a~182a は、第九章「すべての法を完全に決擇する章」

- (*chos thams cad rdzogs par gtan la phab paḥi le ḥu*) に含まれる。
- 註 17. Kun byed (北京 No.451), 94-1-5~95-1-1, 95-3-1, 104-5-3, に記されている。それらのうち、94-1-6 では *rañ bshin-chos sku*, *no bo-loṅs sku* とあり、『七つの宝蔵』と逆になっている。
- 註 18. *no bo* と *rañ bshin* の差異は、現在のところ明確にされていない (V. 註 8 参照)。既述した如く、ゾクチェンでは、*no bo*, *rañ bshin*, *thugs rje* という教義以外でも、考察対象を定義する場合に *no bo*, *rañ bshin*, *mtsham ṅid* が用いられる。この用語も初期からあったらしく、『大蔵経』に所収されている Dpal dbyaṅs の論書『心燈』Thugs kyi sgron ma (北京 No.5918) の 232-1-2 にすでに見出される。これによって *no bo*, *rañ bshin* はニマ派のゾクチェンで初期からあり、使い分けられていたことが分る。
- さて、*rañ bshin lhun grub* を「法界」における所取・能取と離れた諸法の成就、あるいは諸法の「法性」としての成就とする筆者の試解は、存在論的に、禅定体験的に解釈したものである。上述した (V. 註 29) 如く、「法界」における成就とは、本来 *ston* と *gsal* を超えたものである。それを *rañ grub* の面を積極的に表現したのに過ぎないものが、*rañ bshin lhun grub* である。禅定体験的には本来 *no bo ston pa = rañ bshin lhun grub* であって、真理の両面に過ぎないのである。その点は、神会の「本用」(=「靈知」) に類似している。
- 禅定体験的には、それぞれ「止」と「観」の意味するところにも相当する (cf. 『心把握』p.391。V. 註 24)。
- それが次第に、三仏身と結びつけられ、*no do* → *rañ bshin* → *thugs rje* という「心」における「心性」の現象への展開の順序をもつようになったのである。もともと、二仏身説で十分な「如来蔵思想」の三仏身説への移行ともとらえられる。「如来蔵思想」には *loṅs sku = rañ bshin* は本来不要なのである (『中観唯識』所収論文「仏身論をめぐる」参照)。
- 以上によって、ゾクチェンのこの場合の *rañ bshin* には、*lhun grub* と *gsal ba* という言葉が使われていることになる。前者の *lhun grub* は「法界」における諸法が *ran grub* という面である。後者の *gsal ba* には、現象展開における中間の段階という面と、「止」と「観」のうちの「観」という面が含まれている。「真理」の三側面のうちの *rañ bshin* には合わせてこれら三面が含まれていることになる。
- Guenther 氏が *no bo*, *rañ bshin*, *thugs rje* を真理の現象への展開の三

段階として解釈しているのは、これらの概念の一面をとらえていると言える。彼の説は KBU, vol 1, p.244 参照。他に、この *no bo, ran bshin* の差異を研究している学者に、A. Bharati がいる。彼の説は、*The Tāntric Tradition*, Rider & Company, London, 1965 の pp. 51~55 参照。

- 註 19. Th·Ch, 338b, 4~342b, 2 参照。
- 註 20. *ka ti gser gyi rtsa chen* の *ka ti* とは、*ka ci* (綿布) のことであろう。Th·Ch では、*hod rtsa ka ti gser* (黄金の綿布の光脈管) とも呼んでいる。
- 註 21. *çel spug can gyi rtsa* の *spug* は、*sbug* (管) か *bug* (管) が正しい形と思われる。*spug bu cuñ* なら「猫眼石」の意味になる。
- 註 22. *gdañs* は *mdañs* (光彩) とほぼ同義である。KBU, vol 1, p.300, 註 9 によると、ロンチェンパは *Zab mo yan tig*, part Wam, p.159 で *gdañs* と *mdañs* を区別しているという。それによると、*gdañs* は the outward radiance であり radiance である。*mdañs* は the inner glow であり a steady, intense lucency without effulgence である。
- 註 23. 「新密呪」派の五風は、ニンマ派で説く「行為の風」に属すると思われる。「行為の風」の用語はサキヤ派にもある。『西藏宗義1』p.144, *Lam hbras pod ser* 6b, 6。ニンマ派から影響を受けたものかどうかは、定かでない。
- 註 24. Th·Ch 第十四章と Tsh·D 第四章に記された教義以外に、Tsh·D 第一章に人間の「如来蔵」から現象展開を説明してある。「自然成就なる根基の顕われの八門」*gshi snañ lhun grub gyi sgo brgyad* に関する教義である。唯識教義を借りないで、現象展開を説明する。「心・界部」以来の「自らのぼる」「自ら解脱する」の両側面をもつ「法性の一元論」を人間の心臓の「如来蔵」にとり入れることによって、密教化したものである。
- 註 25. Çrīsimha 著の論書中、*hKhor ba rtsad nas gcod pa gtan tshigs hKhor lohi man ñag* (北京 No.5031) の 110-1-5, 111-2-1。 *hKhor la rtsad nas gcod pa gser gyi thigs pañi man ñag* (北京 No.5034) の 112-3-3。これらにおいては、「クンシー」は「真」でありつつ、「妄」の源ともなっている。*hKhor ba rtsad nas gcod par byed pa sñan rgyud yi ge med pañi man ñag* (北京, No.5035) 112-5-4 では「クンシー」が根本から切られることと記し、「クンシー」は「真」でありながら「妄」であるかの如き表現がなされている。mahāyga 乗の論書 *sGyu hphrul dra bañi lam*

*bçad pa* (北京 No.4740) の 139-1-6 でも「クンシー」は「真」である。

また、ゾクチェンでは「クンシー」を四つに分類する。それらは、

1. *ye don gyi kun gshi*
2. *sbyor ba don gyi kun gshi*
3. *bag chags sna tshogs pañi kun gshi*
4. *bag chags lus kyi kun gshi*

である。敦煌文献 VP.No.708 に *gshi don gyi kun gshi* と *sbyor ba don gyi kun gshi* が記されている。この論書は転依を説き、ゾクチェン教義とは異なるものの、用語の上からは類似するものを認め得る。これによって、ゾクチェンの唯識教義の影響は、かなり早い時期からあったと推定される。しかし、『七つの宝蔵』で見ると、整理された形で示されるのは、「教誡部」においてである。

- 註 26. これは如来蔵と阿頼耶識との合一という点にのみ限ってである。それによって『起信論』のインド撰述を主張するものではない。
- 註 27. 多田厚隆・大久保良順・田村芳郎・浅井円道『天台本覚論』(日本思想大系 9), 岩波書店, 東京, 1973, p.442 参照。
- 註 28. 「報身の化身」の「五識」と「化身の化身」の「五煩惱」は「妄」に属するものである。それが「真」の方に入れられている理由を、Th·Ch は「自己の時 *rañ dus* には『明知の光彩』があるために、『化身』とされるが、(以下略)」と記す(309a, 5~6)。このことを「心・界部」的に言うと、「自らのぼる」の側面では「不浄の化成」は根基なく迷乱とされるが、「自ら解脱する」の側面では「真理」そのものとなるのである。
- 註 29. Th·Ch には異文と共に二通りの説明がしてある(306b, 1~307b, 1)。
- 註 30. ゾクチェン特有の語を説明しておく、*化成*とは「功能」*nus pa* 「力」*rtsal* 「光」*zer* の如きものであり、「業生の光彩」*las byuñ bañi gdañs* の如きである。たとえば、種子からの芽の如きものであり、顔の様相からその影像が鏡にのぼる如きものである。「飾り」とは、それから熟してのぼるもの(*de las smin sor çar ba*)である類 *hbru* の如きものである。種子から花と網 *rgya* が生じること(*hbur pa*)に喩えられる(Th·Ch, 314b, 3~4)。
- 註 31. 『法界の宝蔵』第四章と第十二章に、「化成」に関する説明がある。第十二章では、やはり、まず、「化成」があり、その「本性」*rañ no* を悟るか悟らないかによって、正覚するか、「無明」から「クンシー」、「クンシー」から境と共に八識がのぼるかになる。第四章では、「法界」を悟るか悟らないかによって、仏か無明が顕われ

る。これは一般の「如来蔵思想」と同じである。先に見た『宗義の宝蔵』第八章でも、いわゆる「不覚」を契機として現象が展開しており、『起信論』と同一である（cf, VI (1-2)）。あるいは、ゾクチェンでも、現象展開の契機は「不覚」であり、『起信論』と同一なのかもしれない。

註 32. 上述の「迷乱の牛を追う仕方について説くもの」のうち「迷乱が根から切れることによって、輪廻・涅槃がくつがえされる仕方」では、「無明」が自ら解脱していると悟られる。

註 33. *bye brag ḥdzin pa* とは、主・客に分けて取ることとも考えられるが、別相を取ることと思われる。なぜなら、第六識・第七識ともに無分別 *rtog med*、有分別 *rtog bcas* があるからである。

註 34. この他、心臓の「如来蔵」を指す語として、G・Th, 186 a, 4 には『サンワ・ニンポ』から引用して「善逝心」*bde gcegs sñin po* の語を記している。また、Th・Ch, 338 b には「滴」を三種に分類してある。即ち、

- (一) 「根基をとる滴」*gshi ḥdzin paḥi thig le*
- (二) 「頭われ、道の滴」*snañ ba lam gyi thig le*
- (三) 「果、自ら熟する滴」*ḥbras bu rañ smin paḥi thig le*

このうち(一)の「滴」は、心臓の「如来蔵」のことであり、「自然成就なる五光の滴」*ḥod lña lhun grub kyī thig le* と呼ばれる。『グフヤサマージャ』*gSañ ḥdus* の「不毀の滴」*mi çigs thig le*、『サンバラ』*bDe mchog* の「不変の滴」と同一のものである。詳しくは、Th・Ch, 338 b, 4~342 b, 2 参照。

註 35. 『チベ密教』p.130 では、「呼吸」*prāṇa, srog* と訳されている。「五風」のうちの一つである。

註 36. *gdañs* は Th・Ch では *mdañs* となっている。*gdañs* が正しい形と思われる。上註 22 参照。

註 37. 「トゥゲル」の実践において、口から「風」を静かに出して、「明知の光彩」と「風」を分離させることが説かれることがある。この両者が分離すれば、輪廻が起らないからである（Th・Ch, 513 a, 3~513 b, 1）。

註 38. Th・Ch, 320 b, 4~5 に、「智」の「ゴウ」を *so so rañ gi rig pa ye nas mkhyen char gnas pa*（それぞれの自己の明知、本来から御知の部分として存するもの）と記す。「本覚」の用語と同一と思われる。「智」のゾクチェンの解釈である。


註 39. 『中観唯識』p.33 参照。

註 40. この心臓の「明知」は「普賢、盒の御意」*kun du bzañ po gaḥu kha sbyor gyi dgonṣ pa* と呼ばれる（Th・Ch, 330 b, 1）。

註 41. 心臓の「如来蔵」の別名として、Th・Ch, 326 b, 6 には *gshi bde bar gcegs paḥi sñin po, rañ bshin lhun grub kyī sañs rgyas gnas lugs, don gyi ye çes chen po* が記されている。上註 34, 40 参照。

註 42. 「明知」の「光彩」には、「光」*ḥod* 「光線」*zer* 「滴」 「小滴」*thig phran* などがある。

註 43. 孔雀の尾翎眼に似ている。

註 44. 母音  (0) の記号に似ている。

註 45. 「ドゥンカン」とは、文字通りには「螺の家」である。脳が渦巻いている様子を形容したものと思われる。

註 46. 「灯明」と両眼及び「清浄孔」の関係については、Tsh・D, 76 a, 5~76 b, 6 参照。また諸「無量宮」のつながり方についても、本論文では Th・Ch, 332 b, 2~333 a, 1 によって示したが、Tsh・D, 74 b, 6~75 a, 4 も参照すること。

註 47. Tsh・D, 68 a, 3~68 b, 2 には「五脈管」が記されている。それらを「四脈管」にまとめる場合でも、Th・Ch や G・Th とは様相が異なる。それらに住する「滴」の記述にも差異がある。

註 48. NGB. Vol 4, *Theg pa kun spyi phud kloñ chen rab ḥbyams kyī rgyud*（「界部」のタントラとされる）Na, 89 a, 1 に、三種の「空」を含めた五種の「空」が記されてある。

註 49. GÇMの輪廻と涅槃の概念が、『七つの宝蔵』と異なる。『七つの宝蔵』では、二つとも「真理」の「化成」とされる。「心性」の「化成」とされる。言わば、「心性」（あるいは「心」）の「頭われ」に清浄・不浄の二種設定し、前者を涅槃の法、後者を輪廻の法とするのである。それらの平等は共に「心性」の「化成」である点から言われる（cf, Th・Ch, 第3の「セムチョク・パ」。G・Th, 第7の「セムチョク・パ」。『法界の宝蔵』第6章）。この項と余り関係ないが、ゾクチェンでも仏教一般のような輪廻・涅槃の用語例がある。例えば、Th・Ch の第3の「究極界」の記述。そこでの輪廻・涅槃無差別はVの註 32 の第3の「のぼる」の側面で言われる。

註 50. これら以外に、ゾクチェン教法一般の「基・道・果」が記されている。GÇM 訳 <2・2・3・2> 参照。

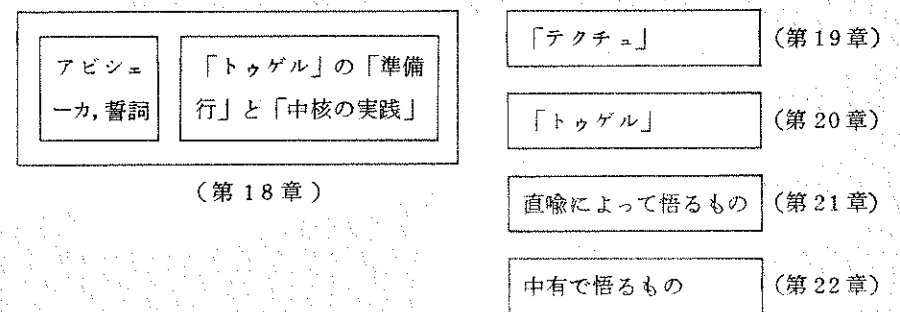
註 51. 上註 32 参照。



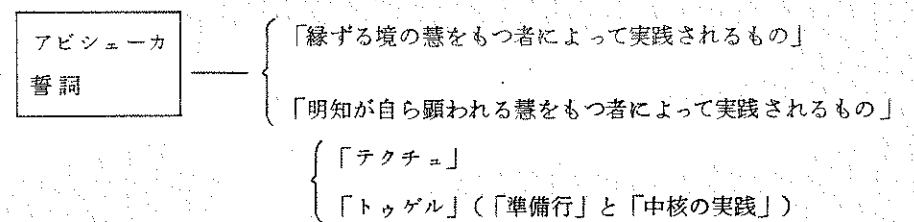
- 註 52. Th・Ch, 431 a, 4~6. Tsh・D, 150 b, 5~151 a, 4 参照。
- 註 53. Th・Ch, 427 a, 5~428 a, 2. Tsh・D, 209 a, 4~209 b, 3。
- 註 54. Th・Ch, 493 b, 6~495 a, 1. Tsh・D, 135 a, 3~136 a, 2。
- 註 55. Th・Ch, 495 a, 3~496 a, 2. Tsh・D, 136 a, 3~137 a, 1。
- 註 56. Th・Ch, 497 a, 2~499 a, 4. Tsh・D, 137 a, 2~140 a, 6。
- 註 57. Th・Ch, 503 a, 5~507 b, 4. Tsh・D, 142 b, 2~146 b, 1。
- 註 58. cer grol の cer は, gcer bu (裸の, 隠されないあるがまま) のこととも考えられるが, cer re (凝視) のことと考えた。
- 註 59. Th・Ch, 510 b, 4~512 b, 2. Tsh・D, 148 a, 5~150 b, 4。
- 註 60. 資料によっては「灯明」の実践を「トゥゲル」に入れているものもある。例えば, Th・Ch では第十八章に「準備行と中核の実践を修するもの」を記し, 第二十章に「トゥゲル」を記しているが, その第二十章には「滴の灯明」の実践も「界の灯明」の実践も組み入れている。
- 註 61. 「水の灯明」を人体形成の点から説明し, 「膺の結節」から眼に到る経路が説かれることは, Th・Ch, 282 a, 4~6, 290 a, 6~290 b, 2, 332 b, 2~333 a, 1 および Tsh・D, 74 b, 6~75 a, 4 参照。上註 46 参照。  
また, 「水の灯明」そのものについては, Th・Ch, 288 a, 3~291 b, 1, Tsh・D, 77 a, 1~79 b, 1 参照。
- 註 62. Th・Ch, 291 b, 1~296 a, 1. Tsh・D, 79 b, 1~83 a, 1。
- 註 63. Th・Ch, 295 a, 4~295 b, 5. 527 b, 2~528 b, 1. Tsh・D, 82 b, 5~83 a, 1. 91 a, 2~92 b, 4. これらのうち, 実践方法が三種とも記されているのは, 最後の箇所であり, それは Tsh・D 第七章「境(yul)の要点を教える章」に含まれる。また, その章は Th・Ch の第二十章「トゥゲルの章」に対応する章である。
- 註 64. Th・Ch, 294 b, 2~295 a, 4. Tsh・D, 81 b, 3~82 b, 4。
- 註 65. Th・Ch, 296 a, 1~300 a, 6. Tsh・D, 83 a, 1~86 b, 1。
- 註 66. Th・Ch, 297 b, 1~298 a, 1. 515 a, 5~515 b, 2. Tsh・D, 95 b, 6~96 b, 1. 162 b, 4~163 a, 1。
- 註 67. Th・Ch, 300 a, 6~303 b, 6. Tsh・D, 86 b, 1~90 a, 2。
- 註 68. Th・Ch, 446 b, 6~447 a, 3. 448 b, 4~452 a, 1. Tsh・D, 165 b, 2~5。
- 註 69. Th・Ch, 447 a, 6~447 b, 4. Tsh・D, 158 a, 1~160 a, 6。

- 註 70. Th・Ch, 452 a, 1~456 a, 2. Tsh・D, 165 b, 5~167 b, 4. 本当を言えば, 第二の顕現は三種である。即ち, 「色の顕現」と「形の顕現」の間に, 須臾に「境地の増大」ñams kyi hphel が顕われるのである。
- 註 71. Th・Ch, 456 a, 2~459 a, 3. Tsh・D, 167 b, 4~170 b, 6。
- 註 72. Th・Ch, 459 a, 3~463 b, 5. Tsh・D, 170 b, 6~174 a, 6。
- 註 73. これらは乗り物である「風」rlun'によって動く。
- 註 74. アビシユーカーと誓詞は, 「トゥゲル」そのものの実践には入れられない。本当のことを言えば, Th・Ch, Tsh・D ともにアビシユーカーと誓詞を「テクチュ」と「トゥゲル」の実践の前に記しており, 両方の実践に共通なものとしている如くに考えられる。即ち,

< Th・Ch >



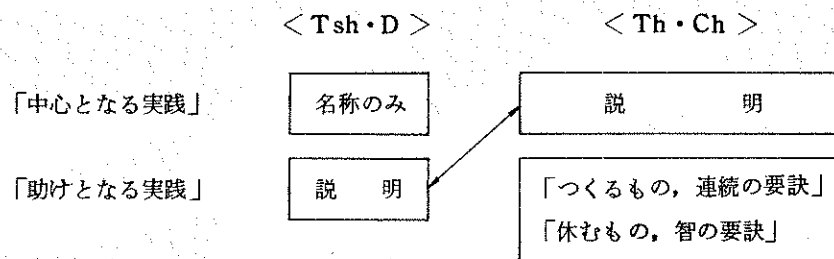
< Tsh・D の第八章 >



しかし, 筆者は「テクチュ」を中国禅宗の実践と考えたので, アビシユーカーと誓詞を「トゥゲル」の実践のみに付加させた。

- 註 75. Th・Ch, 429 b, 1~430 a, 4. Tsh・D, 104 a, 2~105 b, 5. G・Th, 188 b, 4~189 b, 3。
- 註 76. Th・Ch, 430 a, 4~431 a, 3. Tsh・D, 105 b, 5~111 a, 2。
- 註 77. Th・Ch, 432 b, 3~433 b, 6. Tsh・D, 151 b, 5~153 a, 5。
- 註 78. Th・Ch, 433 b, 6~435 b, 3. Tsh・D, 153 a, 5~154 b, 2。

- 註 79. Th・Ch, 435 b, 3~436 a, 2. Tsh・D, 154 b, 2~155 a, 2。
- 註 80. この「実践によって要訣に刺入されること」は, Tsh・D, 157 b, 6~165 a, 6  
にのみ記されている。「金剛鎖」及び「御眼」の種類に関する説明もされているが、  
実践に関しては、本文中に示した三種にとどまる。それらのうち(β)「四つの方法」と  
同名のものが, Th・Ch では「テクチュ」に含まれる(Th・Ch, 488 a, 1~489  
a, 2)。また, (γ)「四つの yoga」も, Th・Ch 第十四章 350 a, 3~350 b, 4  
に記されているが、内容に差異の部分がある。また, (γ)は「界・明知」が顕われたと  
きの観法であり、それらを顕わすことには直接関係しない。
- 註 81. Th・Ch, 438 b, 6~442 a, 2. Tsh・D, 155 a, 4~155 b, 4。Tsh・Dは  
Rañ byuñ bstan paḥi rgyud と Thal ḥgyur を引用して、三仏身の坐法の  
名称を記すのみ。
- 註 82. Th・Ch, 442 a, 2~442 b, 3. Tsh・D, 155 a, 4~155 b, 4。Tsh・Dは  
Rañ byuñ bstan paḥi rgyud と Thal ḥgyur を引用して名称を記すのみ。
- 註 83. Th・Ch, 442 b, 3~6。Tsh・D, 155 a, 4~155 b, 4。Tsh・Dは Rañ  
byuñ bstan paḥi rgyud と Thal ḥgyur を引用するのみで、詳しい説明はな  
い。
- 註 84. Th・Ch, 443 b, 6~444 b, 5。Tsh・D, 156 a, 1~3。Tsh・D では三仏  
身の看法の名称も記されず、ただ、三種の看法から動かないことと記されるのみ。
- 註 85. Th・Ch, 444 b, 5~445 b, 2。Tsh・D, 156 a, 3~156 b, 2。
- 註 86. Th・Ch, 445 b, 2~446 b, 1。Tsh・D, 156 b, 2~6。
- 註 87. 少なくとも, Th・Ch の「界の灯明」の記述に見られるものとは、同一である。
- 註 88. Th・Ch, 464 a, 5~466 a, 5。Tsh・D, 174 b, 5~176 a, 1。Tsh・D  
では「中心となる実践」において三仏身の坐法の名称のみ記し、「助けとなる教誡」  
でそれらの坐法の説明をしているが、それは Th・Ch の「中心となる実践」におけ  
る三坐法の説明と一致する。つまり、三坐法に関して、



という関係がある。Tsh・D では「中心となる実践」と「助けとなる実践」の三坐  
法が全く同一である。本文中で「異なる」と記したのは、Th・Ch の記述において  
である。

また、Th・Ch でも三坐法の方法は、「中心となる実践」「助けとなる教誡」に  
ほとんど差異はない。ただ、目的(あるいは、はたらき)として、「助けとなる教誡」  
は二種の要訣を説く。「つくるもの、連続の要訣」ḥchaḥ ba rgyun gyi gnad  
と「休むもの、智の要訣」nal so ye çes kyi gnadである。前者はつくること、  
引き出すことが主であり、後者は戻すこと(とくに「行為の風」を)、妨ぐことが主  
であると思われる。

- 註 89. Th・Ch, 466 a, 5~466 b, 5。Tsh・D, 176 a, 1~6。「助けとなる教誡」  
の三仏身の看法の説明は、Th・Ch と Tsh・D に差異はない。
- 註 90. Th・Ch, 466 b, 5~6。Tsh・D, 176 a, 6~176 b, 2。
- 註 91. Th・Ch, 466 b, 6~467 a, 2。Tsh・D, 176 b, 2~6。
- 註 92. Th・Ch, 467 a, 2~4。Tsh・D, 176 b, 6~177 a, 2。
- 註 93. Th・Ch, 467 a, 4~469 b, 4。Tsh・D, 177 a, 2~179 a, 2。
- 註 94. Th・Ch, 467 a, 5~467 b, 3。Tsh・D, 177 a, 3~177 b, 1。
- 註 95. Th・Ch, 467 b, 3~469 a, 6。Tsh・D, 177 b, 1~178 b, 5。「とどめる  
こと」がなされる時、「徴相」がのぼるが、それと「アビシェーカ」「四顕現」の  
関係を図示すると、

「四顕現」 「徴相」	「身」の 四つの「徴相」	「語」の 四つの「徴相」	「心」の 四つの「徴相」	
第一の「顕現」 が見えるとき	1	2	3	第一のアビ シェーカ
第二の「顕現」 が見えるとき	4	5	6	第二のアビ シェーカ
第三の「顕現」 が見えるとき	7	8	9	第三のアビ シェーカ
第四の「顕現」 が見えるとき	10	11	12	第四のアビ シェーカ
	アビシェーカの 「基」(gshi)	アビシェーカの 「道」(lam)	アビシェーカの 「果」(ḥbras bu)	

上図の如く、第一から第四の「顕現」それぞれに身・語・心の「徴相」が記されて

いるから、全部で十二の「徴相」になる。縦に見ると、身・語・心それぞれの四つの「徴相」になる。これらの「徴相」はすべて、喩えによって示されている。Th・Chは縦に四つづつ、Tsh・Dは横に三つづつ「徴相」を記してある。アビシェーカを行なうことと「四顕現」を見ることと三種の「とどめること」を行なうという三要素がそろって、これらの「徴相」が生じるのである。これによって「とどめること」の実践の重要なことがわかる。

その説明を見ると、一つの「徴相」を説くのに、「脈管」と「風」からの説明、様様な側面の真理 don からの説明、四種のアビシェーカのそれぞれの「智」からの説明という三点から説明しているように思われる。また、「教誡部」におけるアビシェーカの呼称の理由が、ここで明らかになる。アビシェーカによって生じる「智」によって、アビシェーカの名が付けられたのである。「教誡部」になって、「新密呪」派の影響を受けて、アビシェーカを取り入れたが、それを見事に自己の実践体系の中に融合している。

- 註 96. Th・Ch, 469 a, 6~469 b, 4. Tsh・D, 178 b, 5~179 a, 2。  
 註 97. Th・Ch, 469 b, 4~6. Tsh・D, 179 a, 2~4。  
 註 98. Th・Ch, 469 b, 6~470 a, 3. Tsh・D, 180 a, 5~180 b, 6 (次の九章に含まれる)。  
 註 99. Th・Ch, 470 a, 3~471 b, 6. Tsh・D, 179 a, 4~180 a, 4。  
 註 100. Th・Ch, 456 b, 6~459 a, 3. Tsh・D, 168 b, 3~170 b, 6. Th・Chには三種、Tsh・Dには五種記されている。それらの対応関係は次の如くなる。

< Th・Ch >	←→	< Tsh・D >
1. 「外、顕現の定量」 phyi snañ bañi tshad	←→	1. 定量に到ることの自性を総説 tshad phebs kyi rañ bshin spyir bstan
2. 「内、身体の定量」 nañ lus kyi tshad	←→	2. 身体が定量に到ること lus tshad phebs
3. 「秘密、明知の定量」 gsañ ba rig pañi tshad	←→	3. 「心」が定量に到ること sems tshad phebs
		4. 「つながり」が切れることの定量に到る ñbrel pa chod pañi tshad phebs
		5. 「尽きる果、大種が自ら去るという定

量」に到る zad pañi ñbras  
 bu ñbyuñ ba rañ dens pañi  
 tshad phebs

- 註 101. Th・Ch, 460 a, 1~3. Tsh・D, 172 b, 5~173 a, 1。  
 註 102. Th・Ch, 461 b, 6~463 B, 2. Tsh・D, 173 a, 4~174 a, 2. G・Th, 193 b, 6~194 b, 1。  
 註 103. 残りの三脈管は「如来蔵」の「光彩」の住する所という役割が主であると思われる。  
 註 104. Th・Ch, 525 b, 1~526 b, 5。  
 註 105. Th・Ch, 428 b, 6~429 a, 1。  
 註 106. これは最も中国禅的なものである。『七つの宝蔵』では、「テクチュ」全体がそれになる。しかし、『一切宗義』の如くに「漸悟者の明知を悟る段階」と「頓悟者の明知を自ら悟る段階」に分けるならば、「テクチュ」には後者に対応するものが無いように思われる。  
 註 107. 「新密呪」派の anuttarayoga 乗「究竟次第」では、左右脈管の「風」「心」「滴」を中央脈管に入れて「大楽」を得る。ニンマ派の「トゥゲル」では「風」を利用しながらも、底流にあるものは「真理」を見て体得するという禅宗的な方法である。「風」の瑜伽についても、「新密呪」派の「三脈管」という体系を導入しながら、実際にはそれらを使わず、ただ「風」を静めるのみという原始仏教~yoga 乗の方法を用いる。anuttarayoga 乗よりも後退した方法である。これもゾクチュン成立期における中国禅の影響のためと思われる。

## VII

- 註 1. Vの註4, VIの註4, 7, 10 参照。  
 註 2. 「無上秘密の法類」の成立時期について補足する。DTN, Ga, 42 b, 2~3にジョバル Jo ñbar (1196~1231)が父から「無上秘密の法類」を教えられたと記す。この記述に従えば、彼の父ニブム Ñi ñbum (1158~1213)の時には成立していたことになる。このニブムの父シャントドルジ = Shañ bkra çisrdo rje (1097~1167)までは、「教えの相承」が続いて「直接系」である。彼以前は「埋蔵系」である。それゆえ、DTNの記述に従えば、「無上秘密の法類」の成立時期は、シャントドルジまで遡ることが出来ると思われる。しかし、このようにシャントドルジの時代に「無上秘密の法類」の原形が成立していたと考えることが可能であっても、『七つの宝蔵』に見られるような精緻な教法に大成したのは、ロンチ

エンパであると思われる。

次に、『ニンマ・ギュブム』(NGB) Vol 4, Theg pa kun gyi spyi phud klon chen rab hbyams kyi rgyud (あるいは, lTa ba klon yañs chen poñi rgyud, Na, 87 b, 4~208 b, 1) に見える記述によって、「無上秘密の法類」の成立時期について考察する。このタントラは「界部」に属するとされるが、「四灯明」(Na, 134 a, 6~137 b, 2, 第十五章)が記されている。これに従えば、「無上秘密の法類」が「界部」のときにすでにあったことになり、後期弘通時成立説も疑わしくなる。前期弘通時にも不完全ながらある程度は精神生理学的実践がチベットにもたらされていたと思われ、それを利用した「トゥゲル」の実践がすでに前期弘通時に成立していたと考えることも可能である。しかし、現在の筆者の研究範囲では、「トゥゲル」を含む「無上秘密の法類」は「新密呪」派の影響を受けて創られたものと推定しておく。それゆえ、上述の「界部」のタントラは、「教誡部」成立後、後期弘通時に「界部」のものとして偽撰されたものと推定する。それは rDo rje gliñ pañi gter ma と記されていることによっても、裏づけられると思われる。しかし、以上のことは、あくまで推定である。

## 第 二 部

### 『一切宗義』ニンマ派の章訳註

凡 例

\* < >内の数字及び各節の表題は訳者の付したものである。

\*\* が行は〔り a〕行の音を表わす。

ニソマ派の宗義

〔序〕

【7a】二番目<sup>(1)</sup>としてニソマ派の形成の様子を別説するにあたり、

<1>〔前期の〕形成過程と、

<2>宗義の主張の仕方と、

<3>それに関して少し吟味することと、

<4>後期の形成〔過程〕を示すこととの四〔章を設けよう〕。

<1> ニソマ派の宗義の前期の形成過程

<1・1> 初期の歴史

<1・1・1> ソンツェンカ<sup>o</sup>ンボ王時代

〔それらの〕うち、最初のもは、はじめにソンツェンカ<sup>o</sup>ンボ Sroñ btsan sgam po<sup>(1)</sup>によって観音が生起・究竟次第などの教誡 (bskyed rdzogs sogs kyi gdams pa) を大いにお説きになり、実践も大いになされて、全チベットが聖観音 (hphags pa spyan ras. gzugs)<sup>(2)</sup>に祈禱して、〔祈禱の〕六文字を誦することが、これを始めとして、これから広がった。そのときに、インドからアジャリのクサラ Kusara とバラモンのシャムカラ Çam ka ra、ネパールのアジャリのシーラマンジュ Çi la mañju<sup>(3)</sup>などを招いて、タントラの部分 (cha lag) をたくさん翻訳したと、『カクルマ』Ka khol ma に記されている。

<1・1・2> チソンドツェン王時代

その後、五代目チソンドツェン王 rgyal po Khri sroñ lde btsan<sup>(4)</sup>が大バンディタのシャーンタラクシタ Çāntarakṣita<sup>(5)</sup>を招いた。〔その〕ケンボ (学者) は十善と十八界に依る法をお説きになって、八支の法規 (yan lag brgyad pañi khrims)<sup>(8)</sup>を伝えたことよって、強力な土地神 (yul lha mtho po che)<sup>(9)</sup>たちが喜ばないで、ニエンチェンタンラ神 gñan chen than lha<sup>(10)</sup>がマルポ山 dMar po ri に雷電を投げた〔こと〕、ヤルハジャンボ Yar lha çam po<sup>(11)</sup>がヤルルン Yar klun<sup>(12)</sup>〔の〕パンタン Phan than の宮殿を水で

流し去った〔こと〕、【7b】十二の地神 (bstan ma)<sup>(13)</sup> が人間の疫病、家畜の疫病をたくさんもたらしたことに對して、ケンボ (=ジャンタラクシタ) は、まずチベットの荒々しい鬼神たちを調伏する必要があると思ったので、アジャリのパドマジュンネ Padma hbyuñ gnas<sup>(14)</sup> を招くように仰せになったのに応えて、王が使いを送ったところ、アジャリが〔それを〕神通力でお知りになって、インドからこちらにおいでになるのと、途中で会って、チベットに招いた。

よこしまなすべての鬼神を呪縛して、虚空に金剛の歩み (rdo rjeñi h̄gros) で〔のぼり〕、地鎮祭 (sa h̄dul) をなさって、サムイェの仏殿 Zan yañ mi h̄gyur lhun gyis grub pañi gtsug lag khañ<sup>(15)</sup> をお建てになった。

王と家臣〔との〕二十五人などたくさんの適器の者 (snod ldan) たちを三種の瑜伽によって、〔業果が〕成熟して解脱するよう (smin grol) に導いたので、たくさんの成就者が生じた。〔彼らのうち〕ナムケーニンポ Nam mkhañi sñiñ po<sup>(17)</sup> は太陽の光線をのぼった。サンギエイェシエ Sañs rgyas ye çes<sup>(18)</sup> は岩に櫛 (phur bu) を打ちこんだ。ギェルワチョクイェン rGyal ba mchog dbyaṅs<sup>(19)</sup> は馬の声を三度出した。カルチュンツォギェル mKhar chen mtsho rgyal<sup>(20)</sup> は屍を生き返らせた。ベルギエイェシエ dPal gyi ye çes<sup>(22)</sup> は鬼女 (ma mo) を現実に婢とした。ベルギセンゲ dPal gyi señ ge<sup>(23)</sup> は鬼神 (lha srin) を僕として使った。ヴァイローチャナ Vairocana<sup>(24)</sup> は智眼を得た。カーダクギェルポ mNañ bdag rgyal po<sup>(25)</sup> は不動世間〔マンドラ〕 (h̄jig rten mi gyo) を成就した。ユダニンポ gYu sgra sñiñ po<sup>(26)</sup> は悟りの最勝のものを得た。ジュニャーナクマーラ Jñāna ku māra<sup>(27)</sup> は神変を示した。ドルジェドゥジヨム rDo rje bdud h̄joms<sup>(28)</sup> は風の如くに妨げられることがなかった。イェシエイェン Ye çes dbyaṅs<sup>(29)</sup> は鳥の住む処 (mkhañ spyod gnas) に【8a】お行きになった。ソクポハーベル Sog po lha dpal<sup>(30)</sup> は猛獣を首を擲んでとらえた。ナナムイェシエ sNa nam ye çes<sup>(31)</sup> は虚空に鳥の如くに浮んだ。ベルギワンチュク dPal gyi dbañ phyug<sup>(32)</sup> は金剛杵 (phur pa) を振りあげるだけで〔敵を〕殺した。デマツェマン lDe ma rtse mañ<sup>(33)</sup> は不忘の諸々のダラニ (gzun̄s) を得た。カワベルツェク Ka ba dpal brtsegs<sup>(34)</sup> は他人の心を知った。シェウベルセン Çud bu dpal señ<sup>(35)</sup> は河を逆流させた。ギェルウエロトウ rGyal bañi blo gros<sup>(36)</sup> は屍を起して黄金に変えた。キェウチュエン・ロ〔ツァー〕 Khye hu chuñ lo〔tsā〕<sup>(37)</sup> は虚空の鳥たちをとらえた。デンパナムカー Dran pa nam mkhañ<sup>(38)</sup> は鼻先〔をとらえて〕ヤクを引いた。オデンワンチュク Ho bran dbañ phyug<sup>(39)</sup> は水に魚の如く潜った。マトクリンチュエン rMa thog rin chen<sup>(40)</sup> は大きな岩を食物として食べた。ベルギドルジエ dPal gyi rdo rje<sup>(41)</sup> は岩山に〔行動を〕さえぎられることがなかった。ランドクンチョク Lañ h̄gro dkon mchog<sup>(42)</sup> は雷電を矢の如くに投げた。ギェルウエチャンチュブ rGyal bañi byañ chub<sup>(42)</sup> は虚空に結跏趺坐をなした。と

〔以上の如く〕言われたのである。

タントリスト〔の〕ダルマキールティ Dharmakīrti<sup>(43)</sup>、ヴィマラミトラ Vimalamitra<sup>(44)</sup>、サングェサンワ Sañs rgyas gsañ ba<sup>(45)</sup>、シャーンティガルバ Çānti Garbha<sup>(46)</sup> など他のインドのパンディタたちも、たくさんおいでになったが、ダルマキールティも瑜伽金剛界 (yoga rdo rje dbyiñs)<sup>(47)</sup> のマンドラでアビシエーカをするなどなされた。ヴィマラミトラなど他のアジャリたちも適器の者それぞれ二人にすべての種類 (ci rigs) の教誡を教えた。

彼らが顕教の大きな典籍を説明なされた言葉は無く、タントラも御命令がたいへん厳しかったので、広め【8b】なさらなかった。<sup>(48)</sup>

しかし、ヴァイロー〔チャナ〕、マー・〔リンチェンチョク〕、ニャク・〔ジュニャーナクマラ〕<sup>(49)</sup>、ヌブ・〔サンギエイェシエ〕<sup>(51)</sup> などが、『クンチュェギェルポ』Kun byed rgyal po<sup>(52)</sup>、『ドゴンドウ』mDo dgon̄s h̄dus<sup>(53)</sup>、「幻化網」sgyu h̄phrul、「修部の八〔教説〕」sgrub sde brgyad の諸々の典籍 luñ〔と〕教誡を秘密の仕方て翻訳した。

大アジャリ (=パドマサンバヴァ) が未来の者のために、岩山、湖などに多くの甚深なる教誡を「埋蔵書」gter として隠して、西南のガヤプリン rNa yab gliñ にお去りになったのである。

その如くに、「古密呪」gsaṅ snags rñiñ ma の法はソツェンガンボ王のときから断片的には生じていたが、大いに広がったのはチソンドツェン王の時からであって、主なるものとしてアジャリ・パドマ〔サンバヴァ〕と丁度いま説明した他のアジャリたちから生じたものも多いのである。

この場合に、大アジャリ (=パドマサンバヴァ) の伝記を広く説明するのが適しいのであるが、伝記において一致しないことが多いので、一つに決定することが難しく、文字の分量も大きくなるのを恐れて、〔ここでは〕書かないのである。

或る者が、<sup>(54)</sup>「アジャリ・パドマ〔サンバヴァ〕はチベットに少しの月〔数〕より〔以上〕は滞在なさらなくて、その間に鬼神を調伏して、サムイェ寺の落慶法要をなされたのみ〔であり、それ〕以外には法をたくさんお説きにならなかった。アジャリがお戻りになった後に、或る外道がアジャリに変装して、頭に鷲の羽根をつけることなど、現今の『ウルギェンサホルマ』(Orgyan za hor ma) と呼ばれるこの服装によってチベットにやって来て、ニンマの様々なこれらの法【9a】を広めたのである。」と言う説は、貪瞋 (chags sdañ) による話であることが明らかである。

また、<sup>(55)</sup>或る者が、「ニンマの諸法は、グル・チョワン Guru chos dbañ がつくったものである。現今、『ウルギェンサホルマ』と呼ばれているこれも、〔グル・〕チョワンの服装である。」と言う説は、グル・チョクワンチュクが後世に現れた「テルトッ」(gter ston, 発掘者)

であることによっても、〔真実に〕一致しないことを知らない者の乱説〔であるというの〕に尽きるのである。

### <1・2> 九乗の宗義と六つの伝承の次第

#### <1・2・1> 九乗の宗義

(1)  
ニマの宗義における九乗の設定 (rnam bshag) をなす。〔すなわち〕声聞、独覚、菩薩〔乗、これらは〕化身のシャーキャム = Çākya thub pa がお説きになった三つの普通乗〔である〕。「クリヤ」(kriya)、「ウパ」(upa)、「ヨーガ」(yoga)〔乗、これらは〕報身の金剛薩埵 rDo rje sems dpaḥ がお説きになった三つの外タントラ乗〔である〕。「キェバ・マハーヨーガ」(bskyed pa mahāyoga)、「ルン・アヌヨーガ」(luñ anuyoga)、「ゾクパチュンポ・アティヨーガ」(rdzogs pa chen po atiyoga)〔乗、これらは〕法身の普賢 Kun tu bzañ po がお説きになった三つの内の無上乘〔である。以上が〕九〔乗〕である。

また、「外タントラ部」と「内タントラ部」二つのうちでは、「外〔タントラ部〕の」「クリヤ」〔乗〕もしくは「作タントラ」はシャーキャムニ自身がお説きになった。「ウパ」〔乗〕もしくは「行タントラ」と「ヨーガ」〔乗〕である「瑜伽タントラ」は毘盧遮那仏 rNam par snañ mdzad がお説きになった。「内の無上乘のタントラ」は大金剛持 rDo rje ḥchañ chen po が「広大な法源の仏国土」(chos ḥbyuñ 【9b】 yañs paḥi shin kham) でお説きになったと説明される。

それらのうちで、「無上乘」は本初の主である法身の普賢が自然成就なる報身としておたちになったことによって、「清浄地」(dag sa) に住する所化に対して、「無努力、自然成就、広がり切れることと偏倚することから離れたこと」(rtsal med lhun grub tu rgya chad phyogs lhuñ dañ brañ ba) (2) に関して四時常に教えた〔ものであるが〕、そのような法の異門は虚空と等しく〔多〕いので、量り知ることはできない。

それらの中から少しばかりをこの閻浮州 ḥDzam buḥi gliñ (3) において、ガーラブドルジェ dGaḥ rab rdo rje (4) とジュリーシンハ Çrīsiṅha とジュニャーナストラ Jñānasūtra とヴィマラ〔ミトラ〕とパドマカーラ Padma kāra などの最勝の siddhi (dños grub) を得た持明者 (rig ḥdzin) たちが、明らかになさったのである、と説明される。

### <1・2・2> 六つの伝承の次第

(4)  
伝承の次第については、「仏、御意による伝承」(rgyal ba dgoñs brgyud)、「持明者、記号による伝承」(rig ḥdzin brda brgyud)、「人間、耳による伝承」(gañ zag sñan brgyud)の三つと、また、〔それら以外に〕、「指名の教え、予言による伝承」(bkaḥ babs brgyud)の三つと、また、「カルマの残余、埋蔵書による伝承」(las ḥphro gter gyi brgyud pa)、「祈願、封印による伝承」(smon lam gtad rgyaḥi brgyud pa)〔とあり、以上で〕六つの伝承の設定もなしたのである。

それらも詳しく書くならば、〔説明が〕多くなるので、それ以上は〔説明を〕続けないのである。

### <1・3> 系統の別説

ニマの法に関して、「遠伝仏説」(riñ brgyud bkaḥ ma)、「近伝埋蔵教説」(ñe brgyud gter ma) (1)、「深淵浄現教説」(zab mo dag snañ)の三つの系統に分けているように思えるので、それらがチベットにどの如くに生じたか〔を、以下に説明しよう〕。

#### <1・3・1> 「遠伝仏説」の歴史

「仏説」は「幻化網」【10a】、「ドゥペドゥ」(ḥdus pa mdo)、「セムチュク」(sems phyogs)〔であり、それらは〕「経・幻・心の三つ」(mdo sgyu sems gsum) (2) と言われる。

#### <1・3・1・1> 「幻化網」の系統 (mahāyoga 乗「タントラ部」)

#### <1・3・1・1・1> ヴィマラミトラからマ・リンチェンチュクを経る系統

〔それらの〕うち、「幻化網」の『サンワニンポ』gSañ ba sñiñ po (3) の法類は、ヴィマラ〔ミトラ〕 (4) からマ・リンチェンチュク rMa Rin chen mchog (5) に説明されて翻訳された。彼がツクル・リンチェンチュンヌ gTsug ru Rin chen gshon nu (6) とギレチュキョン Gyi re mchog skyoñ (7) の二人に説明した。彼ら二人がダルジェ・ベルギダクバ Dar rje dPal gyi grags pa (8) とシャン・ギェルウエユンテン Shañ rGyal baḥi yon tan (9) の

二人に説明した。シャンから継承する者たちに関しては、「教誡の系統」(man nag brgyud<sup>(10)</sup> pa)〔と呼ばれ〕、その後(11)にウ、ツァン、カム(12)の三〔地方〕に多ぜいの人々の間で広がったこと(13)によって、「ウ流」(dbus lugs)と「カム流」(khams lugs)の二つと呼ばれる。

<1・3・1・1・2> 「ヌル Zur 系」に到るもの

また、ヴィマラ〔ミトラ〕<sup>(12)</sup>の弟子がニャク・ジュニャーナクマーラ gÑags Jñānakumāra<sup>(13)</sup>、彼の弟子がソクポ・ベルギエシユ Sog po dPal gyi ye ces<sup>(14)</sup>、彼の弟子がアジャリのサンギエシユ Sañs rgyas ye ces<sup>(15)</sup>であることによって、彼らからの系統も生じたようである。ヌブ・サンギエシユ gNubs Sañs rgyas ye ces にソ・イエシエワンチュク So Ye ces dbañ phyug など「御意を得た御弟子」(thugs zin gyi sras)<sup>(16)</sup>四人〔と〕、御弟子の「すぐれたもの」(dam pa) クルンバ・ユンテンギャツォ Khu luñ pa<sup>(17)</sup> Yon tan rgya mtsho とで五人〔の弟子がいる〕。ユンテン御父子に最初の弟子がニャン・シェラブチョク Myañ Çes rab mchog<sup>(18)</sup>。彼の弟子がスルポチェ・シャーキャジュンネ Zur po che Çākya hbyuñ gnas<sup>(19)</sup>。彼のもとに弟子たち「四頂」(rtse mo bshi)<sup>(20)</sup>、「隠頂」(rtse lkog)との五人〔と〕、「百八人の大修業者」(sgom chen brgya rtsa brgyad)<sup>(21)</sup>などが現じた。「四頂」の最勝なるものは、スルチュン・シェラブタク Zun chun<sup>(22)</sup> Çes rab grags、もしくはデシクギャボバ bDe gçegs rgya po pa〔である〕。彼のもとに弟子「四柱」(ka bshi)<sup>(23)</sup>、「八梁」(gduñ brgyad)<sup>(24)</sup>、「十六椽」(lcam bcu drug)<sup>(25)</sup>【10 b】「三十二桁」(gral ma so gñis)<sup>(26)</sup>、「二大修業者」(sgom chen gñis)<sup>(27)</sup>、「一矜持者」(yus po che)<sup>(28)</sup>、「二平常者」(dkyus pa gñis)<sup>(29)</sup>、「二高貴者」(sta gur gñis)<sup>(30)</sup>、「三無益處者」(go ma chod gsum)<sup>(31)</sup>といわれるものたちが現れた。スルチュンの御息は、「金剛手」Phyag rdor の化身といわれるジェ・ドブクバチュンポ・シャーキャセング rje sGro phug pa chen po Çākya señ ge<sup>(32)</sup>〔である〕。彼に弟子「四火」me bshi<sup>(33)</sup>、「四黒」nag bshi<sup>(34)</sup>、「四師」ston bshi<sup>(35)</sup>〔と〕十二人〔がいる〕うちの「四黒」の最勝なるものハジェ・チェトゥンギャナク lHa rje lCe ston rgya nag<sup>(36)</sup>といわれる者は、中観、因明などを学ぶことによって学者になり、ドブクバのところ(37)に論争(38)にやって来たギャ・ツァンセン rGya brTson señ を敗退せしめたので、ドブクバがお喜びになって、すべての教誡(gdams nag)をすっかり〔彼に〕与えた。彼に善き弟子として多くのものが現じたが、〔その〕主席は甥であるラマチュンポ・ユンテンスン bla ma chen po Yon tan<sup>(39)</sup> gzun<sup>(40)</sup>〔である〕。彼のもとに弟子はたいへん多かったが、すぐれた「直弟子」(thugs sras)は化身であるシグポドゥツィ Shig po bdud rtsi<sup>(41)</sup>〔であった〕。その弟子の上首<sup>(42)</sup>

は六人<sup>(43)</sup>のうちの最勝なるものになったタトゥンジョイ = rTa ston jo yes<sup>(44)</sup>であり、この者が語録(gsun sgros)すべてを文字で書いたことによって、後世に対する恩恵は大きいものであった。

<1・3・1・1・3> 他の系統(ドブクバからの別系)

<1・3・1・1・3・1> ツァンパチトゥンとニェトゥンを経る系統

ドブクバの弟子はツァンパチトゥン gTsañ pa spyi ston<sup>(45)</sup>とニェトゥン Ñe ston<sup>(46)</sup>の二人〔である〕。〔彼ら二人の弟子は〕ツァンナク・ウバル gTsañ nag Hod hbar<sup>(47)</sup>〔である〕。彼の弟子は〕メトゥン・グンポ Mes ston mGon po<sup>(48)</sup>。〔その弟子が〕ラマソ Bla ma sro<sup>(49)</sup>。彼にバクシ・シャークオ Pakši Çāk hod<sup>(50)</sup>とタナク・ドゥドゥル rTa nag bDud hdu<sup>(51)</sup>が〔法を〕聞いた。ドゥドゥルからスル・チャムパセンゲ Zur hByams pa señ ge<sup>(52)</sup>〔が法を聞いた〕。彼にユントゥン gYun ston<sup>(53)</sup>とジャムイェン・サムトゥブドル<sup>(54)</sup>ジェ hJam dbyaṅs bSam grub rdo rje<sup>(55)</sup>が〔法を〕聞いて広めた。ユントゥンドルジェベル gYun【11 a】ston rdo rje dpal は学者・成就者であるうちの解脱せる者であり、ニョマ派(rñin ma pa)「新密呪」派(gsar ma pa サルマ・パ)双方の無諍の大成就者(grub thob)であった。

<1・3・1・1・3・2> サンギエタク Sañs rgyas grags を経る系統

また、ドブクバの第一の弟子〔の〕系統<sup>(56)</sup>のサンギエゴンラワ Sañs rgyas gon la ba からカムに大いに広がった。

<1・3・1・1・3・3> ロクの系統

また、ロク Rog<sup>(57)</sup>の家系と弟子系統にも、アビシェーカとタントラ〔の〕説明が多く生じた。

<1・3・1・1・3・4> 他のスルの分派

デンバク Dan hbag<sup>(58)</sup>とツァンの西のマンガル Mañ mgar<sup>(59)</sup>とラトゥ La stod<sup>(60)</sup>〔の〕南北などに広がった。



<1・3・1・1・3・5> カダム系

また、ドブクパの弟子系統であるカダムパ・デシエク Ka dam pa De gçegs<sup>(61)</sup> と呼ばれる者は、本当の名前がシェラブセンゲ Çes rab señ ge<sup>(62)</sup>、そして、ボブパターイエ sBobs pa mthañ yas<sup>(63)</sup> といわれたが、ディ河 ħbri chu の岸、ボムボル sPom ħbor<sup>(64)</sup> の近く、「カ」(𑖅)の文字に似ている場所に寺院をつつたので、「カトク」Ka thog と呼ばれる。そこにも大いに広がった。

<1・3・1・2> 「経」の系統 (anuyoga 乘)

「ドゥパド」[派の典籍]<sup>(65)</sup> は、「根本タントラ」の『クンドゥリクパド』Kun ħdus rig pañi mdo と「説明のタントラ」の『ドゴンパドゥパ』mDo dgoñs pa ħdus pa<sup>(66)</sup> の二つで、<sup>(67)</sup> ダナラクンタ Dhanarakṣita がネパールのダルマボディ Dharmabodhi とヴァスダラ Vasudhara<sup>(68)</sup> に説明した。[また、]ドゥジャ ħBru çā の国[の]トム Khrom<sup>(70)</sup> でルチュエンキエ Ru che btsan skyes<sup>(71)</sup> に説明して翻訳した。彼ら三人がジョウォ・ヌブ・サンギエ jo bo bsNubs Sañs rgyas<sup>(72)</sup> に説明した。ジョウォ・ユンテンギャツォ jo bo Yon tan rgya mtsho<sup>(73)</sup> などから順次に継承されて、ハジェ・シャンパ lHa rje Çams pa<sup>(74)</sup> [に伝えられた]。

また、トガル[の]ナムカーハー Tho gar Nam mkhañ lha<sup>(75)</sup> がハジェ・ウクパルンパ lHa rje ħug pa luñ pa<sup>(76)</sup> に与えて、順次に【11 b】広がった。  
[以上が]「経」[派]の章である。

<1・3・1・3> ロン系<sup>(76)</sup>

或るとき、アジャリのナクポチュパ Nag po spyod pa<sup>(77)</sup> の化身として生まれたロンソムロツァーワチョサン Ron zom lo tsā ba chos bzañ<sup>(78)</sup> といわれる比類なき大学者があらわれた。彼も「経・幻・心の三つ」の聴聞と実践をなさって、他に対して利益をなす「事業」(ħph-rin las) をふやしたのである。

<1・3・1・4> 「八教説」の系統 (=mahāyoga 乘「修部」)

生起次第の主なるものは、「修法の八教説」(sgrub pa bkañ brgyad)<sup>(79)</sup> とよばれるもの

である。[それは以下の如きものである]。「ジャムベル・ク」(ħjam ħpai sku), 「パドマ・スン」(padma gsuñ), 「ヤンダク・トゥク」(yan dag thugs), 「ドゥツィ・ユンテン」(bdud rtsi yon tan), 「ブルバ・チンレ」(phur pa ħphrin las), [これらは]「出世間の五部」(ħjig rten las ħdas pañi sde lña)[と呼ばれる]。「マモ・ポットン」(ma mo rbod gtoñ), 「ムッパ・ダクガク」(dmod pa drag snağs), 「ジクテン・チュトッ」(ħjig rten mchod bstod), [これらは]「世間の三部」(ħjig rten pañi sde gsum)<sup>(80)</sup> と呼ばれるのである。

それらのうちで、「ダデン」(rta mgrin)<sup>(81)</sup> と「ブルバ」の二つは、大アジャリ (=パドマサンバウツァ)<sup>(82)</sup> が王に「ダデン」, 王妃とデアツァラサレ ħBre a tsa ra sa le に「ブルバ」を与えたことによって、彼らから順次に広がった。

「ジャムベル」の法類はアジャリのシャーントンガルバ Çāntim garbha, 「ヤンダク」<sup>(83)</sup> の法類はフーンカーラ Hūm kāra,<sup>(84)</sup> 「ドゥツィ」の法類はヴィマラミトラによって説明されて広げられた。<sup>(85)</sup>

「マモ」などは、アジャリ (=パドマサンバウツァ) がチベットの有害な鬼神たちを調伏して、アビシューカで呪縛した後、三部の派に分けて、世間に利益する同胞に仕立てたその方法 (thabs)<sup>(86)</sup> の次第が教えられたものであり、「行タントラ」【12 a】[の]「世間マンダラ」(spyod rgyud ħjig rten pañi dkyil ħkhor) と設定が等しいのである。

<1・3・1・5> ソクチェンの系統 (=atiyoga 乘)

ニンマの法の中心となるものは、「メーガー・ソクパチェンポ」(man ñag rdzogs pa chen po) と呼ばれるものであって、それにも「心部」(sems sde)「界部」(kloñ sde)「教説部」(man ñag gi sde) と三つ[ある]。「心部」の十八の大小タントラのうち、五<sup>(87)</sup> つはヴァイローチャナ、十三<sup>(88)</sup> はヴィマラ[ミトラ]から生じた。「界部」もヴィマラ[ミトラ]<sup>(89)</sup> から生じたのである。「教説部」については、「ニンチク」(sñiñ tig)<sup>(90)</sup> と呼ばれて、ヴァイローチャナ<sup>(91)</sup> その人から生じたのである。

<1・3・1・5・1> 「心部」の系統

「ソクパチェンポ・セムチョク」(rdzogs pa chen po sems phyogs)<sup>(92)</sup> と呼ばれるものは、ヴァイローチャナ<sup>(93)</sup> とユダニンポ gYu sgra sñiñ po<sup>(94)</sup> にニャク・ジュニャーナ[クマラー]<sup>(95)</sup> が授けてもらった。彼に「教説」(bkañ)<sup>(96)</sup> の四つの大河<sup>(97)</sup> が集って、十人のすぐれた弟

子などのうちからソクポ・〔ベルギイェシエ〕 Sog po [ dPal gyi ye ces ], サンギエ<sup>(98)</sup>  
イェシエ Sañs rgyas ye ces にと順次に伝えたのである。<sup>(99)</sup>

また、ヴァイローチャナの弟子パン・サンギエグンポ sPañs Sañs rgyas mgon po<sup>(100)</sup>  
はバ・ラクシタ rBa Rakṣita に〔法を〕説明した。彼からヤシ・ダルマシェラブ Yazi<sup>(101)</sup>  
Darma ces rab などに伝えられたものと、更に、ヴァイローチャナが王妃デモ jo mo<sup>(102)</sup>  
sGre mo〔に伝え、彼女が〕マルバ・シェラブオウ Mar pa Ces rab hod<sup>(103)</sup> などに伝え  
たものも存するのである。<sup>(104)</sup>

〔以上が〕「セムチョク」の章である。

### <1・3・1・5・2> 「界部」の系統

「ゾクパチェンポ」の「界部」の法類に関しては、真実を九つの界によって教える『等虚空の  
小タントラ』 Nam mkhañ dañ mñam pañi rgyud chuñ ba と『イェシエサンワ』<sup>(106)</sup>  
Ye ces gsañ ba などの系統に依る「金剛橋」(rdo rje zam pa) の諸々の教誡をヴァ  
イローチャナがパン・ミバングンポ dPan Mi pham mgon po に説明した【12b】そ  
れが、順次にジエン・ダルマボディ hDzen Dharmabodhi〔に伝わり〕、彼からニャン・ダ  
ルマンハ Myañ Dharma sinha など五人と、ゴルジエ Nor rje とジェ・ジョセ<sup>(107)</sup>  
hDze Jo sras などが授かったことから、たくさん広がったのである。<sup>(108)</sup>  
<sup>(109)</sup> <sup>(110)</sup> <sup>(111)</sup> <sup>(112)</sup> <sup>(113)</sup> <sup>(114)</sup>

〔以上が〕「金剛橋」の章である。

### <1・3・1・5・3> 「教誡部」の系統

### <1・3・1・5・3・1> 「ニンチク」の系統

「甚深なるもの」(çin tu zab pa) と呼ばれる「ゾクパチェンポ・ニンチク」は「前」の  
ヴィマラミトラ Vimalamitra sna ma が王 とニャン・チンジンサンポー Myañ Tin<sup>(115)</sup> <sup>(116)</sup>  
dzin bzañ po の二人に教えた。ニャンはウルのシャの仏殿 dBu ru Shwañi lha khañ  
を建てて、そこに諸々の教誡を「埋蔵書」(gter kha) として隠した。<sup>(117)</sup> <sup>(118)</sup>

諸々の「言葉の継承」(tshig brgyud) をドム・リンチェンバル hBrom Rin chen<sup>(119)</sup>  
hbar に説いた。彼がベ・ロトゥワンチュク sBas Blo gros dbañ phyug に説明した。<sup>(120)</sup>

上座ダンマフンギェル gnas brtan lDañ ma lhun rgyal といわれるものが、「埋蔵  
書」を掘り出して、チュツウン・センゲワンチュク lCe btsun Sen ge dbañ phyug と<sup>(121)</sup> <sup>(122)</sup>

カラクゴムチュン Kha rag sgom chuñ 二人に説明した。<sup>(123)</sup>

チュツウンはニャン・カーダムバ Myañ bKaḥ gdamṣ pa に教えて、諸々の教誡を三つの  
〔埋蔵書〕として隠した。<sup>(124)</sup> <sup>(125)</sup>

ロナ Ron sna でダーのチュゴムナクポ mDa lCe sgom nag po 〔が発掘し〕、ま  
た、ミルドのチュパタク Mas gro hChad pa stag からシャンパレバ Çañs pa ras pa<sup>(126)</sup> <sup>(127)</sup>  
〔が発掘し〕、また、ヤムドクのヌブツォリングイラド Yar hbrod gi bsNubs mtsho  
glin dguñi bla mdo にお生まれになったシャン・タンドルジエ Shañ bKra çis rdo  
rje が「埋蔵書」を発掘した。<sup>(128)</sup>

この後者はチュツウン自身に会った。彼が御子息ニブム Ñi hbum〔に伝え〕、その後、順  
次にジョベル hJo hber, トゥルンク・センゲギェルワ hKhrul shig Sen ge rgyal ba,<sup>(129)</sup> <sup>(130)</sup> <sup>(131)</sup> <sup>(132)</sup>  
メロンドルジエ Me loñ rdo rje, 持明者クマラージャ rig hdzin Ku ma rā dza,<sup>(133)</sup> <sup>(134)</sup>  
ロンチェンラブチャンバ Kloñ chen rab hbyams pa に〔伝えられた〕。<sup>(135)</sup>

このロンチェンラブチャンバ【13a】は、ニンマ派の教法護持者 (bstan hdzin) の群の  
中で、学者の頂上にのぼった唯一人であって、「学問」rig gnas 「経」mdo の方面と「新」  
「古」密呪 gsañ snaḡs gsar rñiñ の著作した法もたいへん多いのである。

### <1・3・1・5・3・2> 「ダーキニーのニンチク」の系統

「ダーキニーのニンチク」(mkhañ hgro sñiñ thig) と呼ばれるものは、金剛持 rDo  
rje hchañ にガーラブドルジエ dGaḥ rab rdo rje が聞いて、持明者シェリーンハ<sup>(136)</sup> <sup>(137)</sup> <sup>(138)</sup>  
rig hdzin Çrī sinha に与えた。彼からアジャリのパドマサンバヴァ が聞いて、御母イェ  
シェツォギェル yum Ye ces mtsho rgyal に与えて、後世のために「埋蔵書」として隠  
されたものが、パドマ〔サンバヴァの〕業を結びつける力 (Padma las hbrel rtsal) に  
よって〔後に〕発掘され、ギェルセ・レグバギェルツェン rgyal sras Legs pa rgyal<sup>(139)</sup> <sup>(140)</sup> <sup>(141)</sup>  
mtshan とクンキェン・ランジュンドルジエ kun mkhyen Rañ byuñ rdo rje, ニント  
ウン・ドルジエベル gYuñ ston rDo rje dpañ などに伝えられたのである。<sup>(142)</sup>

### <1・3・2> 「埋蔵教説」の系統

「埋蔵教説」(gter ma) が生じた様子は、アジャリのパドマジュンネなどの師表たる大  
人物 (tshad mañi skyes bu) 幾人かが未来の所化のために、最勝〔と〕普通の sidhi  
のたくさんの教誡を「埋蔵書」として隠して、損耗しないように加持して、「埋蔵書」の守護神

(gter srūn)に付託し、因縁に恵まれた人にめぐり会うことを祈願した。いつか発掘されるその時に、発掘される徴候 (ltas mtshan) が生じる様子、発掘する「テルトゥン」(gter ston, 発掘者)の名前とその特徴もとともに「埋蔵書のメモ」(gter gyi kha byān)に書いた。いつの日か場所・時期・人のすべて【13 b】が合致したときに、その「埋蔵書」が発掘されて、多くの因縁ある人々の間で広められるものに対して、「埋蔵教説の法」(gter chos)と呼ぶのである。

一般に、「埋蔵教説の法」はインドにもあり、チベットの他の宗義にもあることによって、すべての「埋蔵教説の法」をニンマ〔派〕の法となすことは、寡聞の故の誤りである。

「テルトゥン」と呼ばれる者が自分でつくり、隠して、発掘する虚偽のものもあるが、「清浄」(=真実)であることが確かであるものも多いことによって、一概に、誹謗することは正しくないのである。

信頼できる「テルトゥン」は、主に『〔パドマ〕タンイグ』〔Padma〕than yig<sup>(144)</sup>で予言されたサンギェラマ Sañs rgyas bla ma<sup>(145)</sup>からはじまってデチェンリンパ bDe chen gliñ pa<sup>(146)</sup>までと、予言によって現実に記されていないが、異議のない「テルトゥン」もたくさん生じた、〔彼らを〕チョギェルワンポィデ Chos rgyal dbañ poñi sde<sup>(147)</sup>が一まとめにして『百人のテルトゥンの願文集』gTer ston brgya rtsahi gsol hdebs<sup>(148)</sup>を著わしたのであるが、彼らに関しては教法と人〔柄〕が二つながら清浄であると、立派な人々がおっしゃっているのである。

彼らの群の中でカーダク・ニャン・ニマオセル mñah bdag Ñan Ñi ma hod zer<sup>(149)</sup>とグル・チョキワンチュク Guru Chos kyi dbañ phyug<sup>(150)</sup>の二人については、「テルトゥンの前後二人」(gter ston goñ hog gñis)といわれ、「日月の如きテルトゥンの王」(ñi zla lta buñi gter ston gyi rgyal po)といわれる。

「テルトゥン」〔の〕ダバ・グンシェバル Gra pa mñon çes hbar<sup>(151)</sup>はダタン Gra than<sup>(152)</sup>を初めとする百八の聖地 (gnas gshi)をつくったことと、多くの「埋蔵書」と特に【14 a】『薬法のギェ・シ』sMan gyi rgyud bshi<sup>(153)</sup>など多くの医方の法類を発掘したことによって、御恩恵と事業 (hphrin las)は大きいように思われるのである。

### <1・3・3> 「深淵浄現教説」の系統

「深淵浄現教説」(zab mo dag snañ)<sup>(154)</sup>の系統は、成就者 siddha の地位を得た者に、神中の神が御顔をお見せして、ありありとお説きになった教誨であって、これもすべての宗義にあるが、ニンマの方面にたくさん生じたように思えるのである。

### <2> ニンマ派の宗義

二番目として、ニンマ派の宗義の主張する仕方について、すべての支分を詳しく書くことは、たいへん疲れるので書かないが、ここに見・修の構成内容の要約を説くのである。

#### <2・1> ソクチェン以外の宗義

また、『ヘルカカワのタントラ』Heruka ka wahi rgyud<sup>(1)</sup>など「新〔密呪〕」の「六支瑜伽」(sbyor drug)<sup>(2)</sup>、「五次第」(rim lña)<sup>(3)</sup>、「道果説」(lam hbras)<sup>(4)</sup>などと一致する道の階程を説明して、「幻化網の六次第」(sgyu drañi rim drug)<sup>(5)</sup>、「〔幻化網の〕三次第」(rim gsum)<sup>(6)</sup>など「解脱の修道」(grol lam)<sup>(7)</sup>と、『サンチク』gSañ thig<sup>(8)</sup>など「方便の修道」(thabs lam)<sup>(9)</sup>の教誡と、「ドゥパド」の「状態の瞑想」(ñañ sgom)<sup>(10)</sup>〔と〕、「八教説」の五族などについても、「新〔密呪〕派」と一致する種類の説明があるが、後のニンマ派の人たちは、それらに関して講説 (hchad ñan)<sup>(11)</sup>と実践を主にさななかったように思われる。

#### <2・2> ソクチェンの宗義

##### <2・2・1> 総説

<sup>(1)</sup>重視すべきものは、「ソクパチェンポ」の見・修であると思うが、「垢れなき現時の明知、裸(あるがまま)の輝きの空」(dri ma dañ bral bañi da ltañi rig pa gsal ston rjen【14 b】pa)これに対して「ソクパチェンポ」という。その言葉の説明も、顕現・有 (snañ srid)〔と〕輪廻・涅槃にまとめられる一切諸法は、この「空なる明知」(rig pa ston pa)のうちに究竟している (rdzogs pa, ソクパ)ゆえに、「ソクパ」(rdzogs pa)<sup>(2)</sup>〔といわれ〕、また、それより以上の輪廻より解脱する最勝なる他の方法は無いゆえに、「チェンポ」(chen po 大)と言われるのである。

##### <2・2・2> 別説

「ソクチェン」派について内部の区別で分けるならば、「心部」「界部」「教誡部」三つである。

<2・2・2・1> 「心部」の教法

〔それらの〕うち、「心部」は如何なる顕われでも「心」(sems)であるが、「心は」[心性](sems ñid)が「自生の智」(rañ byuñ gi ye çes)としてのぼったこと(çar pa)によって、「自生の智」より以外の他になることはないというものである。即ち、この道の案内の仕方だけはたいへん「大印」(phyag chen, mahāmudrā)に似ているのであるが、「大印」派は境(yul)に対して封印し去るのであるが、「心部」派は有境(yul can)を「心性」「明知の空」(rig ston), 「本来清浄」(ka dag)なりとして決定する[ので、改めて境の否定をしない]ことによって、本当は差異が大きいのである。

<2・2・2・2> 「界部」の教法

「界部」は〔諸法が〕「法性」(chos ñid)である「普賢」Kun tu bzañ po の「界」以外に去る場所が無いことによって、「法性の界」以外の他のものが生じることを否定するものである。

ここで(hdis)光明(ḥod gsal)を重じることは、「新密呪」派の「第五次第」と見たところが似ているのであるが、本当は差異が大きいのである。

〔すなわち〕「第五次第」は五風の行為(rluñ lña hi byed)を系縛する要訣によって、空なる色である幻身(sgyu lus ston gzugs)の影像(snañ brñan)そのものを「頓取」(ril ḥdzin, Piṇḍagrāha)と「随壞」(rjes shig, Anubheda)とによって、光明において浄化するものであるから、所作・努力(bya rtsal)を伴うものである。

「界部」派は、【15 a】「縁ずること・心を向けること」(dmigs gtad)と離れる[と]いう]甚深なる要訣、所作・努力が無い状態に置くこと、「深と輝が双入している智」zab gsal gyi ye çes zuñ ḥjugによって「虹身」ḥjaḥ lusを「金剛身」として成就せしめ、[そのような]甚深なる方法であるため、この道に入った先達の持明者たちが「智身」(ye çes kyi sku)を得てお逝きになることのみが生じたのであると言われ、「金剛橋派」(rdō rje zam pa ba)といわれるのである。

<2・2・2・3> 「教誡部」の教法

「教誡部」は「捨取と離れ、双入なる、二として無い智」(span blañ bral ba zuñ ḥjug gñis su med paḥi ye çes)によって、輪廻・涅槃の一切諸法を「法性」である

「空を執取することと離れた状態」(ston ḥdzin dañ bral baḥi ñañ)にもたらす要訣によって、「輪廻・涅槃いづれにも分けられない明知」そのもの(ḥkhor ḥdas gañ duḥañ ma phyē paḥi rig pa ñid)が「法性」の境[として]顯然と(mñion sun du)のぼった後、「自己の明知」(rañ rig)が「[金剛]鎖の仏身」(lug gu rgynd kyi sku)として熟して、解脱させるものである。

これは要訣の上で解脱すること、〔すなわち〕要訣を打つことであり、灸と似ているのである。

それゆえ、「トッゲルの顕われを主要とする修道」(lam thod rgal gyi snañ gtso bar byed pa)は「新密呪」派の「六支瑜伽」(sbyor drug, ṣaḍaṅga-yoga)に似ているのであるが、本当は、差異が大きいのである。

〔すなわち〕「六支瑜伽」は五風を「中央脈管」に縛る要訣によって、「空なる色」(ston gzugs)の顕われがのぼるもので、行為・努力の大業の道に順次に導くものであるが、ここではすべての「意の判別」(yid dpyod, manas-parikṣā)を断って、「自ら輝く真如」(gnas lugs rañ gsal)を如実に(=直接知覚で)確認すること(gtan la ḥbebs pa)によって、とくにすぐれているのであり、この道によって「智身」が「虹身」として解脱することも、「界部」などによって成就せしめられることよりすぐれている。【15 b】というのは、ここ(=「教誡部」)では、三つの粗大門(rags paḥi sgo)が微細清浄身(phra ba dwañs maḥi sku)として清浄になることのみではなく、「法性へ尽きる顕現」(chos ñid zad paḥi snañ ba)が究竟することによって、細・組の三門のすべてが「仏身と〔根本〕智の状態」(sku dañ ye çes kyi ñañ)において根基なく清浄なものであるからと言われるのである。

また別に、「コオウが本来清浄」(no bo ka dag)「ランシンが自然成就」(rañ bshin lhun grub)「トックジュが遍満」(thugs rje kun khyab)三つの定義をする。〔すなわち〕「本初の真如、不生なる根基の空」(thog maḥi gnas lugs gshi skyē ba med paḥi ston pa)に対して「コオウが本来清浄」[と]言い、「その空性の止滅する無き光彩」(ston pa ñid deḥi mdañs ḥgags pa med pa) それに対して「ランシンが自然成就」[と]言い、「浄・不浄いづれにもものぼるその力」(deḥi rtsal dag ma dag cir yan ḥchar pa)に対して「トックジュが遍満」と言う。そして、最初のものに対して「明知の空」が同じであり、二番目のものに対しては「輝く空」(gsal ston)が同じであり、三番目のものに対しては「顕われる空」(snañ ston)が同じであると言われる。

「心」と「明知」(rig pa)の差異は、「無明」(ma rig pa)の力によってあらゆる幻をひき起すものであるところの突然現われる妄分別(mi ḥgyu dgu ḥgyu dran paḥi glo bur gyi rnam rtog)に対して「心」[と]言う。他方「無明」によって汚されていないこ

とによって、「所取・能取の戲論と離れ、輝と空を執取すること無き空」(gzun ḥdzin gyi spros pa dan bral shin gsal ston ḥdzin med kyi ston pa)<sup>(34)</sup>を見知るもの(ño ces pa)に対して「明知」と言う。

「心」の「相」(rnam pa)である「顕われ」の部分、それが輪廻であり、「心」の「体性」(ño bo)である「空」の部分、それが涅槃である。輪廻と涅槃の二つは、自己の「心性」の「体性」である「空」の状態では、区別の因がないことによって、輪廻・涅槃無差別(ḥkhor ḥdas dbyer med)<sup>(35)</sup>といわれるのである、と言われる。

「顕われ」を「心」と【16a】見定め(thag bcad)、「心」を「空」と見定め、「空」を「無二・双入」(gñis med zun ḥjug)<sup>(36)</sup>と見定めたのちでは、一切諸法を「裸(あるがまま)の明知の空」(rig ston rjen pa)と悟ることは、「漸悟者の明知を悟る段階」(rim gyis paḥi rig pa ño ḥphrod paḥi tshad)<sup>(37)</sup>〔であり〕、ラマによって「明知」を印可される(ño sprad)だけで、どんな「顕われ」も「裸(あるがまま)の空なる明知」と悟ること、それが「頓悟者の明知を自ら悟る段階」(cig car paḥi rig pa ran ño ḥphrod paḥi tshad)<sup>(38)</sup>〔であり〕、今生で「裸(あるがまま)の空なる明知」と明らかに「悟らなかつたとしても、修の力によって中有でその正しい悟りがのぼるものは、「トゥゲル〔を修する〕者の明知を自ら悟る段階」(thod rgal baḥi rig pa ran ño ḥphrod paḥi tshad)<sup>(39)</sup>である。

### <2・2・3> 結 び

### <2・2・3・1> 要 略

要するに、「輝も空も執取するなき現時の自己の無垢な明知」(da ltaḥi ran gi rig pa dri ma med pa gsal ston ḥdzin med)<sup>(40)</sup>これを「廣大無辺の漂い」(kha yan)<sup>(41)</sup>において弛め放って(glod)<sup>(42)</sup>、「妄分別」〔即ち〕「顕われ」,「〔心の〕住・動」(gnas ḥgyu)いづれに関しても善・悪〔を見ず〕否定・肯定をなさず、「裸(あるがまま)の明知の空」において〔その状態を〕まもること(skyon pa)<sup>(43)</sup>、これが「ゾクチェン」を修する仕方の精髓であり、大アジャリ(=パドマサンバヴァ)の密意(dgoñs pa)<sup>(44)</sup>の無上の精要である、と言われる。

### <2・2・3・2> 「基・道・果」

「基・道・果」(gshi lam ḥbras bu)<sup>(45)</sup>を主張する仕方は、輪廻・涅槃の心計(ḥkhor ḥdas kyi blo)によって触れられず、迷乱(ḥkhrul pa)の錆によってまとわれていない

「本初の真如」(thog maḥi gnas lugs)、「すなわち」迷乱を経験せず、悟りを経験せず、どこにも成立せず、どこにも生ずることができない「裸(あるがまま)の真如」(gnas lugs rjen pa)に対して〔それを〕「基」〔と〕言い、この「現時の明知」(da ltaḥi rig pa)が弛め放たれて(lhod)<sup>(46)</sup>置かれたときに、善・悪・無記の三つと離れた「空寂」(ston sañ), 清浄なる虚空の【16B】中央の如きものが存在する、〔それ〕に対して「道」〔と〕言い、<sup>(47)</sup>「道」の一切諸功德(yon tan)が顕然となり、無明と迷乱が自己の場所(ran sa)で浄化されて、「法界」(chos dbyiñs)が顕然となったことに対して、「果」と主張するのである。

〔以上〕「ゾクチェン」の見・修についてのこれらの説明は、この宗派の信頼できる諸々の教科書に説明されているものうちから精要を集めて、解り易く書いたものである。

### <3> ニンマ派の教法の吟味

三番目は、それに関して少し吟味することであるが、ニンマのこの法のあり方が、全面的に清浄であるか、不浄であるか、〔浄・不浄の〕混合したものであるかのいづれであるかを考えるならば〔次のようである〕。

### <3・1> 不浄とするもの

大翻訳者リンチェンサンポ Rin chen bzañ po<sup>(1)</sup>の『法と非法の区別』Chos dan chos min rnam ḥbyed<sup>(2)</sup>とハラマ・イェシェオウ lHa bla ma Ye ces hod<sup>(3)</sup>とシワオウ Shi ba ḥod<sup>(4)</sup>、ツァンミローツァー〔ワ〕 rTsa rmi lo tsā [ba]<sup>(5)</sup>、チャクロ〔ツァーワ〕 Chag lo [tsā ba]<sup>(6)</sup>たちの手紙と、ゴク rNog<sup>(7)</sup>の『セマラゴ』gZe ma ra mgo<sup>(8)</sup>、サパン Sa pañ<sup>(9)</sup>の『ドムスラブイェ』sDom gsum rab dbye<sup>(9)</sup>に、ニンマ〔派〕に対して〔名指しで〕傷つける誤りを明かに述べないが、チベットに広がった宗義の正しくないものを区別なく破邪した中で、ニンマ派の頭や足に当たっているような御発言が、いささか、あるように思われる。

ゴウククパ・ヘツ = ḥGos khug pa lHas ltsas<sup>(10)</sup>とディグン・ベルジン ḥBri guñ dPal ḥdzin<sup>(11)</sup>の二人が「〔理由の〕証左」(sgrub byed)をたくさん書いて、ニンマ〔派〕の法を清浄でないことを証明した。ジャーキャ・チョクデン Ḥākya mChog ldan<sup>(12)</sup>とカルマ・ミキェドルジュ Karma Mi bskyod rdo rje もその跡をくり返している。

ブトゥン Bu ston<sup>(12)</sup>がお書きになったかのようなものもある〔が、それは〕【17a】全集(gsum ḥbum)の諸々の目録に見えないうえ、文章法(tshig sbyor)を調べてみても、学

者らしいお言葉とは思えないゆえに、或る愚か者が書いて、プトゥンリンポチュに名を託したにすぎないのである。

### <3・2> 清浄とするもの

翻訳者ロンゾムチョサン <sup>(1)</sup>Roñ zom chos bzān, クンバントゥクジュツゥントゥ Kunspanis thugs rje brtson ḥgrus, カルマ・ランジュンドルジュ = Karma Rañ byuñ rdo rje, トゥプトブウルギェンバ <sup>(2)</sup>Grub thob u rgyan pa, チョムデンレルティ <sup>(3)</sup>bCom ldan ral gri, タルロ・ニマギェルツェン <sup>(4)</sup>Thar lo Ñi ma rgyal mtshan, 後のドゥク派 (ḥbrug pa) [の]パドマカルポ <sup>(5)</sup>Padma dkar po, パーボツクラク <sup>(6)</sup>dPaḥ bo gtsug lag など他の宗義の「学者」と呼ばれる者と、クントゥン・ベルジョルフントゥ <sup>(7)</sup>ブ ḥKhon ston dPal ḥbyor lhun grub とダライラマ五世 <sup>(8)</sup>Goñ sa lña pa chen po など自派の者も、[ニマ派の]法を清浄であると説明している。

### <3・3> そのままにしておくもの

プトゥンリンポチュとツォンカバ <sup>(1)</sup>rgyal ba Tsoñ kha pa <sup>(2)</sup>御師弟など規準とするべきたくさんの人々は、触れないままでおられた。ゲレクベルサンポ <sup>(3)</sup>dGe legs dpal bzān po <sup>(4)</sup>が編集したと言う人もある[書物である]が、[そこには]ニマ[の法]が清浄であると説明なきった、たくさんの偈がある。[その点について言えば]、[著者が]他のゲレクベルサン[ポ]であるならば、それはそれでいいが、ケートゥップタムチュキェンバ <sup>(5)</sup>mKhas grub thams cad mkhyen pa のお説でないことは、誰が見たとしても知られるように思われる。

### <3・4> いづれに従うべきか

さてそれでは、これらの人々のうちから誰の[説の]あとに従うべきかと考えるならば、ジョデン・ソゥナムフントゥ <sup>(1)</sup>Jo gdan bSod nams lhun grub が【17 b】お書きになった『ツォンカバ大伝記』rJe bla maḥi rnam thar chen moによると、「ゾクチュエンのこの見解は清浄であるのかどうかを質問したところ、ツォンカバが仰云るには、『清浄ではあるが、後[世]の多くの愚か者たちが、小細工の挿入をしてある』とおっしゃった。『それでは、ラマリンポチュ(ツォンカバに対する呼称)御自ら挿入をお除き下さるようお願いいたします』と申し上げたところ、『そのような願いがあるのであるが、今は『秘密集会タントラ』gSañ ḥdus

rgyud の註釈、『ドゥンセル』sGron gsal の註釈 (mchan) と要約 (bsdus don) と考察 (mthaḥ dpyod), 『サンバラタントラ』bDe mchog rgyud の註釈などを書くので暇はない。』とおっしゃった。」と説明されている。フラカーチュパ <sup>(1)</sup>IHu la dkaḥ bcu pa がお作りになったツォンカバの伝記にも、また、同じように書かれているようだ、と一切智者である私の先生 (bla ma) <sup>(1)</sup>がお話しになったのを私は聞いた。

それゆえに、それがしは、現今のゾクチュエンの見解のこれらの説明の仕方を、混入された汚垢をもつものとは認めても、その見解の自体から誤った見解であるとは言いかねる。

しかし、このような高尚な見解 (mthon boḥi lta ba) は、大アジャリ (=パドマサンバヴァ) などがおいでになった善い時代の上根の所化たちに対して、心の程度と相応していたことよって、役に立ったのであるように思われるけれども、知る心が凡庸より少しもすぐれていない現今の人間たちに対して、このような高尚な見解によって益があるどころでなく【18 a】なる危険が大きいと考える。[すなわち]ウントゥン・リンチェンガンバ <sup>(2)</sup>dBon ston Rin chen sgañ pa が、「法を心と相応させないで乗 (theg pa) を無理に高くすること、これは野性の馬に小さな子供をまたがらせることに似ている。自己の心と調和していること、これは重要である。」などお話しになっているとおりでである。

更にまた、ニマの諸々のタントラと、見・修・行の三つと、基・道・果の三つのかれこれの設定についても、[異端の]混入がたくさんあるように見えても、その理由によってこれが誤った教法であると誹謗することは正しくなくて、錆が入った黄金に対して黄銅と言うことが正しくないのと同一である。

[異端の]混入はニマのみに限られず、調べる能力のある人が詳しく判定するならば、チベットのすべての宗義にあるようなので、このような様子を正確に知るならば、ツォンカバの宗ただそれだけを、解脱を欲する者たちが、誤りない道であると知ることによって、導き出された確かな知が生ずるようになるから[その]要約を後に説明しなければならぬであろう。

それゆえに、一切智者プトゥンは、<sup>(4)</sup>「旧訳密呪 (sna ḥgyur gsañ snaḡs rñin ma) を、<sup>(5)</sup>翻訳者リンチェンサンポとハラマ・イェンシェオウとポタン・シワオウ <sup>(6)</sup>Pho brañ Shi ba <sup>(7)</sup>ḥod とゴッククバ・ヘツェ <sup>(8)</sup>などたちが、真実でないと言ったのにもかかわらず、それがしの先生である二ヶ国語を話す (=翻訳者) ニメツェンチュエン <sup>(9)</sup>Ñi maḥi mtshan can とリクレル Rig ral <sup>(10)</sup>などが、サムイェ【18 b】から[旧訳密呪関係の]サンスクリット[原]本を得たためと、「ブルバ」(phur pa) <sup>(11)</sup>という根本儀軌の断片的なサンスクリット本がネパールにもあることよって、『[旧訳密呪は]真実のタントラである。』とお話しになっていた。それがしの考えでは、<sup>(12)</sup>『心の罪悪というのは自性を誤らせることである。正しくない物 (gzugs) に対して[何か言って]も正しくないならば、疑わしい法に対しては何も云うべきでない。従って、

そのままにしておくことは、善・悪〔いずれとも〕しないのである。』といわれていることと、『法であるものに対してそうでないと言ったり、そうでないものに対してそうであると言ったりすることは、業果が等しい』と説明されていること、さらに『法のいかなる相 (mtshn ñid) に対しても、有・無いずれとも知らず、見ることもないまま、四つの因によって区分を言うものの口は、魔に裂かれよ。法に対する誹謗は〔シャカ〕牟尼の經典によって否定された。』といわれているのに従ってそのままにしておくのである。』とお話しになったのである。

#### <4> ニンマ派の宗義の後期の形成過程

##### <4・1> 「テルトゥン」の系統

四番目は、後に現れたなにがしかの人々を語ることである。「仏説」「埋蔵教説」の教誨を採り、拡め、前期にあらわれた多くのすぐれた者たちの生じた〔様子〕は、〔既に〕説明し了ったのであるが、後期にあらわれた何がしかの者を言うならば、アジャリ (=パドマサンバヴァ) の御身・御語・御意・功德・事業 (sku, gsun, thugs, yon tan, hphrin las) の五つの化身が生じたうちで、「御身」の化身はニャン Nān<sup>(1)</sup>、「御語」の化身はチョワン Chos dban<sup>(2)</sup>、「御意」の化身はカリバンチュン・パドマワンギェル mÑah ris pañ chen Padma dban<sup>(3)</sup> rgyal, 「功德」の化身はチャンダクポ・タシトブギェ Byan bdag po bKra çis stobs<sup>(4)</sup> rgyas, 「事業」の化身は後に時期が到ったときに生じるのである、と言われる。

それ〔ら〕のうちで、カリ【19 a】バンチュンは学者と成就者との二つを合わせた者であり、著した本もたくさんあったが、その再生の人 (skye ba) はチャンダク・タシトブギェワンポ<sup>(4)</sup> イデ Byan bdag bKra çis stobs rgyas dban poñi sde である。

バンチュンの弟、持明者ゴッキデムトウチュン rig hdzin rGod kyi ldem phru can<sup>(5)</sup> もしくはコウトウブギェルツェン dNos grub rgyal mtshan<sup>(6)</sup> の再生の人は、レグデン・ドゥジョムドルジ = Legs ldan bDud hjom rdo rje<sup>(6)</sup> 〔である〕。また、その再生の人はチャンダク・タシトブギェの御子息、持明者カクギワンポ rig hdzin Nag gi dban po<sup>(7)</sup> 〔である〕。そして、その再生の人がドルジェダク rDo rje brag 寺の活仏 (sprul sku),<sup>(8)</sup> 持明者パドマチンレ rig hdzin Padma hphrin las である。

チャンダク・タシトブギェは執権シンジャクパ・ツェデンドルジ = Shiñ çag pa Tshe<sup>(9)</sup> brtan rdo rje と折り合いが悪かったので、彼とチャンパ・ナムカーギェルツェン Byan pa Nam mkhañ rgyal mtshan<sup>(10)</sup> が助けあって、テトプバ bKras stobs pa を国から追い出した。〔すなわち〕、「力」(stobs, トプ) と言われる力無き放浪者、汝を私はチ

ベットの辺地に追放する。』と満足して言ったことに対して、テトプバが、「『シン』Shiñ と<sup>(11)</sup> 言われる十国 (shiñ) 全部を持てる汝を、私はラーフラ Rāhula<sup>(11)</sup> の御口に投げてやろう。』と言った後、閻魔王 gÇin rje と星宿の呪咀の儀式 (las sbyor) によって、シンジャクパの親族を呪殺した。そのような理由によって、テトプバはしばらくの間、生国を離れて巡礼したこと (byes sgar byed pa) によって、ヘン lHan<sup>(12)</sup> につくったタントラの学堂に対して「エウムチョクガル」E wam lcog sgar<sup>(13)</sup> と言う。後に、ウ地方に僧院を建てて、仏具・仏像を置いたものが、「トゥブテン・ドルジェタク」Thub bstan rdo rje brag<sup>(13)</sup> と名づけられた【19 b】のである。

ダバグンシェ Grwa pa mñon çes<sup>(14)</sup> の転生の系統〔の〕ドカクリンパ mDo snags gliñ pa の再生者、チョギェル・テルダクリンパ・ギェルメドルジ = chos rgyal gTer<sup>(15)</sup> bdag gliñ pa hGyur med rdo rje がウルギェンミントルリン O rgyan smin<sup>(16)</sup> grol gliñ 寺を建てた。

その弟、大翻訳者ダルマシュリー-Dharma çrī<sup>(17)</sup> といわれるものは、経と「新・古」gsar rñin<sup>(18)</sup> のタントラ、言説の学問すべてに対して学者となって、論書もたくさん著作されたのである。

ドライラマ五世 Goñ sa lña pa chen po<sup>(19)</sup> はカールダク・ニャン mÑah bdag Nān<sup>(20)</sup> の「御身」(sku) の再生の者であり、レグデンジェ Legs ldan rje とチョギェルワンポ<sup>(21)</sup> イデ Chos rgyal dban poñi sde<sup>(22)</sup> に「ダグナン」(dag snañ)<sup>(23)</sup> でお会いになったので、彼〔等〕から受けつがれていた諸法をスル・チョインラントル Zur Chos dbyiñs ran<sup>(24)</sup> grol とタツワンパ・ロチョクドルジ = Khra tshañ pa Blo mchog rdo rje<sup>(25)</sup> から全部聞いて、実践、解説、布教の著作などいろいろなされた。ナムバルギェルワ・ペンデレグシェ<sup>(26)</sup> リン rNam par rgyal ba Phan lde legs bçad gliñ 寺にニンマ流の儀式の仕方 (sgrub hphrin) をたくさん創設なさり、ニンマの寺院もたくさんお建てになった。

その当時、ニンマの教法が大いに広がりさかんになったけれども、まもなく、ズンガル族<sup>(27)</sup> Zun gar ba の軍隊が〔それらの〕三つの寺院<sup>(28)</sup> を破壊した。ドルタク rDor brag 寺の活仏の大翻訳者ダルマシュリー、ナムリン rNam gliñ 寺〔の〕バンチュン・クンチョクチョ<sup>(29)</sup> Pañ chen dKon mchog chos と呼ばれる者、テルダクリンパの御子息パドマギェルメギョ<sup>(30)</sup> ャツォ Padma hgyur med rgya mtsho たちは、罪無くして殺された。

セラ Se ra 寺<sup>(31)</sup> とデ〔ブン〕hBras [spuñs]<sup>(32)</sup> 寺などにおいて、〔ニンマ派系の〕不純な人物の混入しているのを除くかのような振りをして、多くの老僧【20 a】<sup>(33)</sup> を追放することなど、ゲルク派の助けになると勝手に思いこんで大妨害の限りをつくした。

しかし、まもなく、ドルジェダク寺とミントルリン寺の二つは復興した。ナムギェルリン

rNam rgyal gliñ 寺〔のニンマ流儀軌〕はゲルク流に改められた。<sup>(34)</sup>

後に、ジェドゥントゥルク・ロサンチンレ rJe drun sprul sku Blo bzan hphrin<sup>(35)</sup> las がテルダクリンバの「埋蔵教説」〔である〕『サンワイェシエの法類』gSañ ba ye<sup>(36)</sup> ces kyi chos skor を学び身につける (rtsal ḥdon) ことによって、「新」「古」〔派〕を融合した多くのテキストを著作した。

彼によって「甘露供養」(bdud rtsi mchod pa)<sup>(37)</sup> と「明妃供養」(rig ma mchod pa)<sup>(38)</sup> がすべての方面に広められた。酒と女を喜ぶ僧と俗人のすべてが〔その〕あとに従った。ゲルク派の活仏と学僧のなにかも彼に従った。〔ツァンポ〕河の南北の多くの戒律を保っている寺 (gtsañ dgon) が〔ニンマの〕妻帯の寺 (ser khyim)<sup>(39)</sup> にわれもわれもなろうとした。我々の最良の立派な指導者で、マイトリ Maitri の名前をもつ者が、法に照し合せて〔この法を〕非難し、断罪したので、その粗雑な法 (rtsid chos) は立場をなくして消え去った (bag la sha bar gyur) のである。

ジェドゥントゥルク自身が高い悟りに達した人であることは確かであるが、仏の御本心と特別な必要がよしんばあったとしても、あらわれたかぎりでは、「新」「古」すべてを一つに混ぜ合わせることによって、〔混ぜ合わせられたものが〕二つの列 (=「新」「古」) に入り切れないものがあつた〔可能性がある〕。また、その御行為は教えの根本である浄行に大いに害がある〔と考えられ〕、【 20 b 】多くの人間を地獄へ行く理由に走らせるようなことが生じたようである。

#### < 4・2 > ニンマ派の寺院

ウ〔地方〕とツァン〔地方〕でニンマの寺の大きなものは、ドル〔ジュタク〕寺とミン〔トルリ〕寺の二つであり、小さなものは少なからずあつて、カム〔地方〕のカトク Ka thog 寺、<sup>(2)</sup> <sup>(3)</sup> <sup>(4)</sup> <sup>(5)</sup> <sup>(6)</sup> <sup>(7)</sup> <sup>(8)</sup> <sup>(9)</sup> <sup>(10)</sup> <sup>(11)</sup> <sup>(12)</sup> <sup>(13)</sup> <sup>(14)</sup> <sup>(15)</sup> <sup>(16)</sup> <sup>(17)</sup> <sup>(18)</sup> <sup>(19)</sup> <sup>(20)</sup> <sup>(21)</sup> <sup>(22)</sup> <sup>(23)</sup> <sup>(24)</sup> <sup>(25)</sup> <sup>(26)</sup> <sup>(27)</sup> <sup>(28)</sup> <sup>(29)</sup> <sup>(30)</sup> <sup>(31)</sup> <sup>(32)</sup> <sup>(33)</sup> <sup>(34)</sup> <sup>(35)</sup> <sup>(36)</sup> <sup>(37)</sup> <sup>(38)</sup> <sup>(39)</sup> <sup>(40)</sup> <sup>(41)</sup> <sup>(42)</sup> <sup>(43)</sup> <sup>(44)</sup> <sup>(45)</sup> <sup>(46)</sup> <sup>(47)</sup> <sup>(48)</sup> <sup>(49)</sup> <sup>(50)</sup> <sup>(51)</sup> <sup>(52)</sup> <sup>(53)</sup> <sup>(54)</sup> <sup>(55)</sup> <sup>(56)</sup> <sup>(57)</sup> <sup>(58)</sup> <sup>(59)</sup> <sup>(60)</sup> <sup>(61)</sup> <sup>(62)</sup> <sup>(63)</sup> <sup>(64)</sup> <sup>(65)</sup> <sup>(66)</sup> <sup>(67)</sup> <sup>(68)</sup> <sup>(69)</sup> <sup>(70)</sup> <sup>(71)</sup> <sup>(72)</sup> <sup>(73)</sup> <sup>(74)</sup> <sup>(75)</sup> <sup>(76)</sup> <sup>(77)</sup> <sup>(78)</sup> <sup>(79)</sup> <sup>(80)</sup> <sup>(81)</sup> <sup>(82)</sup> <sup>(83)</sup> <sup>(84)</sup> <sup>(85)</sup> <sup>(86)</sup> <sup>(87)</sup> <sup>(88)</sup> <sup>(89)</sup> <sup>(90)</sup> <sup>(91)</sup> <sup>(92)</sup> <sup>(93)</sup> <sup>(94)</sup> <sup>(95)</sup> <sup>(96)</sup> <sup>(97)</sup> <sup>(98)</sup> <sup>(99)</sup> <sup>(100)</sup> <sup>(101)</sup> <sup>(102)</sup> <sup>(103)</sup> <sup>(104)</sup> <sup>(105)</sup> <sup>(106)</sup> <sup>(107)</sup> <sup>(108)</sup> <sup>(109)</sup> <sup>(110)</sup> <sup>(111)</sup> <sup>(112)</sup> <sup>(113)</sup> <sup>(114)</sup> <sup>(115)</sup> <sup>(116)</sup> <sup>(117)</sup> <sup>(118)</sup> <sup>(119)</sup> <sup>(120)</sup> <sup>(121)</sup> <sup>(122)</sup> <sup>(123)</sup> <sup>(124)</sup> <sup>(125)</sup> <sup>(126)</sup> <sup>(127)</sup> <sup>(128)</sup> <sup>(129)</sup> <sup>(130)</sup> <sup>(131)</sup> <sup>(132)</sup> <sup>(133)</sup> <sup>(134)</sup> <sup>(135)</sup> <sup>(136)</sup> <sup>(137)</sup> <sup>(138)</sup> <sup>(139)</sup> <sup>(140)</sup> <sup>(141)</sup> <sup>(142)</sup> <sup>(143)</sup> <sup>(144)</sup> <sup>(145)</sup> <sup>(146)</sup> <sup>(147)</sup> <sup>(148)</sup> <sup>(149)</sup> <sup>(150)</sup> <sup>(151)</sup> <sup>(152)</sup> <sup>(153)</sup> <sup>(154)</sup> <sup>(155)</sup> <sup>(156)</sup> <sup>(157)</sup> <sup>(158)</sup> <sup>(159)</sup> <sup>(160)</sup> <sup>(161)</sup> <sup>(162)</sup> <sup>(163)</sup> <sup>(164)</sup> <sup>(165)</sup> <sup>(166)</sup> <sup>(167)</sup> <sup>(168)</sup> <sup>(169)</sup> <sup>(170)</sup> <sup>(171)</sup> <sup>(172)</sup> <sup>(173)</sup> <sup>(174)</sup> <sup>(175)</sup> <sup>(176)</sup> <sup>(177)</sup> <sup>(178)</sup> <sup>(179)</sup> <sup>(180)</sup> <sup>(181)</sup> <sup>(182)</sup> <sup>(183)</sup> <sup>(184)</sup> <sup>(185)</sup> <sup>(186)</sup> <sup>(187)</sup> <sup>(188)</sup> <sup>(189)</sup> <sup>(190)</sup> <sup>(191)</sup> <sup>(192)</sup> <sup>(193)</sup> <sup>(194)</sup> <sup>(195)</sup> <sup>(196)</sup> <sup>(197)</sup> <sup>(198)</sup> <sup>(199)</sup> <sup>(200)</sup> <sup>(201)</sup> <sup>(202)</sup> <sup>(203)</sup> <sup>(204)</sup> <sup>(205)</sup> <sup>(206)</sup> <sup>(207)</sup> <sup>(208)</sup> <sup>(209)</sup> <sup>(210)</sup> <sup>(211)</sup> <sup>(212)</sup> <sup>(213)</sup> <sup>(214)</sup> <sup>(215)</sup> <sup>(216)</sup> <sup>(217)</sup> <sup>(218)</sup> <sup>(219)</sup> <sup>(220)</sup> <sup>(221)</sup> <sup>(222)</sup> <sup>(223)</sup> <sup>(224)</sup> <sup>(225)</sup> <sup>(226)</sup> <sup>(227)</sup> <sup>(228)</sup> <sup>(229)</sup> <sup>(230)</sup> <sup>(231)</sup> <sup>(232)</sup> <sup>(233)</sup> <sup>(234)</sup> <sup>(235)</sup> <sup>(236)</sup> <sup>(237)</sup> <sup>(238)</sup> <sup>(239)</sup> <sup>(240)</sup> <sup>(241)</sup> <sup>(242)</sup> <sup>(243)</sup> <sup>(244)</sup> <sup>(245)</sup> <sup>(246)</sup> <sup>(247)</sup> <sup>(248)</sup> <sup>(249)</sup> <sup>(250)</sup> <sup>(251)</sup> <sup>(252)</sup> <sup>(253)</sup> <sup>(254)</sup> <sup>(255)</sup> <sup>(256)</sup> <sup>(257)</sup> <sup>(258)</sup> <sup>(259)</sup> <sup>(260)</sup> <sup>(261)</sup> <sup>(262)</sup> <sup>(263)</sup> <sup>(264)</sup> <sup>(265)</sup> <sup>(266)</sup> <sup>(267)</sup> <sup>(268)</sup> <sup>(269)</sup> <sup>(270)</sup> <sup>(271)</sup> <sup>(272)</sup> <sup>(273)</sup> <sup>(274)</sup> <sup>(275)</sup> <sup>(276)</sup> <sup>(277)</sup> <sup>(278)</sup> <sup>(279)</sup> <sup>(280)</sup> <sup>(281)</sup> <sup>(282)</sup> <sup>(283)</sup> <sup>(284)</sup> <sup>(285)</sup> <sup>(286)</sup> <sup>(287)</sup> <sup>(288)</sup> <sup>(289)</sup> <sup>(290)</sup> <sup>(291)</sup> <sup>(292)</sup> <sup>(293)</sup> <sup>(294)</sup> <sup>(295)</sup> <sup>(296)</sup> <sup>(297)</sup> <sup>(298)</sup> <sup>(299)</sup> <sup>(300)</sup> <sup>(301)</sup> <sup>(302)</sup> <sup>(303)</sup> <sup>(304)</sup> <sup>(305)</sup> <sup>(306)</sup> <sup>(307)</sup> <sup>(308)</sup> <sup>(309)</sup> <sup>(310)</sup> <sup>(311)</sup> <sup>(312)</sup> <sup>(313)</sup> <sup>(314)</sup> <sup>(315)</sup> <sup>(316)</sup> <sup>(317)</sup> <sup>(318)</sup> <sup>(319)</sup> <sup>(320)</sup> <sup>(321)</sup> <sup>(322)</sup> <sup>(323)</sup> <sup>(324)</sup> <sup>(325)</sup> <sup>(326)</sup> <sup>(327)</sup> <sup>(328)</sup> <sup>(329)</sup> <sup>(330)</sup> <sup>(331)</sup> <sup>(332)</sup> <sup>(333)</sup> <sup>(334)</sup> <sup>(335)</sup> <sup>(336)</sup> <sup>(337)</sup> <sup>(338)</sup> <sup>(339)</sup> <sup>(340)</sup> <sup>(341)</sup> <sup>(342)</sup> <sup>(343)</sup> <sup>(344)</sup> <sup>(345)</sup> <sup>(346)</sup> <sup>(347)</sup> <sup>(348)</sup> <sup>(349)</sup> <sup>(350)</sup> <sup>(351)</sup> <sup>(352)</sup> <sup>(353)</sup> <sup>(354)</sup> <sup>(355)</sup> <sup>(356)</sup> <sup>(357)</sup> <sup>(358)</sup> <sup>(359)</sup> <sup>(360)</sup> <sup>(361)</sup> <sup>(362)</sup> <sup>(363)</sup> <sup>(364)</sup> <sup>(365)</sup> <sup>(366)</sup> <sup>(367)</sup> <sup>(368)</sup> <sup>(369)</sup> <sup>(370)</sup> <sup>(371)</sup> <sup>(372)</sup> <sup>(373)</sup> <sup>(374)</sup> <sup>(375)</sup> <sup>(376)</sup> <sup>(377)</sup> <sup>(378)</sup> <sup>(379)</sup> <sup>(380)</sup> <sup>(381)</sup> <sup>(382)</sup> <sup>(383)</sup> <sup>(384)</sup> <sup>(385)</sup> <sup>(386)</sup> <sup>(387)</sup> <sup>(388)</sup> <sup>(389)</sup> <sup>(390)</sup> <sup>(391)</sup> <sup>(392)</sup> <sup>(393)</sup> <sup>(394)</sup> <sup>(395)</sup> <sup>(396)</sup> <sup>(397)</sup> <sup>(398)</sup> <sup>(399)</sup> <sup>(400)</sup> <sup>(401)</sup> <sup>(402)</sup> <sup>(403)</sup> <sup>(404)</sup> <sup>(405)</sup> <sup>(406)</sup> <sup>(407)</sup> <sup>(408)</sup> <sup>(409)</sup> <sup>(410)</sup> <sup>(411)</sup> <sup>(412)</sup> <sup>(413)</sup> <sup>(414)</sup> <sup>(415)</sup> <sup>(416)</sup> <sup>(417)</sup> <sup>(418)</sup> <sup>(419)</sup> <sup>(420)</sup> <sup>(421)</sup> <sup>(422)</sup> <sup>(423)</sup> <sup>(424)</sup> <sup>(425)</sup> <sup>(426)</sup> <sup>(427)</sup> <sup>(428)</sup> <sup>(429)</sup> <sup>(430)</sup> <sup>(431)</sup> <sup>(432)</sup> <sup>(433)</sup> <sup>(434)</sup> <sup>(435)</sup> <sup>(436)</sup> <sup>(437)</sup> <sup>(438)</sup> <sup>(439)</sup> <sup>(440)</sup> <sup>(441)</sup> <sup>(442)</sup> <sup>(443)</sup> <sup>(444)</sup> <sup>(445)</sup> <sup>(446)</sup> <sup>(447)</sup> <sup>(448)</sup> <sup>(449)</sup> <sup>(450)</sup> <sup>(451)</sup> <sup>(452)</sup> <sup>(453)</sup> <sup>(454)</sup> <sup>(455)</sup> <sup>(456)</sup> <sup>(457)</sup> <sup>(458)</sup> <sup>(459)</sup> <sup>(460)</sup> <sup>(461)</sup> <sup>(462)</sup> <sup>(463)</sup> <sup>(464)</sup> <sup>(465)</sup> <sup>(466)</sup> <sup>(467)</sup> <sup>(468)</sup> <sup>(469)</sup> <sup>(470)</sup> <sup>(471)</sup> <sup>(472)</sup> <sup>(473)</sup> <sup>(474)</sup> <sup>(475)</sup> <sup>(476)</sup> <sup>(477)</sup> <sup>(478)</sup> <sup>(479)</sup> <sup>(480)</sup> <sup>(481)</sup> <sup>(482)</sup> <sup>(483)</sup> <sup>(484)</sup> <sup>(485)</sup> <sup>(486)</sup> <sup>(487)</sup> <sup>(488)</sup> <sup>(489)</sup> <sup>(490)</sup> <sup>(491)</sup> <sup>(492)</sup> <sup>(493)</sup> <sup>(494)</sup> <sup>(495)</sup> <sup>(496)</sup> <sup>(497)</sup> <sup>(498)</sup> <sup>(499)</sup> <sup>(500)</sup> <sup>(501)</sup> <sup>(502)</sup> <sup>(503)</sup> <sup>(504)</sup> <sup>(505)</sup> <sup>(506)</sup> <sup>(507)</sup> <sup>(508)</sup> <sup>(509)</sup> <sup>(510)</sup> <sup>(511)</sup> <sup>(512)</sup> <sup>(513)</sup> <sup>(514)</sup> <sup>(515)</sup> <sup>(516)</sup> <sup>(517)</sup> <sup>(518)</sup> <sup>(519)</sup> <sup>(520)</sup> <sup>(521)</sup> <sup>(522)</sup> <sup>(523)</sup> <sup>(524)</sup> <sup>(525)</sup> <sup>(526)</sup> <sup>(527)</sup> <sup>(528)</sup> <sup>(529)</sup> <sup>(530)</sup> <sup>(531)</sup> <sup>(532)</sup> <sup>(533)</sup> <sup>(534)</sup> <sup>(535)</sup> <sup>(536)</sup> <sup>(537)</sup> <sup>(538)</sup> <sup>(539)</sup> <sup>(540)</sup> <sup>(541)</sup> <sup>(542)</sup> <sup>(543)</sup> <sup>(544)</sup> <sup>(545)</sup> <sup>(546)</sup> <sup>(547)</sup> <sup>(548)</sup> <sup>(549)</sup> <sup>(550)</sup> <sup>(551)</sup> <sup>(552)</sup> <sup>(553)</sup> <sup>(554)</sup> <sup>(555)</sup> <sup>(556)</sup> <sup>(557)</sup> <sup>(558)</sup> <sup>(559)</sup> <sup>(560)</sup> <sup>(561)</sup> <sup>(562)</sup> <sup>(563)</sup> <sup>(564)</sup> <sup>(565)</sup> <sup>(566)</sup> <sup>(567)</sup> <sup>(568)</sup> <sup>(569)</sup> <sup>(570)</sup> <sup>(571)</sup> <sup>(572)</sup> <sup>(573)</sup> <sup>(574)</sup> <sup>(575)</sup> <sup>(576)</sup> <sup>(577)</sup> <sup>(578)</sup> <sup>(579)</sup> <sup>(580)</sup> <sup>(581)</sup> <sup>(582)</sup> <sup>(583)</sup> <sup>(584)</sup> <sup>(585)</sup> <sup>(586)</sup> <sup>(587)</sup> <sup>(588)</sup> <sup>(589)</sup> <sup>(590)</sup> <sup>(591)</sup> <sup>(592)</sup> <sup>(593)</sup> <sup>(594)</sup> <sup>(595)</sup> <sup>(596)</sup> <sup>(597)</sup> <sup>(598)</sup> <sup>(599)</sup> <sup>(600)</sup> <sup>(601)</sup> <sup>(602)</sup> <sup>(603)</sup> <sup>(604)</sup> <sup>(605)</sup> <sup>(606)</sup> <sup>(607)</sup> <sup>(608)</sup> <sup>(609)</sup> <sup>(610)</sup> <sup>(611)</sup> <sup>(612)</sup> <sup>(613)</sup> <sup>(614)</sup> <sup>(615)</sup> <sup>(616)</sup> <sup>(617)</sup> <sup>(618)</sup> <sup>(619)</sup> <sup>(620)</sup> <sup>(621)</sup> <sup>(622)</sup> <sup>(623)</sup> <sup>(624)</sup> <sup>(625)</sup> <sup>(626)</sup> <sup>(627)</sup> <sup>(628)</sup> <sup>(629)</sup> <sup>(630)</sup> <sup>(631)</sup> <sup>(632)</sup> <sup>(633)</sup> <sup>(634)</sup> <sup>(635)</sup> <sup>(636)</sup> <sup>(637)</sup> <sup>(638)</sup> <sup>(639)</sup> <sup>(640)</sup> <sup>(641)</sup> <sup>(642)</sup> <sup>(643)</sup> <sup>(644)</sup> <sup>(645)</sup> <sup>(646)</sup> <sup>(647)</sup> <sup>(648)</sup> <sup>(649)</sup> <sup>(650)</sup> <sup>(651)</sup> <sup>(652)</sup> <sup>(653)</sup> <sup>(654)</sup> <sup>(655)</sup> <sup>(656)</sup> <sup>(657)</sup> <sup>(658)</sup> <sup>(659)</sup> <sup>(660)</sup> <sup>(661)</sup> <sup>(662)</sup> <sup>(663)</sup> <sup>(664)</sup> <sup>(665)</sup> <sup>(666)</sup> <sup>(667)</sup> <sup>(668)</sup> <sup>(669)</sup> <sup>(670)</sup> <sup>(671)</sup> <sup>(672)</sup> <sup>(673)</sup> <sup>(674)</sup> <sup>(675)</sup> <sup>(676)</sup> <sup>(677)</sup> <sup>(678)</sup> <sup>(679)</sup> <sup>(680)</sup> <sup>(681)</sup> <sup>(682)</sup> <sup>(683)</sup> <sup>(684)</sup> <sup>(685)</sup> <sup>(686)</sup> <sup>(687)</sup> <sup>(688)</sup> <sup>(689)</sup> <sup>(690)</sup> <sup>(691)</sup> <sup>(692)</sup> <sup>(693)</sup> <sup>(694)</sup> <sup>(695)</sup> <sup>(696)</sup> <sup>(697)</sup> <sup>(698)</sup> <sup>(699)</sup> <sup>(700)</sup> <sup>(701)</sup> <sup>(702)</sup> <sup>(703)</sup> <sup>(704)</sup> <sup>(705)</sup> <sup>(706)</sup> <sup>(707)</sup> <sup>(708)</sup> <sup>(709)</sup> <sup>(710)</sup> <sup>(711)</sup> <sup>(712)</sup> <sup>(713)</sup> <sup>(714)</sup> <sup>(715)</sup> <sup>(716)</sup> <sup>(717)</sup> <sup>(718)</sup> <sup>(719)</sup> <sup>(720)</sup> <sup>(721)</sup> <sup>(722)</sup> <sup>(723)</sup> <sup>(724)</sup> <sup>(725)</sup> <sup>(726)</sup> <sup>(727)</sup> <sup>(728)</sup> <sup>(729)</sup> <sup>(730)</sup> <sup>(731)</sup> <sup>(732)</sup> <sup>(733)</sup> <sup>(734)</sup> <sup>(735)</sup> <sup>(736)</sup> <sup>(737)</sup> <sup>(738)</sup> <sup>(739)</sup> <sup>(740)</sup> <sup>(741)</sup> <sup>(742)</sup> <sup>(743)</sup> <sup>(744)</sup> <sup>(745)</sup> <sup>(746)</sup> <sup>(747)</sup> <sup>(748)</sup> <sup>(749)</sup> <sup>(750)</sup> <sup>(751)</sup> <sup>(752)</sup> <sup>(753)</sup> <sup>(754)</sup> <sup>(755)</sup> <sup>(756)</sup> <sup>(757)</sup> <sup>(758)</sup> <sup>(759)</sup> <sup>(760)</sup> <sup>(761)</sup> <sup>(762)</sup> <sup>(763)</sup> <sup>(764)</sup> <sup>(765)</sup> <sup>(766)</sup> <sup>(767)</sup> <sup>(768)</sup> <sup>(769)</sup> <sup>(770)</sup> <sup>(771)</sup> <sup>(772)</sup> <sup>(773)</sup> <sup>(774)</sup> <sup>(775)</sup> <sup>(776)</sup> <sup>(777)</sup> <sup>(778)</sup> <sup>(779)</sup> <sup>(780)</sup> <sup>(781)</sup> <sup>(782)</sup> <sup>(783)</sup> <sup>(784)</sup> <sup>(785)</sup> <sup>(786)</sup> <sup>(787)</sup> <sup>(788)</sup> <sup>(789)</sup> <sup>(790)</sup> <sup>(791)</sup> <sup>(792)</sup> <sup>(793)</sup> <sup>(794)</sup> <sup>(795)</sup> <sup>(796)</sup> <sup>(797)</sup> <sup>(798)</sup> <sup>(799)</sup> <sup>(800)</sup> <sup>(801)</sup> <sup>(802)</sup> <sup>(803)</sup> <sup>(804)</sup> <sup>(805)</sup> <sup>(806)</sup> <sup>(807)</sup> <sup>(808)</sup> <sup>(809)</sup> <sup>(810)</sup> <sup>(811)</sup> <sup>(812)</sup> <sup>(813)</sup> <sup>(814)</sup> <sup>(815)</sup> <sup>(816)</sup> <sup>(817)</sup> <sup>(818)</sup> <sup>(819)</sup> <sup>(820)</sup> <sup>(821)</sup> <sup>(822)</sup> <sup>(823)</sup> <sup>(824)</sup> <sup>(825)</sup> <sup>(826)</sup> <sup>(827)</sup> <sup>(828)</sup> <sup>(829)</sup> <sup>(830)</sup> <sup>(831)</sup> <sup>(832)</sup> <sup>(833)</sup> <sup>(834)</sup> <sup>(835)</sup> <sup>(836)</sup> <sup>(837)</sup> <sup>(838)</sup> <sup>(839)</sup> <sup>(840)</sup> <sup>(841)</sup> <sup>(842)</sup> <sup>(843)</sup> <sup>(844)</sup> <sup>(845)</sup> <sup>(846)</sup> <sup>(847)</sup> <sup>(848)</sup> <sup>(849)</sup> <sup>(850)</sup> <sup>(851)</sup> <sup>(852)</sup> <sup>(853)</sup> <sup>(854)</sup> <sup>(855)</sup> <sup>(856)</sup> <sup>(857)</sup> <sup>(858)</sup> <sup>(859)</sup> <sup>(860)</sup> <sup>(861)</sup> <sup>(862)</sup> <sup>(863)</sup> <sup>(864)</sup> <sup>(865)</sup> <sup>(866)</sup> <sup>(867)</sup> <sup>(868)</sup> <sup>(869)</sup> <sup>(870)</sup> <sup>(871)</sup> <sup>(872)</sup> <sup>(873)</sup> <sup>(874)</sup> <sup>(875)</sup> <sup>(876)</sup> <sup>(877)</sup> <sup>(878)</sup> <sup>(879)</sup> <sup>(880)</sup> <sup>(881)</sup> <sup>(882)</sup> <sup>(883)</sup> <sup>(884)</sup> <sup>(885)</sup> <sup>(886)</sup> <sup>(887)</sup> <sup>(888)</sup> <sup>(889)</sup> <sup>(890)</sup> <sup>(891)</sup> <sup>(892)</sup> <sup>(893)</sup> <sup>(894)</sup> <sup>(895)</sup> <sup>(896)</sup> <sup>(897)</sup> <sup>(898)</sup> <sup>(899)</sup> <sup>(900)</sup> <sup>(901)</sup> <sup>(902)</sup> <sup>(903)</sup> <sup>(904)</sup> <sup>(905)</sup> <sup>(906)</sup> <sup>(907)</sup> <sup>(908)</sup> <sup>(909)</sup> <sup>(910)</sup> <sup>(911)</sup> <sup>(912)</sup> <sup>(913)</sup> <sup>(914)</sup> <sup>(915)</sup> <sup>(916)</sup> <sup>(917)</sup> <sup>(918)</sup> <sup>(919)</sup> <sup>(920)</sup> <sup>(921)</sup> <sup>(922)</sup> <sup>(923)</sup> <sup>(924)</sup> <sup>(925)</sup> <sup>(926)</sup> <sup>(927)</sup> <sup>(928)</sup> <sup>(929)</sup> <sup>(930)</sup> <sup>(931)</sup> <sup>(932)</sup> <sup>(933)</sup> <sup>(934)</sup> <sup>(935)</sup> <sup>(936)</sup> <sup>(937)</sup> <sup>(938)</sup> <sup>(939)</sup> <sup>(940)</sup> <sup>(941)</sup> <sup>(942)</sup> <sup>(943)</sup> <sup>(944)</sup> <sup>(945)</sup> <sup>(946)</sup> <sup>(947)</sup> <sup>(948)</sup> <sup>(949)</sup> <sup>(950)</sup> <sup>(951)</sup> <sup>(952)</sup> <sup>(953)</sup> <sup>(954)</sup> <sup>(955)</sup> <sup>(956)</sup> <sup>(957)</sup> <sup>(958)</sup> <sup>(959)</sup> <sup>(960)</sup> <sup>(961)</sup> <sup>(962)</sup> <sup>(963)</sup> <sup>(964)</sup> <sup>(965)</sup> <sup>(966)</sup> <sup>(967)</sup> <sup>(968)</sup> <sup>(969)</sup> <sup>(970)</sup> <sup>(971)</sup> <sup>(972)</sup> <sup>(973)</sup> <sup>(974)</sup> <sup>(975)</sup> <sup>(976)</sup> <sup>(977)</sup> <sup>(978)</sup> <sup>(979)</sup> <sup>(980)</sup> <sup>(981)</sup> <sup>(982)</sup> <sup>(983)</sup> <sup>(984)</sup> <sup>(985)</sup> <sup>(986)</sup> <sup>(987)</sup> <sup>(988)</sup> <sup>(989)</sup> <sup>(990)</sup> <sup>(991)</sup> <sup>(992)</sup> <sup>(993)</sup> <sup>(994)</sup> <sup>(995)</sup> <sup>(996)</sup> <sup>(997)</sup> <sup>(998)</sup> <sup>(999)</sup> <sup>(1000)</sup> <sup>(1001)</sup> <sup>(1002)</sup> <sup>(1003)</sup> <sup>(1004)</sup> <sup>(1005)</sup> <sup>(1006)</sup> <sup>(1007)</sup> <sup>(1008)</sup> <sup>(1009)</sup> <sup>(1010)</sup> <sup>(1011)</sup> <sup>(1012)</sup> <sup>(1013)</sup> <sup>(1014)</sup> <sup>(1015)</sup> <sup>(1016)</sup> <sup>(1017)</sup> <sup>(1018)</sup> <sup>(1019)</sup> <sup>(1020)</sup> <sup>(1021)</sup> <sup>(1022)</sup> <sup>(1023)</sup> <sup>(1024)</sup> <sup>(1025)</sup> <sup>(1026)</sup> <sup>(1027)</sup> <sup>(1028)</sup> <sup>(1029)</sup> <sup>(1030)</sup> <sup>(1031)</sup> <sup>(1032)</sup> <sup>(1033)</sup> <sup>(1034)</sup> <sup>(1035)</sup> <sup>(1036)</sup> <sup>(1037)</sup> <sup>(1038)</sup> <sup>(1039)</sup> <sup>(1040)</sup> <sup>(1041)</sup> <sup>(1042)</sup> <sup>(1043)</sup> <sup>(1044)</sup> <sup>(1045)</sup> <sup>(1046)</sup> <sup>(1047)</sup> <sup>(1048)</sup> <sup>(1049)</sup> <sup>(1050)</sup> <sup>(1051)</sup> <sup>(1052)</sup> <sup>(1053)</sup> <sup>(1054)</sup> <sup>(1055)</sup> <sup>(1056)</sup> <sup>(1057)</sup> <sup>(1058)</sup> <sup>(1059)</sup> <sup>(1060)</sup> <sup>(1061)</sup> <sup>(1062)</sup> <sup>(1063)</sup> <sup>(1064)</sup> <sup>(1065)</sup> <sup>(1066)</sup> <sup>(1067)</sup> <sup>(1068)</sup> <sup>(1069)</sup> <sup>(1070)</sup> <sup>(1071)</sup> <sup>(1072)</sup> <sup>(1073)</sup> <sup>(1074)</sup> <sup>(1075)</sup> <sup>(1076)</sup> <sup>(1077)</sup> <sup>(1078)</sup> <sup>(1079)</sup> <sup>(1080)</sup> <sup>(1081)</sup> <sup>(1082)</sup> <sup>(1083)</sup> <sup>(1084)</sup> <sup>(1085)</sup> <sup>(1086)</sup> <sup>(1087)</sup> <sup>(1088)</sup> <sup>(1089)</sup> <sup>(1090)</sup> <sup>(1091)</sup> <sup>(1092)</sup> <sup>(1093)</sup> <sup>(1094)</sup> <sup>(1095)</sup> <sup>(1096)</sup> <sup>(1097)</sup> <sup>(1098)</sup> <sup>(1099)</sup> <sup>(1100)</sup> <sup>(1101)</sup> <sup>(1102)</sup> <sup>(1103)</sup> <sup>(1104)</sup> <sup>(1105)</sup> <sup>(1106)</sup> <sup>(1107)</sup> <sup>(1108)</sup> <sup>(1109)</sup> <sup>(1110)</sup> <sup>(1111)</sup> <sup>(1112)</sup> <sup>(1113)</sup> <sup>(1114)</sup> <sup>(1115)</sup> <sup>(1116)</sup> <sup>(1117)</sup> <sup>(1118)</sup> <sup>(1119)</sup> <sup>(1120)</sup> <sup>(1121)</sup> <sup>(1122)</sup> <sup>(1123)</sup> <sup>(1124)</sup> <sup>(1125)</sup> <sup>(1126)</sup> <sup>(1127)</sup> <sup>(1128)</sup> <sup>(1129)</sup> <sup>(1130)</sup> <sup>(1131)</sup> <sup>(1132)</sup> <sup>(1133)</sup> <sup>(1134)</sup> <sup>(1135)</sup> <sup>(1136)</sup> <sup>(1137)</sup> <sup>(1138)</sup> <sup>(1139)</sup> <sup>(1140)</sup> <sup>(1141)</sup> <sup>(1142)</sup> <sup>(1143)</sup> <sup>(1144)</sup> <sup>(1145)</sup> <sup>(1146)</sup> <sup>(1147)</sup> <sup>(1148)</sup> <sup>(1149)</sup> <sup>(1150)</sup> <sup>(1151)</sup> <sup>(1152)</sup> <sup>(1153)</sup> <sup>(1154)</sup> <sup>(1155)</sup> <sup>(1156)</sup> <sup>(1157)</sup> <sup>(1158)</sup> <sup>(1159)</sup> <sup>(1160)</sup> <sup>(1161)</sup> <sup>(1162)</sup> <sup>(1163)</sup> <sup>(1164)</sup> <sup>(1165)</sup> <sup>(1166)</sup> <sup>(1167)</sup> <sup>(1168)</sup> <sup>(1169)</sup> <sup>(1170)</sup> <sup>(1171)</sup> <sup>(1172)</sup> <sup>(1173)</sup> <sup>(1174)</sup> <sup>(1175)</sup> <sup>(1176)</sup> <sup>(1177)</sup> <sup>(1178)</sup> <sup>(1179)</sup> <sup>(1180)</sup> <sup>(1181)</sup> <sup>(1182)</sup> <sup>(1183)</sup> <sup>(1184)</sup> <sup>(1185)</sup> <sup>(1186)</sup> <sup>(1187)</sup> <sup>(1188)</sup> <sup>(1189)</sup> <sup>(1190)</sup> <sup>(1191)</sup> <sup>(1192)</sup> <sup>(1193)</sup> <sup>(1194)</sup> <sup>(1195)</sup> <sup>(1196)</sup> <sup>(1197)</sup> <sup>(1198)</sup> <sup>(1199)</sup> <sup>(1200)</sup> <sup>(1201)</sup> <sup>(1202)</sup> <sup>(1203)</sup> <sup>(1204)</sup> <sup>(1205)</sup> <sup>(1206)</sup> <sup>(1207)</sup> <sup>(1208)</sup> <sup>(1209)</sup> <sup>(1210)</sup> <sup>(1211)</sup> <sup>(1212)</sup> <sup>(1213)</sup> <sup>(1214)</sup> <sup>(1215)</sup> <sup>(1216)</sup> <sup>(1217)</sup> <sup>(1218)</sup> <sup>(1219)</sup> <sup>(1220)</sup> <sup>(1221)</sup> <sup>(1222)</sup> <sup>(1223)</sup> <sup>(1224)</sup> <sup>(1225)</sup> <sup>(1226)</sup> <sup>(1227)</sup> <sup>(1228)</sup> <sup>(1229)</sup> <sup>(1230)</sup> <sup>(1231)</sup> <sup>(1232)</sup> <sup>(1233)</sup> <sup>(1234)</sup> <sup>(1235)</sup> <sup>(1236)</sup> <sup>(1237)</sup> <sup>(1238)</sup> <sup>(1239)</sup> <sup>(1240)</sup> <sup>(1241)</sup> <sup>(1242)</sup> <sup>(1243)</sup> <sup>(1244)</sup> <sup>(1245)</sup> <sup>(1246)</sup> <sup>(1247)</sup> <sup>(1248)</sup> <sup>(1249)</sup> <sup>(1250)</sup> <sup>(1251)</sup> <sup>(1252)</sup> <sup>(1253)</sup> <sup>(1254)</sup> <sup>(1255)</sup> <sup>(1256)</sup> <sup>(1257)</sup> <sup>(1258)</sup> <sup>(1259)</sup> <sup>(1260)</sup> <sup>(1261)</sup> <sup>(1262)</sup> <sup>(1263)</sup> <sup>(1264)</sup> <sup>(1265)</sup> <sup>(1266)</sup> <sup>(1267)</sup> <sup>(1268)</sup> <sup>(1269)</sup> <sup>(1270)</sup> <sup>(1271)</sup> <sup>(1272)</sup> <sup>(</sup>



〔序〕

- 註 1. 『一切宗義』第二章を含む科文を示すと、  
「チベットに宗義の生じた様子」 bod du grub mthaḥ byuñ tshul (Kha, 1b, 2)
- I) spyir sañs rgyas kyi bstan pa byuñ tshul
    - I-1) bstan pa sna dar byuñ baḥi tshul (Kha, 2a, 2)
    - I-2) phyi dar byuñ baḥi tshul (Kha, 3b, 5)
  - II) bye brag tu grub mthaḥ mi ḥdra ba byuñ tshul (Kha, 5a, 3)
    - II-1) grub mthaḥ gshan gyi byuñ tshul (Kha, 5b, 4)
      - II-1-1) rñiñ ma pa (Kha, 5b, 5)
        - II-1-1-1) spyir gsar rñiñ gi dbye mtshams nios bzuñ ba (Kha, 5b, 6)
        - II-1-1-2) bye brag tu rñiñ ma paḥi byuñ tshul bḥad pa (Kha, 7a, 1)
          - <1> ji ltar byuñ ba (Kha, 7a, 2)
          - <2> grub mthaḥi ḥdod tshul (Kha, 14a, 2)
          - <3> de la cuñ zad dpyod pa (Kha, 16b, 2)
          - <4> phyis kyi byuñ ba ḥgaḥ shig brjod ba (Kha, 18b, 4)
      - II-1-2) bKaḥ gdams pa
      - II-1-3) bKaḥ rgyud pa
      - II-1-4) Shi byed pa
      - II-1-5) Sa skya pa
      - II-1-6) Jo nañ pa
      - II-1-7) Ñi tshe pa
    - II-2) dGe lugs paḥi byuñ tshul
  - III) ḥphros don du mdo snags rig gnas byuñ tsul
  - IV) shar byuñ du bon gyi lugs srol byuñ tshul

以上のうち、第二章は I) と II-1-1) である。本論文で訳出したのは、II-1-1-2) のみである。「二番目」というのは、II-1-1-1) に対する II-1-1-2) であるからである。

<1・1>

- 註 1. (581~649)。吐蕃王朝を統一国家にした王。歴史的に見て、この王のときに、最初に仏教がチベットに導入せられた。しかし、この時代の仏教は宮廷内の一部分に伝えられたのみである。「チベ仏教」 pp.231~233。『チベ文化』 pp.46~52。
- 註 2. Omī-maṇi-padme-ḥum の六文字。観音への祈禱とこの六文字の導入の記述は、DTN, Ga, 2b, 3 に依ったものと思われる。
- 註 3. 書名。TBH, 350A-2611。THL, pp.28~32。
- 註 4. (742~797)。「チベ仏教」 pp.234~250。『チベ文化』 pp.56~60。
- 註 5. 北インドのナーランダ Nālanda の僧院の最もすぐれた学者。「チベ仏教」 pp.236~243。『チベ文化』 pp.57~58。
- 註 6. 十悪をしないこと。十悪とは、殺生、偷盗、邪淫、妄語、兩舌、惡口、綺語、貪欲、瞋恚、邪見。
- 註 7. 原始仏教で言う諸法の範疇。一切諸法はすべてこれらに収まる。六根と六境と六識である。なお、「界」は dhātu で、ここでは種類という意味。『仏学辞』 p.238 参照。
- 註 8. 八聖道のこと。八支正道とも呼ばれる。正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定である。これに反するものは、八邪(行)と呼ばれる。
- 註 9. 以下の記述, PSJ, 242 下 a, 7。Das 版 p.383 参照。PSJ では他に lha gñan dgu もあげる。
- 註 10. ODT, p.94 etc 参照。のちに、ニンマ派の護法神にされる。山の神。
- 註 11. ODT, p.95 etc 参照。この神ものちにニンマ派の護法神にされる。
- 註 12. ツァンボ河の南にあり、吐蕃王朝があった地方。
- 註 13. 女神ドルジュェグェドゥンマ rDo rje gyu sgron ma (ODT, p.95) と一人の眷族たちである。これらも、後に、ニンマ派の護法神に入れられた。ODT, pp.181~198 にその詳しい説明がなされている。それらの神名のみをあげておく。
1. rDo rje Kun grags ma
  2. rDo rje gyaḥ ma skyoñ
  3. rDo rje Kun tu bzañ

4. rDo rje bgegs kyi gtsa
5. rDo rje spyang gcig ma
6. rDo rje dpay gyi yum
7. rDo rje klu mo
8. rDo rje drag mo rgyal
9. rDo rje bod khams skyon
10. rDo rje sman gcig ma
11. rDo rje gyaḥ ma bsil
12. rDo rje gzugs legs ma (= rDo rje gyu sgron ma ? p.190)

これら十二の地神 (Tussaint はこれらの神群を rGya gar brtan ma と呼んでいる) は、他の神群 Tshe rin mched lña に従属するものである。なお、ボン教の Bar do thos sgröl からの十二の地神 (bsTan ma) は、TPS, II, p. 741, note 41 に記されている。

註 14. ボン教の呪術に対するために呼ばれたのである。ウッディヤナ Uḍḍyana (= Orgyan) のタントリストである。773 年に入蔵。彼については異説が多い。PSJ, 241a, 4~243a, 1 (Das 版, pp. 380~384) はバドマンバヴァに関する記述である。スムバケンボ (PSJ の著者) は、信すべき説として、バドマサンバヴァはチベットに十八ヶ月ほど滞在して、その間に鬼神調伏、サムイェの地鎮祭などをした、その後、ダーミドディバ Ḍamidodripa といわれるトディン ḥGro ldiñ の小島に行き、そこを仏教国にして、その後、ガヤプリン rŅa yab gliñ に去った。バドマサンバヴァがチベットから帰ってのち、黒い服、帽子、鳥の羽根をつけた偽者があらわれて、酒と女に耽り、誤った法を鼓吹したという。他に TPS, p. 87 にも彼に関する記述がある。そこには、彼の別名 Padmākar, Mahāpadmavajra, Mahāsukha padma etc もあげられている。「チベ仏教」 pp. 237, 241。『チベ文化』 p. 58。

註 15. Zan yan とは、中国語の「三樣」に由来する。「三樣」に関しては、CTI, p. 106, 註 2 参照。775 年に着工され、787 年にシャーンタラクシタによって落慶法要された。オタンタプリ (あるいはナーランダ) の寺院をモデルにしたといわれる (cf, 『チベ文化』 p. 58, 「チベ仏教」 p. 237)。789 年に仏具・仏像を配する。この同じ年に、チベットで初めて出家者がつくられる。「試みの七人」(Sa mi mi bdun) である。(実際には六人。後に一人が混入せられた。「チベ仏教」 p. 238)。

註 16. いわゆる「二十五大成就者」のこと。GÇM は DTN と PSJ を資料として、これらを記す。DC, 88a, 1~88b, 5。また、DC, 89b, 1~2 には他のいろいろな成就者を示す。即ち、

- 「チンプの二十五大成就者」(mchims phuḥi grub chen ñer lña, 今, GÇM の記すもの)
- 「ソンの五十五人の大悟者」(rdzoñ gi rtogs ldan ña lña)
- 「イェルパとチョウォリの百八人の光身成就者」(yer pa dañ cho bo riḥi ḥod lus grub pa brgya brgyad)
- 「シェルダクの三十人の密呪者」(ḥel brag gi snags pa sum cu)
- 「光身逝去の二十五人のダーキニ」(ḥod skur gḥegs paḥi mkhaḥ ḥgro ñer lña)
- 「女性成就者」(grub pa thob paḥi bud med)

これらのうち、「二十五大成就者」と「女性成就者」は名が記されている。後者の名前に関しては、DC, 88b, 5~89b, 1, 『EVA』 p. 34 参照。

これら成就者たちは mahāyoga 乗の「修部」(sgrub sde) の「八教説」(bkaḥ brgyad) に依ったものと思われる。

註 17. PSJ, 244b, 7. Das 版, p. 387. DC, 88a, 1. DTN, Ga, 2a, 3。彼は「八教説」の法類のうち yan dag thugs を成就した。yan dag はフームカラ Hüm-kara によってチベットにもたらされた (DTN, Ga, 3a, 2)。MBT, p. 21 には中国禪の通熟者と記されている。

註 18. PSJ, 244b, 7. Das 版, p. 387. DC, 88a, 1。「八教説」の ḥjam dpal の法類を成就する。ḥjam dpal はシャーンティ (ム) ガルバ Ḥānti (m) -garbha によってチベットにもたらされた。シャーンティ (ム) ガルバについては、「チベ変容」 p. 27 参照。

註 19. PSJ, 244b, 7. Das 版, p. 387. DC, 88a, 2。「八教説」の dbaḥ chen (padma gsuñ) の法類を成就する。これはバドマサンバヴァによってチベットにもたらされた。

註 20. PSJ, 244b, 7. Das 版, p. 387. DC, 88a, 2。「八教説」の phur pa の法類を成就した。この法類はバドマサンバヴァによってチベットにもたらされた。また、このカルチェンツォギェルはイェツェツォギェル Ye ḥes mtsho rgyal と呼ばれ、チソンドツェン王の妃の一人である (cf, 『EVA』 p. 34)。

註 21. PSJ, 245a, 1. Das 版, p. 387. DC, 88a, 2. DC によれば、「八教説」

- の *ma mo* の法類を成就した。この法類はバドマサンバヴァがチベットにもたらしたもの。
- 註 22. PSJ, 245a, 1. Das 版, p.387. DC, 88a, 3. DC によれば「八教説」の *mchod bstod* の法類を成就した。これはバドマサンバヴァがチベットにもたらしたものだ。
- 註 23. PSJ, 245a, 1. Das 版, p.387. DTN, Ga, 2a, 4. DC, 88a, 3. DC によれば「八教説」の *drag snags* の法類を成就した。この法類はバドマサンバヴァがチベットにもたらしたものである。この箇所、DC には、智眼を得て、神変に自在になった、と記される。なお、このヴァイローチャナは「試みの六人」の一人であり、インドに留学してタントリストとして帰国し、後にカム地方に追放される者である。ゾクチェンの「心・界部」の始祖とされる。
- 註 24. PSJ, 245a, 1. Das 版, p.387. DC には不記。
- 註 25. PSJ, 245a, 1. Das 版, p.387. DC, 88a, 5. チソンドツェン王の妃の一人。DC には、黄金の仏身の金剛として化身する、と記される。
- 註 26. PSJ, 245a, 1. Das 版, p.387. DC, 88a, 4. DC には、潤れた岩から甘露を出す、と記す。
- 註 27. PSJ, 245a, 1. Das 版, p.387. DC, 88a, 5. DTN, Ga, 2a, 3. DC では, *sNa nam rDo rje bdud ḥjom*. 岩山を通り抜けた、と記す。
- 註 28. PSJ, 245a, 2. Das 版, p.387. DC, 88a, 5.
- 註 29. PSJ, 245a, 2. Das 版, p.387. DC, 88a, 6.
- 註 30. PSJ, 245a, 2. Das 版, p.387. DC, 88a, 6. DC では *sNa nam Ye ces sde*.
- 註 31. PSJ, 245a, 2. Das 版, p.387. DC, 88b, 1. DC では *mKhar chen dPal gyi dbaṅ phyug*. DC では、金剛杵をあげるのみによって、どんな敵(?) (*gzas pa po*) も呪殺すること (*sgrol*) ができた、と記す。
- 註 32. PSJ, 245a, 2. Das 版, p.387. DC, 88b, 1. 「Das 訳」 *lDan ma rtse yaṅ*.
- 註 33. PSJ, 245a, 2. Das 版, p.387. DC, 88b, 1. DC では, *sKa ba dPal brtsegs*. MBT, II, p.114 によると中国語の達人。中国禅に関係ある人と思われる。
- 註 34. PSJ, 245a, 3. Das 版, p.387. DC, 88b, 2.
- 註 35. PSJ, 245a, 3. Das 版, p.387. DTN, Ga, 2a, 3~4. DC, 88b, 2.

- DC と DTN では *ḥBre rgyal baḥi blo gros*.
- 註 36. PSJ, 245a, 3. Das 版, p.387. DC, 88b, 2. DC では, *ḥBrog ban Khye ḥu chuṅ lo tsā* は空の鳥を看法 (*lta stāns*, この場合は煥視と同意) と指さすこと (*sdigs mdzub*) のみによって召いた (*ḥgugs*), と記す。
- 註 37. PSJ, 245a, 3. Das 版, p.387. DC には不記。
- 註 38. PSJ, 245a, 3. Das 版, p.387. DC, 88b, 3. DC では, *Ḥo bran dPal gyi dbaṅ phyug*.
- 註 39. PSJ, 245a, 3. Das 版, p.387. DC, 88b, 3. DC では *rMa Rin chen mchog*. 「試みの六人」の一人。MBT, p.18.
- 註 40. PSJ, 245a, 3. Das 版, p.387. DC, 88b, 4. DC では *lHa luṅ dPal gyi rdo rje*.
- 註 41. PSJ, 245a, 4. Das 版, p.387. DC, 88b, 4. DC では, *Laṅ gro dkon mchog ḥbyuṅ gnas*.
- 註 42. PSJ, 245a, 4. Das 版, p.387. DC, 88b, 4. DC では, *La gsum rgyal ba byaṅ chub*.
- 註 43. 「チベ変容」 p.27.
- 註 44. 彼が入蔵したのはチソンドツェン王のときと一般に言われる。資料によっては、チソンドツェン王の没後に入蔵したともされる(「チベ仏教」 p.242 参照)。「前」と「後」のヴィマラミトラがおり、ここでは「前」のヴィマラミトラのこと。*mahā-yoga* 乗の「タントラ部」(*rgyud sde*) の始祖であり、ゾクチェンの始祖とも言い伝えられる。
- 註 45. *Buddha Guhya*. DTN, Ga, 41a, 1. DC, 44a, 6~45b, 2. 「チベ変容」 pp.20, 23, 28~35.
- 註 46. 「八教説」の *ḥjam dPal sku* の法類をチベットにもたらした人。DTN, Ga, 3a, 1. DC, 87a, 6. 「チベ変容」 p.27.
- 註 47. 「チベ変容」 pp.24, 27, 28.
- 註 48. この箇所「Das 訳」は誤訳している。「Das 訳」 p.9, ll.7~12. *mahā-yoga* クラス以上のタントラ翻訳禁止については、「チベ仏教」 p.241. 沖本克己「*bsam yas* の宗論(二)」『西藏会報』第22号, 昭和51, p.6, 註10. *dPaḥ bo gtsug lag ḥphreṅ ba : mKhas paḥi dgaḥ ston*, vol. ja, *Çata Piṭaka series*, vol. 9(4), New Delhi, 1962, f. 105b. 「チベ変容」 pp.27, 29, 39~40, 50. 『密経典史』 p.249. 『密教歴史』 p.113.

註 49. この四人はいずれも有名なニンマ派の始祖。ヴァイローチャナはゾクチェン、他の三人は mahāyoga 乗の「タントラ部」(=「幻化網」の法類)の始祖として有名である。

註 50. ゾクチェン(=atiyoga 乗)の「心部」の中心タントラ。北京 No.451, 東北 No.828。

註 51. DTN, Ga, 26b, 1 に anuyoga 乗の根本タントラ Kun ḥdus rig paḥi mdo と説明のタントラ mDo dgoñs pa ḥdus pa と記されているうちの後者である。『大蔵経』に Kun ḥdus rig paḥi mdo の文字が含まれているものは、北京 No.452 と北京 No.454 が収められている。NGB, 253b, 2~6 を参考にすると、北京 No.452 が mDo dgoñs pa ḥdus pa に相当するようである。北京 No.454 が Kun ḥdus rig paḥi mdo に相当するかどうかは、定かでない。これら二つのタントラにより、anuyoga 乗は「ドゥパド」(ḥdus pa mdo, 「集経」)あるいは「経」(mdo)の系統と呼ばれる。

註 52. 「幻化網」の法類の中心タントラが、『サンワニンポ』gSañ ba sñin poである。これは『大蔵経』に収められている(北京 No.455, 東北 No.832)。これは mahāyoga 乗「タントラ部」の法類である。mahāyoga 乗の「タントラ部」は「幻化網」の法類を取り扱うので、mahāyoga 乗の系統が「幻化網」あるいは「幻」sgyu の系統と呼ばれることもある。

註 53. 「八教説」の法類は、mahāyoga 乗「修部」sgrub sde の法類である。「二十五大成就者」たちが依ったものである。チベットの土俗神も加えられている。「リアンチュ」pp.147~148。

註 54. チャク・ロツァーフ Chag lo tsā ba の言葉である。PSJ, 248a, 5~6。Das 版, p.392。PSJ には、ネパールのカルジン Ka ru ḥdzin といわれる者の心の中に、「テウラン」(The ḥu rañs, ポン教の神)が「ペハル」(Pe har, 神の名)として入り、ウルギェンサホルの服装でチベットに来た、と詳しく記す。

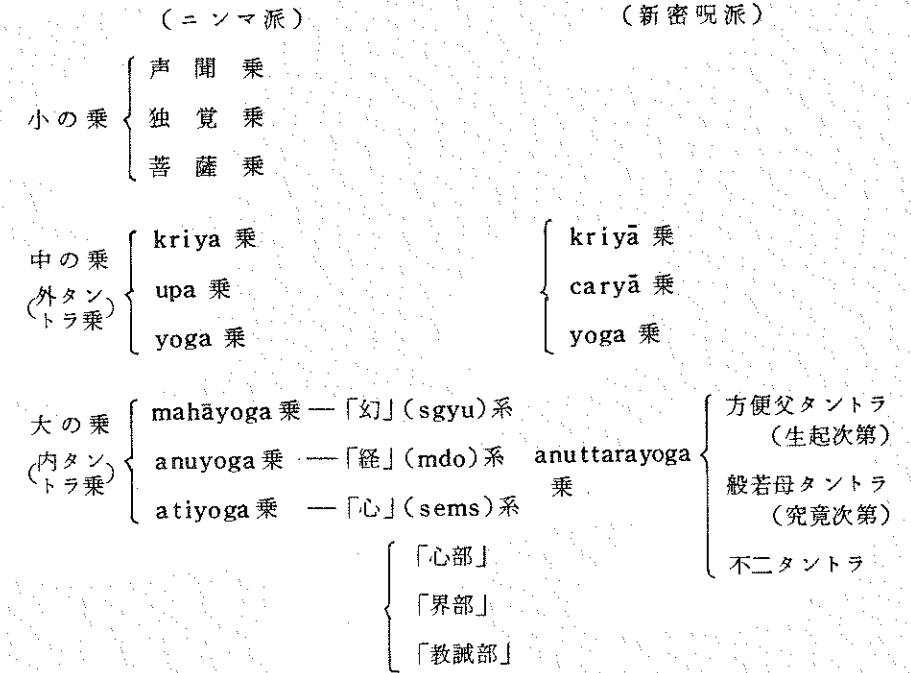
註 55. PSJ に上註 54 に示した簡書につづいて、よく似たチャク・ロツァーフの言葉がある(PSJ, 248a, 6~7。Das 版, p.392)。しかし、グルチョワン(1212~1270, <1・3>註 150)が、ウルギェンサホルの服装をつくったとは記されていない。ただ、パドマサンバヴァに変装したネパール人(上註 54)のあとにあらわれて、「埋蔵教説」の法を広めたと記すのみ。あるいは、GÇMはPSJ以外の資料を参考にしたとも考えられる。

ついでに言うと、チャク・ロツァーフはニンマの所依の諸タントラをチベット偽撰と

する(PSJ, 248a, 3~248b, 1。Das 版, p.392)。

<1・2>

註 1. 九乗の宗義を簡単に説明しておく。



小の乗は省略して、中の乗から説明する。kriya 乗は「作」を主にする。瞑想に関しては、六つの神(lha)を観ずることと、自己と智慧薩埵を主人と僕の様子で観ずることである。upa 乗は「見」は yoga 乗、「行」は kriya 乗と同一である。自己と智慧薩埵を兄弟か友の様子で観ずる。yoga 乗は「見」である瑜伽を主にする。「五現覚」と「四印」による。

内のタントラ三乗のうち、mahāyoga 乗には「タントラ部」と「修部」がある。前者は「新密呪」派の「幻化網」の法類と同一である。後者は「八教説」のことであり、ニンマ派特有のものも含まれる。anuyoga 乗は「界」(dbyiñs)と「智」(ye çes)の不二を体得するもの。atiyoga 乗ゾクチェンは密教の影響を認めうるものの、基本的には中国禅の頓悟思想である。

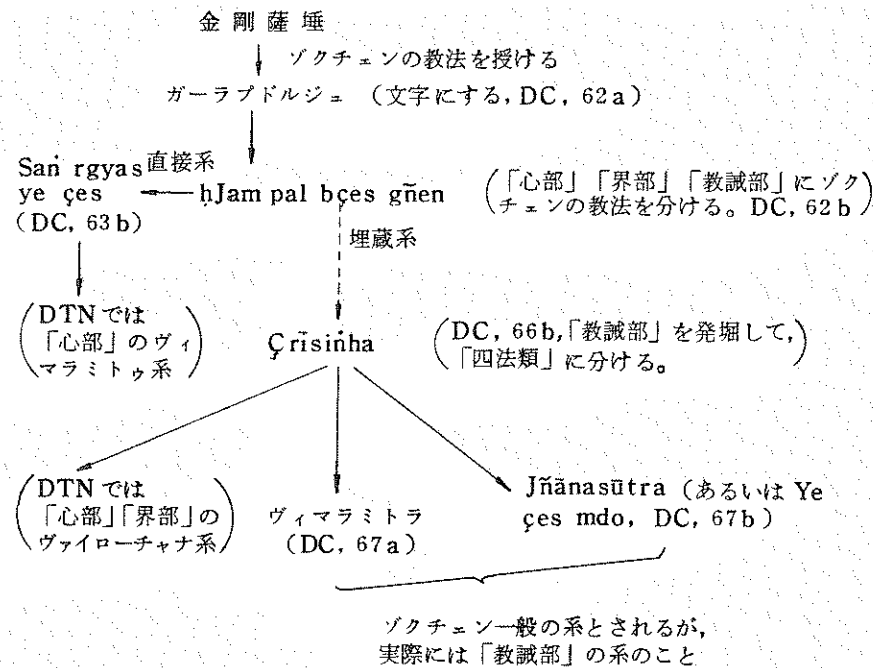
kriya 乗から anuyoga 乗までは、「新密呪」派と共通の部分もある。ただし、anuyoga 乗になると差異は大きくなる。atiyoga 乗はニンマ派独特のものである。

九乗の宗義関係の資料については、TPS, p.88。MBT, pp.61, 68~101,

137, 138. 『チベ文化』 p.177. 「チベ仏教」 p.270. 沖本克己「bSam yas の宗論(一) — pelliot 116 について」『西藏会報』第21号, 1975, p.7. H.V.Guenther: Buddhist philosophy in theory and practice, a Pelican Original, 1972, p.150 以下がある。

チベット文資料には, PSJ, 『五部実録』, SMG, 『七つの宝蔵』, DTN, GÇM などがある。

- 註 2. ~の状態, 「無上乘を」四時に教えた, とも訳せる。「無努力」「自然成就」「広がり切れることと偏倚することから離れたこと」はゾクチェンの基本概念である。最初のは三昧状態のことで「無分別」に通ずる。二番目のものは、「ゾクチェンの四義」のうちの一つである。三番目のものは、やはり三昧状態をあらわす。
- 註 3. DC, 62a, 2. ゾクチェンの始祖の一人。以下ヴィマラミトラまで系統を示す。



(cf. 『EVa』 p.27)

このうちでは、中国人 Çrīsinha が重要である。ヴァイローチャナは「心・界部」の系統から補ったもの。

- 註 4. 本論本文 III の(2), pp. 8, 11 及び本論註 III, 註 8~13 参照。

<1・3>

- 註 1. 本論本文 III の(3), pp. 8~10 及び本論註 III, 註 1~3 参照。
- 註 2. このうち、「幻化網」は mahāyoga 乗, 「ドゥパド」は anuyoga 乗の系統をあらわす。これらの呼称の理由については, <1・1> 註 51, 52 参照。  
「セムチョク」に関しては, atiyoga ゾクチェン一般を「セムチョク」と呼ぶ場合もあり, ゾクチェンの「心部」を「セムチョク」と呼ぶ場合もあるから, 注意する必要がある。この場合は, ゾクチェン一般を指す。
- 註 3. 『大藏経』に収められている。北京 No.455, 東北 No.832, <1・1> 註 52 参照。DC, 86a, 5 では「十八大タントラの根本, 幻化網『サンワニンポ』の法類 [の] 幻化網八部」(tantra chen po sde bco brgyad kyi spyi ham rtsa bar gyur pa rdo rje sems dpañ sgyu hphrul drwa ba gSañ ba sñin po hi skor sgyu hphrul sde brgyad) を伝える系統と記す。
- 註 4. GÇM の「遠伝伝説」の歴史は DTN の要約といえる。それゆえ, DTN の該当箇所と補足事項を以下に註記する。DTN, Ga, 3b, 6. DC, 86a, 6. ヴィマラミトラは mahāyoga 乗とゾクチェンをチベットにもたらしたとされる。<1・1> 註 44 参照。
- 註 5. DTN, Ga, 3b, 4. DC, 86a, 6. PSJ, 244a, 7. Das 版, p.386. <1・1> 註 39 参照。
- 註 6. DTN, Ga, 3b, 5. DC, 86a, 6.
- 註 7. DTN, Ga, 3b, 5. DC, 86b, 1. DC では Kye re mchog skyon.
- 註 8. DTN, Ga, 3b, 5. DC, 86b, 1.
- 註 9. DTN, Ga, 3b, 5. DC, 86b, 1.
- 註 10. これは「カーチムブワ」(bkañ ḥchims phu ba) と呼ばれる (DTN, Ga, 3b, 5)。
- 註 11. 以下に記される「ウ流」「カム流」は DTN によれば, ダルジェ・ベルギダクパからのもの (DTN, Ga, 3b, 6)。GÇM の記述は, その点があいまいである。
- 註 12. DC, 86b, 3 ではバドマサンバヴァになっており, 弟子のニャク・ジュニャクマーラに Man ñag Ita bañi phren ba を授けたと記す。
- 註 13. DTN, Ga, 4a, 1. DC, 86b, 3. PSJ, 245b, 7. Das 版, p.388.
- 註 14. DTN, Ga, 4a, 1. DC, 86b, 4 と 139b, 3~4.
- 註 15. DTN, Ga, 4a, 1. DC, 86b, 5 と 140a, 4. PSJ, 245b, 4 と 7 及び 246a, 3. Das 版 pp.388, 389. ヌブ・サンギェイェジェのこと。レルワチェン

Ral ba can (806~841) からチタシツェクパベル王 Khri bkra çis  
brtsegs pa dpal の間の人。

註 16. DTN, Ga, 4a, 3. DC, 144b, 2. PSJ, 246a, 4. Das 版, p.389。

註 17. チベットでは弟子を分類する場合に、「御身の弟子」(skuhi sras)「御語の弟子」(gsun gyi sras)「御意の弟子」(thugs sras)と形容されることがある。この場合は、「御意の弟子」にあたる。また, thugs sras のみのときは、「直弟子」と訳した場合もある。

註 18. スブ・サンギェイェシエの弟子たちを示す。

So Ye çes dbaŋ phyug  
Pa gor Blon chen phags pa  
Ñan Yon tan mchog  
Gru legs paŋi sgron ma (DCでは Sruhi ston pa legs paŋi  
sgron me)  
Yon tan rgya mtso

DTN, Ga, 4a, 3~6. DC, 144b, 1~146a, 2。

このうちで, So Ye çes dbaŋ phyug と Yon tan rgya mtso の系統が続く。前者は「ソ」So 系と呼ばれ, 後者は「スル」Zur 系に到る。

なお, 注意することは, DTNによると弟子たちに伝えられた教法のうち, Ita ba sgaŋ dril と star ka gegs sel と gab pa mñon du phyuŋ はゾクチュン「教誡部」に属するものである。この記述による限り, 「教誡部」の一部は「前期弘通期」成立ということになるが, 「無上秘密の法類」に見られるような密教色の濃い, 「教誡部」に特有な教法は「前期弘通期」に成立していなかったと推定される。

(DTNの訳者, G.N.Roerich が Ita ba sgaŋ dril を theory, star ka gegs sel を the hinderance of bleeding, gab pa mñon du phyuŋ を having revealed the Hidden と訳するのは, 本当の意味を伝えていない。BA, pp.108, 109)

註 19. DTN, Ga, 4a, 5. DC, 145a, 4~146a, 2. PSJ, 246a, 3~4. Das 版, p.389。

註 20. ユンテンギャツォの弟子たちを御子息を入れて示すと,

(御子息)

Ye çes rgya mtsho (DTN, Ga, 4a, 6. DC, 146a, 2~146b, 1) →  
→ IHa rje hum chun (DC, 146b, 3)  
(御子息)  
Padma dbaŋ rgyal (DTN, Ga, 4a, 6. DC, 146b, 1~3)  
Myaŋ Çes rab mchog (DTN, Ga, 4b, 4. DC, 146b, 4~6)

GÇMにユンテンの御父子とある御子とは上の二人を指す。

註 21. DTN, 4b, 4. DC, 146b, 4~6. PSJ, 246a, 4. Das 版, p.389。  
ゴク Nog にション gÇons 寺を建てた。略して, ニャン・シェチョク Myaŋ Çes mchog ともいわれる。DCでは IHa rje hum chun の弟子ともされる。このニャン・シェラブチョクから「ロン」Roŋ 系または「ニャン」Myaŋ 系と呼ばれるものが生じる。この「ロン」系をロンソム Roŋ zom の「ロン」系と混同しないように注意する必要がある。

また, ニャン・シェラブチョクの弟子は Myaŋ Ye çes hbyuŋ gnas (DTN, Ga, 4b, 5. DC, 146b, 4. PSJ, 246a, 4. Das 版, p.389) である。GÇMでは省略されている。Myaŋ Ye çes hbyuŋ gnas の弟子が, スルチェ Zur che である。

註 22. DTN, Ga, 4b, 5~6b, 3. DC, 147a, 4~164b, 1. PSJ, 246a, 4. Das 版, p.389。「リアンチェ」p.150によると 954年生まれ。彼以後の系統を「スル」Zur 系と呼ぶ。ニンマ派では重要な系統の一つである。スルチュン, ドブクパと合わせて「三人のスル」Zur gsum と呼ばれる。また, このスルポチェはウクバルン Hug pa luŋ の仏殿を建てたため, ウクバルン・パとも呼ばれる。そして, この「スル」系の「幻化網」の流儀は, ロンソム流 (=mthun moŋ ma yin pa), ロンチュンバ流 (=çin tu mthun moŋ ma yin pa) に対して, 「新密呪」派と共通なため, mthun moŋ pa (共通のもの) と呼ばれる(「リアンチェ」p.157)。

註 23. DTN, Ga, 5a, 6~7. DC, 151b, 2~4。「四頂」とは,

1. スルチュン・シェラブタクパ Zur chun Çes rab grags pa (1014~1074)。「見解の頂」(Ita dgoŋis kyi rtse mo)
2. ベンナムデのミニャクジュンタク Pan nam bres kyi Mi ñag hbyuŋ grags. DCでは Me ñags khyuŋ grags。「幻化網の一方向の説明の頂」

(sgyu hphrul gyi bçad pa phyogs gcig gi rtse mo)。

3. ラサのシャントゥチュンワ Ra zañi Shañ hgros chuñ ba。「智慧の頂」  
(mkhyen rgyañi rtse mo)。

4. ツォニャのサンゴムシェラブギェルポ ḥTsho ña kyī bZañ sgom çes  
rab rgyal po。「瞑想の頂」(sgom sgrub kyī rtse mo)。

これらのうちで、系統を継ぐのは、スルチュンである。

註 24. DTN, Ga, 5b, 1. DC, 151b, 4。「隠頂」はツァクテマ rTsags bla  
ma である。「男性的なことの頂」(pho zañi rtse mo)とも呼ばれる。彼は本  
当は八人の「隠頂」(DTN, Ga, 5b, 1~2)のうちの一入である。八人の「隠頂」  
とは、1. Ro rog 2. Ro thuñ çāk rgyal 3. rTa rol 4. rTsags  
bla ma (これが今問題の人) 6. Lol sgom 7. Sum pa blo rgya 8.  
Chags ston nam mkhañ である。

註 25. DTN, Ga, 5a, 6. DC, 151b, 5. DTNには名が記されていないが、  
DCにはそのうち六人が記されている。即ち、Gru sgom ḥgyiñ, Yul sgom  
nag mo, lCe sgom çāk rgyal, Zur sgom rdor ḥbyuñ, gYu sgom  
jo ḥbar, sGom pa bsod nams sñiñ po である。

註 26. (1014~1074)。DTN, Ga, 6b, 3~7a, 4. DC, 164b, 1~174a, 5.  
PSJ, 246a, 4. Das 版, p.389. 別名 bDe gçegs rgya po pa または、  
lHa rje chuñ ba。スルボチュの弟子の最良のもの。ドブクバ sGro phug  
pa の父でもある。仏教後期弘通時の十一世紀の各宗派群立のただなかで、生涯を送  
った。墮落した密教要素を取り除くなど後期弘通時におけるニンマ派内での教義の整  
理・確立に大きな役割を果たしたと思われる。

註 27. DTN, Ga, 8b, 6 と 9b, 3~4. DC, 169b, 2 と 171a, 5~6。「四柱」  
とは、

1. Guñ buñi sKyo ston Çāk yes。「セムチョクの柱」。
2. sKyeñ luñs gi Yañ kheñ bla ma。「経(mdo)の柱」。
3. Chu bar gyi Glan Çākya bzañ po。「幻化網の柱」。
4. Nag mo riñi mÑaḥ ti jo çāk。「事業(phrin sgrub)の柱」。

これら「四柱」に Ma thog byañ ḥbar を加えて、「五人の継承者」(brgyud  
pa lña)とも呼ばれる。

なお、家屋構造の用語によって、師弟継承をあらわすことは、チベットによく見ら  
れる。たとえば、マルベの弟子の「四柱」。『チベ文化』p.117 参照。

註 28. DTN, Ga, 8b, 6 と 9b, 4~5. DC, 169b, 3 と 171a, 6~171b, 2。  
「八梁」とは、1. Ma thog pa 2. sKya ston chos señ 3. Glan  
çākya byañ chub 4. rTsags Çāk riñs 5. sNubs sTon bag ma  
6. dBus pa Sa ḥthor 7. Su ston zla grags 8. rTse phrom  
byañ dpal

或る者はこれらの中に、A la gzi chen, Nañ rba sñiñ po, Ram ston  
rgyal ba を含めるという。

註 29. DTN, Ga, 8b, 6. DC, 169b, 3. 人名は記されていない。

註 30. DTN, Ga, 8b, 6. DC, 169b, 3. 人名は記されていない。

註 31. DTN, Ga, 8b, 6 と 9b, 5~6. DC, 169b, 3 と 171b, 2。  
「二大修業者」とは、

1. ḥBaḥ sgom dig ma 2. Bon sgom do pa

註 32. DTN, Ga, 8b, 6 と 9b, 6. DC, 169b, 3 と 171b, 2。

「一矜持者」とは、Las stod kyī Shi ston bsod rgyal

註 33. DTN, Ga, 8b, 6. DC, 169b, 3. 人名は記されていない。

註 34. DTN, Ga, 8b, 6 と 9b, 6. DC, 169b, 3 と 171b, 3。

「二高貴者」とは、

1. Shañ ston sñags se 2. Khyuñ po rta chuñ grags se

註 35. DTN, Ga, 8b, 6 (人名記されず)。DC, 169b, 3~4. 171b, 3~4。  
DCによると「三無益處者」とは、

1. ḥGo bya rtsa 2. Mig chuñ dbañ señ 3. ḥGo chuñ dbañ ñe

註 36. (1074~1134)。DTN, Ga, 11a, 4~12a, 4. DC, 174a, 5~177b,  
6. PSJ, 246a, 4. Das 版, p.389. スルチュンの御子息である。スル・ジャ  
ーキャセング Zur Çākya señ ge がその名前。ジェ・ドブクパチュンポ・ジャ  
ーキャセングと呼ばれるのは、ドブク sGro phug 寺を建てたため(「リアンチ」  
p.151)である。ハジェチュンポ・ドブクバ lHa rje chen po sGro phug  
pa とともにガーツァホルポ mÑaḥ tsha hor po と呼ばれる。サキャ派のクンガ  
ーニンポ Sa chen Kun sñiñ (cf, 『チベ文化』p.70)と同時代人。

註 37. DTN, Ga, 11b, 3. DC, 176b, 6. DCでは mes bshi と記される。  
「四火」とは、

1. dBoñ ston lcags skyu, DCでは sBañs ston lcags skyu
2. Çab rtsa gser ba, DCでは dBus pa chos señ

3. *Bya ston rDo rje grags*, DCでは *rTsañs pa Byi ston* にする。  
(系統つづく)
4. *gYu ston*, DCでは *gYu ston hor po*
- 註 38. DTN, Ga, 11b, 3。DC, 176b, 4~5。「四黒」とは、
1. *lCe ston rgya nag* (1094~1149)。(系統つづく)
  2. *Zur Nag ḥphor lo*
  3. *Myañ Nag mdo pa* (系統つづき, DTNの著者に到る)。DCでは *Ñañ Nag mdo bo*
  4. *mÑañ nag gtshug gtor dbañ phyug*
- 註 39. DTN, Ga, 11b, 3~4。DC, 176b, 5~6。「四師」とは、
1. *rGya ston*, DCでは *rGya ston pa*
  2. *gYabs ston*, DCでは *rGyabs ston rDo rje mgon po*
  3. *Ñe ston*, DCでは *Ñe ston chos señ*。(系統つづく)
  4. *Shañ ston*
- 註 40. (1094~1149)。DTN, Ga, 12a, 4~13a, 4。DC, 177b, 4~179a, 3。PSJ, 246a, 4。Das版, p.389。ドブクパの弟子の中で最もすぐれたもの。ギャツゥンセンとの論争の話は, DTNに記されているものをそのままとったもの (DTN, Ga, 12b)。
- このチェトゥンギャナクから系統が続くが, それはサンギェウントゥン *Sañs rgyas dbon ston* の弟子タトゥンシジ *rTa ston gshi brzid* にもとづいて書かれたもの, とDTNは記す。
- 註 41. (1126~1195)。DTN, Ga, 13a, 4~14b, 2。DC, 179a, 3~180b, 4。PSJ, 246a, 4。Das版, p.389。ハジェ・ハカンパ *lHa rje lHa khañ pa* ともダグニチェンポ *bDag ñid chen po* ともキルカルバ *sKyil mkhar pa* とも呼ばれる。チェトゥンギャナク (上註 40) の甥であり, 弟子である。
- このユンテンスンの弟子たちは, *Shig po bdud rtsi* (1149~1199), *sTon po bla skyabs*, *dBus pa jo bsod*, *sÑe ston Ñi ma rdo rje* (DTN, Ga, 14a, 7)。他に, *Me ston mgon po* や *dPyal Kun dgaḥ rdo rje* とも教えを求めに来た, という。
- 註 42. (1149~1199)。DTN, Ga, 14b, 2~19a, 3。DC, 180b, 4~184a, 5。PSJ, 246a, 4。Das版, p.389。ユンテンスンの弟子の最良のもの。シグ

- ボリンポチェ *Shig po rin po che* とも呼ばれる。
- 註 43. シグボドゥツィの六人の弟子は, DTN, Ga, 19a, 2~3。DC, 184a, 4。PSJ, 246a, 4 (二人記すのみ)。Das版, p.389 に記されている。
1. *rTa ston jo ye ces* (1163~1230) 兄  
(後継者)
  2. *Ma hālhun po*
  3. *mKhas pa jo nam*
  4. *dBus pa jo bsod* (1170~1200) 弟
  5. *bZañ ston hor grags*
  6. *gÑos ston bla ma* (DCでは, *gÑer ston bla ma*)
- 註 44. (1163~1230)。DTN, Ga, 19a, 3~22a, 4。DC, 184a, 5~186b, 5。PSJ, 246a, 4。Das版, p.389。シグボドゥツィの弟子中, 最良のもの。同じくシグボドゥツィの弟子 *dBus pa jo bsod* の兄 (上註 43)。このタトゥンジョイェには六人の「根本の師」(*mūla-guru*) がいたが, そのうち無比の者がシグボドゥツィである。
- 註 45. 以下はブトゥンの弟子のユントゥンパのコクウブ *gYuñ ston paḥi Khog dbub* にもとづく, ドブクパからの別系である。GÇMはこのことを記さないのではなはだ不明瞭である。
- 註 46. DTN, Ga, 22a, 5。DC, 187a, 4。DCでは「四火」のチャトゥンドルジェタクと同一人とする (DC, 176b, 6。上註 37)。
- 註 47. DTN, Ga, 22a, 5。DC, 187a, 4。ドブクパの弟子「四師」のうちの一人 (上註 39)。要するに「四火」の一人 (cf, 上註 46) と「四師」の一人から別系が生じたのである。なお, DCでは *sGoñ driñs pa Ñe ston Chos kyi señ ge* と記す。
- 註 48. DTN, Ga, 22a, 5。DC, 187a, 5。
- 註 49. DTN, Ga, 22a, 5。DC, 187a, 5。
- 註 50. DTN, Ga, 22a, 5。DC, 187a, 5。
- 註 51. DTN, Ga, 22a, 5。DC, 187a, 5。189a, 2~3。DTNのみ *Paḥi ḡāk ḥod*。DCはDTNと同じ。
- 註 52. DTN, Ga, 22a, 5。DC, 190a, 5。DCではバクシシャーコウの弟子になっている。
- 註 53. DTN, Ga, 22a, 7。DC, 190b, 5。バクシの孫 (DC, 190a, 6)



註 54. (1284~1365)。DTN, Ga, 22a, 7~22b, 1。DC, 192a, 1~193a, 3。彼の資料に従って、このドブクバの別系が書かれているのである(上註 45)。プトゥンの弟子であり、Dharma svāmin Rañ byuñ rdo rje の弟子でもある。弟子も二人記されているが、重要でない。

註 55. (1295~1376)。DTN, Ga, 22b, 1。DC, 193a, 3~193b, 3。スルチャンパ・センゲ(上註 53)の二人の弟子のうちの一。DCによれば、この系統が現在まで続く。即ち、

hJam dbyaṅs bSam grub rdo rje →  
(DCでは、rTa nag sgröl ma bSam grub rdo rje)

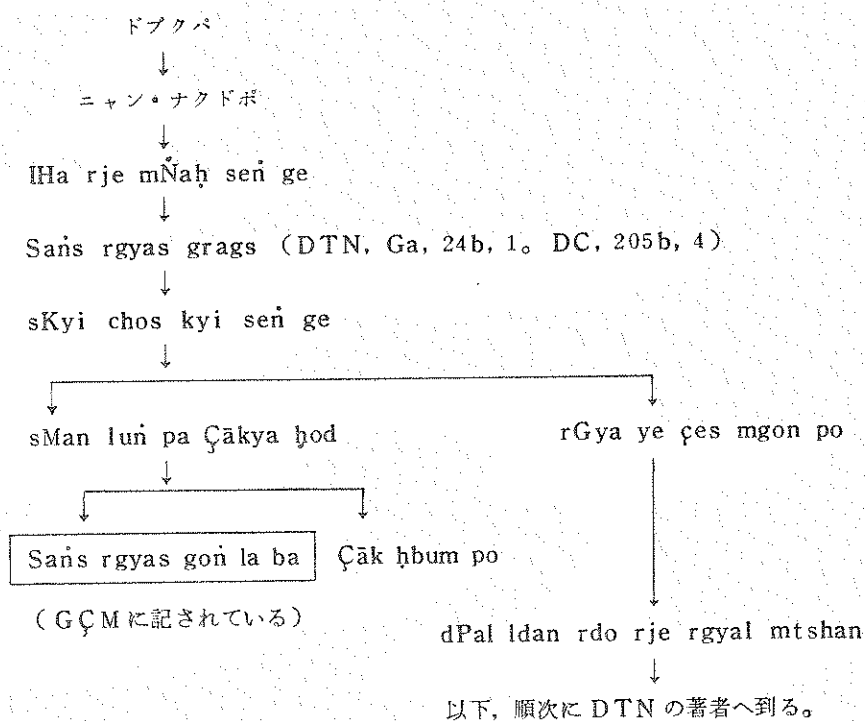
→ { 1. 「スル系」(Zur brgyud)  
Zur ham çākya ḥbyuñ gnas (DC, 193b)  
2. 「御子息の系」(sras brgyud)  
Saṅs rgyas rin chen rGyal mtshan dpal bzañ po  
(DTN, Ga, 23a。DC, 196a。1350~1431)

↓  
bDag ñid chen po ḥGos gshun nu dpal (DC, 197b)  
↓  
Shwa dmar bshi pa sPyan sñā rin po che (DC, 199a)  
↓  
ḥBri guñ zur pa Rin chen phun tshogs (DC, 199b)  
↓  
Rañ grol ñi zla saṅs rgyas (DC, 200b)  
↓  
Tshe dbaṅ nor rgyas (DC, 200b)  
↓  
ḥKhon ston dPal ḥbyor lhun grub (DC, 200b)  
↓  
Zur chen Chos dbyiṅs rañ grol (DC, 202a)  
↓  
ダライラマ五世 rGyal mchog lña pa chen po (DC, 204a)  
↓  
Phrin las lhun grub (DC, 205a。テルダクリンパの父)  
↓  
gTer bdag gliñ pa (DC, 205b)

テルダクリンパ以後、現在のドジョムリンポチ(= DCの著者)まで続く(DC, 137a, 4~240b, 4 参照)

註 56. ドブクバの弟子「四黒」の一人ニャン・ナクドボ(上註 38)からの系である。

GÇMはこのことを記さない。系図を示すと、



この系統を見れば、GÇMの記述の恣意性が分かる。Saṅs rgyas goñ la ba は末端であり重要と思われぬ。彼よりもニャン・ナクドボ、Saṅs rgyas grags, sKyi chos kyi señ ge の方を記すべきである。

また、DTNによれば、これは phur pa nag の法類の系統も兼ねる。パドマサンバヴァから順序に Saṅs rgyas grags に来る。この点からも、Saṅs rgyas grags の重要性が知られる。

註 57. DTN, Ga, 25b, 3~26a, 1。DC, 217b, 1~218a, 4。ロク・シェラブオウ Rog Çes rab ḥod が中心人物。やはり、ドブクバの別系である。五つの師弟系統が記されているが、そのうちの一つがドブクバにつながる。それを示す。

ドブクバ → sNubs ston → Kha rag sñiñ po →

→ { Yam ḥud dños grub }  
(御子息) → ロク・シェラブオウ  
Padma ḥbar

註 58. 以下は「ロク系」の広がった地方の如くに読みとれるが、DTN, Ga, 26a, 1~2を調べると、「スル系」の他の別系が広がった地方のことと思われる。

この地はロンチュンバが学んだ場所でもある。彼はその地で学んだことから、gSañ ba sñiñ poñi greñ pa [の] Par khab の流儀は不十分であり、ロンソムの流儀（上註 22, 「リアンチュ」 p.157）を正しいものとして、自らゾクチュンの「教誡部」（man ñag sñiñ thig）と一致する gSañ ba sñiñ po の註釈、sPyi ñi khog dbub と rGyud kyì rnam bñad をつくった。

註 59. これも「スル系」の別系が広がった地である。sTod zur ba が広げた（DTN, Ga, 26a, 2~3）。

註 60. DTN, Ga, 26a, 3。ラトウの南はムスタング Mu stan、北はカムリン Nam rin。

註 61. DTN, Ga, 26a, 5~7。DC, 207b, 4~209b, 6。「リアンチュ」 p.151 によれば、1122年生まれという。バクモドゥッパ Phag mo grub pa の母方の兄弟（yum spun）である。「カム流」に属する。「カム流」はアジャリのニオウセンゲ Ñi ñod señ ge がつくった gSañ ba sñiñ po の註釈を、Vairocana がカムで翻訳したのに始まる。

しかし、この「カダム系」は「スル系」ともつながる。即ち、

ドブクバ → ñDzam ston ñgro bañi mgon po → Ka thog pa (DC, 208a, 3)

ここで Ka thog pa とは、Ka thog 寺を建てたデシェクのことである。DTN, Ga, 26a, 5~6 では、sGa dam pa bDe gñegs çes ba, DC, 208a, 5~6 では Kañ thog pa dam pa bDe bar gñegs pa と記されている。GÇM での Ka dam pa とはそれを略したものである。「カトク・パ」（Ka thog 寺の住職）の呼称は代々受けつがれる。二代目は gTsañ ston pa である。以下十三代つづく。DC, 207b, 4~218a, 4 はこの流派のことについて説明したものである。

註 62. DC, 207b, 6。

註 63. DC, 207b, 6。DC では Bla ma çar pa sPobs pa mthañ yas。

註 64. 「カ・ベ・ゾクの三寺」（Ka Pe rDzogs gsum）と呼ばれるニンマ三大寺（〈4・2〉註 3~6）の一つ。DZL, pp.103, 186, 203。「リアンチュ」 p.151 参照。

なお、カトク寺は一時衰退するが、テルトウの bDud ñdul rdo rje (1615~1672, DC, 287b, 5~290b, 5) が弟子の Klon gsal sñiñ po (DC, 290b, 3) とともに再興する。後者の御子息 rGyal sras bSod nams Ide

btsan がその寺の座主になり、その後、彼の子孫が代々座主になる。

註 65. Gh・Th, 164b, 3~165a, 5 によると、anuyoga 系の所依タントラは、1. 「マントラの六経」（sñags kyì mdo drug）、2. 「根本タントラ」（rtsa ba ñi rgyud）3. 「教誡のタントラ」（gdams pa man ñag gi rgyud）4. 「明呪の瞑想のタントラ」（rig sñags gi sgrub pa）5. 「瞑想の六部」（sgrub pa sde drug）と大きく五種に分かれる。GÇM にあげられている二つのタントラは、いずれも 1 に含まれる。（〈1・1〉註 51 参照）。

GÇM のこの箇所の記述は全く DTN, Ga, 26b, 1 に依ったものである。

註 66. DTN にはドブクバの著作による二つの系統が記されている。一つの系統は「秘密主」gSañ ba bdag から順次にダナラクスタに到り、二代を経て、ダルマボディとヴァスダラに到るものである（DTN, Ga, 26b, 4~7）。他の系統はダナラクスタから始まるものである（DTN, Ga, 27a, 1~6）。GÇM は後者のみを記す。前者を神話時代の伝承として、記さなかったのである。

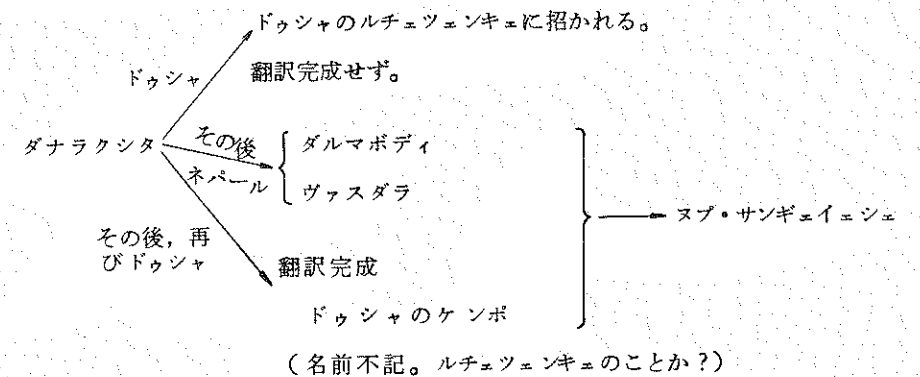
ダナラクスタに関しては、DTN, Ga, 26b, 7 と 27a, 1。

註 67. DTN, Ga, 26b, 7。Ga, 27a, 1。DC, 89b, 3。

註 68. DTN, Ga, 26b, 7 と 27a, 1。DC, 89b, 3。

註 69. DZL, p.122。

註 70. DTN, Ga, 27a, 1。ダナラクスタはドゥシャの国に前後二回来ている。

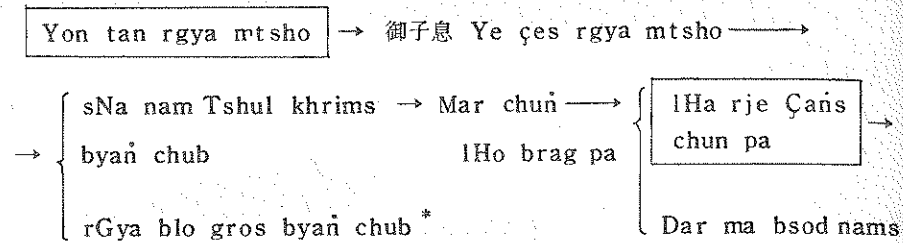


註 71. DTN, Ga, 27a, 2。DC, 89b, 3。これは「幻化網」の系統のヌブ・サンギェイエシエのこと。〈1・1〉註 18, 49, 〈1・3〉註 15 参照。DC では彼以後「幻化網」と「経」が同一の系統によって伝えられるとする。

註 72. DTN, Ga, 27a, 2。これも「幻化網」のユンテンギャツォと同一人。〈1・3〉註 19 参照。ただ、DTN によると「経」系は次に Myañ Çes rab mchog

につながらないで、御子息の Ye ces rgya mtsho につながるものが、「幻化網」系と異なる。

註 73. DTN, Ga, 27a, 3. 彼に到るまでに省略されている系統者を記すと、



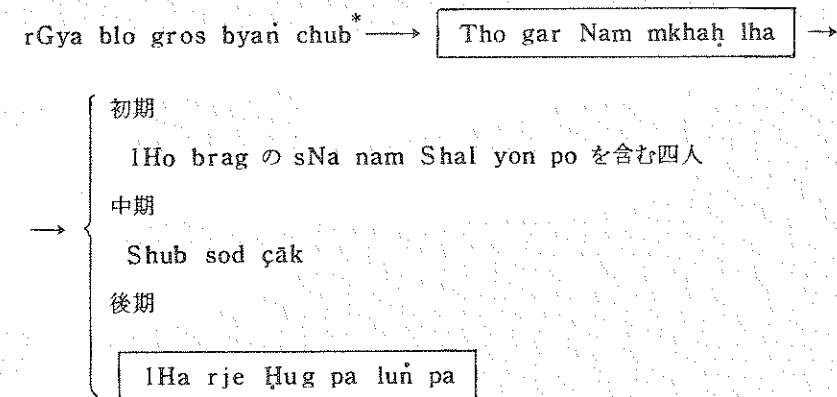
→ ドブクバ

(彼以後は「幻」と「経」が同一の系になる。)

これらに関して、GÇMの記述は、IHa rje Ḥaṃs chuñ pa 以後ドブクバに到ることを記さないし、ドブクバ以後、「幻」と「経」の系統が一つになって、以後継承されることを記さない。はなはだ不明瞭な記述の仕方である。

註 74. DTN, Ga, 27a, 2. Tho gar は地名。DZL, p.122.

註 75. この系統は、rGya blo gros byañ chub (註 73 の\* 印) からの系統である。彼以後を示すと、



(DTN, Ga, 27a, 3)

これによると、IHa rje Ḥug pa luñ pa は Tho gar Nam mkhaḥ lha の弟子のうち後期のものであることが分る。以上は DTN, Ga, 27a, 2~3 に記されている。

註 76. DTN, Ga, 27a, 6~31a, 1. DC, 218a, 4~224a, 3. 「カム流」に属する。「幻化網」の流儀に関しては、「スル流」と「ロンチェンバ流」の中間の段階に位置する(上註 22, 58, 「リアンチ」 p.157)。

註 77. DTN, Ga, 27b, 1~6 には化身の四説が記されている。

1. ロンソムが生まれる少し前にチベットに来た Smṛti - jñānākīrti (cf. 『密教歴史』 p.119. 『チベ文化』 p.65 によるとアティーシャの弟子のドムトウヤセツウの師でもある。) の化身という説。
2. カム地方に来たバンディタの A tsa ra Phra la riñ ma の化身という説。
3. Nag po sphyod pa (=Kṛśṇapāda) の化身という説。これはロンソムに会ったアティーシャが言ったもの。
4. Sugata あるいは Ārya - Mañjuśrī の具現といわれる。

以上の四説は Ron zom の弟子 Yul dag bsñen rDo rje dbaṃ phyug によってつくられた物語によるものである。GÇM は三番目のみを記す。

DTNはこの他に、弟子の gYog rDo rje ḥdzin pa の著作も資料としている。

註 78. 彼はアティーシャが来藏したとき(1042)に会っているから、十一世紀の人である。「スル系」のスルチュンと同時代人である。「リアンチ」 p.148 によると、Sung Dynasty の Jen - tsung 帝の統治時代(1023~1063)と同時代という。正確な生没年は分らない。

DTN, Ga, 30b, 2~31a, 1 及び DC, 220b, 5~221a, 6 には彼に流入した教義の四系統が記されている。即ち、

1. バドマサンバヴァの教誨 (gdams pa)  
sNa nam rDo rje bdud ḥjoms から順次に四代経て後、祖父、父を経てロンソムに伝わる。
2. ヴァイローチャナの教誡 (Vairocanaḥi man nāg)  
Vairocana が gYu sgra sñiñ po に伝え、順次に三代経て Ya zi Bon ston に伝えられ、彼がロンソムに伝える。
3. ソクチュンのカム流 (rDzogs chen Khams lugs)  
A ro Ye ces ḥbyuñ gnas から Ya zi Bon ston を経てロンソムに伝えられる。A ro Ye ces ḥbyuñ gnas はインドの七系の教誨と中国和尚 (hwa cañ) の七系の教誨をもつものである。
4. ヴィマラミトラ系  
Vimalamitra から順次にロンソムに伝えられたもの。

これらのうちで、Ya zi Bon ston とその師 A ro は注意すべきである。前

者はボン教僧であり、彼の主著『大乘ヨーガ入門』は、来蔵したアティーシャがその当時のチベット人の著作で承認した唯一のものといわれる。(『チベ文化』pp.65, 66 参照)。

註 79. 生起次第の主なるものにはちがいがいが、説明が不足している。「生起次第」mahāyoga 乗に「タントラ部」(rgyud sde)と「修部」(sgrub sde)があって、前者が「幻化網」の法類、後者がこの「八教説」である。

なお、この「八教説」の記述部分は、DTNの如くに「幻化網」の系統の前へ置く方が、構成としては適当である。

註 80. 「八教説」のうち「出世間の五部」は御身・御語・御意・功德・事業に配されている。それぞれの呼称を試訳すると、「文珠師利・御身」(hjam dpal sku)「蓮華・御語」(padma gsun)「真実・御意」(yañ dag thugs)「甘露・功德」(bdud rtsi yon tan)「〔金剛〕杵・事業」(phur pa hphrin las)となる。

同じく「世間の三部」を訳すると、「鬼女・激発」(ma mo rbod gton)「呪い・激しいマントラ」(dmod pa drag snags)「世間・讃歌」(hjiḡ rten mchod bstod)となる。

「リアンチュ」p.147には、それらの象徴と目的と果が記されている。p.148には「八教説」の八神の様子が示されている。(実際は、rig hdzin slop dpon lha が加えられて、九神にされるという。)

註 81. 以下 GÇM の記述は DTN, Ga, 2b, 6~3b, 1 によって書かれたもの。rta mgrin とは「リアンチュ」p.147 によると Padma gsun の法類のこと。

註 82. この王妃とは、「二十五大成就者」のうちの一人 mKhar chen mtsho rgyal のことと思われる (DC, 88a, 2. Ye ces mtsho rgyal <1・1> 註 20)。hBre a tsa ra sa le については不明。彼は DTN, Ga, 2b, 7 に記されている。また、王妃 Dañ hbre a tsa ra sa le と一人の名前として読むことも可能であるが、今は二人に分けた。

註 83. DTN, Ga, 3a, 1. <1・1> 註 46。

註 84. DTN, Ga, 3a, 2。

註 85. DTN, Ga, 3a, 2. <1・1> 註 44, <1・3> 註 4, 註 12。

また、以上の「出世間の五部」は五仏に配せられる。<2・1> 註 11 参照。

註 86. 参考論文には、D. S. Ruegg: Sur les rapports entre le buddhisme et le "substrat religieux indien et tibétain", Journal Asiatique,

1964 がある。これは S. Karmay 氏の教示による。

なお、TPS, p.222 に、yoga 乗に五族があり、anuttarayoga 乗にはそれに「世間族」(hjiḡ rten rigs) を加えて六族にしていることを記す。この「世間族」は、ここで言われる「世間マンドラ」と同類ではないかと思われる。

註 87. Gh・Th, 182a, 3~4 によると、ヴァイローチャナが翻訳した「前期翻訳の五〔タントラ〕」(sna hgyur lña) とは、

Rig pahi khu byug, rTsal chen sprug pa, Khuñ chen ldiñ ba, rDol gser shun, Mi nub pañi rgyal mtshan nam mkhañ che

註 88. この十三タントラは Gh・Th によると Vimalamitra と gÑags Jñānaku-māra と rgyal mo gYu sgra sñiñ po の三人に翻訳された「後期翻訳の十三〔タントラ〕」(phyi hgyur bcu gsum) といわれる。Gh・Th, 182a, 4~182b, 1 によるとその十三タントラとは、

rTse mo byuñ rgyal, Nam mkhañi rgyal po, bDe ba hphrul bkod, rDzogs pa spyi chiñs, Byañ chub sems tig, bDe ba rab hbyams, Srog gi hkhor lo, Thig le drug pa, rDzogs pa spyi spyod, Yid bshin nor bu, Kun hñus rig pa, rJe btsan dam pa, sGom pa don grub ba

上註 87 の五タントラとこの十三タントラを合わせて、「心部」の「十八タントラ」と呼ばれる。これらの他に Vairocana が以前に翻訳した Kun byed, rMa byuñ, mDo bcu の三つを合わせて、「心部の二十一〔タントラ〕」(sems sde ñer gcig) とも呼ばれる。

註 89. 「界部」のタントラについては、Gh・Th, 182b, 1~2。

註 90. 後の各部の系統の説明を見ると、「界部」—ヴァイローチャナ、「教誡部」—ヴィマラミトラであり、GÇM のこの箇所の記述は両者が逆であると思われる。

註 91. 「教誡部」のタントラについては、G・Th, 182 b, 2~4. 198b, 5~205b, 6。

註 92. ロンチュンパの『七つの宝蔵』の中で、「心部」に対して付けている呼称。一切諸法を「心の方面」(sams phyogs, セムチョク) と悟るものであるから、「心部」を「セムチョク」と呼んだのである。本当は「セムチョク・パ」が正しい。Th・Ch, 73a, 2. G・Th, 169b, 1。

註 93. DTN, Ga, 31b, 7. DC, 89b, 5. 「二十五大成就者」の一人であり、「試

みの六人」の一人。〈1・1〉註 23, 49。DTN では、彼が三度宣説したと記す。

- |     |   |         |
|-----|---|---------|
| 1回目 | 王   |         |
|     | 2回目   |         |
| カムで | { rgyal mo gYu sgra sñin po<br>gSañ ston Ye ces bla ma<br>Sañ rgyas mgon po<br>(「界部」の sPañ Mi pham mgon po<br>と同一人といわれる。) | → 系統つづく |
|     |   | → 系統つづく |
|     |   |         |
| 3回目 | ウで - Ra zi Ces rab sgron ma (尼僧)  |         |

註 94. DTN, Ga, 32a, 1。DC, 91a, 1。rgyal mo と冠せられているから、王妃と思われる。

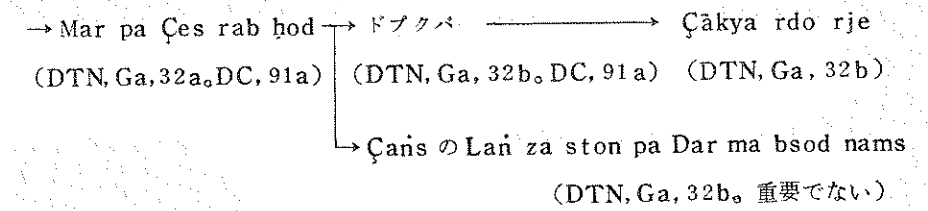
註 95. DTN, Ga, 32a, 2~4。DC, 91a, 2。ヴィマラミトラからも学ぶ。〈1・1〉註 26, 49, 〈1・3〉註 13。

- 註 96. 「四つの河流」とは、DTN, Ga, 32a, 2~4 によると、
1. dkyus bçad gshuñ gi chu bo hgral dā kyī stoñ thuñ dañ bcas pa
  2. sñan brgyud gdams ñag gi chu bo gnad yig dmar khrid dañ bcas pa
  3. byin rlabs dbañ gi chu bo bskur thabs ño sprod dañ bcas pa
  4. phyag bshes phrin sgrub kyī chu bo bstan bsrungs drag sñags dañ bcas pa

- 註 97. DTN, Ga, 32a, 5~6。DC, 91a, 4。
1. Sog po dPal gyi ye ces
  2. Gra dPal gyi sñin po
  3. lHa luñ dPal gyi rdo rje
  4. Ho phrañ dPal gyi gshon nu (DC, Ho brañ dPal gyi gshon nu)
  5. sñan dPal dbyañs (以下 DC 記さず)
  6. hTshul nag Ye ces dpal

7. Upa De gsal
8. Than bzañs dPal gyi rdo rje
9. dGye hphags pa ces rab
10. Bhu su ku mchog gyi byañ chub

- 註 98. Sog po dPal gyi ye ces のこと。DTN, Ga, 32a, 5 と 6。DC, 91a, 4~5。「幻化網」の系統者でもある。〈1・3〉註 14。
- 註 99. DTN, Ga, 32a, 6。DC, 91a, 5。gNubs Sañ rgyas ye ces のこと。「幻化網」の系統者でもある。〈1・3〉註 15。
- 註 100. DTN, Ga, 32a, 6。DC, 91a, 2 と 6。以下の系は rTsañ tsha Çāk rdor の話にもとづく別系である。この sPañs Sañs rgyas mgon po は「界部」の系統者の sPañ Mi pham mgon po (〈1・3〉註 110) と同一人。
- 註 101. DTN, Ga, 32a, 7。DC, 91a, 5。DTN では Sā Rakṣita。DC では sPañ Rakṣita。
- 註 102. DTN, Ga, 32a, 7。DC, 91a, 5。DC では Yañ phri Dar ma ces rab になっている。GÇM では彼以後の系統者が省略されている。それらを示すと、



- 註 103. DTN, Ga, 32b, 2。DTN ではヴィマラミトラになっている。DTNの方が正しい。
- 註 104. DTN, Ga, 32b, 2。これは註 102 で示した系統者のうち Zer mo dge sloñ ma bDe gnas ma と同一人。
- 註 105. DTN, Ga, 32b, 2。DC, 91a, 5。この後、DTN は Lanis ston (DTN, Ga, 32b, 2) につづくとする。
- 註 106. DTN, Ga, 32b, 6~7 には、Nam mkhañ dañ mñam pañi rgyud chen po と Nam mkhañ dañ mñam pañi rgyud chun ba と二つの所依タントラが示されている。ともに九つの「界」を主題としているが、前者は膨大なため、DTN は後者によって九つの「界」を記している。GÇM もそれになっている

が、前者のタントラについては、その名称も記さない。

九つの「界」とは、1. 「見の界」(lta baḥi kloṅ) 2. 「行の界」(spyod paḥi kloṅ) 3. 「マンダラの界」(dkyil ḥkhor gyi kloṅ) 4. 「アビシユーカーの界」(dbaṅ gi kloṅ) 5. 「誓詞の界」(dam tsig gi kloṅ) 6. 「瞑想の界」(sgrub paḥi kloṅ) 7. 「事業の界」(phrin las kyī kloṅ) 8. 「地・道の界」(sa lam gyi kloṅ) 9. 「果の界」(ḥbras buḥi kloṅ)  
これらは上述タントラの十一章から十九章の間に記されているという (DTN, Ga, 32b, 7~33a, 1)

註 107. DTN, Ga, 33a, 1. タントラの名。(NGB, 249a, 6)

註 108. DTN, Ga, 33a, 1. PSJ, 246a, 4. Das 版, p.389. GÇM ではこれが「界部」の系統の名とされている。「界部」の代表的な教誡の名と思われる。

註 109. DTN, Ga, 33a, 2. DC, 89b, 5. 91a, 6. PSJ, 246a, 4. Das 版, p.389. <1・3> 註 93 参照。PSJ は DTN の「心部」の系統にあたるものを記さない。「心・界部」で一つの系統と見て、「界部」の系統で代表させたようにも思える。DC で「心部」の系はこの「界部」の系を通して現代まで伝えられる。

註 110. DTN, Ga, 33a, 2. DC, 91a, 6. PSJ, 246a, 4~5. Das 版, p.389. これは「心部」の Saṅs rgyas mgon po (<1・3> 註 100) と同一人。彼からジェン・ダルマボディに到る系統者を示すと、

sPaṅ Mi pham mgon po → Nan lam Byaṅ chub rgyal mtshan →  
(DTN, Ga, 33a. DC, 91a) (DTN, Ga, 33a. DC, 91a)

→ Za nam Rin chen dbyig → Chos kyī khu ḥgyur gsal baḥi mchog →  
(DTN, Ga, 33a. DC, 91b) (DTN, Ga, 33a. DC, 92a)

→ Myaṅ Byaṅ chub grags → Myaṅ Çes rab byuṅ gnas →  
(DTN, Ga, 33b. DC, 92a) (DTN, Ga, 33b. DC, 92b)

→ sBa sgom (Ye çes byaṅ chub) → ḥDzeṅ Dharma bodhi  
(DTN, Ga, 33b. DC, 92b) (DTN, 34a. DC, 94a)

GÇM では以上のうち、ḥDzeṅ Dharma bodhi まで省略されている。

註 111. (1052~1168)。DTN, Ga, 34a, 7~39a, 1. DC, 94a, 3~100b, 1。

PSJ, 246a, 5. Das 版 p.389. 彼が DTN の「界部」の中心人物。DTN では「界部」の記述のほとんどの頁を、このジェン・ダルマボディにさいている。彼の弟子を示す。

◦ Nor rje → Dor pa Rab tu dgaḥ baḥi rdo rje

◦ Kun bzaṅ → Ḥod ḥbar seṅ ge → Jo mgon → Bya mad tshul rin  
(1151~?)

◦ ḥDzeṅ Jo sras

◦ bTsan thaṅ pa

◦ Myaṅ Dārma simha → Vajrapāṇi → Bla ma lha

◦ gSer luṅ pa → Raṅ grol → 御子息 Chos rin

◦ Nu rdo rje rgyan → Nu ston dad pa brtson ḥgrus

◦ gZig Ye çes dbaṅ po → La kha ba → mGo skya ba → Go ra ba →  
→ So ston

◦ gYag ston Zla ba ḥod zer → Klog ston dGe ḥdun skyabs →  
→ Ban de dgos pa btsan

◦ sKye tshe Ye çes dbaṅ phyug → gZig Ye çes dbaṅ po → 以下  
順次に DTN の著者に到り現今までつづく

(以上、弟子たちについては、DTN, Ga, 38b, 6~40b, 7. DC, 100a, 5~103a, 2)

これらのうちで、DC では最後の系統をテルダクリンパまで続け、さらに現在まで続けている。

註 112. DTN, Ga, 39a, 1. DC, 102a, 2. 彼の後、Vajrapāṇi (DTN, 40a, 4) → Bla ma lha (DTN, 40a, 4) と続く。DTN では他に七人記されている。GÇM でいわれる他の四人は、そのうちの誰を指すのか不明 (上註 111 参照)。

註 113. DTN, Ga, 38b, 6. (上註 111 参照)

註 114. DTN, Ga, 38b, 7. Ga, 39a, 1~39b, 2. DC, 100a, 5. 100b, 1~101a, 5. PSJ, 246a, 5. Das 版, p.389. (上註 111 参照)

註 115. DTN, Ga, 41a, 1. DC, 103b, 6. PSJ, 246a, 5. Das 版, p.389. 「前」のヴィマラミトラというのは、ヴィマラミトラに二人いたとされるからである。

DTN, Ga, 41a, 2~6 によって示すと,

1. 「前」のヴィマラミトラ

チソンデツェン王の時代にチベットに来た者。彼の著作から判断すると, Kama-laśīla より後にチベットに来たらしい。王とニャン・チンジンサンポに「ニンチク」(ゾクチェン「教誡部」)の教義を教えた後, 中国に行った。

2. 「後」のヴィマラミトラ

mñah bdag Ral ba can (レルフチェン王 806~841。Khri gtsug lde brtsan のこと)の時代の人。

この場合は、「前」のヴィマラミトラであるが、彼に到るまでの系は、DTN によると、

ḥJam dpal dḥes gñen → Ḥrīśīḥa → Ye ḥes mdo (=Jñānasūtra) → Vimalamitra である(Ḥrīśīḥa までは「心部」系と同じ)。

また、このヴィマラミトラは「幻化網」の法類をチベットにもたらした者でもある(<1・1>註44 <1・3>註4, 12 参照)。

- 註 116. チソンデツェン王(742~797)のこと。DTN, Ga, 41a, 6。DC, 104a, 4。『バ・シエ』によると、ヴィマラミトラはチソンデツェン王の死後に、来蔵したことになる(「チベ仏教」p.242 参照)。このチソンデツェン王は本格的にチベットに仏教を導入した王であり、「サムイェの宗論」を行なわせ、インド系の正統派仏教をチベットに確立せんとした王である。中国仏教の影響の濃いゾクチェンとの関係は容認し難い。<1・1>註4 参照。

- 註 117. DTN, Ga, 41a, 6。DC, 104a, 4。104b, 1。PSJ, 246a, 5。Das 版,p.389。ニャン・チンジンサンポは中国禅系の仏教へ好意を示した者とされ、ニマ派の「ゾクチェン」の祖師の一人に数えられている。「チベ仏教」pp.243~252 参照。

- 註 118. GHP, pp.44, 110。

- 註 119. DTN, Ga, 41b, 1~2。DC, 104b, 3。この「言葉の継承」は「人間による伝承」(gañ zag brgyud pa)にも含まれると、DTN, Ga, 41b, 2 は記す。

- 註 120. DTN, Ga, 41b, 2。PSJ, 246a, 6。Das 版,p.389。

- 註 121. DTN, Ga, 41b, 2。DC, 104b, 4。

- 註 122. DTN, Ga, 41b, 3。DC, 104b, 6。PSJ, 246a, 6。Das 版,p.389。

- 註 123. DTN, Ga, 41b, 2。DC, 105a, 1。

- 註 124. DTN, Ga, 41b, 4~5。DC, 105a, 3。DC では、Ñañ bkahḥ gdams

pa。チュツンの「直接系」である。

- 註 125. 三つの場所は、Ḥu yug と Lanḥ groḥi ḥchad pa stag と Jal gyi phu である。DTN, Ga, 42a, 6~7。DC, 105b, 2。

- 註 126. DTN, Ga, 41b, 2。DC, 106a, 2。三十年後に発掘したのである。発掘場所は記されていない。

- 註 127. DTN, Ga, 42a, 1。DC, 106a, 2~3。Lanḥ gro ḥchad pa stag に関しては、上註 125 参照。

- 註 128. (1097~1167)。DTN, Ga, 42a, 1。DC, 106a, 3~107b, 1。PSJ, 246a, 6。Das 版 p.389。DC では Shanḥ stoñ と記す。1117年に Ḥu yug で埋蔵書を発見。その後、Jal gyi phu でチュツンの埋蔵書を発掘。その後、サムイェの ḥChims phu でヴィマラミトラの埋蔵書を発見。彼の発見はチュゴム(上註 126)の発見から五十年過ぎているといわれる。

- 註 129. GḤM のチュツンは、チュゴムの誤りであると思われる。DTN, Ga, 42b, 1。(しかし、DC, 107a, 2 ではチュツンチェンポとなっている?)

- 註 130. (1158~1213)。DTN, Ga, 42a, 6~42b, 2。DC, 107b, 1~108a (欠帖)。PSJ, 246a, 6。Das 版,p.389。ジャン・タンドルジェ(上註 128)の御息であり、弟子。Tshig don chen mo といわれる論書をつくる。

- 註 131. (1196~1231)。RM では 1230 年に没。DTN, Ga, 42b, 2~6。DC, 108a (欠帖)。PSJ, 246a, 6。Das 版,p.389。ニブム(上註 130)の御息であり弟子である。「無上秘密の教誨」(gsañ ba bla na med paḥi gdams pa)を父から聞く、と DTN は記す。この DTN の記述を信ずるとすれば、ゾクチェン「教誡部」で最も重要な「トッゲル」(thod rgal)の実践は、彼の父(=ニブム)の時代に出来ていたことになる。

- 註 132. DTN, Ga, 42b, 6~43a, 4。DC, 108b, 6~109b, 6。PSJ, 246a, 6。Das 版,p.389。

- 註 133. (1243~1303)。DTN, Ga, 43a, 4~43b, 6。DC, 108b, 6~111a, 5。PSJ, 246a, 6。Das 版,p.389。メロンバ Me loñ pa とも呼ばれる。トゥルシク・センギェルワ(上註 132)の弟子。このメロンドルジェから順次に DTN の著者に到る別系もある(DTN, Ga, 45b, 5~46a, 2)。

- 註 134. (1266~1343)。DTN, Ga, 43b, 6~45a, 2。DC, 111a, 5~114b, 3。PSJ, 246a, 6。Das 版,p.389。本名タルバギェン Thar pa rgyan。また、シュヌギェルポ gShon nu rgyal po とも呼ばれる。DTN によると、ゾクチ

ン「教誡部」(= snin thig)の教法を、「究竟次第」を混ぜることなしに、「教誡部」特有の用語によってその教義を教えたことに、彼の功績がある。弟子に二人いる。

{	Karma pa Rañ byuñ rdo rje	→	gYuñ ston rDo rje dpal
	(DC, 114b, 3~115b, 3)		Ye rgyal ba
	Klon chen pa (DC, 115b, 3以下)		Ye ces rgyal mtshan pa
			sPrul sku ba

ここでは、Karma pa Rañ byuñ rdo rje の系のみ記したが、Klon chen pa の系の方が重要であり、テルダクリンバを経て現在まで続く(後註 135 参照)。

註 135. (1308~1363)。DTN, Ga, 45a, 2~45b, 5。DC, 115b, 3~134b, 4 (第四章第四部はすべてロンチェンバの物語)。PSJ, 246a, 6。Das 版 p. 389。

「第二の仏陀」(rGyal ba gñis pa, または rGyal ba gñis pa dPal bsam yas pa kun mkhyen ñag gi dbaṅ po)とも呼ばれる。KBU, vol 1, p. 245 によれば、彼の著作の名前は三つある。初期 Tshul khriṃs blo gros, 中期 sNa tshogs rañ grol Klon chen rab ḥbyams pa または bSam yas pa ñag gi dbaṅ po または sNa tshogs rañ grol, 後期 Dri med ḥod zer。著書は DTN によれば、二百六十三ある。有名なものとしては、mDzod bdun, Ñal gso skor gsum, Rañ grol skor gsum, sñin thig ya bshi, bsDus don phreñ ba rnam gsum などがある。これらはいずれもゾクチェンへの入門書として重要である。また、「幻化網」の法類の gSañ ba sñin po に対してゾクチェン「教誡部」的な註釈を作った。sPyiñi khog dbub pa と rGyud kyi rnam bçad である。これらは Klon chen pañi gsañ snin ḥgrel pa と呼ばれる。「幻化網」の「ロンチェンバ流」に関しては、<1・3>註 22, 58, 78, 「リアンチェ」p.157 参照。

彼はゾクチェン教義の大成者であり、彼無くしては、現在まで続くゾクチェンはあり得ないと思われる。ゾクチェンの「教誡部」には、彼の創作による部分もあると思われる。後半生は「ダーキニーのニンタク」を説いたと言われる。

弟子は多数いる。DC, 133a, 5~134a, 4 によると、

1. 「名声を得た成就者であり智者であるもの三人」(grags pa thob pañi mkhas grub gsum)。mKhas grub bDe legs rgya mtsho。mKhas grub Chos kyi grags pa。mKhas grub Khyab gdal lhun grub

(この者から現在まで系統が続く)。

2. 「直弟子五人」(thugs kyi sras lña)  
mDo khams pa ḥDan sgom chos kyi grags pa, rGyal sras bzod pa。Bla ma dPal mchog pa。Guru Ye ces rab ḥbyams。gShon nu sañs rgyas。
3. 「教えを広げた四人の朋友」(bstan pa spel ba gñen bshi)  
sPrul sku dPal ḥbyor rgya mtsho。slob dpon Sañs rgyas kun dgaḥ。slob dpon Blo gros bzañ po。sTag mgo bya bral chos rje。
4. 「siddhi を得た四人の yogin」(rnal ḥbyor bshi)  
Pha rgod rTogs ldan rgyal po。rNal ḥbyor pa Ḥod zer go cha。rig ḥdzin Ḥod gsal rañ grol。Bya btañ bSod nams ḥod zer。
5. 「教えを保つ善知識」(bstan ḥdzin gyi bces gñen)  
Sañs rgyas dpal rin。Grags pa dpal。Glu mkhan bSod nams señ ge など多数(他の名前は記されていない)。
6. 「本当の弟子」(dnos kyi slob ma)  
ḥBri guñ pa Rin chen phun tshogs pa → Padmañi rgyal tshab Çantapuripa もしくは gTer chen Çes rab ḥod zer  
以上のロンチェンバの弟子たちの中で系統が続くものは、mKhas grub Khyab gdal lhun grub である。継承される法類名は、man ñag sñin thig gi smin grol gdams skor と記されている。彼以後テルダクリンバまでの系統者を示すと、  
ロンチェンバ → mKhas grub Khyab gdal lhun grub → Grags pa ḥod zer → Sañs rgyas dbon po → Zla ba grags pa → Kun bzañ rdo rje → rGyal mtshan dpal bzañ → sNa tshogs rañ grol → bsTan ḥdzin grags pa → mDo sñags bstan ḥdzin → rig ḥdzin Phrin las lhun grub → テルダクリンバ  
テルダクリンバ以後、順次に現今のドゥジョムリンボチェ (DCの著者)まで系統は続く。

註 136. DTN にはこの系統は記されていない。これを記すのは、GÇMの特徴の一つである。DCでは「教誡部」をバドマサンバヴァ系 (DC, 103a, 3~103b, 6)とヴィ



マラミトラ系 (DC, 103b, 6~134b, 4) に分けてある。ヴィマラミトラ系がゾク  
チェンニンテク (一般にいわれる「教誡部」), バドマサンバヴァ系が「ダーキニ  
ーのニンテク」のことである。この「ダーキニのニンテク」は、ロンチェンパの時  
代あるいはそれより少し前に創作された教義と思われる。

註 137. 金剛持 → ガーラブドルジェ → シュリーシンハという系は、ゾクチェンの始祖た  
ちに関する典型的な系統である。cf. 『EVA』 p.26。

註 138. DC, 103a, 3~4 に記されている O rgyan Sañs rgyas gñis pa はバド  
マサンバヴァのこと。DC, 103b, 1 に彼の弟子として, Ye çes mtsho rgyal  
と王妃 ḥBrom bzaḥ byañ chub sman が記されている。以上の弟子たちは  
「直接系」であるが, 「埋蔵系」の弟子はロンチェンパである。「埋蔵書」を発掘し  
て教義を広めたと言われるのであって, バドマサンバヴァから直接教えを聞いたので  
はない。

註 139. DC, 103b, 1。バドマサンバヴァの明妃。『EVA』 p.89。DC, 248a, 2  
参照。

註 140. BA, II-p.1079。

註 141. BA, II-p.1241 に Rañ byuñ rdo rje が記されている。しかし, この  
kun mkhyen Rañ byuñ rdo rje と同一人かどうか不明。

註 142. BA, II-p.493。

註 143. 『EVA』 p.67 にこの部分の訳がなされている。

註 144. DC, 250a, 1。ウルギェンリンパ O rgyan gliñ pa (1323~推定1360)  
の発掘した「埋蔵書」である。東大 No.294 O rgyan gu ru Padma ḥbyuñ  
gnas kyi skyes rabs rnam par thar pa rgyas par bkod pa Padma  
bkaḥi than yig がこの書である。未来のテルトゥンなどを予言した書。(たと  
えば, 「五人のテルトゥン王」など)。しかし, 実際は発掘者ウルギェンリンパの創  
作と思われる。後世になると予言に合わないことがあらわれるようになる。この書に  
関しては, THL, pp.32~45 参照。訳も多数あるが, Toussaint: Le dict  
de Padma, paris, 1933 が有名である。

註 145. (推定1000~1080)。DC, 250a, 4~251a, 3。『EVA』 p.211, 註16  
によると, 生年は958~1006の間といわれる。IHa rje gter ston rkyan  
pa の第十三代目の転生の人。発掘した埋蔵書では, rTsa gsum dril sgrub  
dños grub brtan gzigs が重要である。また, 中国から翻訳された「経流」  
(mdo lugs) のたくさんの儀軌 (cho ga) も発掘した。

註 146. 『EVA』 p.68 によると, bDe chen Shig po gliñ pa (1829~1870)  
のことという。Shig po gliñ pa は GÇM の著者トゥカンよりも後代の人であ  
る。

註 147. タシトブギェルワンポイデ bKra çis stobs rgyal dbaṅ poḥi sde のこと。  
ニンマ派がツァン地方を追い出される原因になる人。

後に, 彼の御子息, 三代目ゴッデム rGod Idem カクギワンポ ṅag gi dbaṅ  
po はウ地方にニンマ派の総本山となるドルジェタク rDo rje brag 寺をつくる。  
<4・1> 註4 参照。

註 148. DC, 250a, 2~3 に記されてある gTer ston brgya rtsa ḥi rnam  
thar sna phyi のことと思われる。(ダライラマ五世のことを予言してあると思  
われる bKra çis stobs rgyal gyi gter luñ (DC, 293b, 1~2, <4・  
1> 註19) は, 別の書か。)

註 149. (1124~1192)。DC, 251b, 6~255a, 1。PSJ, 244b, 3。Das 版, p.  
387。「第一のテルトゥン王」である。PSJ, 245b, 6~7, Das 版, p.388  
には, 彼に到る「伝説のニャン流」(bkaḥ ma ṅañ lugs) を記す。そして, 彼  
以後, 「伝説」と「埋蔵教説」の系統が混ざるとする (PSJ, 246a, 1。Das 版,  
p.389)。

<発掘した埋蔵書>

1. brag srin ma sbar rje (ダバグンツェ (後註151) が以前に発掘したと  
ころ) から

Avalokiteśvara などの像とともに, 「ダーキニの法類」(mkhaḥ ḥgroḥi  
chos skor) の埋蔵書

2. mkho mthiñ (サムイェのチンプ mchims phu にある) から  
bKaḥ brgyad bde gcegs ḥdus pa (最も重要)

3. mu tig çel gyi spa goñ から  
mKhaḥ ḥgroḥi shus lan brgya

<系 統>

弟子のうち最良のものは, 御子息でもある ḥGro mgon Nam mkhaḥ dpal  
ba である。他に, 「五人の弟子」(bu lña) と呼ばれる gños grags rgyal,  
Shig po bdud rtsi (1149~1199), sMan luñ pa Mi bskyod rdo  
rje などがいる。

御子息の系を示しておく。

ニャン・ニマオセル → hGro mgon Nam mkhaḥ ḥod zer  
 → hGro mgon Nam mkhaḥ dpal ba → mÑaḥ bdag blo ldan →  
 (Avalokiteśvara の化身) (Mañjuśrī の化身)

→ mÑaḥ bdag bdud ḥdul  
 (Vajrapāṇi の化身) (以上は『EVa』pp. 97~103による)

なお、現在まで伝わるニャン・ニマオセルの埋蔵書に関しては、『EVa』p.103参照。

註 150. (1212~1270)。DC, 255a, 1~263b, 6。<1・1>註 55も参照。「第二のテルトゥン王」である。ニャン・ニマオセル(上註 149)と合わせて、「テルトゥンの前後二人」と呼ばれる。チソンドゥエン王の「御語」(gsun)の転生者である。

<発掘した埋蔵書>

発掘場所によって十九にまとめられる(DC, 258a, 3~6。『EVa』p.109)。

即ち、

1. gNam skas can [ gter ]    2. Brag dmar [ gter ]
3. rTa mgrin shabs [ gter ]    4. Mon kha sten [ gi gter ]
5. rTa mgrin [ gter ]    6. dBen rtsaḥi sgoḥi gter
7. mKho yi gcin dmar gter    8. rTa mgrin gter
9. sGom chos la [ gter ]    10. Sras mkhar gter
11. sKya bo phug rin [ gter ]    12. Phyag mtheb maḥi gter
13. bSam yas āryaḥi gter    14. lCag phur gter
15. Mon bum thaṅ gter    16. rTsis kyi lha khaṅ gi gter
17. Roṅ brag gter    18. Ha bo gaṅs gyi gter
19. Raṅ gab don gyi gter

また、グル・チュワンの「十八大埋蔵書」(gter kha chen po)のうちで、コントゥル sKoṅ sprul(『リンチェンテルヅ』の編者)が選んだものが、『EVa』p.118に記されている。

<系統>

「八人の直弟子」(thugs sras)

九人 → Padma dbaṅ chen — Lan gro と Ñi ma ḥod zer の転生の人  
 → Mi bskyod rdo rje — 主系統になる。「仏説」と「埋蔵教説」を知る  
 他六人  
 → Bha ro gtsug ḥdzin (ネパール人)

他に弟子として、Maṅi rin chen (カトク寺の者)等がいる。

また、グル・チュワンが建てた寺としては、Tshoṅ dus ḥgur mo 寺と bSam ḥgrub bde ba chen 寺がある。(以上は、『EVa』pp. 103~119による)

註 151. (1012~1090)。DC, 251a, 1~6。Çud bu dPal gyi sen ge (チソンドゥエン王の二十四人の家来の一人)と Vairocana の転生の人。別名 dBya phyug ḥbar ともいう。シチュ派の始祖であるマチクの師である(「チベ仏教」p.269)。

<発掘した埋蔵書>

1. dBu rtse とよばれるサムイェの主寺院の扉の上から  
Dzam dmar gsaṅ sgrub と gNod sbyin rdo rje bdud ḥdul

2. 同じ場所の舍利柱 (bum pa can) から  
 薬法関係の『ギェ・シ』 rGyud bshi

<系統>

1. 『ギェ・シ』  
 ダバ・グンツェバル → dGe bces khu ston darma grags → gYu thog Yon tan mgon po (チベットの第二の医王) → 以後広がる
2. gNod sbyin rdo rje bdud ḥdul の法類の dbaṅ と luṅ の系統は、現在まで続いている。(以上は、『EVa』pp. 94~96による)

註 152. ダナク Grwa nag とも呼ばれる。1081年設立。GHP, pp.54, 132。

註 153. THL, p.125。水谷幸正「『ギェ・シ』<rGyud bshi>によるチベット医学の綱格」『印仏研』6巻2号, 昭和33。『ギェ・シ』はチベットやモンゴルのラマ医学で最も用いられている根本聖典のことであり、正式には bDud rtsi ḥi sñin po yan lag brgyad pa gsaṅ ba man ṅag gyi rgyud である。四編の奥義 (rgyud, 水谷訳。普通はタントラと訳す)より成り立っているため rGyud bshi と呼ばれる。チベット医学の文献の主要なものは、この rGyud bshi の注釈書か、その系統のものである。水谷氏の論文に詳しい説明がある。

註 154. 本論註Ⅲの註3。<1・3>註1。

<2・1>

註 1. anuyoga 乘に六種類のタントラがあるうち、「明咒のタントラ」(rig snags gi sgrub pa) の「総」(spyi hi sgrub pa) のタントラである Heru ka hi tantra (G・Th, 164b, 3~165a, 5. <1・3> 註 65) が呼称の上から類似しているが、同一タントラを指すのかどうか不明。

註 2. 「六支瑜伽」はもと、インドのヨーガ学派から由来するもの。『イン思想史』 pp.145, 146 に、ヨーガの八実修として、1. 制戒 (yama) 2. 内制 (niyama) 3. 坐法 (āsana) 4. 調息 (prāṇāyāma) 5. 制感 (pratyāhāra) 6. 総持 (dhāraṇā) 7. 禅定 (dhyāna) 8. 三昧 (samādhi) が記されている。さて、このヨーガ学派の八実修法の影響のもとに成立した「六支瑜伽」の六支とは、1. 対応制御 (pratyāhāra) 2. 禅 (dhyāna) 3. 調息 (prāṇāyāma) 4. 総持 (dhāraṇā) 5. 随念 (anusmṛti) 6. 定 (samādhi) である。『秘密集会タントラ』の「五次第」(究竟次第) も「六支瑜伽」に配せられることがある。『チベ密教』付録 pp.1~29 参照。なお、「六支瑜伽」の六支の訳語は酒井氏に従った。

註 3. 『秘密集会タントラ』の二つの修法次第のうち、究竟次第 (Niṣpanna-krama, rdzogs rim) の方である。『チベ密教』 pp.103~232 は、龍樹系の「五次第」の研究である。

註 4. サキヤ派の教義である。『西藏宗義 1』 pp.18~32 は「道果説」の研究である。それに対する批判研究に、津田真一「タントラとは何か」『豊山学報』第 24 号、昭和 54 がある。

註 5. S. Karmay 氏の教示によれば、ニンマ派の「幻化網」には「六次第」「五次第」「三次第」があるという。ニンマ派の「幻化網」の流儀のうちで「新タントラ派」と一致するのは「スル流」である。他の二流派には中国禅あるいはゾクチェンの影響が見られる。ニンマ派の「幻化網」の三流派に関しては、<1・3> 註 22, 58, 78, 135, 「リアンチェ」 p.157 参照。『サンワニンポ』及び「新密呪」派の「幻化網」に関する研究には、松長有慶「幻化網タントラの性格」『印仏研』第八巻、第 2 号と同著者の『密経典史』 pp.240~244, 271 がある。

註 6. S. Karmay 氏によれば、ニンマ派には「三つの修道」(lam gsum) がある。  
 { 1. 律 (venaya) — span lam (「捨の修道」)  
 2. タントラ (tāntric way) — bsgyur lam (「変化の修道」)

{ thabs lam (方便道), 父タントラ  
 ges rab kyi lam (般若道), 母タントラ  
 3. ゾクチェン (rdzogs chen) — grol lam (「解脱の修道」)

この説明による限り、トゥカン説は誤りである。トゥカンは bsgyur lam にすべきところを、grol lam にしているのである。「幻化網」は tāntric way に属するものであるからである。ただし、以上は S. Karmay 氏の説明にもとづくもので、直接文献によって確かめたものではない。

註 7. 正式には gSañ baḥi thig le, これを略して gSañ thig と呼ぶ。S. Karmay 氏によれば、内容的には半タントラ、半ゾクチェンとのこと。

註 8. タントラ道の父タントラ「方便道」のこと。上註 6 参照。意味の異同はともかく、thabs lam の用語例としては、「チベ変容」p.63 にカギユ派のものが記されている。ついでに言うと、gdams niag も man niag もともに「教誡」と訳されるが、前者は実践に関する教え、後者は口伝(あるいは、極意、注意事項)という差異がある。ここの「教誡」は man niag である。(これら二者に対して、「典籍」は gshuñ といわれる。)

註 9. anuyoga 乗のこと。<1・1> 註 51, <1・3> 註 2。

註 10. nañ は「法界」のいろいろな側面のことと思われる。nañ sgom とは、それらを瞑想することである。nañ に対する「新密呪」派の例は、GÇM, Shol 版, Kha, 20a, 1 と 2 (「カギユ派の章」) に記されている。なお、本論註 V (3) 参照。

註 11. mahāyoga 乗の「修部」が「八教説」である (<1・3> 註 79, 80 参照)。「八教説」のうち「出世間の五部」が「五族の仏」と対応する。即ち、

「出世間の五部」	→	<五族の仏>
1. ḥjam dpal sku	→	rNam snañ (Vairocana)
2. padma gsuñ	→	Ḥod dpag med (Amitābha)
3. yañ dag thugs	→	Mi bskyod pa (Akṣobhya)
4. bdud rtsi yon tan	→	Rin ḥbyuñ (Ratnasambhava)
5. phur pa phrin las	→	Don grub (Amogāsiddha)

(DTN, Ga, 3a, 4~5)

<2・2>

註 1. MBT, pp.60, 61 に、この部分の英訳がなされている。

- 註 2. 「心部」の中心聖典 Kun byed rgyal po には「ソク」(rdzogs, 究竟)に三種を記す。G・Th, 168b, 4~169a, 4 にその詳しい説明があるが、その三種の「ソク」の一つに、GÇMのこの説明は含まれる。本論本文Vの1-1) 参照。
- 註 3. これは Th・Ch の「心部」のうちの、「セムチョクであると言う心部」の総じての no bo の記述を資料としている。Th・Ch, 73a, 5~6。
- 註 4. ここの「大印」はカギユ派の教義であると思われる。DTNによると「大印」の教義はインドの Saraha がその起源という(壁瀬灌雄「大印派と根本思想」『西藏会報』No.10 参照)。  
「大印」の教義を知る手近な資料としては、二つある。一つは Phyag chen gyi zin bris (蔵外 No.240) である。これは W. Y. Evans - Wentz : Tibetan yoga and secret doctrins, oxford Newyork, 1977, pp. 115~154 に翻訳されている。他の一つは、GÇMのカギユ派の章に見られる(Shol 版, Kha, 19b, 1~28b, 6)。
- 註 5. 「明知の空」「本来清浄」は、「教誡部」の説明(訳文 p. 115, 後註 32)及び本論本文Ⅵの1-4) 参照。
- 註 6. 「大印」との差異の解釈に二種考えられる(本論本文Vの2-2-1) 参照。  
訳文では、そのうちの一つに従って訳した。
- 註 7. Th・Ch, 72b, 4~5 に記されている「界部」の総説に一致する。省略されている部分もあるので、Th・Chのその部分を示す。「法性である普賢の界以外に他の去る場所は無いと説くものが、『界部』である。これらは所詮(brjod bya)が法性の界より以外の他のもの〔として〕生ずることを滅することに意図がある。」  
GÇMでは「法性の界」の前の「所詮」が省略されている。
- 註 8. 「五次第」は『秘密集会タントラ』の究竟次第である。『秘密集会タントラ』は「父タントラ」(「不二タントラ」と言われることもある)に属し、生起次第が主である。しかし、「父タントラ」といっても生起次第のみとり扱うのではなく、究竟次第もとり扱う。その「究竟次第」がこの「五次第」である。〈2・1〉註3。(究竟次第に関しては、「母タントラ」に属する『ヘーヴァジュラ・タントラ』の究竟次第が一般には有名である。)
- 註 9. 本当は「十風」である。根と肢のそれぞれの「五風」がある。『チベ密教』p.130 によりて示すと、

「根」	1. 呼気	2. 吸気	3. 等風	4. 上風	5. 介風
	prāṇa	upāna	samāna	udāna	vyāna
	srog	thur-sel	mñam-gnas	gyen-rgyu	khyab-byed
「肢」	1. 龍風	2. 亀風	3. 鷓鴣風	4. 天授風	5. 勝財風
	nāga	kūrma	kṛkara	deva-datta	phanañjaya
	klu	ru-sbal	rtsaṅs-pa	lhas-byin	gshu-las-rgyal

(上段がサンスクリット語, 下段がチベット語である。)

これら「十風」は「ウペニシャッド」の教説に由来する。

- 註 10. 「顯明」(Āloka) 等を堅固にするためと推定される。
- 註 11. 「五次第」中第三の「自加持次第」で悟られ成就するもの。『チベ密教』pp.147~148。
- 註 12. 「五次第」中第四の「楽現覚次第」で行なわれるもの。『チベ密教』では Ril par ḥdzin. 第三の「自加持次第」で成就した「幻化の身」を光明になして清める実践である。『チベ密教』pp.154, 155。KGJ, p.326 註 13, p.327。
- 註 13. 『チベ密教』では, rJes su gshag。『チベ密教』p.155。KGJ, p.326 註 13, p.327。
- 註 14. 一般には, dmigs gtad は「縁ぜられる対象」を意味する(『藏文辞』p.656, 『Jäschke 辞』p.423)。しかし, dmigs pa について, 『藏文辞』p.657 には「縁ずること」の意味も記されているので、そちらの方の意味をとった。
- 註 15. 「光明」を重んずる「界部」の実践法は、「因果を超えた究極界」に四種あるうち最後の「要点が広げられるもの, 真実性の究極界」で示されている。そこに二つ示されている観法のうち, 第一の観法, 「見られるままの諸法を凝視した明瞭さの中で全く散乱なく弛め放つこと」が, GÇMで言われる「界部」の実践法である。「界部」の最も特徴的で重要な実践法をもって, 「界部」の実践を代表させたのである。  
(G・Th, 176a, 1~6. Th・Ch, 77b, 1~3)
- 註 16. 「深」と「輝」は, 瞑想における「止」と「観」に相当する。瞑想の心的状態の否定的側面が「深」, 肯定的側面が「輝」である。『心把握』p.391 参照。本論註Vの(20) 参照。DTN, Ga, 31b, 4~5 の Grol baḥi thig le の記述が参考になる。
- 註 17. 『チベ文化』p.197。
- 註 18. 「金剛橋」に関して, BA, p.171 には the name of rñiñ-ma comen-tary. BA, p.182 には rñiñ-ma system of mental concentration.

「リアンチュ」 p.150 には「界部」の教義名。『EVA』 p.54 には, the name of one of the principal texts. DTN, Ga, 33a, 1 には *Ye ces gsan ba* などの系に依る「金剛橋」の教誡 (*rdo rje zam paḥi man nāg*) と記す。これらのうち、「界部」の教誡名とするのが正しいと思われる。

註 19. 「教誡部」でいう「明知」とは、密教の精神生理学的に実体化された心臓の「如来蔵」を指す。

註 20. 「明知」が「境」にのぼり、現実に見られることは、「トゥゲル」(*thod rgal*) の実践が「テクチュ」の実践よりすぐれている七点の一つである。その七点については, Th・Ch, 510b, 4~512b, 2 及び TSh・D, 148a, 5~150b, 4 参照。

註 21. 「トゥゲル」の実践において、「明知」(*rig*) を「界」(*dbyiṅs*) の中に入れて動くことなきようにして見ることから、様々な「顕現」が「界」の中にあられる。それらは四段階に分けられて、「四顕現」(*snañ ba bshi*) と呼ばれる。ここに記されている「金剛鎖の仏身」は、第三の「顕現」においてあられる。「四顕現」の名称と資料の記述箇所を示す。

第一の顕現 — 「直接なる法性の顕現」

(*chos ṅid mñon sum gyi snañ ba*) Th・Ch, 446b, 6~447a, 3, 448b, 4~452a, 1. Tsh・D, 165b, 2~5.

第二の顕現 — 「境地が増える顕現」

(*ñams goñ ḥphel gyi snañ ba*) Th・Ch, 452a, 1~456a, 2. Tsh・D, 165b, 2~167b, 4.

第三の顕現 — 「明知が定量に到る顕現」

(*rig pa tshad phebs kyi snañ ba*) Th・Ch, 456a, 2~459a, 3. Tsh・D, 167b, 4~170b, 6.

第四の顕現 — 「法性へ尽きる顕現」

(*chos ṅid zad paḥi snañ ba*) Th・Ch, 459a, 3~463b, 5. Tsh・D, 170b, 6~174a, 6.

註 22. 『七つの宝蔵』で「教誡部」を総じて説明してある箇所にもとづいたものと思われる。Th・Ch, 78a, 1~2. G・Th, 177b, 4~5.

註 23. 「トゥゲルの顕われ」とは、実践によって虚空にのぼる「光彩」(*gdañs* = GÇM では「空なる色」) のことである。「光彩」とは、心臓の「如来蔵」(=「明知」) の「光彩」のことである。「教誡部」の「トゥゲル」と「六支瑜伽」の共通点が「光彩」

の顕われであることは, Th・Ch, 428b, 6~429a, 1 に記されている。即ち、

「六支瑜伽」

「風の光彩」(*rluñ gdañs*) がのぼる。「迷乱の顕われ」(*ḥkhrul snañ*) で不浄な「明知の力」(*rig rtsal*) の「光彩」を道 (*lam*) とす。

「トゥゲル」

「明知の光彩」(*rig gdañs*) がのぼる。「清浄な顕われ」(*dag snañ*) で「光明」(*ḥod gsal dños*) の「光彩」を道とす。

(以上には、「光彩」による共通点と、「光彩」の種類による両実践法の差異も説かれている。むしろ、差異を説くのが主である。)

註 24. 「六支瑜伽」は新タントラ派の *anuttarayoga* 乗の「究竟次第」に属するものである。『時論タントラ』の「六支瑜伽」が有名であるが、『チベ密教』付録 pp.1~29 に記されてあるものが手短である。

「六支」( $<2 \cdot 1>$  註 2 参照) のうち第四支「総持」で顕現があられる。心が中央脈 (= 金剛道) にあるとき、氣息の両風に特相 (*nimitta*) の顕現が生ずるとされる。特相は五種であり、陽焰、煙、虚空明、燈焰明、常照 (光明) である (『チベ密教』付録 pp.7, 8)。これらが Th・Ch でいう「風の光彩」(上註 23) のことであり, GÇM に記す「空なる色」のことである。

また, GÇM でいわれる「五風を中央脈に系縛する」のは、第三支「調息」のときであり、第四支の「総持」においてもそれは持続される。

註 25. 「六支瑜伽」の六支 (上註 23) のうち、とくに第四支、第五支、第六支である。「大楽」が完成するのは、第六支である。

註 26. 「教誡部」の実践「トゥゲル」で、「四顕現」(上註 21) を眼の感官で直接に見ること。「意の判別」によらず眼で直接見ることは、「教誡部」の実践が他乗よりすぐれている七点の一つである。それら七点は, Th・Ch, 427a, 5~428a, 2 及び Tsh・D, 209a, 4~209b, 3 に記されている。

註 27. 「身・語・意」(*lus, ṅag, yid*) のこと。

註 28. 御身・御語・御意 (*sku, gsuñ, thugs*) のこと。密教一般には、人間の身・語・意を仏の御身・御語・御意にすれば、それで目的は達せられたことになる。ただし、それは「生起次第」においてである。「究竟次第」ではすべて「勝義空」(*Prabhāsa*) へ帰入する。

註 29. 第四の顕現である (上註 21 参照)。

註 30. これもゾクチュン「教誡部」の実践が他乗よりすぐれている七点 (上註 26 参照)

の一つと同趣旨である。その優位点とは、他乗は三仏身 (sku) を究竟の果とするが、この「教誡部」は三仏身が「道での顕現」(lam snañ) としてのほり、究竟はすべて「本来清浄光明の界」(hod gsal ka dag gi kloñ) へ消入してしまうことである。

註 31. ソクチュンでは、ño bo と rañ bshin は区別されている。それについては、本論本文 V の 1-2) の(三) p. 16, 本論註 V (29), VI (18) 参照。

註 32. ño bo ka dag, rañ bshin lhun grnb, thugs rje kun khyab と「三空」、中国仏教、密教教義の比較については、本文 VI の 1-2) pp. 44~45, VI の 1-4) p. 55。

註 33. 『七つの宝蔵』では、「心」と「智」になっている。本論本文 VI の 1-4), p. 55 参照。

註 34. ここの gsal stonñ hdzin med kyi stonñ pa を、「輝く空 (gsal ston), 即ち執取すること無き空」と読めないこともないが、認め難い。教義内容の異同はともかく、gsal stonñ hdzin med はサキヤ派にもある。『西藏宗義 I』pp. 33~37. gsal については上註 16 参照。

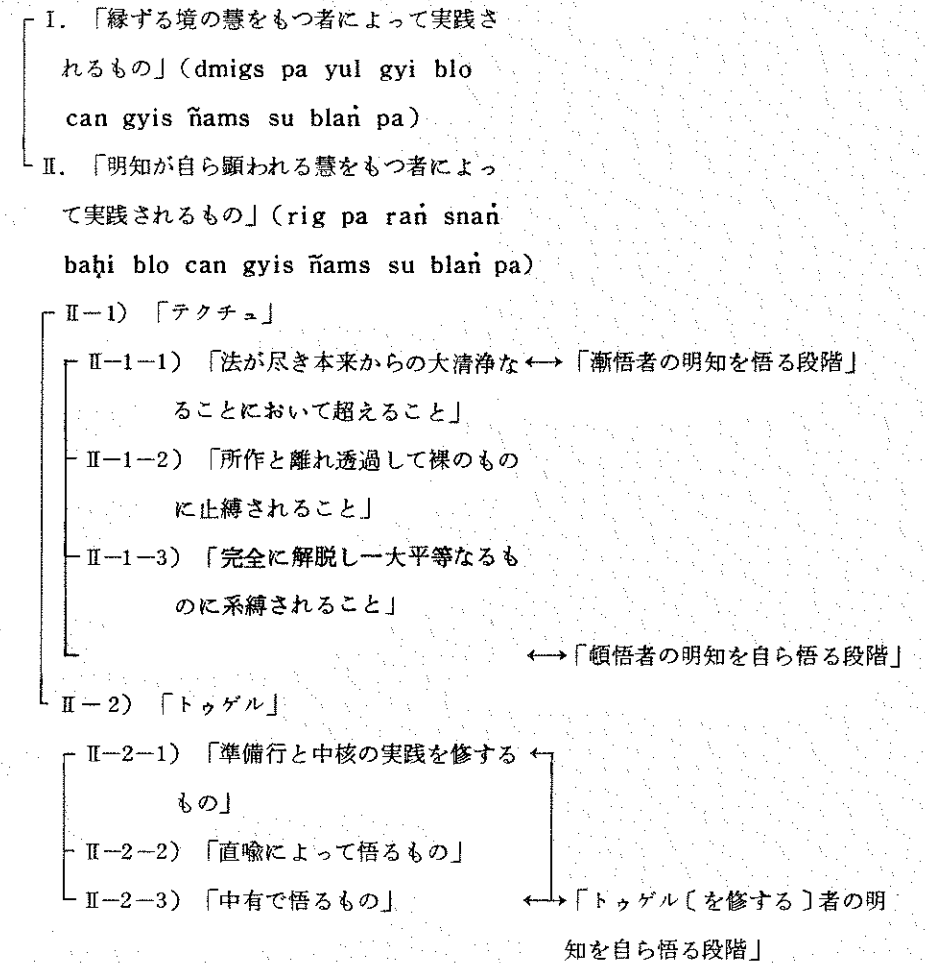
註 35. 本論本文 VI の 1-4) p. 55 参照。同名の教義がサキヤ派にもある。『西藏宗義 I』pp. 33~37。

註 36. rig ston を「三空」の一つの「明知の空」として訳したが、「明知」に重点を置いて「空なる明知」と訳すことも可能である。

註 37. GÇM の「心部」の箇所に記されていた教義である。教義がそのまま観法となる教観一致のものである。「教誡部」の実践法のうち、頓悟性の「テクチュ」と呼ばれるものである。GÇM で漸悟としたのは、観法が、「顕われ」「心」→「心」「空」→「空」「無二・双入」→「顕われ」「明知の空」と段階的に分かれているためである。教観一致であり真妄間に修道が無い点では、頓悟性のものである。後註 39 参照。

註 38. 全く、中国禅の師資相伝に類似している。「チベ仏教」p. 270 に説明されているソクチュンとは、これを指すと思われる。

註 39. 「トゥゲル」も含めて、GÇM の記述は説明不足の点もあるので、『七つの宝蔵』によって補う。まず、『七つの宝蔵』に記されている「教誡部」の実践を、GÇM に記されているものと対応させつつ、図示する。



上図を説明する。Iはこの場合、余り重要でないので割愛する。IIのうち、「テクチュ」は「心・界部」以来のものである。教観一致であり、中国禅宗の頓悟的なものである。三種あるうち、GÇM の「漸悟者の明知を悟る段階」は、II-1-1) に相当する。「テクチュ」の三種については、本論 VI の 2-1-1) を参照。

II-2) 「トゥゲル」は「教誡部」独自の実践法である。禅宗的な「見性成仏」を base にしながらも、密教的要素が多く加わったもの。心臓にある「如来蔵」を虚空に出して(=「四顕現」上註 21 参照)、それを見ることによって正覚するものである。

「トゥゲル」のうち、II-2-1) は、いわゆる「トゥゲル」であって、「四顕現」を虚空に出すもの。II-2-2) は、水晶にあたる太陽の光 etc の直喩 (dpe) を見て、心臓の「如来蔵」を悟り正覚するもの。II-2-3) は、「トゥゲル」を修し

たが今生で正覚できずに、その修の力によって、中有で「如来蔵」(＝「明知」)を悟り正覚するもの。「トゥゲル」の中では、II-2-1)が最も重要である。GÇMの「トゥゲル〔を修する〕者の明知を自ら悟る段階」は、II-2-1)とII-2-3)に相当する。どちらかという、II-2-3)の方に重点を置いているようである。

なお、II-2-1)において「頓悟するもの」(cig car pa)と「漸悟するもの」(rim gyis pa)がある。「漸悟するもの」とは、「四顕現」が順次に定量(tshad)に到るもの。「頓悟するもの」とは、第一の「顕現」が見えて、それについて修習することによって、第二の「顕現」も経ずに、「顕現」が尽きること(zad pa、普通は第四の「顕現」で尽きる)も経験するもの。「最勝慧の頓悟するもの」(Blo mchog cig car pa)と呼ばれる。この「頓悟するもの」を、GÇMの「頓悟者の明知を自ら悟る段階」と混同しないように注意する必要がある。

以上のことについては、Th・Ch, 431a, 4~6。Tsh・D, 150b, 5~151a, 4 参照。

註 40. この箇所を、「無垢で、輝であり空である、執取するなき現時の自己の明知」と読めなくもない(上註 16 及び上註 34 参照)。

註 41. rgya yan と同義語である。無努力・無分別の三昧状態を意味する。「ゾクチェンの四義」のうちでは、phyal pa に当る。

註 42. relax すること。妄分別している状態(所取・能取に分かれていること)に対して、無分別状態のことを言う。

註 43. 「まもる」とは、それを対象として瞑想すること(sgom pa)ではない。その三昧状態を無分別のままに保つこと(keep up)である。対象として瞑想すれば、「意の判別」が入り、所取・能取に分かれる。ゾクチェンの教法で最も嫌うことである。

註 44. ゾクチェンはバドマサンバヴァとは全く関係はない。

註 45. 一般に言われる「基・道・果」とは異なる。一般には、「道」は妄から真への「修道」を指す。この場合は、「基」「道」「果」とも「真理」(＝「明知」)の三様態であり、基＝道＝果である。あえて、「修道」を言えば、「現時の明知」を弛め放つことである。

註 46. glod pa と同義語である。無分別・無努力の三昧にしておくこと。上註 42 参照。

註 47. 「自己本来の場所」あるいは「法界における場所」を意味すると思われる。しかしまた、「その場で」「おのづから自然に」を意味するとも考えることも可能である。

<3・1>

註 1. (958~1055)。PSJ, 248a, 3。Das 版 p.392。BTC, Ya, 179b, 2。吐蕃王朝崩壊後、西チベットのガリに逃れた王統のキデニマゴン sKyid lde Ńi ma mgon の孫ソング Sron Ńe (＝ハラマ・イエシエオウ lHa bla ma Ye çes hod)が、チベットの正統仏教再興のため、インドに遣わした二十一人の中の最良のもの(後註 3 参照)。

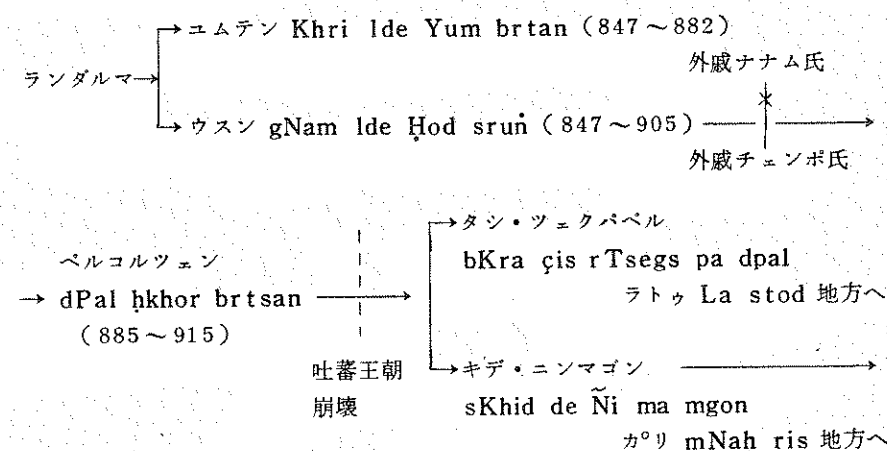
後期仏教再興の中で、アティージャが教義面でインド正統派仏教によって、チベットの墮落した仏教をたてなおしたのに対して、リンチェンサンポは「旧訳タントラ」の訳語を是正した。彼以後の訳は、「新訳」と呼ばれる。(「チベ仏教」pp.258~260。『チベ文化』p.64 参照)

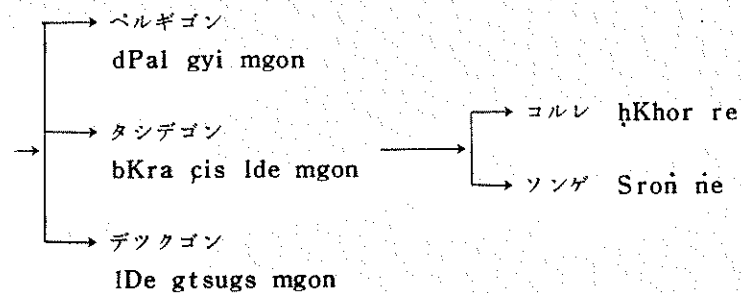
また、GÇMは<3>の記述を主として PSJ, 247a, 4~253b, 7, Das 版 pp.390~402, 他に DTN と BTC を資料としていると思われる。

註 2. PSJ, 247b, 7~248a, 3。Das 版, p.392。ニンマ教法を否定する理由として、次のようなものを記す。九乗の宗義のうちの或るものは、「三乗」「四タントラ部」のいづれにも入らないこと。前期翻訳のニンマ派のタントラの名前が、古い目録の lDan dkar ma 等に記されていないこと。チベットに來た他のどんなバンディタもそれらの法を説いていないこと etc。

なお、ルメ Klu mes (10c, 後期仏教弘通の初めに、律をカムに伝えた人)の著作にも Chos dan chos min rnam hbyed (PSJ, 250b, 3, Das 版, p.396)がある。

註 3. 吐蕃王朝の系統の者である。BTC, Ya, 179b, 2。『チベ文化』p.62 によって、彼に到るまでの系を示すと、



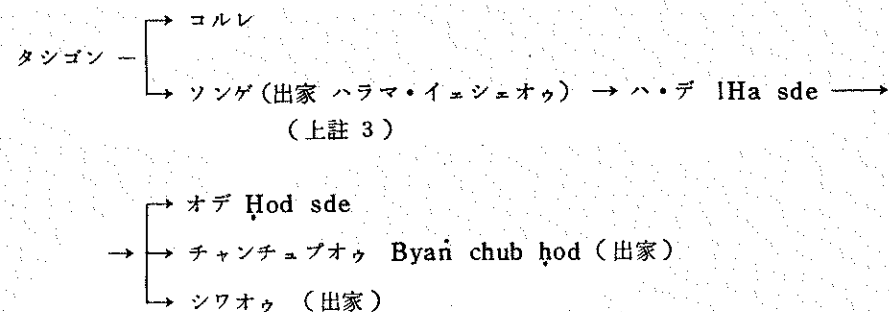


(これは、BA, p.37 による)

これらのうちのソングの出家名が、ハラマ・イエシエオウである。彼はチベット仏教が衰退して、墮落しているのを嘆いて、正統派仏教の復興を目指した人である。チベット仏教の後期弘通は、彼に負うところが多い。二十一人の若者（その中の一人がリンチェンサンポ。上註1参照）をインドに送ったり、西部律のもとになる三人のパンディタを招いたりしている。トディン mTho lIdin 寺を建てたのも彼である。アティーシャを招くように指図したのも彼であり、ガルロク Gar log に捕えられた時に、ガルロクに払われるべき彼の身代金によって、アティーシャが招かれたとも言われる。

彼によるニンマ派に対する批判は、PSJ, 248b, 5~249a, 4, Das 版 p.393 に記されている。『チベ文化』p.156 にその部分訳がある。彼の批判はニンマ派の中で、吐蕃王朝崩壊後その墮落が助長された密教に集中されている。

- 註 4. PSJ, 250b, 3~4. Das 版, p.395. BTC, Ya, 179b, 2. 正式にはポタン・シワオウ Pho bran Shi ba hod. カリの王である。BA, pp.37, 102, 244, 431, 575, 1070. BA, p.37 によると、その家系は、



シワオウの手紙とは、「水・申(chu sprul)の年に、インドに遣わした自己の支配下の家来に与えた手紙」である。この手紙に関しては、「サムテン」p.151 参照。

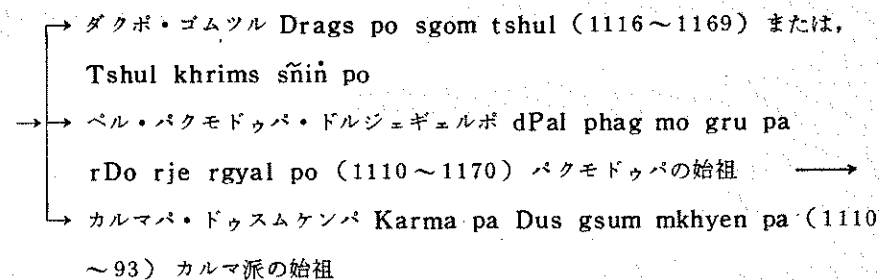
- 註 5. PSJ, 250b, 3. Das 版, p.396。  
 註 6. PSJ, 248a, 3~248b, 1. Das 版, p.392. 批判内容はニンマ派のタントラ偽撰に対するものが主である。他に、バドマサンバヴァとグル・チョワンに関するものがある(<1・1>註 54, 55 参照)。  
 註 7. (1011~1109). PSJ, 250b, 3. Das 版, p.396. 正式には、コク・ロデンシエラブ rNog Blo ldan çes rab. カダム派の人。  
 註 8. PSJ, 250b, 3. 250b, 4~251a, 1. Das 版, p.396. 正式には、サキヤバンチェン・クンガーギェルツェン Sa skya pañ chen Kun dgañ rgyal mtshan (1182~1251)。新サキヤ派のもとになる人(「チベ仏教」p.268 参照)。1224年に二人の甥とともに蒙古に行き、後、その甥の一人バクバがクビライから、チベットの全権を託される(『チベ文化』p.71, 「チベ仏教」p.275 参照)。  
 註 9. PSJ, 250b, 4~251a, 1. Das 版, p.396. Sa-skya bkañ hbum, ToKyo, vol 4, No.132. 経・タントラの偽撰、埋蔵書に対する批判が記されている。

他に、PSJ, 245a, 2~255b, 7, Das 版, pp.402~405 にも同書の引用がしてある。

- 註 10. 11世紀の人。PSJ, 248b, 1~5. Das 版 p.392, 393. BTC, Ya, 179b, 2. PSJ では mGos khugs pa lHa bcas. 彼の批判はチベット偽撰の経・タントラに向けられたものである。  
 註 11. PSJ, 251a, 1~252a, 4. Das 版 pp.396~399. カギェ派に属する。彼に到る系を示すと、

マイトリバ → テーローバ → ミラレバ Mi la ras pa (1040~1123) →

→ ガムボバ rje sGam po pa (1079~1153) →  
 別名、タクボ・ラジェ (『チベ文化』p.66)





→ ディグン・ベルジン (1143~1217)

本名、ディグン・リンチェンベル

別名、キュラリンポチェ sKyu ra rin po che

または、ディグン・リンポチェ

または、ディグン・パ

または、ディグン・ジグテンゴンポ ḥBri guñ ḥJig rten mgon po

または、ディグン・キョブパ ḥBri guñ sKyobs pa

『チベ文化』 p.69 によれば、ディグン・パの始祖

『EVA』 pp.105, 215 では、1177年生まれとしている。

(「チベ仏教」 p.267 参照)

このディグン・ベルジンのニンマ派批判は、それまでのニンマ派への批判を総まとめにしたものである。PSJ で最も長く記述されている。その批判の対象は次の如くである。ランダルマ破仏後の墮落タントラ。インド密教にはないチベットで付加された諸要素(土俗神の取り入れ etc)。中国禪の教義を混入したこと。埋蔵書。ニンマの偽撰タントラ。

また、PSJ, 252b, 4~6, Das 版 p.400 に同じく、ディグン・ベルジンのゾクチェンへの批判が記されている。

他に、DTN, Ga, 3a, 7~3b, 1 に「八教説」の「世間族の三部」に土俗神を加えたことに対する批判。DTN, Ga, 31a, 3~4 にゾクチェンの名称がインドにないことへの批判が記されている。いずれも PSJ の記述に含まれる。

註 12. PSJ, 249a, 4~5, Das 版 p.394 に見えるプトンの弟子が書いたと考えられる Chos lugs sun ḥbyin のことではないかと思われるが、詳細不明。

### <3・2>

註 1. ニンマ派の「ロン系」のロンソム(<1・3>註78)のことか、あるいは異なる人物か。

註 2. BA, p.102. BTC, Ya, 179b, 3. 「大蔵縁起」 pp.42, 55. プトンの師。サムイェからニンマ派のタントラのサンスクリット原本を見つけた。BA, p.345. 後註7参照。「チベ変容」 p.72 によると、ナルタンの大学匠。

註 3. BA, p.102. BTC, Ya, 179b, 3. 「大蔵縁起」 p.57. プトンの師。サムイェからニンマ派タントラのサンスクリット原本を見つけた。BA, pp.94, 283, 688, 758, 1073. 後註7参照。

註 4. BA, pp.358, 756~7, 803.

註 5. ゲルク派以外の宗派ということ。自派とは、GÇMの著者トウカンの属するゲルク派のこと。

註 6. (1617~1682)。彼によってチベットにダライラマ政権(ゲルク派)が成立する。ニンマ派の教法を好んで、ニンマ派を保護した。ダライラマ五世の全集の第二部は、すべてニンマ派の教義に関するものである。PSJ, 245a, 5~246a, 1。Das 版 pp.388~389。『チベ文化』 p.181。DC, 292a, 6~295a, 2。<4・1>註19。

註 7. DTNは以上の他に、ニンマ派のタントラを清浄とする次の理由を示す。(DTN, Ga, 1b, 3~2a, 2)。

1. 『秘密集会タントラ』の註釈に gSañ ba sñin po が多く引用されている。

2. サキャ派の Kun dgaḥ rgyal mtshan (1182~1252) が Ḥaṅs sreg shin で Phur pa rtsa ba のサンスクリット原本を見つけた。

3. (ア) Kha che paṅ chen (1204~1213) がサムイェで gSañ ba sñin po のサンスクリット原本を見つける。それは順次に、チョムデンレルティに伝わる。

(イ) 後に、新しく見つけた gSañ sñin rgyud phyi ma をタルロ・ニマギェルツェンが翻訳する。

4. 「ゾクチェン」の名称がインドの論書にないというベルジンに対して、Ye ḥes shabs (Jñānapāda) 等のものにあることを示す。(DTN, Ga, 31a, 4~6)。

以上のうちで、PSJ, 252a, 6~252b, 2, Das 版 p.399 では、PSJの著者スンパケンポは二番目と三番目をも否定している。これは行き過ぎである。

### <3・3>

註 1. (1290~1364)。プトンの師の系統については、「チベ変容」 pp.72~89。ニンマ派の家系に生まれたので、最初ニンマ派の専門僧としての教育を受け、ニンマ派の教法に対する学識は相当のものであったと思われる(「チベ変容」 p.92 参照)。しかし、ニンマ派の諸タントラに対しては否定的であり、一部を除いてはそのままに捨て置いて『大蔵経』には取めなかった。

註 2. (1357~1419)。本名ロサンダクベベル bLo bzañ grags paḥi dpal。アムドのツォンカ bTson kha 出身のため、ツォンカバと呼ばれる。ゲルク派

dGe lugs pa の始祖。カーダム派をアティーシャが目指したものにするために、戒律を重んじた。それによって新カーダム派 bKaḥ gdams gsar ma と呼ばれる。また、ガンデン寺を建てたので (1409), ガンデン派 dGaḥ ldan pa あるいはゲデン派 lGe ldan pa と呼ばれる。著作は Lam rim, sNags rim など多数ある。ツォンカバがプトゥンにならってニンマ派タントラをそのままにしていることは, PSJ, 203b, 3。Das 版 p.401。

註 3. そのままにするというのは、黙認していることではない。「チベ変容」p.72 の言葉借りれば、プトゥンは「賛意を表しえない場合は、彼は強いてとりあげもしなければ、敢えて排除し論駁を加えもせず、それにふれずにそっと捨てる」のである。これは「捨」の態度と言われ、消極的な否定である。また、ナルタンの Rigs ral (<3・2>註2)のニンマ派タントラに対する態度の相違、『大藏経』の中に三帙が収められている事情については、「大藏縁起」pp.55, 56 参照。プトゥンはそれら三帙を清浄と認めたわけではないのである。このことは、ゾクチェンの中心聖典 Kun byed にとって重要である。

註 4. (1385~1438)。mKhas grub thams cad mkhyen pa dGe legs dpal bzañ po のこと。mKhas grub chos rje あるいは mKhas grub rje あるいは mKhas grub smra baḥi ṅi ma dGe legs dpal bzañ po と呼ばれる。ツォンカバの弟子。彼の著に rGyud sde spyiḥi rnam par gshag pa rgyas par brjod がある。プトゥンのタントラ分類の後を受けるものである。Ferdinand D. Lessing and Alex Wayman: mKhas grub rje's Fundamentals of The Buddhist Tantra, Mouton, The Hague, Paris, 1968 はその訳である。mKhas grub rje について詳しくは、同書 pp.11~14 (introduction) 参照。

註 5. 上註4の dGe legs dpal bzañ po のこと。

<3・4>

註 1. 第二代チャンキャ・ロールベードルジ = lCan skya rol paḥi rdo rje (1717~1786) のことである。このチャンキャも宗義書を著わしている。なお、トゥカンの師にはスンバケンポ (PSJ の著者) や第二代ジャムヤンシェーパーもいる。『西藏宗義1』pp.9~10 参照。

註 2. BA, p.1070 に記されている者と同一人物か異なる人物か、詳細不明。

註 3. GÇM のゲルク派の章のことと思われる。

註 4. BTC, Ya, 179b, 2~3 の引用である。BA, p.102。このBTCの引用部分は, PSJ, 253a, 7~254b, 1。Das 版, p.401 にも引用されている。

註 5. <3・1> 註1

註 6. <3・1> 註3

註 7. <3・1> 註4

註 8. <3・1> 註10

註 9. <3・2> 註3, 註7。発見したサンスクリット本は gSañ sñiñ rgyud phyi ma。

註 10. <3・2> 註2, 註7。カチュェパンチェンがサムイェで見つけた gSañ ba sñiñ po のサンスクリット本を得たのである。

註 11. mahāyoga 乗の「修部」の「八教説」の教法の一つ (<1・3> 註79, 80 参照)。このGÇMの Phur pa rtsa ba はDTN, Ga, 1b, 5~6 に記されている Kun dgaḥ rgyal mtshan (=Chos rjes skya ba) が Ḥaṅs sreg shiñ で見つけたものと異なるものか (<3・2> 註7)。この発見のことは, PSJ, 252a, 6, Das 版 p.399 にも記されている。

註 12. BTC, Ya, 179b, 3~6。PSJ, 253b, 1~3。Das 版 p.401 引用文中、最初の「それがしの考えでは」の部分は、最後尾の「そのままにしておくのである」にかかる。

<4・1>

註 1. ニャンレル・ニマオセル (1124~1192)。DC, 251b, 1~255a, 1。<1・3> 註149 参照。「第一のテルトゥン王」である。

註 2. グル・チョキワンチュク (1212~1270) のこと。DC, 255a, 1~263a, 6。<1・3> 註150 参照。「第二のテルトゥン王」。

註 3. (1487~1543)。DC, 270b, 5。DC, 282b, 4~285a, 2。北テルマ系。チソンデツェン王 (742~797) の「御意」(thugs) の転生者である rGyal sras lha rje の九代目の転生者である。彼の弟は Legs ldan rdo rje (後註6) である。

「埋蔵書」に関しては、サムイェ寺の最上層から Rig ḥdzin yoñs ḥdus kyī chos skor gsol ḥdebs le ḥu bdun maḥi sgrub thabs を発見する。

自著に, sDom gsum rnam par ṅes paḥi bstan bcos がある。

彼の再生者はチャンダク・タントブギェル (後註4) である。

註 4. DC, 270b, 5. 285a, 1. シンシャク・パの執権 sDe srid gtsaṅ pa (DC, 270b, 5. GÇMでは Shiṅ çag pa Tshe brtan rdo rje, 後註9) と諍いを起して、ニンマ派がツァン地方から追われる原因となった人。『百人のテルトゥンの願文集』をつくった (<1・3> 註 147, 148 参照)。カリバンチュン (上註 3) の再生者である。後にダライラマ五世にたいへん尊崇された。シンシャク・パの執権との諍いについては, TPS, pp.44~46 及び p.68 参照。

註 5. (1337~1409)。DC, 269a, 3~271a, 3. 「北テルマ」(Byaṅ gter) の始祖。チソンドツェン王の二十四人の家臣の一人 sNa nam rDo rje bdud hioms の転生者である。

<発掘した埋蔵書>

Zaṅ Zaṅ lha brag から  
mDzod lña ḥdus paḥi zab gter chen po, 『ブルバの三法類』, Las rgyu ḥbras la zlo baḥi chos dgoṅs pa, bsṅNen sgrub rnam pa bshiḥi chos skor, rTen ḥbrel can gyi chos tsan, dGra bgegs thal bar rlog paḥi chos, Kun bzaṅ dgoṅs pa zaṅ thal gyis thog draṅs paḥi chos

『EVA』 p.131 に、彼の発掘した埋蔵書で、現存している重要なものが六つ記されている。

<系統>

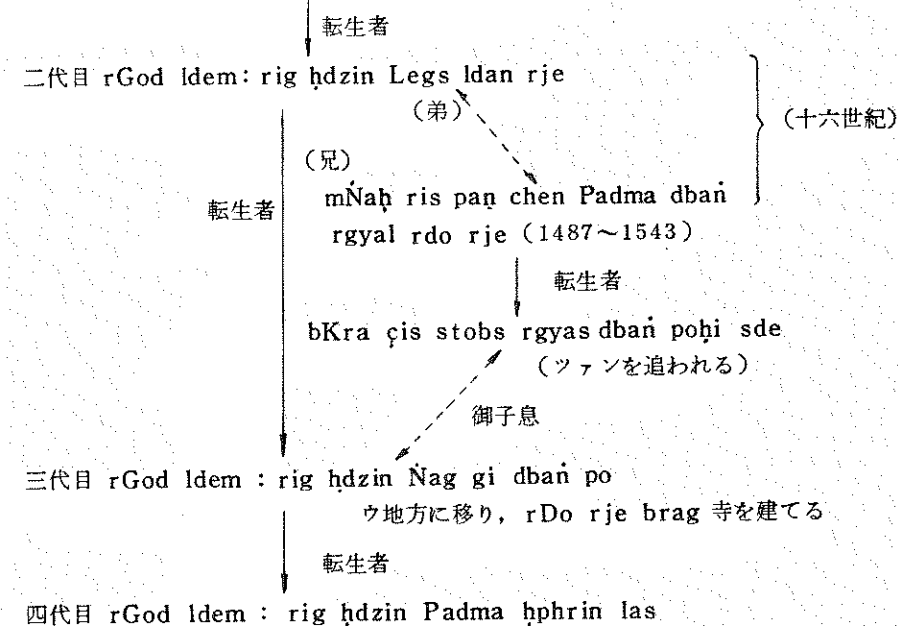
彼の系統は「北テルマ系」であり、代々、ゴッデム rGod ldem を襲名する転生者である(後註8)。二代目のゴッデムはレグデンドルジェ(後註6)である。

註 6. DC, 270b, 5. 284a, 2. カリバンチュン・パドマワングェル(上註3)の弟。十六世紀の人。略して, rig ḥdzin Legs ldan rje ともいわれる。

註 7. DC, 270b, 6~271a, 1. 三代目ゴッデム。二代目ゴッデムのレグデンドルジェ(上註6)の再生の人。父親タットプギェ(上註4)が諍いを起して、ツァン地方を追われて、仮の寺 E waṅ lcog sgar (後註12)を建てたが、それをウ地方に移し, rDo rje brag 寺とする。これはニンマ派の総本山となる。

註 8. DC, 271a, 1. 以上の「北テルマ系」を整理すると、

初代 rGod ldem can : dṅos grub rgyal mtshan (十四世紀)



これ以後, rDo rje brag 寺に拠って, 転生者 rGod ldem が続く。

註 9. DC, 270b, 5. DC では, sde srid gTsaṅ pa (執権ツァンパ)。TPS, pp.44~46. 上註4。

註 10. テトプバとは, タットプギェ(上註4)のこと。

註 11. Rāhula はゴウタマ・ブッダの御子息のことか, 詳細不明。むしろ, Rāhu ではないか。もしそうならば, 月と太陽を食べて, 日蝕, 月蝕を起す神。

Sir M. Monier — Williams : Sanskrit — English Dictionary, new edition, Oxford, 1974, p.879 参照。

註 12. DC, 270b, 6. GÇM は byes sgar byed pa (外国に巡礼する)の sgar を寺の名称の理由にしている。

註 13. DZL, pp.89, 167. DC, 271a, 1. ニンマ派の総本山。北テルマ系。ミントルリン(南テルマ系, 後註16)と並び称される。

註 14. 『ギェ・シ』(薬法のタントラ)を発見したテルトゥン。シチェ派のマチクの師。 <1・3> 註 151~153 参照。

註 15. (16<sup>34</sup>/<sub>46</sub>~1714)。DC, 295a, 2~302b, 2. DC では Vairo cana の「御語」(gsuṅ)の転生者と記す。父も有名な学者 rig ḥdzin Phrin las lhun grub である。ダライラマ五世の弟子でもある。このテルダクリンバに「仏説」のすべての系統(=「経・幻・心の三つ」)が集り, 以後現在まで続く。ニンマ派の系統の

中で枢要となる者である。別名, *Ņag dbaŋ Padma bstan ḥdzin*, あるいは, *ḥGyur med rdo rje*, あるいは *Padma gar dbaŋ ḥGyur med rdo rje* と呼ばれる。ミントルリン寺を建てる。後, ニンマ派の総本山となり, 「南テルマ系」を伝える。

〈発掘した埋蔵書〉

1. *gYaḥ ma luŋ* から

1663年に, *Rig ḥdzin thugs thig*

2. *Ḥel brag* から

1667年に, *gḤin rje gḥed dregs ḥjoms*

3. *O dkar brag* から

1676年に, *Guru drag* の法類と *rDor sems* の法類。

4. *Sa ḥug ltag sgo* から

1680年に, *Thugs rje chen po bde gḥegs kun ḥdus*

〈系 統〉

(以上は, 『EVA』p. 179による)

{ *ダライラマ五世* (師であり弟子である)

{ 執権サンギェギャツォ *Saŋs rgyas rgya mtsho* (1653~1705。ダライラマ五世の弟子。)

「御意」(*thugs*) の弟子 : *ダルマシュリー*

「御身」(*sku*) の弟子

{ *Padma ḥgyur med rgya mtsho* (テルダクリンパの御子息)

*Shabs druŋ yid bshin legs grub*

*Drin chen rin chen rnam rgyal*

*Mi ḥgyur dpal sgron*

{ *Blo gsal rgya mtsho*

*sŅags rab ḥbyams pa*

*O rgyan chos grags*

*ḥBum rab ḥbyams pa*

*O rgyan skal bzaŋ*

(cf. 『EVA』p. 185)

以上の他にも弟子多数あり (DC, 301a, 6~302a, 1)。

註 16. ニンマ派の総本山。南テルマの拠点寺。GHP, pp.55, 132, 133。略して, *sMin gliŋ* とも呼ばれる。

註 17. DC, 301b, 5。

註 18. 「新」とは, リンチュエンサンポ (958~1055。〈3・1〉註1) の翻訳以後のタントラ。「古」とは, 彼の翻訳に到るまでの前期弘通期の旧訳タントラ。「新密呪」派は前者に依り, ニンマ派は後者に依った。

註 19. (1617~1682)。DC, 292a, 6~295a, 2。PSJ, 245a, 5~246a, 1, Das 版 pp.388~389には, *ダライラマ五世*の著作による系統の説明がされている。*Avalokiteśvara* の化身であり, チソンデツェン王の「事業」(*ḥphrin las*) の転生者である。GḤMによるとニャンレル・ニマオセルの転生者。第一代パンチュンラマのロサンチョキギェルツェン *Blo bzaŋ chos kyi rgyal mtshan* (1567~1662) が彼をダライラマ四世の転生者と認める。『EVA』pp.171~172によると, 二十五の論書を *gSaŋ ba rgya can* と名づけ, 付録として二巻加えて, 弟子のテルダクリンパ (上註15) とパドマチンレ *Padma phrin las* に伝える。蒙古からチベットの全政権を委託され, それまでの権力争いに終止符をうつ。この間の事情 (モンゴル各部族とチベット各宗派の結びつきと抗争) は, 「チベ仏教」pp.277~282, 「チベ文化」pp.74, 77, TPS, p.60 以下参照。

*ダライラマ五世*はゲルク派の人であるが, 他宗派の教義も学んだ博識の人であった。他宗派の中でも, とくにニンマ派の教義を好み (PSJ, 245a, 5~6, Das 版 p.388), ニンマ派は彼の庇護下に大いに栄えた。ニンマ派関係の弟子としては, 上述のテルダクリンパ, パドマチンレ (DC, 294a, 6), ホダク・トックセ・テンジン・ギェルメドルジェ *IHo brag thugs sras bstan ḥdzin ḥGyur med rdo rje* (DC, 294a, 6) などがいた。発掘した埋蔵書は「サ・テル」ではなく, 「ゴン・テル」である。それらをまとめたのが, 上述の *gSaŋ ba rgya can* である。その他, 著作は『全集』*gsuŋ ḥbum* に収められている。

また, *ダライラマ五世*は「新密呪」派のジャムイェンツェ *ḥJam dbyaŋis mkhyen rtse*, ニンマ派のタシトプギェル (上註4) を尊崇した (DC, 294b, 3)。後者はダライラマ五世のことを予言したからである (その書は, DC, 293b, 1~2 に記されている *bKra çis stobs rgyal gyi gter luŋ* のことと思われる。なお, 〈1・3〉註147, 148, 〈3・2〉註6参照)。

註 20. ニャンレル・ニマオセル (1124~1192) のこと。〈1・3〉註149。

註 21. 二代目ゴッデム。上註6。

註 22. タシトプギェルワンポイデのこと。上註4, 9, 10。〈1・3〉註147, 148。

註 23. *meditation* で現出する世界のこと。ここで啓示を受けて創作するのが, 「ゴン・テル」 (=「深淵浄現説」) である。〈1・3〉註1, 註154, 参照。「ダグナ

ン]そのものについては、『西藏宗義2』p.9, 『チベ文化』p.312。

- 註 24. DC, 293a, 3。ダライラマ五世の師の一人。DCでは, Zúr chen Chos dbyiñs rañ grol。PSJ, 245b, 6。246a, 3。Das 版 pp.388, 389。
- 註 25. DC, 293a, 3~4。DCでは, sMan luñ pa Blo mchog rdo rje。
- 註 26. これはダライラマ五世のデブン寺の直屬学堂 grva tshañ。チョコルギェル Chos h̄khor rgyal 寺(ダライラマ三世の寺, 「大蔵縁起」p.66 に記されている寺 Dgañ—ldan thub—chen chos—h̄khor—glin̄ のことか)に元来あった学堂。ナムバルギェルワとベンデレグシェリンは同一寺の顯密による名の区別である。前者が顯教の呼び名, 後者が密教の呼び名である。
- 註 27. 『チベ文化』p.80。TPS, pp.75~80。CTI, pp.32~50。1717年に侵入。ダライラマ六世の晩年以後の一連の混乱状態は, 1720年に清の介入によって終結する。それ以後チベットは清の間接統治の下に入り, ゲルク派のダライラマ政権は存続する(1912年まで)。
- 註 28. ミントルリンとドルジェダクとナムゲルリン(=ナムバルギェルワ・ベンデレグシェリン)の三寺である。三寺院破壊については, CTI, pp.53~54。
- 註 29. ナムバルギェルワ・ベンデレグシェリン(上註26)のこと。
- 註 30. DC, 301b, 5。
- 註 31. ゲルク派の四大寺の一つ。DZL, pp.76, 83, 158, 159, 199。GHP, pp.42, 99~101, 103。『チベ文化』p.74。「チベ仏教」p.278。ツォンカパの弟子チャムチャンチュェジュ・シャキヤエシェ(中国に派遣された者)が, 1419年につくる。
- 註 32. ゲルク派の四大寺の一つ。DZL, pp.76, 79, 80, 83, 116, 129, 149, 151, 152, 196, 199。GHP, pp.41, 42, 93, 96~99, 101~103, 145。『チベ文化』p.74。「チベ仏教」p.278。ツォンカパの弟子, ジャムヤンチュェジュ・タシベルデンが1416年にラサの近くに建てた。  
四大寺の残り二寺は, ガーデン dGañ ldan 寺とタシルンポ bKra çis lhun po 寺である。前者は1409年創建, 後者は1447年創建である。(GHP, p.42)。
- 註 33. CTI, pp.53~54。このニンマ派迫害の理由としては, ダライラマ五世とサンギェギャツォの親ニンマ派政策に対する反動が考えられる。これによって, ゲルク派内の反ニンマ派集団に迎合したのである。しかし, 反ニンマ派の空気は一般的なものでなく, 一般の反感を買ったという。
- 註 34. ダライラマ五世時代は, ゲルク派中のニンマ派であったが, この時代にニンマ風の

儀軌の採用をやめたことを意味する。rNam rgyal gliñ 寺とは, 上註26の rNam par rgyal bañ gliñ 寺のことである。

- 註 35. 別名 gSañ bdag sprul sku Blo bzañ h̄phrin las あるいは Sle luñ bshad pañi rdo rje (S.Karmey 氏の教示による)。ゲルク派からニンマ派に改宗した人。GCMのこれより以下の記述に見られる如く, かなり墮落した危険な教義を創った。DCはこの人について記さない。
- 註 36. S.Karmay 氏の教示によると, 正式には mKhañ h̄gro gsañ ba ye çes kyi chos skor。本当はテルダクリンバの著作ではなくて, ロサンチンレ自身が書いたもの。
- 註 37. 詳細は不明。PSJ, 248b, 5~249a, 4, Das 版 p.393 に, ハラマイエシエオ(<3・1>註3)が, ランダルマの破仏とそれに続く吐蕃王朝崩壊によって, 墮落した密教(ニンマ派の一要素となる)を批判したことが, 記されている。その中で, 神々に尿と精液と血によって供養をさしあげる, 肉・血・尿によって三宝を供養する, と批判している(これらは正統な師がいないため, タントラの密意を知らず, タントラの字句そのまま理解したもの)  
ここでいわれる「甘露供養」はそれに類似したものと思われる。あるいは, 「甘露」は「酒」を意味する場合もあるから, 酒によって神々を供養することかもしれない。  
なお, S.Karmay 氏によると, この「甘露供養」と次の「明妃供養」はいずれも, ロサンチンレが発掘したといわれる先述の mKhañ h̄gro gsañ ba ye çes kyi chos skor に記されている。
- 註 38. 詳細は不明。「明妃」(rig ma)とは密教の女性パートナーを指す(『西藏宗義1』p.26)。「明妃供養」とは明妃そのものを神々に捧げることか, 明妃との性的行為を捧げものにするものであると思われる。
- 註 39. Phur bu mchog Ñag dbañ byams pa のことか。

<4・2>

- 註 1. <4・1>註13。「リアンチェ」p.151 参照。
- 註 2. <4・1>註16。「リアンチェ」p.151 参照。
- 註 3. ニンマ派の「カム流」の拠点寺。<1・3>註64。カダム派(Ka dam pa)の始祖カダムバ・デシェクシェワ(<1・3>註61)によって建てられた。デルゲにある。「カ・ベ・ゾクの三寺」(カトク寺, ベルユル寺, ゾクチェン寺)と呼ばれるニンマ三大寺(いずれもデルゲにある)の一つ。<1・3>註60, 「リアンチェ」

p.151。DZL, p.103。

- 註 4. 「リアンチュ」p.152。パドマリグジン Padma rig ḥdzin (1625～1697) によって、1685年に建てられた。彼はデルゲの貴族カクワンタン Nag dban bkra çis に招かれて、1684年にデルゲにやって来た者である。
- 註 5. 「リアンチュ」p.152。ゾクチュン寺から1746年ごろ分派したもの。シチュンラブチャンパ Zi chen rab ḥbyams pa がその創始者である。デルゲにある。DZL, pp.103, 186。
- 註 6. 「カ・ペ・ゾクの三寺」(Ka Pe rDzogs gsum) と呼ばれる三大寺の残りのものベルユル dpal yul 寺について、GÇMは記していない。この寺はゾクチュン寺と同じ頃、持明者クンサンシェラブ rig ḥdzin Kun bzan çes rab によって建てられた。「リアンチュ」p.152。「リアンチュ」によれば、三大寺いづれもミントルリン寺 (<4・1>註16) 系の南テルマの教法を継ぐものという。

#### <4・3>

- 註 1. この記述は誤り。実際は「遠伝仏説」の系統が現在まで続いている。テルトゥンが「仏説」の系統者を兼ねていたのである。すべての「仏説」の系統の枢要点は、テルトゥンのテルダクリンパ (<4・1>註15) である。彼を通して現在まで伝わる。GÇMは後期歴史において「仏説」の系に触れない。「仏説」の系統が「埋蔵教説」の系統を通して伝えられることを記さない。「仏説」の系統が前期で絶えてしまったと考えたのか。

その上、ニンマの後期歴史の最後に、ニンマの墮落した方面のロサンチンレ (<4・1>註34) を記すのみである。実際にはニンマ派の再興を目指すジクメリンパ ḥJig med glin pa (1729～1798, DC, 302b, 2～306b, 4) がいたのである。これはGÇMの著者トゥカンの情報不足のためか、故意にニンマ派の墮落の方面のみを描いて、批判せんと意図のためか。とにかく、ニンマ派の後期歴史の正しい姿を伝えていない。

GÇMのこの誤った記述に対して、DC, 241b, 5～242a, 3 に批判がなされている。

- 註 2. M. Lalou : PRÉLIMINAIRES D'UNE ÉTUDE DES GAṆACAK RA, 『密教学密教史論文集』高野山大学編, 昭和40, pp.41～46。『チベ宗教』p.267。BA, p.125。『西藏宗義2』p.58, 註4。『チベ文化』p.155 によれば、沢山の男女の瞑想者たちを集め、大饗宴のかたちで行なわれる一種の儀式。

ヒンズー教の「輪坐儀礼」(cakrapūja) に類するものと思われる(『イン思想史』p.204 参照)。

#### [ 結 語 ]

- 註 1. 「六つの伝承の次第」のこと。<1・2>註4。
- 註 2. ニンマ派のこと。リンチュンサンポ以前の前期弘通期に翻訳されたタントラを所依とするため、このように呼ばれる。
- 註 3. ゾクチュン「教誡部」の実践の一つ。漸悟のもの。<2・2>註21, 39。
- 註 4. ゾクチュン「教誡部」の実践の一つ。頓悟のもの。<2・2>註37, 39。
- 註 5. 孔雀は毒を食べ物にする、とチベットで言われる。インド起源の伝説。
- 註 6. 『Das 辞』p.1310 によると、龍樹 Nāgārjuna によって創始された錬金術(他金属を黄金に変えるもの)のこと。『Jäschke 辞』p.590 によると、Philosopher's stone のこと。
- 註 7. GÇM の gdod lña (五感) は ḥdod lña の誤りであろう。GÇMの原文を訂正して訳した。
- 註 8. GÇM, Kha, 18a, 1～2 のウントゥン・リンチュンガンパの言葉によるもの。<3・4>註2 参照。
- 註 9. 「善説水晶鏡」の呼称の説明に関しては、『西藏宗義1』p.40, III の註1 参照。
- 註 10. 第二章の前半部分(GÇM, Kha, 2a, 2～5a, 3)。この部分は訳出しなかった。[序]註1 参照。
- 註 11. 第二章の後半部分(GÇM, Kha, 5b, 5～21a, 4)。ただし、そのうち spyir gsar rñiñ gi dbye mtshams nos bzuñ ba (5b, 6～7a, 1) は、訳出しなかった。[序]註1 参照。

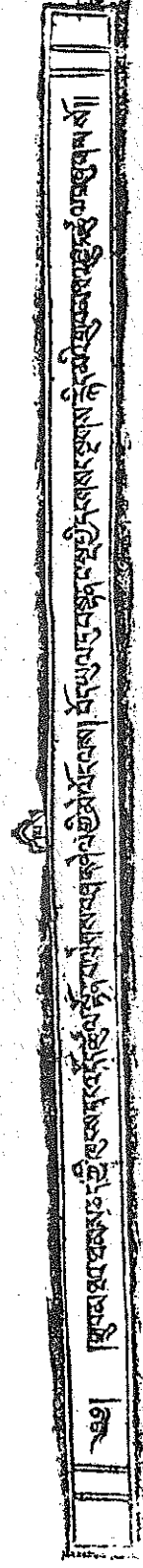
第 三 部

テキスト，ゾクチェンの種類

## I 『一切宗義』ニンマ派の章テキスト

以下のテキストは東京大学所蔵のグンルン寺版（東大 No. 101）のリップリントである。異版として、Collected Works of Thu'u - bkwan Blo - bzang - chos - kyi - ŋi - ma, Edited and Reproduced by Ngawang Gelek Demo, Delhi, 1969, vol. 2, (pp. 5 ~ 519) に Shol 版が収められている。Shol 版の方が勝れており、それによる訂正は各業の下に略号 Sh. によって示した。また『テプテルゴンボ』による訂正箇所は略号 DTN により示し、筆者の見解による訂正箇所は略号 Au. によって示した。

なお、原則的に ba と pa の相違は訂正せず、そのままにしておいた。また、和訳は Kha, 7a, 1 以下の部分であり、校訂箇所もそれに従う。



























## II 『七つの宝蔵』に見えるゾクチェンの種類

これは本論本文でゾクチェンの教法を説明するために用いた、『最勝乗の宝蔵』と『宗義の宝蔵』の九乗の宗義の概要部分 (Th・Ch, 71b~84a。G・Th, 165a~182a) に記されているゾクチェンの種類を、整理のためにまとめたものである。呼称のチベット語原文に関して、『最勝乗の宝蔵』と『宗義の宝蔵』に差異がある場合は、双方ともに記した。呼称の訳は本論本文で示したものを記した。(即ち、Th・Ch と G・Th のうち、適当と思われる方を訳したものである。)

### 1. 「心部」sems sde

#### I. 「様々なものが心であると言うゾクチェン」

sna tshogs sems yin du smra baḥi rdzogs pa chen po (<Th・Ch>のみ)

#### II. 「心の方面であると言うゾクチェン」

sems kyi phyogs yin du smra baḥi rdzogs pa chen po (<Th・Ch>のみ)

##### 1. 「果は心の生じたところと主張するセムチョク・[パ]」

<Th・Ch> ḥbras bu sems kyi byuṅ sar ḥdod paḥi sems phogs [pa]

<G・Th> ḥbras bu gdod maḥi dbyiṅs la zer ba

##### 2. 「誤謬・障蔽を超えたセムチョク・[パ]」

<Th・Ch> gol sgrib las ḥdas paḥi sems phyog [pa]

<G・Th> gol sgrib la bzla baḥi sems phyogs pa

##### 3. 「理由[によるもの]・[根源が]乱れ混雑されるセムチョク・[パ]」

<Th・Ch> gtan tshigs ḥkhrugs sdebs kyi sems phyogs [pa]

<G・Th> gtan tshigs khuṅs rdib kyi sems phyogs pa

##### 4. 「広がり切れることと一方に偏ることが無い自生の智のセムチョク・[パ]」

<Th・Ch> rgya chad phyogs lhun med par raṅ byuṅ ye ḥes kyi sems phyogs [pa]

<G・Th> rgya chad phyogs lhun med par ḥdod paḥi sems phyogs

pa

##### 5. 「かたよりをとる物が自ら成立していること[を説く]セムチョク・[パ]」

<Th・Ch> phyogs ḥdzin dṅos po raṅ grub paḥi sems phyogs [pa]

<G・Th> phyogs ḥdzin grub mthaḥi sems phyogs pa

##### 6. 「心計と離れた宗義を開陳するセムチョク・[パ]」

<Th・Ch> grub mthaḥ blo bral ḥan ḥbyed kyi sems phyogs [pa]

<G・Th> blo bral phyogs ḥdzin las ḥdas paḥi sems phyogs pa

##### 7. 「心の方面であると言うセムチョク・[パ]」

<G・Th> sems kyi phyogs yin du smra baḥi sems phyogs pa

(<G・Th>のみ)

### 2. 「界部」kloṅ sde

#### 1. 「因無きことについて説く黒き界」

kloṅ nag po rgyu med su smra ba

##### a. 「御行為の黒き界の部」

mdzad pa kloṅ nag gi sde

##### b. 「御慈悲の黒き界の部」

thugs rje kloṅ nag gi sde

##### c. 「化成の黒き界の部」

sprul pa kloṅ nag gi sde

#### 2. 「様々なものについて説く斑の界」

<Th・Ch> khra bo sna tshogs su smra ba

<G・Th> kloṅ khra bo sna tshogs su smra ba

##### a. 「有について説く心部と一致する斑の界」

<Th・Ch> yod par smra ba sems sde daṅ mthun ba khra boḥi sde

<G・Th> yod smra sems sde daṅ mthun baḥi kloṅ khra bo

##### b. 「無について説く自己の要訣と相応する斑の界」

<Th・Ch> med par smra ba raṅ gnad daṅ mthun pa khra boḥi sde

<G・Th> med smra raṅ gnad daṅ mthun paḥi kloṅ khra bo

c. 「有無を教誡〔部〕と相応して説く斑の界」

<Th・Ch> yod med man ñag dañ mthun par smra ba khra bohi sde

<G・Th> yod med man ñag dañ mthun par smra bañi kloñ khra bo

3. 「心について説く白き界」

<Th・Ch> dkar po sems su smra ba

<G・Th> kloñ dkar po sems su smra ba

a. 「言説することができない広大な行為について説明する白き界」

<Th・Ch> las rgya che ba brjod med du bçad pañi kloñ dkar po

<G・Th> brjod med rañ çar chen poñi kloñ dkar po

(a) 「海の界」 rgya mtshoñi kloñ

(一) 「大のもの」 che ba

(二) 「小のもの」 chuñ ba

(b) 「虚空の界」 nam mkhañi kloñ

(一) 「日月の界」 ñi zlañi kloñ

(二) 「宝の白き界」 rin po cheñi kloñ dkar po

b. 「見・修を蓋する白き界」

<Th・Ch> lta sgom kha sbyor gyi kloñ dkar po

<G・Th> lta sgom gñis su med pañi kloñ dkar po

4. 「因果を超えた究極界」

<Th・Ch> rab ñbyams rgyu ñbras la bzla bañi sde

<G・Th> kloñ rab ñbyams rgyu ñbras la bzla ba

a. 「作られることと離れていることと〔を説く〕外の究極界」

bya ba dañ bral ba phyi ñi rab ñbyams

b. 「自己の理である宗義について説く内の究極界」

grub mthañ rañ gshun du smra ba nañ gi rab ñbyams

c. 「障碍が除かれるもの、秘密の究極界」

gegs bsal ba gsañ bañi rab ñbyams

d. 「要訣が広げられるもの、真实性の究極界」

<Th・Ch> gnad sprod pa de kho na ñid kyi rab ñbyams

<G・Th> gnad bkrol ba de kho na ñid kyi rab ñbyams

3. 「教誡部」 man ñag sde

1. 「尊の仕方で説くもの」

kha ñthor bañi tshul du gsuñ pa

a. 「設定されるべき道の決擇の教誡」

gshag pa lam gyi mthañ gcod pañi man ñag

b. 「解脱したものの清浄なる力の道が明らかになる教誡」

grol ba stobs dag pañi lam mñon du gyur pañi man ñag

2. 「談話の仕方で説くもの」

<Th・Ch> kha gtam pañi tshul du gsuñ pa

<G・Th> kha gtam gyi tshul du gsuñ pa

a. 「愚癡が動かされて捨てられるもの」

glen pa yeñs la bor bañi kha gtam

b. 「口に触れる時がないもの」

<Th・Ch> khar phog dus med pañi kha gtam

<G・Th> bar phog dus med pañi kha gtam

3. 「タントラ、自己の理の仕方で説くもの」

<Th・Ch> rgyud rañ gshuñ gi tshul du bkañ stsal ba

<G・Th> rgyud rañ gshuñ du gsuñs pa

a. 「いかなる見解もまとまる仕方で説くもの」

<Th・Ch> lta ba sgañ dril bañi tshul du bkañ stsal ba

<G・Th> lta ba dgoñs dril bañi tshul du bkañ stsal ba

(a) 「所分別である顯われの見解について主張するもの、〔顯われは〕作られることがないということ」

<Th・Ch> snañ ba rtags lta bar ñdod pa byar med pa

<G・Th> snañ brtags lta bar ñdod pa byar med pa

(b) 「能分別である心の見解に関してまとめられたもの、〔心は〕一切から起すものであるということ」

<Th・Ch> sems rtog lta bar dril ba kun nas sloñ ba

<G・Th> sems rtog lta bar dril ba

b. 「放血、障碍が除けられるという仕方で説くもの」

<Th・Ch> gtar ka gegs bsal bañi tshul du bkañ stsal ba

<G・Th> gtar ga gegs sel baḥi tshul du bkaḥ stsal ba

(a) 「見・修の温暖の程度によって障害を除くもの」

lta sgom drod tshad kyī gegs bsal ba

(い) 「物のあり方によって障害を除くもの」

dños po ḥdug tshul gyī gegs bsal ba

c. 「隠蔽と顕出の仕方で説くもの」

gab pa mñon du phyuñ baḥi tshul du bkaḥ stsal ba

(a) 「一が隠蔽され二が顕出されるもの」

<Th・Ch> gcig gsañs nas gñis mñon du phyuñ ba

<G・Th> gcig gab nas gñis mñon du phyuñ ba

(い) 「二が隠蔽され一が顕出されるもの」

<Th・Ch> gñis gsañs nas gcig mñon du phyuñ ba

<G・Th> gñis gab nas gcig mñon du phyuñ ba

d. 「説明が自らあらわれる仕方では説くもの」

bḥad pa rañ gsal baḥi tshul du bkaḥ stsal ba

(a) 「迷乱の牛を追う仕方について説くもの」

<Th・Ch> ḥkhrul pa ba ded kyī lugs su smra ba

<G・Th> ḥkhrul pa ba ded du ḥdod pa

(一) 「迷乱が根から切れることによって、輪廻・涅槃がくつがえされる仕方」

<Th・Ch> ḥkhrul pa rtsad nas bḥad pas ḥkhor ḥdas lto  
bzlog paḥi lugs

<G・Th> ḥkhrul pa rtsad bḥad pas ḥkhor ḥdas lto bzlog  
paḥi lugs

(二) 「迷乱をもとのままに置くことによって、不迷乱の法性を認識する仕方」

<Th・Ch> ḥkhrul pa rañ so la bshag pas ma ḥkhrul paḥi  
chos ñid ños zin paḥi lugs

<G・Th> ḥkhrul pa rañ so la bshag pas ma ḥkhrul paḥi  
chos ñid ños zin pa

(三) 「迷乱の根基の内部が阻まれることによって、迷乱の輪廻する流れが切れる仕方」

<Th・Ch> ḥkhrul gshi khog bsgor bas ḥkhrul ḥkhor rgyun  
chad baḥi lugs

<G・Th> ḥkhrul gshi khog bskor bas ḥkhrul ḥkhor rgyun

chad pa

(い) 「迷乱を根基において追い戻す仕方について説くもの」

<Th・Ch> ḥkhrul pa gshi la zlog paḥi tshul du gsuñ ba

<G・Th> ḥkhrul pa gshi la bzlog pa

(5) 「滴が自己の要訣で投げ降されるもの」

<Th・Ch> thig le rañ gnad la phab ste gsuñ ba

<G・Th> thig le rañ gnad la phebs pa

(一) 「耳による伝承」 sñan rgyud

(a) 「文字を伴うもの」

<Th・Ch> yi ge dañ bcas pa

<G・Th> yi ge can

(β) 「文字が無い耳の伝承、法性・真理の教誡」

<Th・Ch> yi ge med paḥi sñan rgyud chos ñid don gyi  
man ñag

<G・Th> yi ge med paḥi sñan rgyud tshig(?) don gyi  
man ñag du bab pa

(二) 「説明による伝承」 bḥad rgyud

(a) 「外の法類」 phyiḥi skor

(β) 「内の法類」 nañḥi skor

(γ) 「秘密の法類」 gsañ baḥi skor

(δ) 「無上秘密の法類」 gsañ ba bla na med paḥi skor

昭和 57 年 3 月 20 日 印刷  
昭和 57 年 3 月 25 日 発行

非売品

西藏仏教宗義研究(第三卷)

—トツカン『一切宗義』ニンマ派の章—

著者 東洋文庫チベット研究委員会  
平松 敏 雄

発行者 東京都文京区本駒込 2 丁目 28 番地 21 号  
財団法人 東 洋 文 庫

印刷者 有限会社 日 本 興 業 社  
東京都板橋区高島平 3-11-6-1108

発行所 東京都文京区本駒込 2 丁目 28 番地 21 号  
財団法人 東 洋 文 庫

本書は東洋文庫に対する昭和 56 年度文部省補助金の一部により刊行された。

西藏仏教宗義研究（第三卷）

— トゥカン『一切宗義』ニンマ派の章 —

正 誤 表

ページ	行	誤	正
I	9	S. chandra Das	S. Chandra Das
V	1	..... 184	..... 187
V	2	.....	..... 208
VI	12	A Tibetan-Englih Dictionary	<u>A Tibetan-English Dictionary</u>
VI	13	Gaṅs ljoṅs rgyal	<u>Gaṅs ljoṅs rgyal</u>
VI	14	bstan yoṅs rdzogs kyi phyi mo sna ḡgyur rdo rje theg	<u>bstan yoṅs rdzogs kyi</u> <u>phyi mo sna ḡgyur rdo</u> <u>rje theg</u>
VI	15	paḡi bstan pa rin po che ji ltar byuṅ baḡi tshnl dag ciṅ	<u>paḡi bstan pa rin po che</u> <u>ji ltar byuṅ baḡi tshul</u> <u>dag ciṅ</u>
VI	16	gsal bar brjod pa lha dbaṅ gyul las rgyal baḡi rṅa bo	<u>gsal bar brjod pa lha</u> <u>dbaṅ gyul las rgyal baḡi</u> <u>rṅa bo</u>
VI	17	cheḡi sgra dbyaṅs, printed by Shlva	<u>cheḡi sgra dbyaṅs,</u> printed by Shiva
4	12	(略号 TPS)	(略号 TPS),
4	12	(略号 MBT)	(略号 MBT),
11	22	dhākiṅx	dhākiṅī
39	9	84a, 1.	84a, 1.
56	4	妄-如思相]	妄-如思想]
85	12	Çri simha	Çrī simha
86	14	VP. NO. 454	VP. NO. 454
87	17	lta ba sgaṅ dril	lta ba sgaṅ dril.
90	3	<u>The Tāntric Tradition</u>	<u>The Tāntric Tradition</u>
99	26	シャントドルジェ Shaṅ bkra çis rdo rje	シャン・タンドルジェ Shaṅ bKra çis rdo rje
99	29	シャントドルジェ	シャン・タンドルジェ

ページ	行	誤	正
99	29~30	シャタンドルジェ	シャン・タンドルジェ
109	8	「ダチン」	「ダティン」
109	9	「ダデン」	「ダティン」
115	4	lug gu rgynd	lug gu rgyud
125	14	偷盜	偷盜
127	17	PSJ, 244b, 7.	PSJ, 244b, 7.
147	7	<u>Khuṅ chen ldiṅ ba</u>	<u>Khyuṅ chen ldiṅ ba</u>
148	28	(DC, Ḥo braṅ	(DC, Ḥo braṅ
154	3	Karma pa Raṅ byuṅ rdo rje	Karma pa Raṅ byuṅ rdo rje →
160	30	律 (venaya)	律 (vinaya)
182	9	dpal yul	d Pal yul
206		2. གསར་རྫོང་བསྐྱེས་པའི་ → Sh. གཅིག་ཏུ་བསྐྱེས་པས་	2. གསར་རྫོང་བསྐྱེས་པའི་ → Sh. གསར་རྫོང་བསྐྱེས་པའི་
206		6. གཅིག་ཏུ་བསྐྱེས་པས་ → Sh. གསར་རྫོང་བསྐྱེས་པའི་	6. གཅིག་ཏུ་བསྐྱེས་པས་ → Sh. གཅིག་ཏུ་བསྐྱེས་པས་
208	15	セムチョク・[バ]	セムチョク・[バ]
209	23	心部と一致する	心部と相応する
210	24	いることと [を説く]	いること [を説く]